

k y u s h u

i n s t i t u t e o f

t e c h n o l o g y

平成20年度

現状と課題

九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書

九州工業大学大学院工学研究院部局評価委員会

目 次

1	はじめに	1
2	工学部・工学研究科の教育	
2.1	2008年度卒業生アンケート(工学部)	2
2.2	2008年度修了生アンケート(工学研究科)	35
2.3	教育達成度評価アンケート:雇用主(2006年3月以前卒業生)	59
2.4	教育達成度評価アンケート:雇用主(2006年3月以前修了生)	65
2.5	教育達成度評価アンケート:卒業生(2006年3月以前卒業生)	71
2.6	教育達成度評価アンケート:修了生(2006年3月以前修了生)	77
3	大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営	
3.1	大学院工学研究院・工学府・工学部の組織図	83
3.2	各種委員会活動の点検・評価	84
3.2.1	大学院工学研究院部局評価委員会	84
3.2.2	工学部教務委員会	85
3.2.3	工学部学生委員会	89
3.2.4	工学部入学試験委員会	91
3.2.5	大学院工学府・工学部教育方法等開発委員会	94
3.2.6	大学院工学府・工学部安全環境委員会	97
3.2.7	大学院工学研究院情報化推進委員会	98
3.2.8	大学院工学府広報委員会	100
3.2.9	工学部広報委員会	101
3.2.10	大学院工学府学務委員会	104
3.2.11	大学院工学府入学試験委員会	106
3.3	教員組織	107
3.3.1	教員の配置	107
3.4	事務組織	109
4	大学院工学研究院・工学府・工学部の財政	
4.1	運営費交付金配分状況	110
4.2	科学研究費補助金の採択状況	112
4.3	外部資金導入状況	113
4.3.1	寄附金	113

4.3.2	民間等との共同研究	113
4.3.3	受託研究	114
4.3.4	寄附講座	114
4.3.5	寄附金の利息	115
5	大学院工学研究院・工学府・工学部と社会とのつながり	
5.1	地域貢献活動	116
5.1.1	大学公開	116
5.1.2	公開講座等	117
5.1.3	北九州市民カレッジへの協力	119
5.1.4	出前講義	120
5.1.5	情報公開	123
5.2	学生の国際交流	124
5.2.1	外国人留学生（国籍別・課程別・費用別）在籍状況一覧表	124
5.2.2	外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧	125
5.2.3	学生の海外派遣	126
6	おわりに	127

(平成21年度大学院工学研究院部局評価委員会委員名)

1.はじめに

このたび平成20年度版九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書「現状と課題」を発刊する運びとなりました。工学部・工学研究科は平成20年度に工学研究院・工学府・工学部に改組されましたが、これまでに引き続き、卒業生・修了生アンケート、教育達成度評価アンケート、ならびに各種委員会の活動などについて記載しています。

平成16年度の国立大学法人化以降、各国立大学法人においては中期計画・中期目標の年度計画に基づいて教育・研究活動が進められています。工学研究院部局評価委員会は、卒業生・修了生及び企業へのアンケート調査を行い、その結果を分析して各種委員会の中期計画・中期目標にフィードバックすることなどを通じて教育研究活動の改善に資することを目的として活動しております。また、国立大学法人評価の際には、これらの結果は教育目標の達成度を測る指標として活用されております。

本冊子は6章から構成されています。

第2章「工学部・工学研究科の教育」では、平成21年1月に実施した卒業生・修了生に対するアンケート、同6月に実施した企業に対するアンケート、そして教育達成度評価アンケートと同時に実施した平成18年3月以前の卒業生・修了生に対するアンケートの結果について、過去のデータと比較し述べています。企業に対するアンケートに関しては、企業側から見た本学の卒業生・修了生の評価を“全体としての傾向”として簡潔にまとめております。卒業・修了後3年を経過した本学同窓生を対象としたアンケートでは必ずしも十分とは言えないかもしれませんが、法人評価の観点からも有用と考えています。なお、平成20年度の工学部改組に伴い、大学院生の所属は「大学院工学府」となりましたが、修了生については修了時の所属である「工学研究科」との表記にしております。

第3章「大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営」では、平成20年度の大学院工学研究院・工学府・工学部組織および各種委員会の活動等について記載しています。

第4章「大学院工学研究院・工学府・工学部の財政」では、外部資金の獲得状況、民間との共同研究等について記載しています。

第5章「大学院工学研究院・工学府・工学部と社会のつながり」では、公開講座、出前講義、国際交流等について記載しています。

平成18年度版より、閲覧の利便性などを考慮して本報告書を工学部のホームページに掲載しております。これにより、学内外に九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部の内容を公表し、社会に開かれた大学としての役割を果たしたいと考えております。

最後となりますが、平成20年度版「現状と課題」は多くの教育職員および事務職員の皆さまの協力により纏められました。この「現状と課題」が当部局の現状の達成状況を見つめ、更なる改善への道しるべとなることを願っております。

平成22年2月吉日

加藤幹雄（大学院工学研究院部局評価委員会委員長）

2 工学部・工学研究科の教育

2.1 2008年度卒業生アンケート（工学部）

アンケート実施年月日 平成21年 1月26日

アンケート回収率

学年	配付枚数	回収枚数（回答率）
4年生（卒業予定者）	722枚	439枚（60.8%）

[1]所属する学科・コース名を書いて下さい。

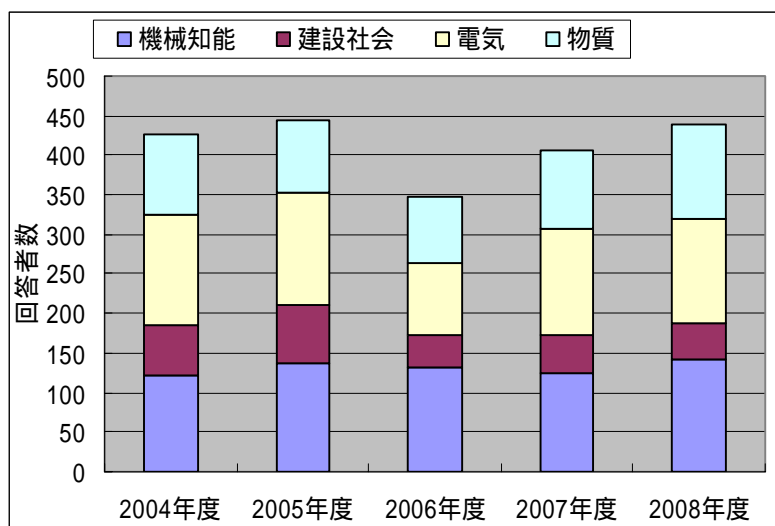
機械知能工学科（143名）

建設社会工学科（46名）

電気工学科（131名）

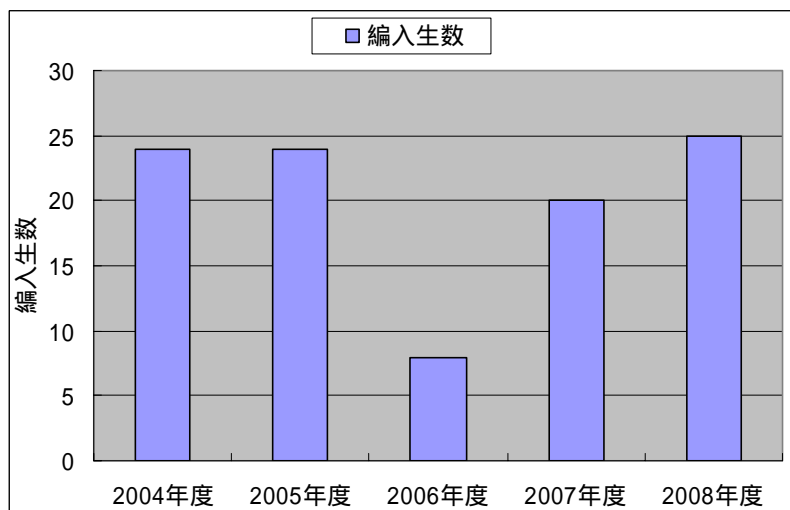
物質工学科（119名）

一昨年に低下した回答数が、昨年、今年と徐々に回復し、これまででは多い年となった。今後もこの水準が維持できるようにしていければよいと思われる。



[1-1]3年次編入の人は[]に○を入れて下さい。 [25名]

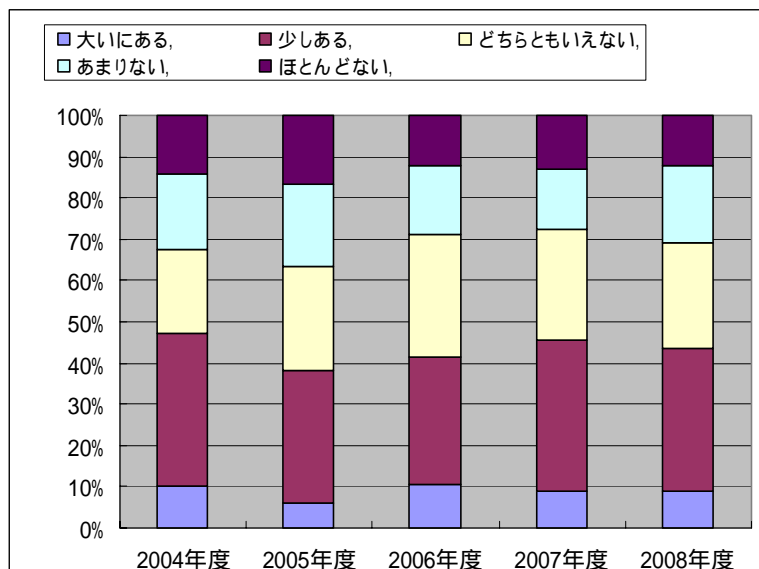
一昨年大きく低下した回答数は、昨年かなり回復し、今年はその以前の回答数に戻った。編入生は25人程度なので、相対割合では容易に大きく変化してしまうが、今後もこの水準を安定して維持できればよいと思われる。



[2]大学教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

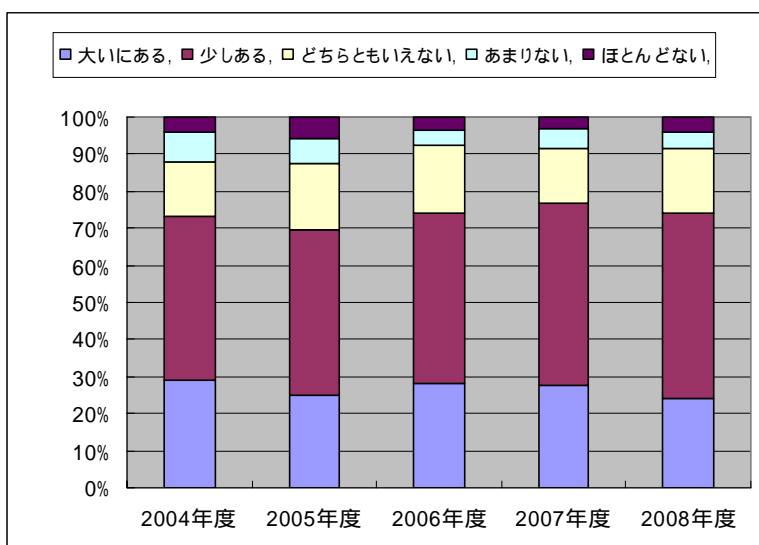
[2-1]人間科学科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。(法学, 経済学, 社会学, 哲学, 倫理学, 歴史学, 語学, 保健体育学, 文学, 教育学等)

効果があると回答した割合は昨年と比べると僅かに減少しているが、過去5年の変動は数ポイント内と小さく、そのなかで本年は微増し中位であり、人間科学科目の教育改善は維持されていると判断される。



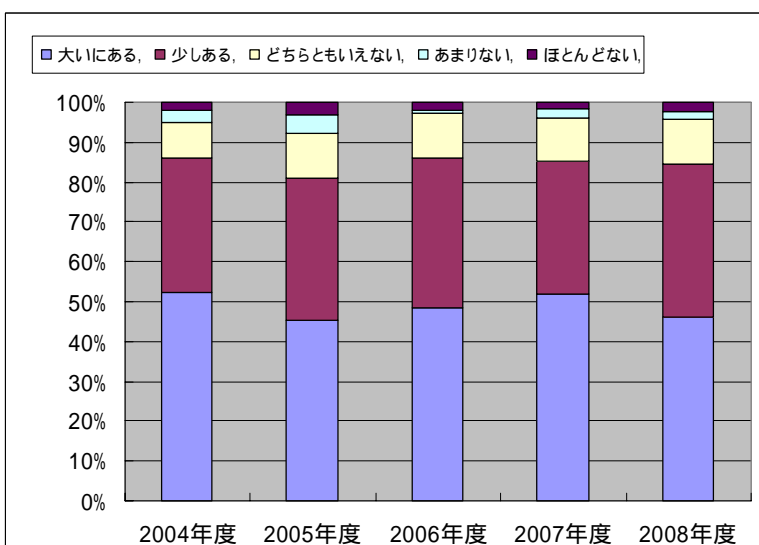
[2-2]工学基礎科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。(数学, 物理学, 化学, 情報関連基礎科目)

昨年と比べれば、効果が「あまりなかった」「ほとんどなかった」との回答割合が僅かに増したが、依然低水準で維持され、「ある」の側の回答割合は充分高い。今後もこの水準の水準が維持されれば工業基礎科目として良好と思われる。



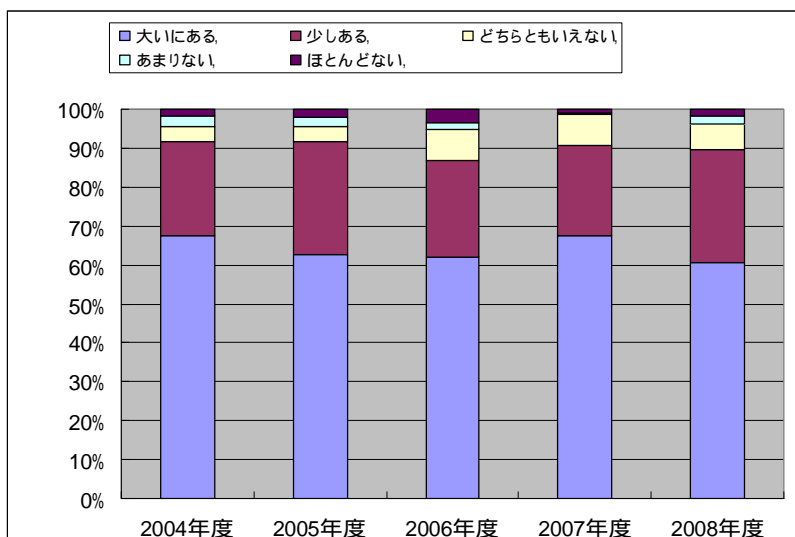
[2-3]工学専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

工業専門科目に対して「ある」の割合が昨年同様充分高く、又、「ない」も低水準が維持され、改善維持がなされている。今後もこの水準が維持されれば良いと思われる。



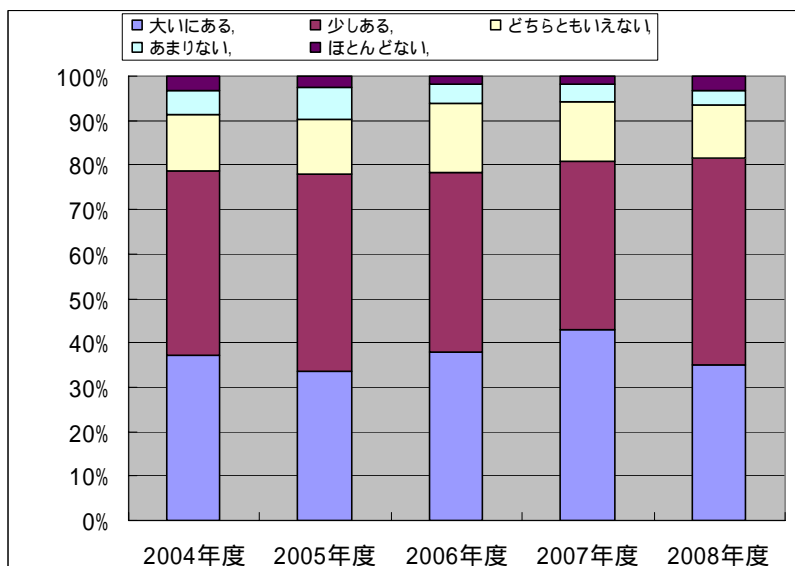
[2-4]卒業研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。

卒業研究に対して、「大いにある」が60%で最も多く、「ある」以上では90%と高水準が維持されている。今後もこの水準が維持されれば良いと思われる。



[2-5]実験・実習・演習・製図はあなたの自己形成に効果がありましたか。

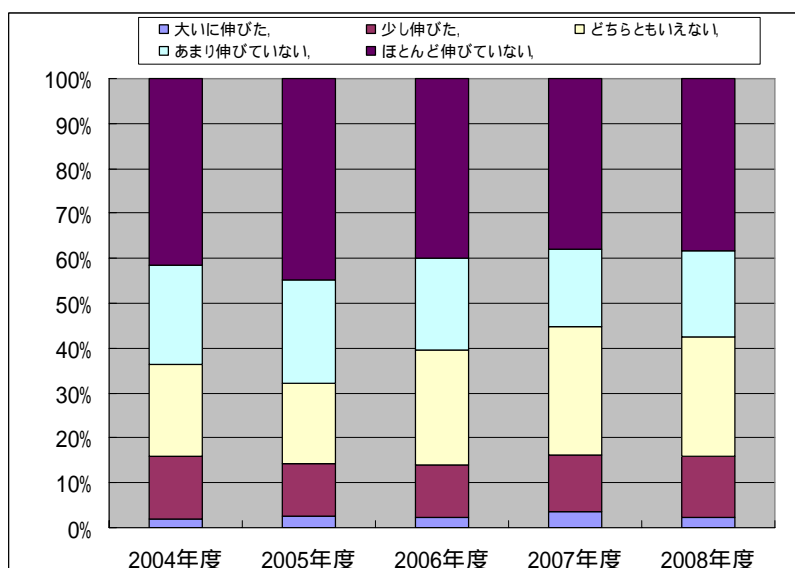
実験・実習・演習・製図に関しては、「ある」以上の回答が80%であり、高水準が維持され、「ない」の回答は極く少ない。今後もこの水準が維持されれば良いと思われる。



[3]英語力についてお尋ねします。

[3-1]大学の4年間であなたの英語力は伸びましたか。

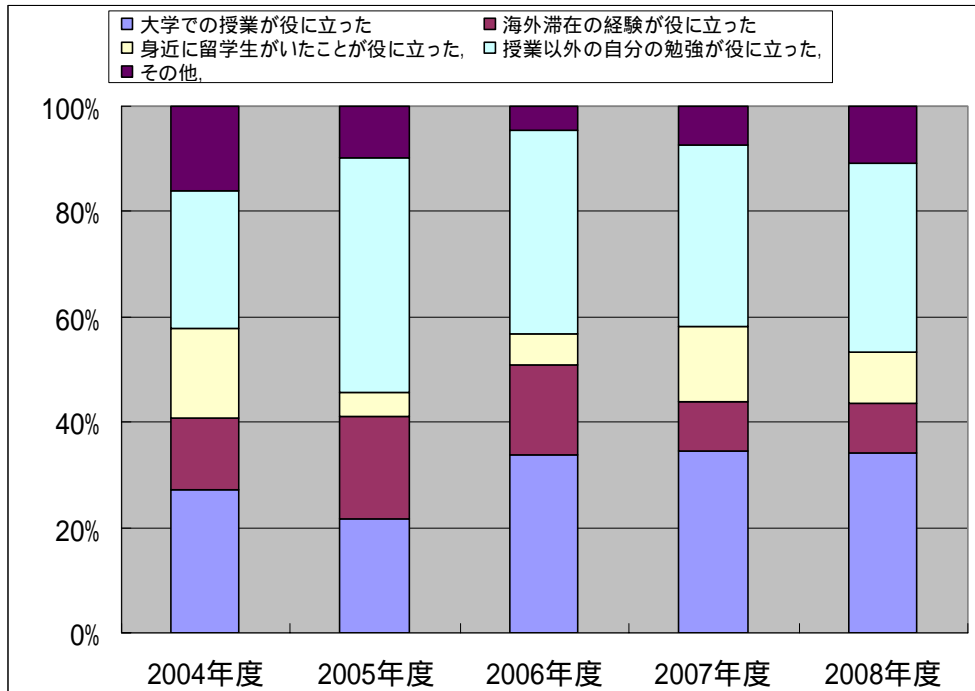
英語力については、伸びたと回答しているものが年々僅かに増加し、殆ど伸びていないと回答する者は僅かながら減少しているの改善はみられる。他方、伸びていないと回答する者が依然かなりあり、今後、さらなる改善が望まれる。



[3-2][3-1]でA（大いに伸びた）またはB（少し伸びた）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

英語力が伸びた理由についての回答は、「大学での授業」と「授業以外の自分の勉強」の割合が拮抗しており、両者で約7割を占める。専門科目などのタイトなカリキュラムの中で、改善に繋がられるような効果的な英語教育を行うかに工夫が求められるかも知れない。

英語力が伸びた理由について、研究時の文献購読などを挙げるコメントがあり、研究に関連したような技術英語教育をどう取り組むかの検討も必要かもしれない。



E（その他）[具体的に：]

- ・ TOEIC対策
- ・ TOEIC等への勉強が大いに役立った。
- ・ 英語の勤があまり鈍らずに済んだから
- ・ 知識として、物を考えるための基礎。
- ・ 研究室のゼミで専門英語をやったから
- ・ 研究で文献を読んだこと。
- ・ TOEIC受験。
- ・ TOEICテストのための、勉強でのびた。
- ・ 4年時の英論文購読
- ・ 卒業論文の制作にあたり、英語文献をたくさん読んだ

[3-3][3-1]でD（あまり伸びていない）またはE（ほとんど伸びていない）と答えた方：その理由は何ですか。

英語力が伸びていない理由として、高校までのような時間数がないことや、自習意欲の低下、低学年でしか科目がないことを理由として挙げる者が多い。特に3年次以上では、専門科目中心の時間割となっており、科目の配置の議論なども必要かもしれない。

- ・ 1年までしか英語が必修じゃないから、その後英語をとらなかつた。
- ・ 一年時の授業だけで伸びるとは思えない。
- ・ 高校までのように英語の授業が常にあるわけではないから
- ・ 授業の内容がうすかったのと自身が真剣さに欠けていた。
- ・ 英語を勉強する時間が減った

- ・ 勉強しなくなったから
- ・ そこまで、英語を勉強しなかったため。
- ・ 授業以外で英語に触れることがなかったから
- ・ 伸びたと感じなかったから
- ・ 1年次では英語の授業が必修であったので勉強していたが、それ以降は学んでいないので。
- ・ 伸びるような授業がなかった。
- ・ ほとんど使っていないため
- ・ 英語にあまりふれていない
- ・ 語学の授業が
- ・ 必須科目しか英語をしなかった
- ・ 1年次しか授業がなく、もう忘れてしまった。
- ・ 1年の時しか受けていなかったなので、時間がたって忘れてしまう。
- ・ 英語に関する授業を受けていないし、英語を使う機会もあまりなかった。4年になってから多少英語を使う機会が増えた。
- ・ ほとんど英語と関わってなかったから
- ・ 英語の授業が少ない。
- ・ 積極的に勉強しなかったから
- ・ 取り組
- ・ ほとんど使っていないから
- ・ 積極的に授業に参加しなかった
- ・ 授業がなくなって勉強しなくなったから
- ・ 英語を学ぶ機会が少ない
- ・ 1年のとき以降は、ほとんど英語にふれていなかったから
- ・ 英語の授業を受けていない
- ・ 英語を使う機会がない。
- ・ 授業回数が少ない。
- ・ 英語に触れる機会が減ったから
- ・ あきらかに履修時間が短かったと思う。また、興味のもてる授業内容でなかったから。
- ・ 勉強していない
- ・ 勉強はしたがテスト後にすべて忘れた。
- ・ 1年時しか授業がないため、もう忘れました。
- ・ 英語をほとんど勉強しなかったから
- ・ 一年次にしか英語科目がなく、それ以外の学習をしていないため
- ・ 編入のため授業を取っていない
- ・ 勉強しなかったため。
- ・ 1年次のみしかしていないので。
- ・ 勉強時間が少なかった。
- ・ 学習意欲がありません
- ・ 英語の学習にほとんど手をつけなかったので
- ・ 勉強不足
- ・ 勉強時間がへった
- ・ 1、2年の時だけしか、英語に触れなかったから。
- ・ 英語の授業が少なすぎる
- ・ 勉強をしなかったため。
- ・ 1年次の必修の英語は基本的過ぎる。
- ・ 常日頃使う機会が皆無だった
- ・ 英語の授業が少ない
- ・ 役に立ったとは思えない
- ・ 自分の勉強不足と、語学力の必要性の認識が甘かった。
- ・ ただでさえ講義が少ないのに、ドイツ語まであるとなると。
- ・ 英語を勉強しなかった。
- ・ スピーキング、リスニングは、英会話に通って伸びたが、ライティングは衰えた。3年以降英語課目が少ないのは問題だと思う。

- ・ 大学で英語を用いた授業が少なく、自分で学習する以外英語を学ぶ機会が少なかったから。
- ・ 英語にあまり触れなかった。授業も遊び同然のようなものだったため
- ・ あまり勉強してない。
- ・ 大学での授業が役立たなかった
- ・ 勉強してないから。
- ・ 英語を勉強しなかった。
- ・ あまり勉強しなかった。
- ・ 自分の勉強不足と必要なシチュエーションの少なさ
- ・ 授業中にアウトプットする機会が少なすぎる。
- ・ 授業の内容が中学レベルなので
- ・ 授業として英語を学んだのは1年のときのみで、その後は学ぶことがなかったから。
- ・ ほとんど英語に触れていないため。
- ・ 授業が高校レベル。
- ・ 一年時しか勉強をしていないため。
- ・ あまり勉強しなかった
- ・ 2、3年で授業が無かった為
- ・ 1年の間だけで他の学年のときは勉強しなかったから。
- ・ レベルが低い
- ・ やる気ないから
- ・ 三、四年次に英語の勉強をあまりしなかったため、忘れていってしまったから
- ・ 英語科目の単位を取った後は勉強しなかったのも元に戻ってしまった。
- ・ 授業以外でほとんど勉強していないため
- ・ 高校英語と変わらない
- ・ 高校レベルで十分通用した為伸び様がなかった。
- ・ 英語と自分の相性が悪いから
- ・ 英語に関わる機会が少なかった。
- ・ 勉強していないから
- ・ 1年、2年のときは授業があったが、それ以降はなく、勉強しなかったから。
- ・ 英語に触れる機械が少ないから。
- ・ 英語を勉強する機会が少なかった為
- ・ 入学してから、2年間しか英語に触れる機会がないのに伸びるはずがない。
- ・ 英語に触れることがなかったから。
- ・ 話せないし、聞きとれないから
- ・ 授業が1、2年のときしかない
- ・ 英語を使う機会が減った。
- ・ 三年生以降英語に触れる機会が減った。
- ・ 日常で英語を使うことがないため、すぐに忘れてしまう。
- ・ かんたんだったから
- ・ 使用する機会がない
- ・ 英語にふれる機会がとても少なかったため
- ・ 英語に必要性を感じず、勉強しようとしなかった。
- ・ 伸びる様な環境ではないし、伸ばす必要もないと感じたため。
- ・ 学年が上がると、英語と接する機会が減っていった。
- ・ 2年次から(以降)は英語に触れていなかったから。
- ・ 全く勉強しなかったため。
- ・ 英語が苦手だから
- ・ 講義以外で自主的に勉強しなかったから
- ・ 英語に接する時間が短い。
- ・ 英語にふれる機会があまりなかった(3年次以降)
- ・ 入学時の能力と差を感じない。
- ・ 1年の時しか、英語の勉強をしていないから。
- ・ 1年の時しか英語の勉強をしないから。
- ・ 授業数が少ない

- ・ 英語の授業が少なく、英語力を伸ばそうとするなら自力で勉強するしかないから。
- ・ 勉強不足である。
- ・ 1年時しか英語の授業をうけなかった
- ・ 英語があまり好きではないから
- ・ 長期間の英語ばなれ
- ・ ない
- ・ 1年時にしか講義がなかったから
- ・ 授業中に使う程度で日常生活においてほとんど使う機会がないから。
- ・ 英語に対する興味が薄かった。
- ・ 3、4年次で英語を読まなくなった
- ・ 英語を使う機会が少なすぎる。
- ・ 授業数が少なかった。
- ・ 英語にふれる時間が少なかったため
- ・ 英語に、触れる機会が少なかった。
- ・ 英語の勉強をしていないから
- ・ 初めから基礎が無いから。
- ・ 熱心に取り組むことができなかった。
- ・ 授業以外で英語の勉強はほとんどしなかった
- ・ 授業受けただけではあまりかわらなかった
- ・ 自主的に勉強していなかったため
- ・ 積極的に英語の勉強をしなかった
- ・ あまり英語の授業がなかったから
- ・ 英語の授業が少なすぎる
- ・ 授業がほぼない。1年の時に少しやって、2年で全くなくて、3年に専門英語しても伸びないと思うし、下がると思う。
- ・ 1年次の必修の英語以外に英語の科目を履修せず英語から遠ざかっていたから
- ・ 授業が意味ない(授業なくていい)
- ・ 授業が少なかったかな...
- ・ TOEICで良い点をとれなかった
- ・ 特に何もやってない
- ・ 英語科目が少ない。
- ・ 高校英語みたいでした。
- ・ 勉強してないから。
- ・ 1年時のみの学習であったため4年時にはほぼ忘れていた。
- ・ TOEICの点数が大学卒の平均より低いため
- ・ 授業では極端に簡単か、難しいかだったから
- ・ 2、3年で英語の授業をとらなかったから
- ・ 勉強していないから
- ・ 講義以外でほとんど勉強していなかったため。
- ・ 英語に触れる機会があまりなかった
- ・ 1年次しか英語がなかった。ドイツ語の時間を英語へ。
- ・ 英語の勉強を継続的に行わなかったから
- ・ 授業でも、英文講読でも辞書がないと簡単な文が読めないから
- ・ 英語は日常あまり使わないので。
- ・ 授業以外で、自主的に英語に触れることがなかったから。
- ・ 高校のときより英語にふれる機会が減ったから。
- ・ 自分から進んで英語をしなかったから。
- ・ 2～4年の間が空白
- ・ 滅多に使わなかったから
- ・ あまり英語を話す機会がなかった
- ・ 英語力を必要とする機会がほとんどなかったため
- ・ 授業が高校以下だと思うし、1～2年しかやらないっていうのが...
- ・ 英語をやらないから

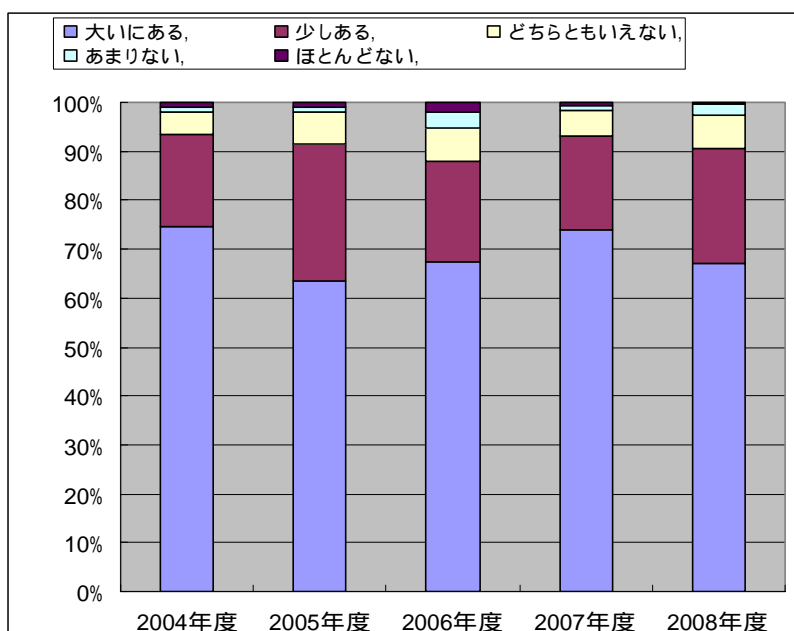
- ・ 2～4年の間に忘れていった
- ・ 授業がほとんどなかったから
- ・ 普段の努力が足りなかった。
- ・ 英語と接する時間があまり作らなかった。
- ・ 海外でこまることが多かったから。
- ・ 英文をあまり読まなかったため。
- ・ 英語に触れる機会が少なかった。
- ・ 英語にふれていないから。嫌いだから。
- ・ 授業や試験でしか英語に触れなかった
- ・ 授業時間外に英語を活用しなかったから。
- ・ 英語に関わる機会が減った。
- ・ 英語系の単位が1しかないし本代もかかるからほとんどとらなかったので
- ・ 授業が少ない
- ・ 単語力はついたが、授業でリスニングがあまりなくあまり成長できてないと思うため
- ・ やらなかったから
- ・ 高校時より英語を勉強しなくなった
- ・ 勉強不足
- ・ 英語を使わなかったから。
- ・ あまり力が入った授業ではないと感じた。
- ・ 本格的に英語を学ぶ機会がなかった
- ・ 日常生活の中で英語を使う機会がまったくないから。
- ・ 授業ない。ドイツ語とかいらん！！
- ・ 授業が少ない
- ・ 日常的に英語に触れていないから。
- ・ 家庭での学習が少なかった。
- ・ 自主的に勉強を取り入れなかったこと。日本語のみで十分と考えたから。
- ・ 自分から学ばなかったから
- ・ 努力してないから
- ・ 英語の授業が少ないから
- ・ 英語の時間がすくなかった
- ・ 興味がなかった(授業に対して)
- ・ むしろ落ちた。英語に接する機会も少なく、TOEICの点が伸びない。
- ・ 1年生の時しか講義を履修しなかった
- ・ 高校時代よりも勉強しなかったから
- ・ 大学一年次に学ぶ英語が高校レベルだったから。
- ・ 使用する頻度が極端に少なかったこと。
- ・ 英語に重点を置いて勉強しなかったから
- ・ 1年間では意味がない
- ・ 英語を学習する環境が整っていなかったため。
- ・ 授業以外で英語と接する機会が無かった。
- ・ 英語教育が悪過ぎる。カリキュラムが薄い
- ・ 一年時と四年時しか触れなかったため。
- ・ 何もしてないから。
- ・ 結局、意欲的に取り組めなかったため。
- ・ 英語に触れる機会が少なかった。
- ・ 英語にふれる機会の少なさと必要性を感じなかったこと
- ・ 苦手意識が強すぎた
- ・ 自主学習をしていない。
- ・ 1年次しか英語の授業は必修がなかったから
- ・ 分からなかった
- ・ 特に使っていない為
- ・ 勉強していないから。
- ・ 英語の授業があまりなかったから

- ・ 英語の授業のみでしか使用しないため、高校時に比べ低くなったのではないかと感じる。
- ・ してないから
- ・ TOEICの点数が下がったから
- ・ 身が入らなかったからだろう
- ・ 自主的に勉強をしなかった
- ・ 自分から英語の勉強をしていない為
- ・ 英語に興味を持ってなかったため。
- ・ あまり英語に触れる機会がなかった。
- ・ 文章の読解力は伸びたように思うが、会話や聞きとりは英語を使うことがなかったので大学入学当時からあまり変わらない。
- ・ 英語をやるきが無いので、すぐわすれたから。
- ・ 内容の薄さ
- ・ 講義が高校レベル、意欲がもともとない。
- ・ わからん
- ・ のびた気がしないから。

[4]卒業研究についてお尋ねします。

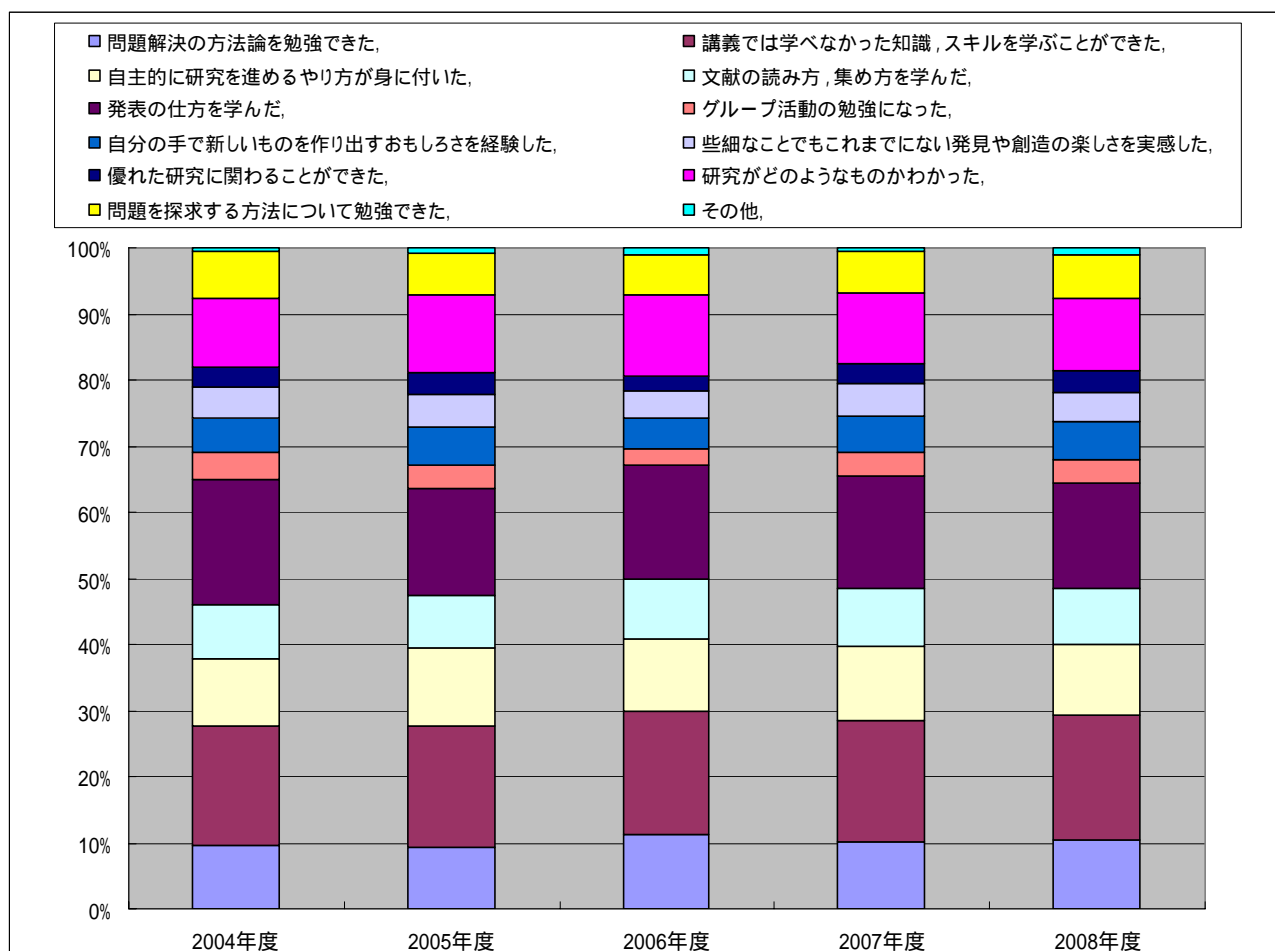
[4-1]卒業研究の意義はあると思いますか。

卒業研究の意義について「大いにある」「ある」との答えの割合の合計は、90%が維持されており、卒業研究の重要度の意義が充分保たれていると判断でき、今後もこの水が維持されることが重要である。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えられた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

卒業研究の意義について「大いにある」「ある」との答えられた理由については、昨年と同様、問題解決方法、講義では学べない事項、発表の仕方など多面的な回答となっている。回答者は、複合的な理由の中からどの理由を挙げるかを迷うと想像されるが、それこそが卒業研究が極めて意義深い証しであろう。工学部における卒業研究を通して学ぶことの幅広さ・重大さを、あらためて認識させられる結果である。



L (その他)[具体的に :

- ・金の使い方の勉強になった。
- ・大学生生活のメとして満足のものであった
- ・自ら問題を提起し解決するタイプの教育は自由研究以来であり、重要視すべき教育であるにもかかわらず、その機会は少ないため
- ・超えるべき壁をみつけた。
- ・世渡りを覚えた
- ・自分でやるという責任があるので、それを学べた。
- ・論文の書き方を学んだ
- ・自分一人では得ることのできない知識をどのように得るか、考えることができた。
- ・研究室という空間で学ぶことが多々あった。人間関係、団体行動等々...
- ・卒研は自身の研究であると言われながら、指導者の言う通りに行動しないと文句・嫌味を言われる。又、一日の行動を監視されていると感じる程の束縛がある。生徒は指導者の手足だということが分かったことについて意義があった。
- ・卒研とは言え、指導者の言う通りに行動しないと全てにおいて嫌味を言われ、逆ギレされる。又は監視とも言える行動範囲の束縛がある等、短端に言うと指導者の手足にならないと認められないと言う、研究とはかけ離れたものであるという事がわかったという点においては意義がある。
- ・解決策の模索、自己理解
- ・自律する難しさを経験できた
- ・自分を知った
- ・何十回と実験をかさねることででてくる結果をえたときとてもうれしかった。達成感
- ・いろいろ

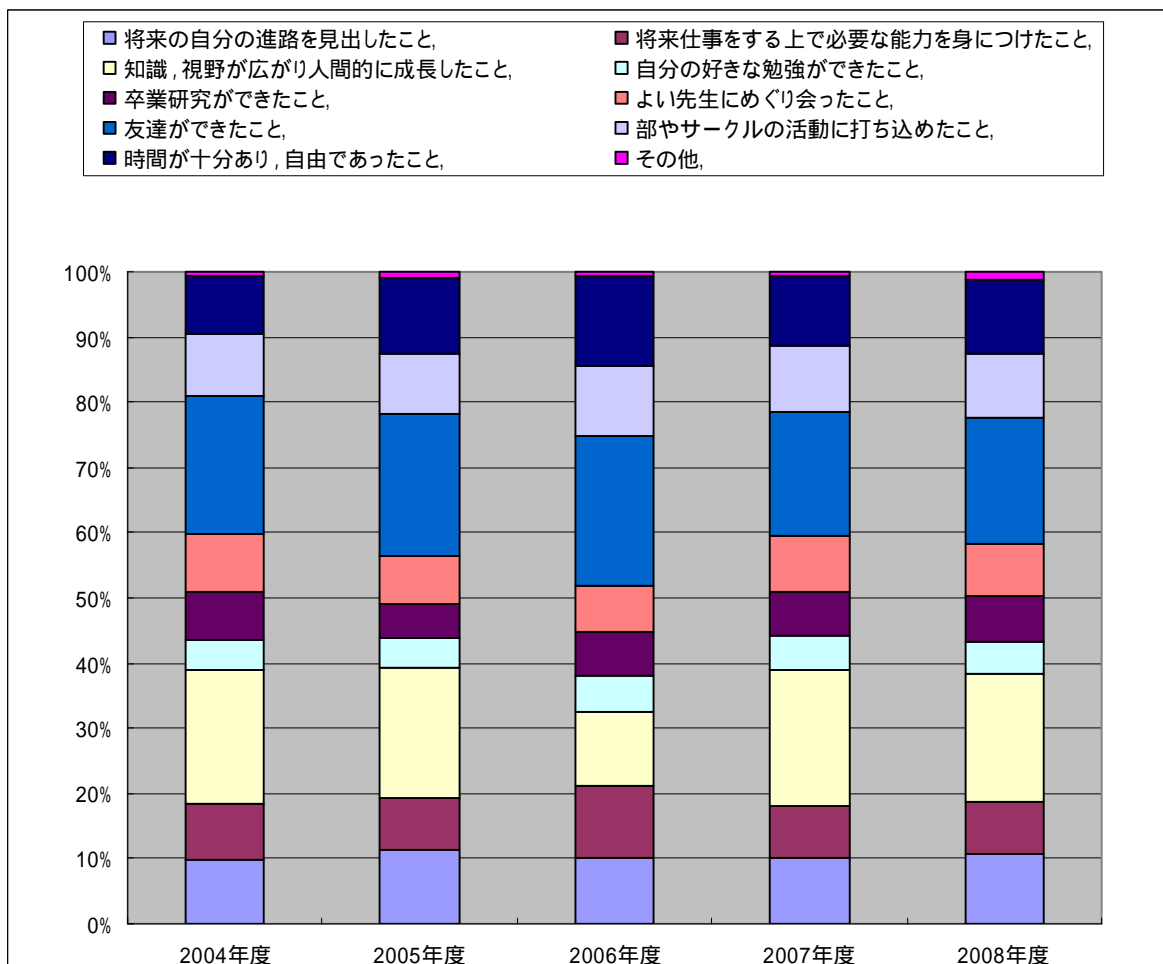
[4-3][4-1]で卒業研究の意義がD(あまりない)またはE(ほとんどない)と答えた方：その理由は何ですか。

卒業研究の意義について、僅かながら「ない」との答えた者がいる。その理由は、自分の思い通りの研究室やテーマでなかった場合等にそう答えたものと推測される。配属の仕方の工夫などでその対応が現実的に可能か、吟味事項かも知れない。

- ・ 役に立たないと思うから
- ・ 拘束時間が長いわりにムダな時間が多いと思う。
- ・ 研究したことを就職してからつかわない。
- ・ きつい
- ・ 卒業する為に研究を行う事とテストを受ける事の違いが良く分からない。
- ・ 実用化するには費用がかかり過ぎる
- ・ 自分の興味が無いことに対してはどうしても探求心がわからない。
- ・ やりたい研究室に行けなかったから。配属のシステムがおかしい！！

[5]大学生生活を振り返って、どのようなことがよかったですか。（複数回答可）

今年も、これまでの傾向と同じである。知識や視野の広がり、友人が出来たことなどを中心として、多面的にバランスのある回答となっており、大学生活を有意義であったと感じている証しであるように思われる。



J (その他)[具体的に：]

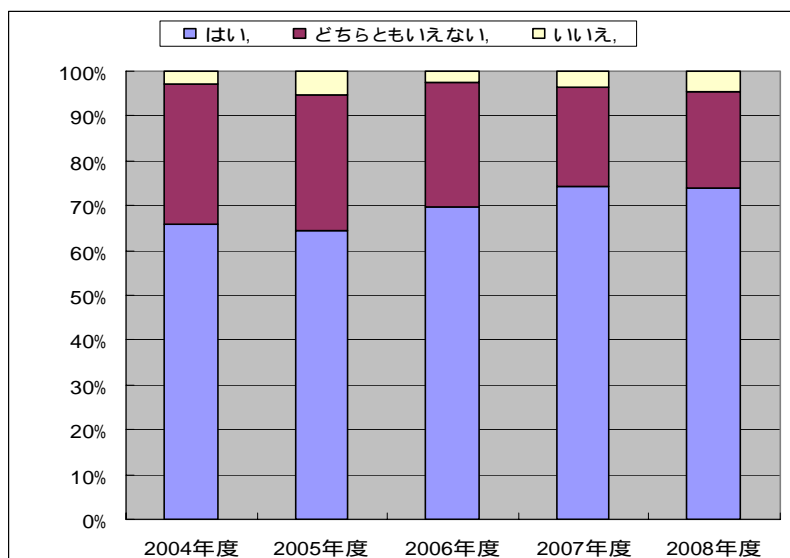
- ・ とくになし
- ・ バイト

- ・ すべてにおいて、良い経験になった
- ・ バイトで社会という物が少しわかった
- ・ 大学がつまらなく、学問以外の能力の方が社会で必要なことがわかった。
- ・ 寮で生活したこと。
- ・ 世の中にはどうしようもない最悪な人間が本当に同世代にいることを知れたこと。
- ・ 人と違う人生を、歩めた事。
- ・ アルバイトをすることで広い年齢層とかかわることができた
- ・ 大人の振る舞いなど身に付き成長できた。
- ・ よい先輩にめぐり会ったこと
- ・ 高校時代とは違った人との付き合いができた。
- ・ 特になし。
- ・ 勉強することの大切さを学んだこと

[6]入学した学科についてお尋ねします。

[6-1]現在の学科に入学してよかったですか。

入学した学科については、良かったと思わない者の割合は例年数%と非常に低いが、今回も少なかった。第一希望で入学していない者が含まれているが、それでも、本結果となっているのは、充分納得のいく学生生活を送ることが出来ていることを示していると判断できる。



[6-2][6-1]でC(いいえ)と答えた方：その理由は何ですか。

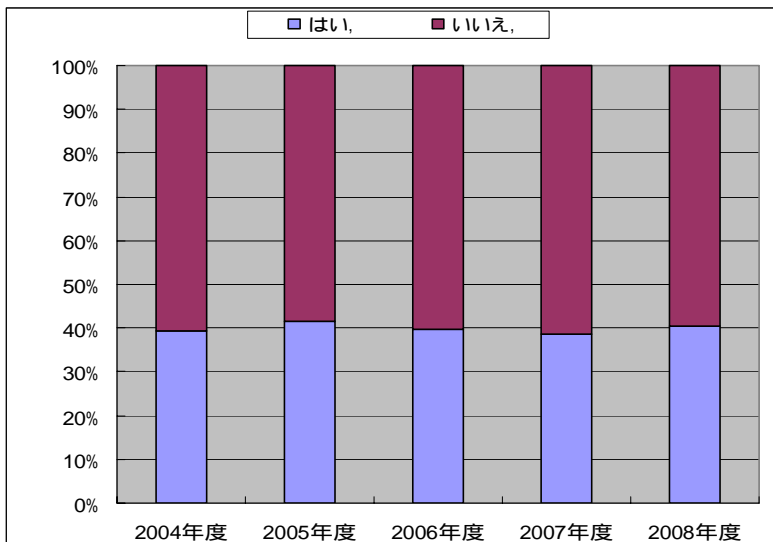
入学した学科については、良かったと思わない理由は、思っていたのと異なっていたとか、個人的な経緯による場合が多いようである。配属方法などをより弾力的にすることでの対応も考えられるが、それにも限度があろう。

- ・ 一般での就職がしにくい点
- ・ 自分がやりたいと思うことが変わってきたから
- ・ 他学科の方が女性が多い。
- ・ 就職したい分野にはたいして役に立たないから
- ・ 何か1つのことでプロになることを美德としないため
- ・ 単位がとりにくい
- ・ 興味がない
- ・ 希望のコースに行けなかったから。
- ・ 認定単位ギリギリでただでさえうざい上に勉強も難しい。卒研の拘束時間が長い
- ・ 他の学科の方が興味が出てきた。
- ・ つまらない、就職先の幅がせまい
- ・ 本来は機械知能工学科に行きたかったから
- ・ 退官された方の研究室に行きたかったから
- ・ 自分のやりたいことと違ったため。
- ・ 機械の方がたのしそうだった。

[7]入学時の目標の達成についてお尋ねします。

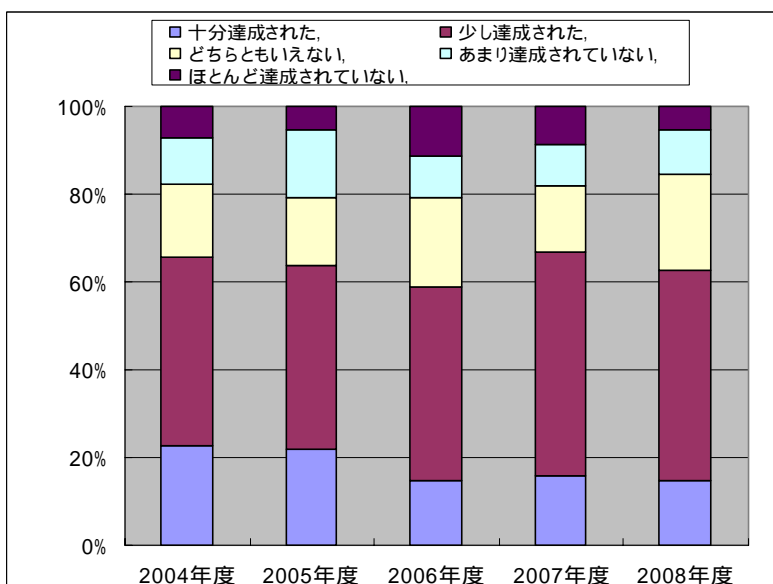
[7-1]あなたは入学の時に大学で達成したい目標がありましたか。

入学時に目標を持たずにいる者が約60%で、全くと言っていいほど年度ごとの変化がない。目標の程度、意味が個人個人で異なることもあり、この数字をどう判断するかは社会状況を考慮した分析が必要であろう。



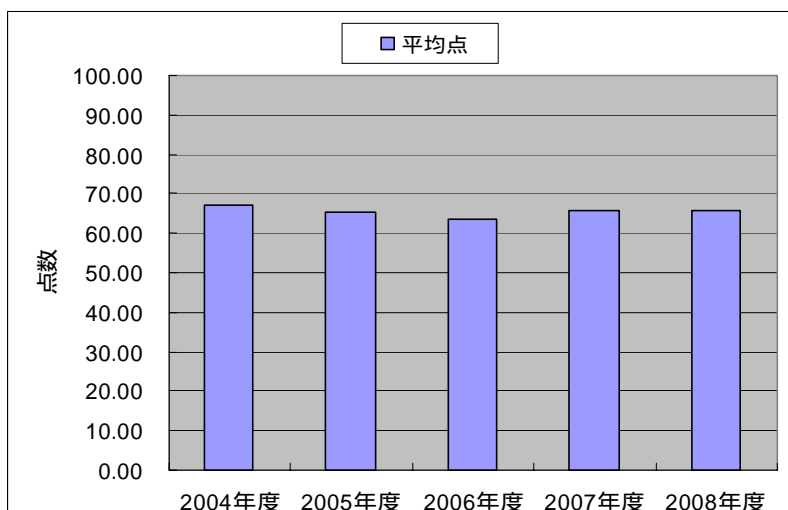
[7-2][7-1]でA(はい)と答えられた方は、それは現在どの程度達成されていますか。

目標のレベルにもよるが、達成されたと感じている者の割合が約2/3で例年推移している。否定的意見がやや減少していることから、改善効果がうかがえるが、「十分」の割合が増えることが望まれる。



[8]在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

今回の満足度のポイントは66点で例年と大差ない。この数値は期待が高いと低く出ることになるので一概に言えないが、期待度、到達度の双方が妥当な状況と判断される。

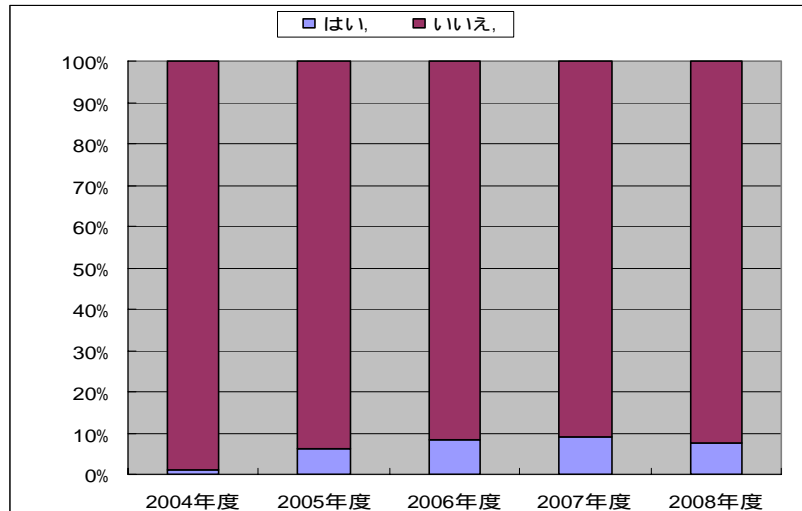


[9]卒業により取得予定の資格についてお答え下さい。

(本学の教育目標に適合しない資格 (自動車免許等) は除外します。)

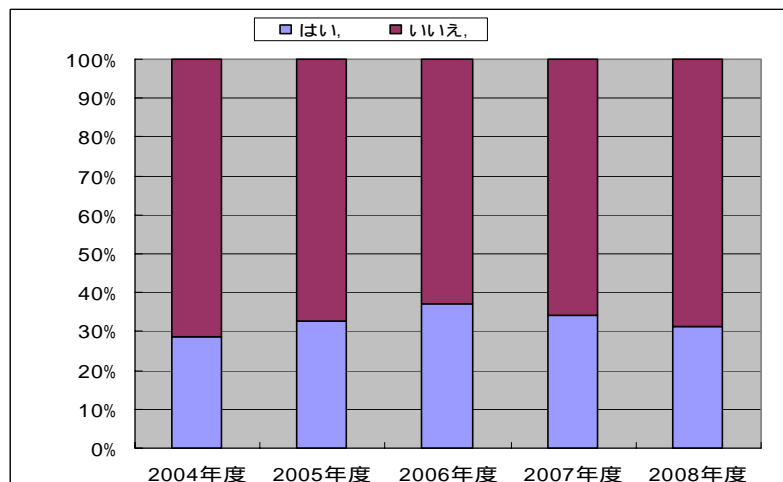
[9-1]あなたは教員免許取得を目標としていましたか。

昨年より、教員免許の取得の希望者割合が微減している。10%以下のこのような学生がいることは認識しておくべきであるが、実際に教員をどの程度目指していたか等についての情報の収集も今後、必要となるかも知れない。



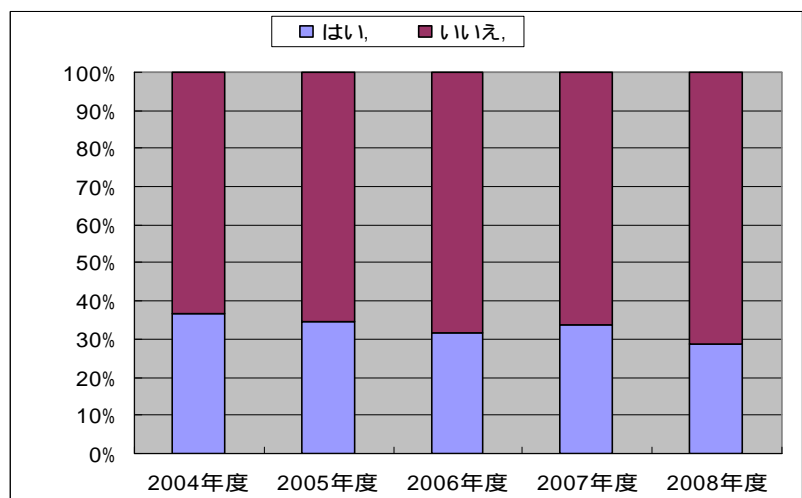
[9-2]教員免許 (数学) が可能でしたら、あなたは取得を希望しましたか。

これまで30%余りで推移しているが、昨年と比べると少し減少した。このデータの分析には希望の程度がそれほど高くない者の数がどの程度含まれているかの情報が必要と思われる。



[9-3]あなたは卒業後資格 (教員免許を除く) を取得する予定ですか。

卒業後資格の予定については、「はい」の割合が今回も例年同様に30%程度で、就職先の事情と合わせて判断したい意向と理解される。



[9-4][9-3]でA(はい)と答えた方: どのような資格を取得する予定ですか。

卒業生は種々の資格を個人個人が得た情報で意識していると思われる。正式名称で無いものも多く含まれているようで、将来の状況に応じて取得の必要性を聞かされていると判断される。

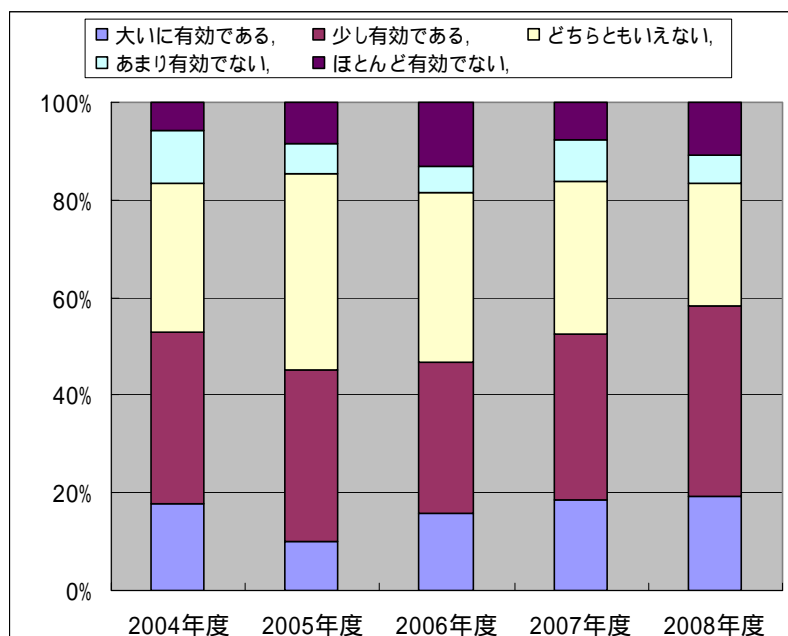
- ・ 工業系以外
- ・ 危険物取扱
- ・ TOEIC
- ・ 就職先で必要な資格
- ・ 技術者
- ・ 情報系全て(ITパスポート、基本情報、シスアド、ソフ開)
- ・ 電検
- ・ 必要だと思う資格
- ・ 情報系
- ・ 特許に関する資格、知的財産管理技能士など。
- ・ 就職してから。
- ・ 仕事に関わるもの
- ・ 応用情報技術者
- ・ 介護士
- ・ 技術士
- ・ 一級土木施工技士
- ・ 一級土木技術士
- ・ 技術士、施行管理技士。
- ・ 電検3種
- ・ MBA。
- ・ 仕事をする上で持っていて役に立つもの
- ・ 建築士、インテリアコーディネーター
- ・ 建築士
- ・ 技術士
- ・ 自分のためになるもの
- ・ 1級土木施工管理技士
- ・ 技術士補、技術士
- ・ 仕事をしていく上で必要なもの。
- ・ 技術士
- ・ 仕事に係わる資格。
- ・ 技術士
- ・ わからない
- ・ 施こう管理士
- ・ 技術士。
- ・ 一級建築士
- ・ 技術士の資格
- ・ 技術士
- ・ 技術士
- ・ 技術士
- ・ コンクリート診断士。
- ・ 技術士
- ・ 電検
- ・ 電気主任技術者3種
- ・ 情報処理系の資格。
- ・ 仕事で必要な資格、具体的にはまだわからない。
- ・ 電気主任技術士
- ・ イタリア語、ドイツ語、TOEIC
- ・ 電験
- ・ 電検2種

- ・ 電気主任技術者3種
- ・ 電検3種
- ・ 電験3種
- ・ 希望としては電検を取得したいとは思いますが...
- ・ 電気主任技術者
- ・ トイック
- ・ Engineer license
- ・ 電験
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電験2種、3種
- ・ 電気工事士
- ・ 電検3・2・1種
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電験一種
- ・ 電検など。あとは簿記にも興味が有ります。
- ・ 就職先で必要になる資格
- ・ プログラム関係
- ・ 電気主任技術者
- ・ 色々
- ・ ソフ開
- ・ 情報処理技術者試験
- ・ まだ決めていない
- ・ 電験。
- ・ 第一級陸上無線技術士
- ・ 無線の資格
- ・ 第一級陸上無線技術士
- ・ 音響技能検定、秘書検定、etc...
- ・ 役に立つと思うもの
- ・ 電験2種、3種
- ・ 仕事に役に立ちそーなの。
- ・ 一陸技
- ・ 一陸技
- ・ 電気主任技術者。
- ・ 電気主任技術者3種
- ・ 危険物取扱
- ・ 危険物取扱
- ・ 危険物取扱
- ・ 自分のスキルアップに役立つ資格。
- ・ 興味のあるものは色々。
- ・ 危険物取扱
- ・ 応用情報技術者試験
- ・ 危険物取扱等
- ・ 危険物甲種
- ・ 興味のあるもの
- ・ 危険物取扱
- ・ 危険物
- ・ 弁理士
- ・ CFP
- ・ 危険物取扱者甲種、環境測量士
- ・ 環境技士
- ・ 基本情報技術者
- ・ 基本情報技術者

- ・ 社会保険労務士
- ・ 技術士
- ・ 危険物とかその他
- ・ 就職先でいろいろととるといわれたもの。
- ・ 危険物etc

[9-5][9-3]でA(はい)と答えた方：大学の授業は資格取得に有効ですか。

資格取得に大学の授業が有効と考える者の割合は徐々に増加しており、本年はこれまでで最も高く、半数以上の者が有効であると感じている。そうでないと答えた者は、授業が資格試験に直接関係しない場合などに有効性を感じないからとも想像され、授業に資格取得を意識した内容を盛り込むべきかは、別途の判断が必要になるかもしれない。



[9-6][9-5]でD(あまり有効でない)またはE(ほとんど有効でない)と答えた方：その理由は何ですか。

学生の想定する取得資格の種類・必要性に大きな幅があると思われるような雑多な回答となっている。大学が提供すべき内容、方向を逸脱しないことに留意しつつ、学生のニーズに合わせるような工夫があれば良いが、雑多なニーズに合わせることは現実的には困難であろう。

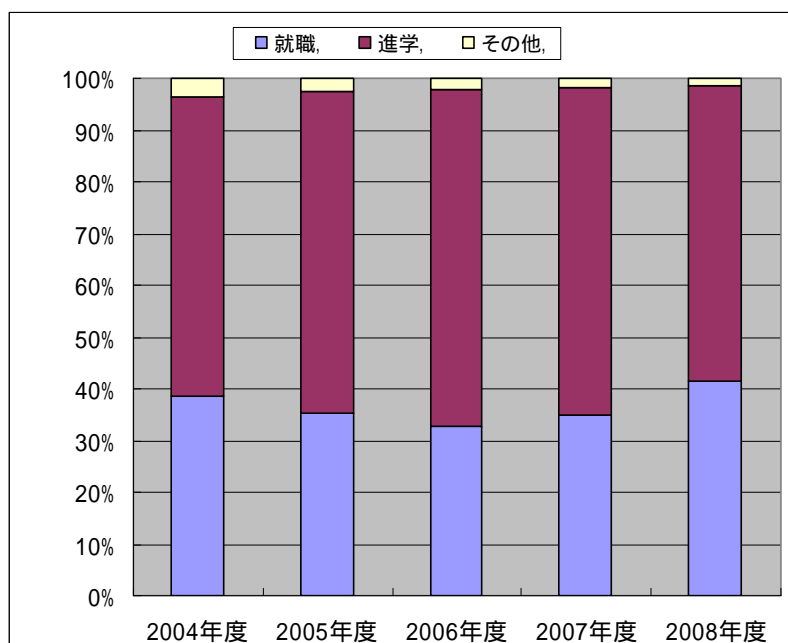
- ・ 英語が身に付かなかったから。
- ・ あまり理解できないので。
- ・ 関係ない内容だから。選択授業にさえなっていない！
- ・ 大学の講義は理論的・理想的なレベルでの話しかしないので実用レベルではほとんど使いものにならないから。
- ・ 不安がある
- ・ 介護だから
- ・ 分野が違う為
- ・ 学校と何にも関係ないから。
- ・ 取得できないから。
- ・ 大学の授業は知的好奇心を養うものであって、資格取得の為に受講するものではないと思う
- ・ 分野が違うため。
- ・ セミナー等がないこと
- ・ 取得したい資格にもよるが、それに対してより専門的、また集中した内容の授業がないため、自主的な学習で取得を目指す人が多い。
- ・ 分野が異なるだろうから
- ・ 文系向けの資格だから
- ・ あまり関係のない資格なので
- ・ 所属学科と全く関係ない分野のため。
- ・ 自分がとる資格が関係ないから
- ・ 関係ないから

- ・ 資格はその資格の勉強をする方がよい
- ・ 応化なのであまりとれる資格がないから。

[10]卒業後の進路についてお尋ねします。

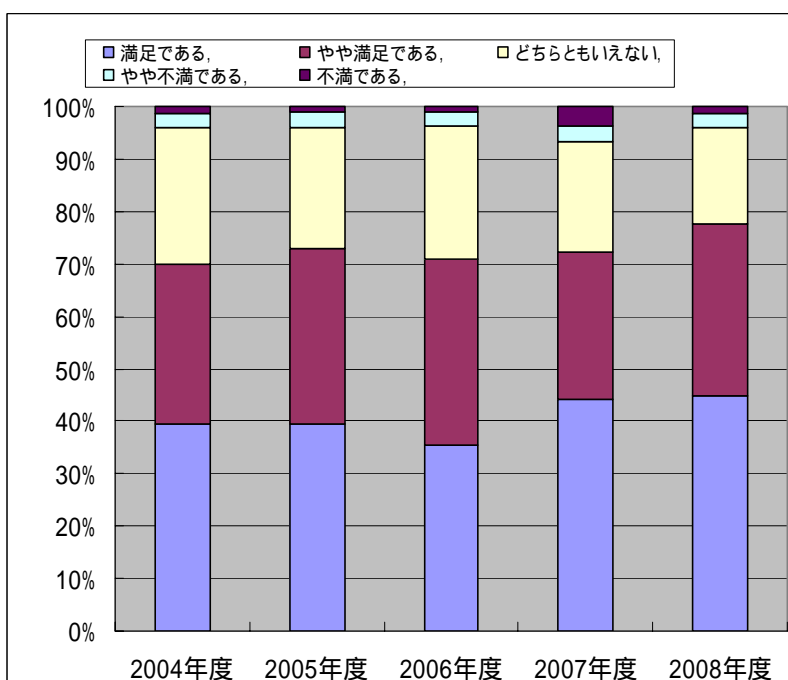
[10-1]あなたは卒業後就職しますか、進学しますか。

進学する卒業生が2004年度に60%弱であったものが、2005年度から2007年度にかけては60%強となり、学部生の進学率はやや増加していた。しかし、2008年度には、再び2004年度のレベルに減少している。今後の動向を観察する必要がある。



[10-2]あなたは卒業後の進路に満足していますか。

2004年度から2008年度の傾向を見る。「満足である」と「やや満足である」が70%以上の高い水準にあり、しかも、その割合が増加している。



[10-3][10-2]でD(やや不満である)またはE(不満である)と答えた方:その理由は何ですか。

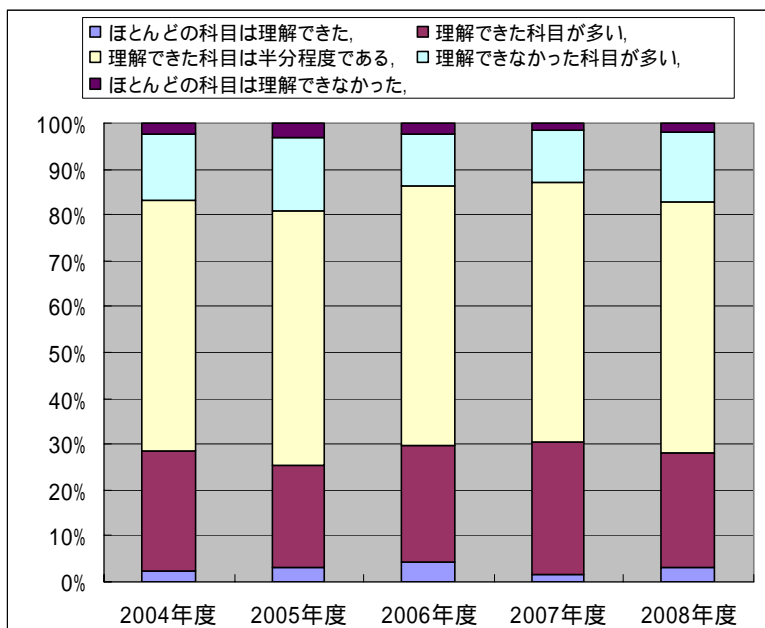
卒業後の進路に関する事、自分の希望通りにいかなかったことへの不満をあげた卒業生が比較的多かった。

- ・ 社会にでて働きたいと考えるようになったから
- ・ 研究が苦痛であるから
- ・ 昨年末からの不景気で求人が下がると思うため。

- ・ 第一希望をあきらめたため
- ・ 就職活動を意識する時期が遅すぎた。
- ・ まだ進路が決まってないから
- ・ 進路を間違えたから。
- ・ あまり興味がもてない
- ・ 希望する就職先ではなかった
- ・ 研究室が変わること。
- ・ 就職したかったから
- ・ 今後が不安だから
- ・ 4年になるまで遊ぶことしか考えておらず今もしんろもきまらずにいるのでこうかいています。

[11]これまでに受講した科目の理解度はどの程度ですか。

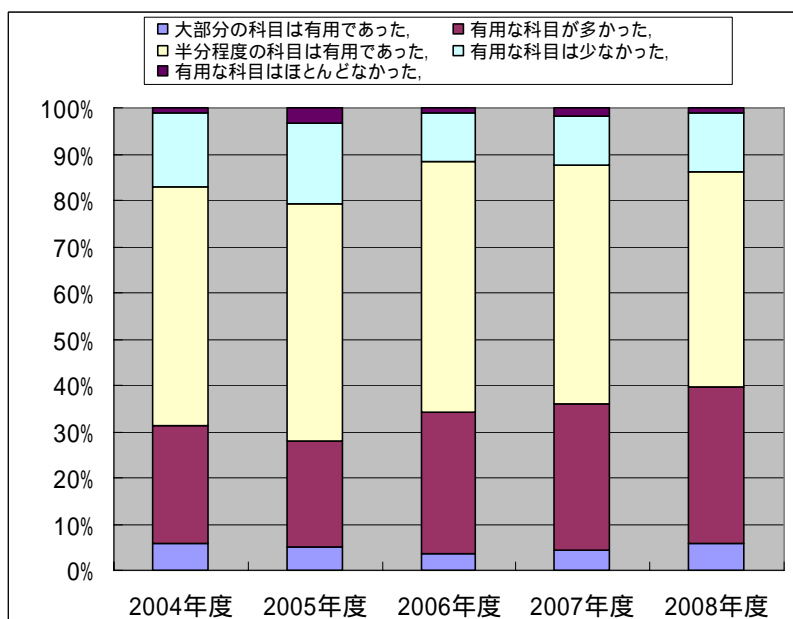
2004年度から2008年度の傾向を見る。「ほとんどの科目は理解できなかった」と「理解できなかった科目が多い」の割合が、2004年度、2005年度の約20%から減少し、特に、2006年度、2007年度には約13%に減少している。しかし、2008年度には、再び、20%近くに増加している。今後の動向を観察する必要がある。



[12]履修価値のあった科目の割合についてお尋ねします。

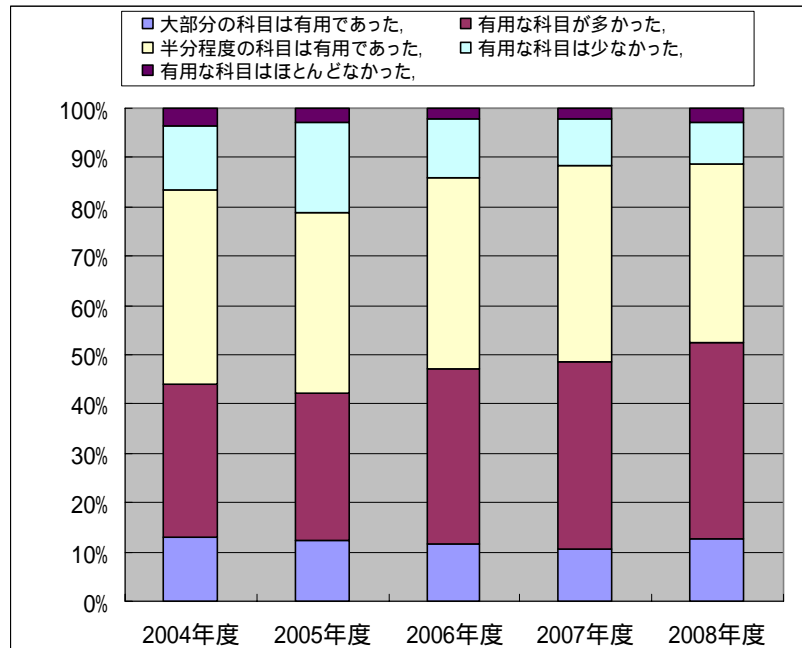
[12-1]受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

2004年度から2008年度の傾向を見る。「有用な科目はほとんどなかった」と「有用な科目は少なかった」の割合が約20%から減少して、特に、2006年度～2008年度には10%強になっている。その一方で、「有用な科目が多かった」と「大部分の科目は有用であった」の割合は約30%から、2008年度には40%に増加し、改善の傾向にある。



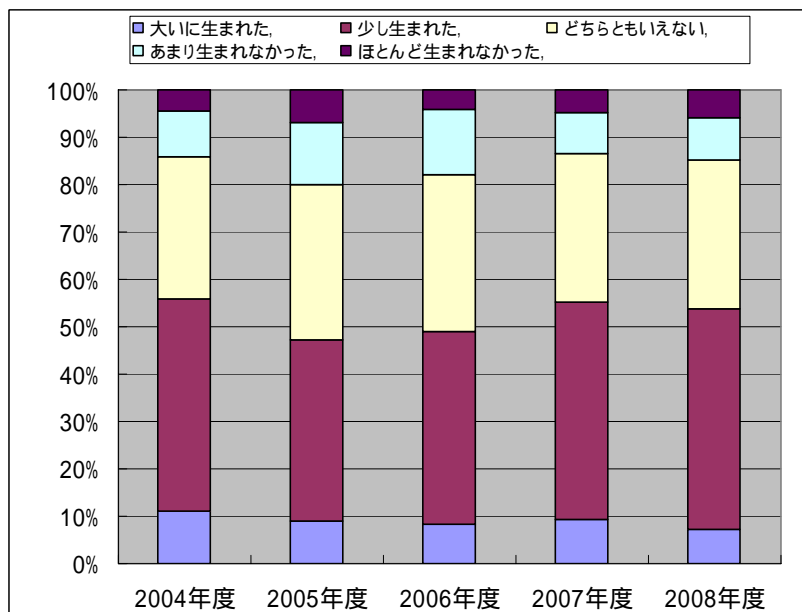
[12-2] 受講した実験・実習科目の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

204年度から208年度の傾向を見る。「有用な科目はほとんどなかった」と「有用な科目は少なかった」の割合は約20%から減少して、特に、206年度～208年度には10%強に減少している。その一方で、「有用な科目が多かった」と「大部分の科目は有用であった」の割合は40%強から、208年度には50%強に増加し、改善の傾向にある。



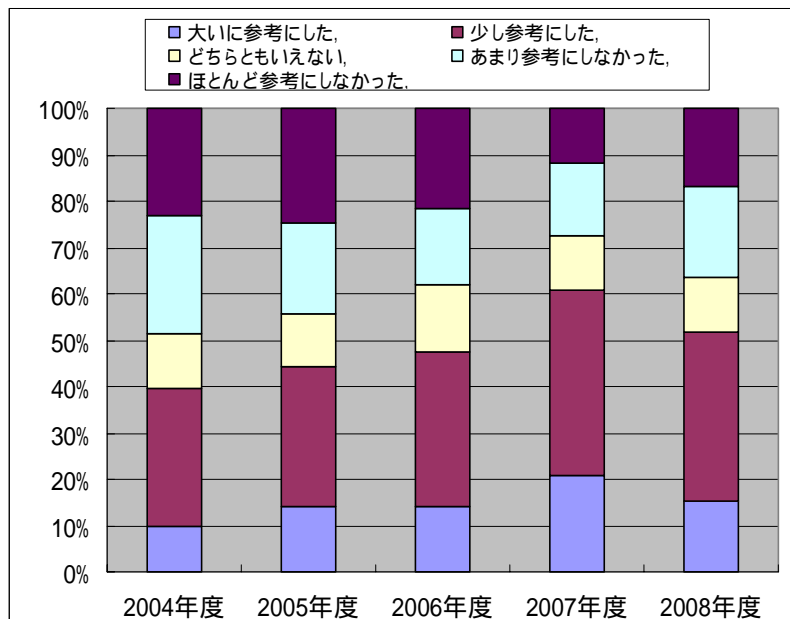
[13] 大学における教育により、将来への自信や意欲が生まれましたか。

204年度から208年度の傾向を見る。否定の割合は14%から20%程度で変動し、肯定の割合も47%から56%程度で変動しており、今後の動向を観察する必要がある。しかし、肯定の割合は205年度からは増加傾向にあり、改善の傾向にある。



[14] 講義科目を選択する際に、シラバスを参考にしましたか。

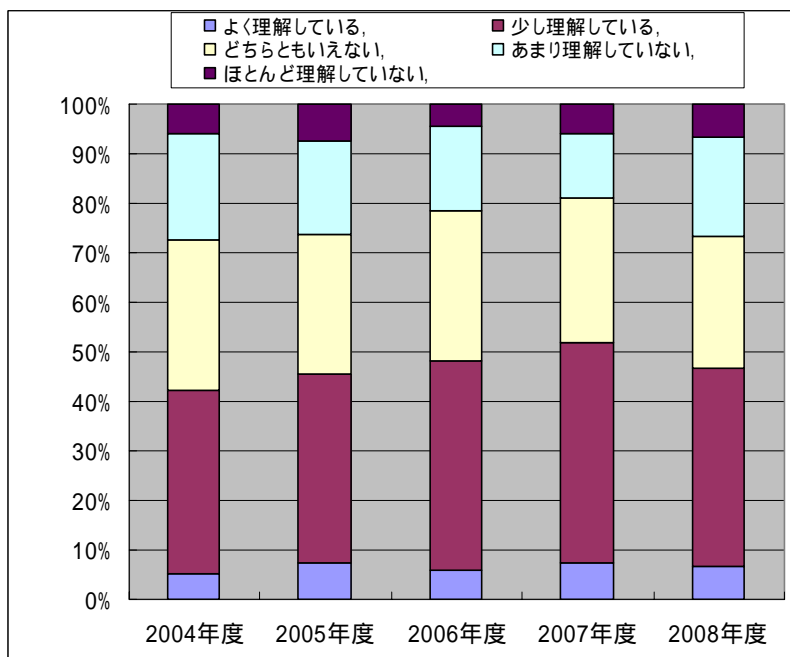
2004年度から2007年度には、「ほとんど参考にしなかった」と「あまり参考にしなかった」という否定の割合が50%弱から30%弱に減少し、「少し参考にした」と「大いに参考にした」という肯定の割合が40%から約60%へと増加しており、改善されていた。しかし、2008年度には、やや元に戻っている。今後の動向を観察する必要がある。



[15]カリキュラムについてお尋ねします。

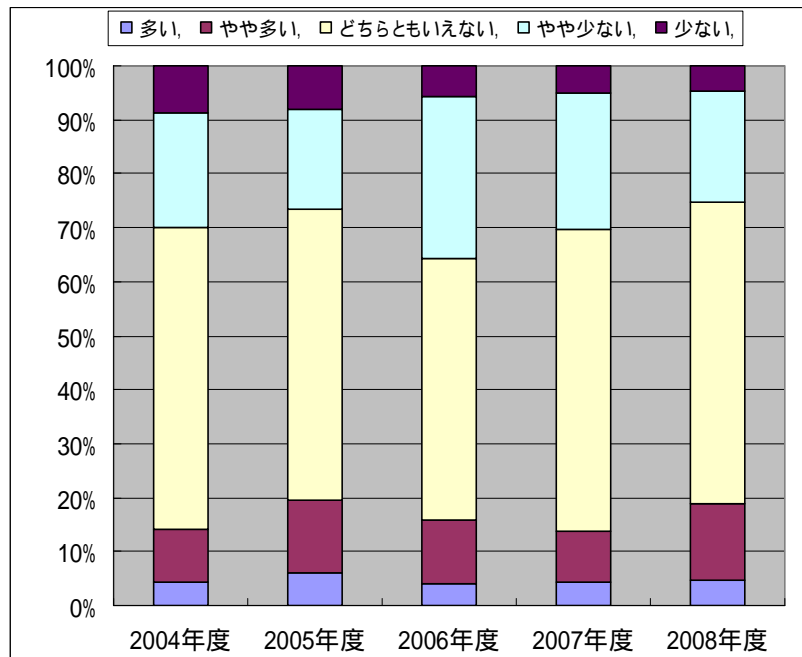
[15-1]カリキュラムの中で、科目間のつながりを理解していますか。

2004年度から2007年度には、4年連続して、「ほとんど理解していない」と「あまり理解していない」という否定的な回答が30%弱から20%弱と減少し、「少し理解している」と「よく理解している」という肯定的な回答が40%弱から50%強に増加しており、改善の傾向にある。しかし、2008年度には、やや元に戻っている。



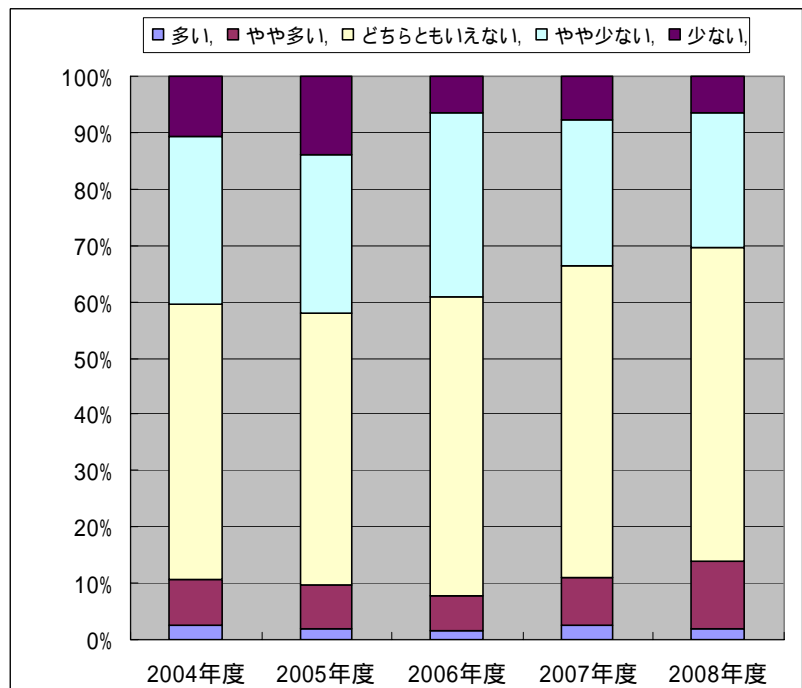
[15-2]カリキュラムの中で、実験・実習科目の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

2004年度から2008年度の傾向を見る。「少ない」と「やや少ない」は30%程度、「やや多い」と「多い」も15%程度であり、その割合にあまり変化はない。



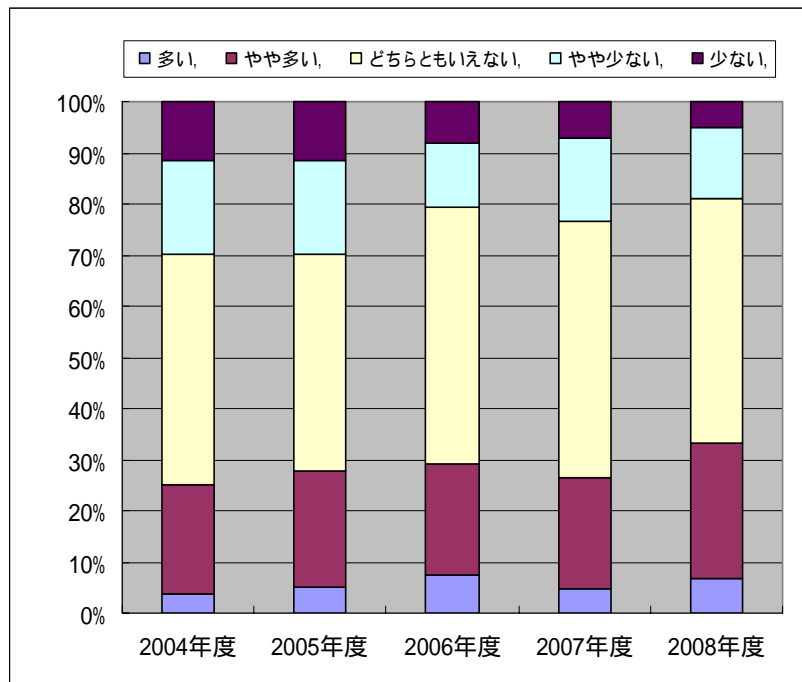
[15-3]カリキュラムの中で、演習時間の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

2004年度から2008年度の傾向を見る。「少ない」と「やや少ない」は約40%から、2008年度には30%に減少しており、演習時間の比重が少ないと感じる学生が減少している。



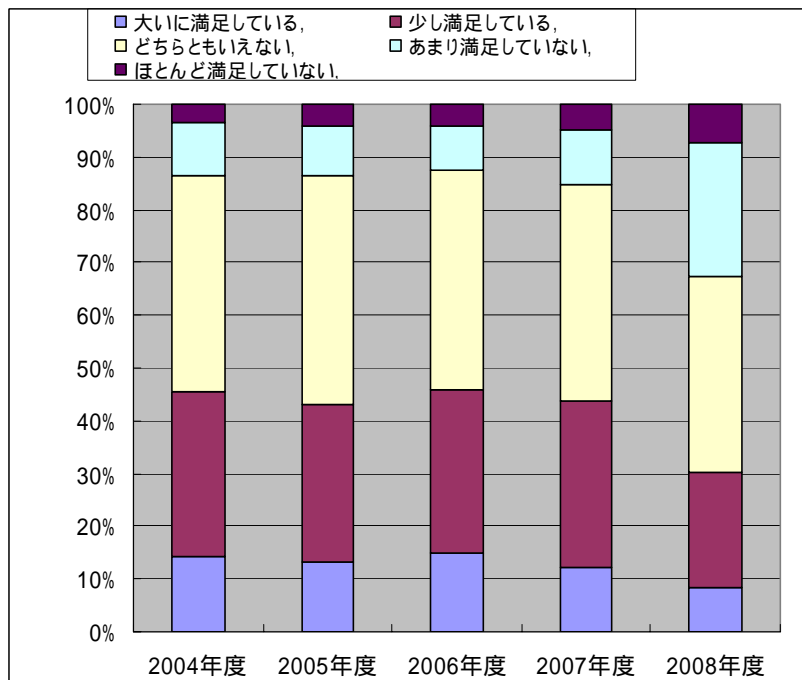
[16]受講した科目全般について、教育への熱意があった担当教員の割合はどの程度ですか。

2004年度から2008年度の傾向を見る。2004年度から2008年度では、「多い」と「やや多い」が約25%から約35%に増加し、「やや少ない」と「少ない」が30%から約20%に減少しており、教育の熱意に対する評価が上昇している。



[17]成績評価についてお尋ねします。
[17-1]成績評価（秀、優・良・可・不合格・未履修）に満足していますか。

2004年度から2008年度の傾向を見る。2004年度から2007年度は、「大いに満足」と「少し満足」が約45%であったが、2008年度は約30%に減少し、その一方で、「あまり満足していない」と「ほとんど満足していない」が約13%から30%強に増加している。今後の動向を観察する必要がある。



[17-2][17-1]でD（あまり満足していない）またはE（ほとんど満足していない）と答えた方：その理由は何ですか。

種々の理由が回答されたが、大きく分類すると、成績についての不満足度が強いことの原因として、「自分の努力の不足や結果が伴わない勉強」をあげるものと、「成績評価の手続きの公正さについての疑問」をあげる者がいた。特に、前者の理由が非常に多かった。

- ・ 1～3年前半まで高校生気分でありあまりまじめに取りくんでなかった。
- ・ 成績が悪かった
- ・ 留年したから
- ・ 可が多い

- ・ 高校の時と比べ、一人暮らしを始めたことにより怠け、勉強を避けてしまっていた。
- ・ やりようによってはまだまだ伸ばせる部分があると感じるから
- ・ 努力の余地があったから
- ・ 取り組の甘さ
- ・ 成績がよくなかったから
- ・ 勉強不足
- ・ 授業についていくのにやっとだった
- ・ がんばれなかったから。
- ・ もう少し良い成績がとれたのではないかと。努力が足りなかったのかなと。
- ・ 大学院へのすいせんがもらえなかった。
- ・ 勉強が不十分
- ・ もう少しがんばれたと思うので
- ・ 内容がよくない
- ・ テストの点の低さ
- ・ 可が多かったため
- ・ もっと時間をかけて理解したかった
- ・ 不合格が多い
- ・ 良、可が大半だったため。講義に対する自分の努力が足りなかった。
- ・ 出席日数が足りず、試験を受けられず、留年したから
- ・ 自身の努力不足
- ・ 思ったほど単位を取ることができなかった為
- ・ 授業の理解度と成績があまり関係なかった。試験のためだけの勉強をすれば成績が上がるのは納得できない。
- ・ 主席になれなかった
- ・ がんばればもう少し成績を上げられたと思うから。
- ・ 成績のつけ方に疑問が残る科目があった。
- ・ 留年してしまったため
- ・ 自分の責任で。
- ・ 基礎を怠って後々の講義がきつかった。
- ・ 1年時悪かったため。
- ・ 希望を通せるほどの成績が得られていないため。
- ・ 留年したから。
- ・ あまり成績がよくない時期があった。
- ・ 留年したから。
- ・ おとしたから
- ・ 未リシュウ多い
- ・ 入学当時は単位を取れば良いと思っていたため成績が好ましくない。
- ・ もっと上にいけたのではないかと思えるから
- ・ たくさん遊び単位がひどいから。大学外で遊ぶことで色々学んだので後かいは無し。
- ・ 自分が理解した科目であっても、成績に反映していなかったから。
- ・ 勉強不足ということに不満
- ・ 自分に甘く勉強を怠った
- ・ もう少しがんばれたと思う。
- ・ 取得単位数の乏しさ。
- ・ 勉強をあまりしていなかった為
- ・ 成績が良くなかったから
- ・ 同じ科目でも教授によって取る難度が違う。
- ・ あまり良い成績が得られなかった。
- ・ まだやれた
- ・ 勉強不足
- ・ もっと意欲的に学ぶべきであった。
- ・ 成績があまり良くなかった
- ・ 真面目にやっていない時期があった

- ・ 勉強以外のことに時間を費やした割に順調に來れたと思うが、成績自体は悪い
- ・ あまり勉強していなかったので成績が悪かったから。
- ・ 悪いから
- ・ 留年したから。
- ・ 留年したから。
- ・ 勉強不足であった。
- ・ 成績のみで研究室配属が決まるから
- ・ GPA制度に疑念があります
- ・ 思ったよりも理解できていなかった
- ・ 試験前、試験中は理解しているが、時間がたつと忘れるから、本当の実力が反映されていない気がする。

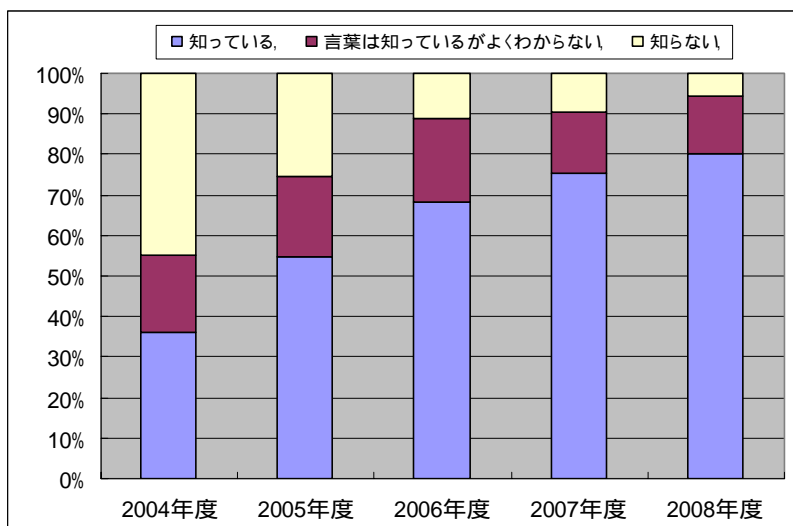
- ・ 思うような成績になっていない
- ・ 低いから
- ・ カンニングして、良い成績をとっている人が多く、マジメにやっても...
- ・ 自主的に学習しなかったせいなので仕方ないです。
- ・ もうちょっと取れる部分があったから
- ・ 時間を有意義に使うことができず、学習時間を十分に確保できなかったため。
- ・ まだまだできたことがあった。
- ・ 満足できないから
- ・ 成績が悪い！！
- ・ 成績は理解度に比例していると考えるから
- ・ 勉強不足で、未履習になった科目があったため
- ・ 自分のせいだが、GPAが低すぎるため
- ・ まだまだ努力が足りなかったと思う
- ・ 自分自身でもう少し努力して勉強すれば良かったかなと思っている
- ・ もっとがんばればよかった
- ・ 二年次の成績があまり良くなかった
- ・ 理解できてなかった。
- ・ あまり勉強しなかったから。
- ・ 1年留年するほどに単位が取れなかった
- ・ 予想よりも成績が悪かったから
- ・ 人文科目が全体の成績を下げた。
- ・ あまり勉強をしなかったから。
- ・ あまり良い成績ではないので
- ・ もっと頑張ればよかった
- ・ もう少しきちんと勉強すればよかったからです。
- ・ 勉強していなかった
- ・ もっとがんばれたと思う。
- ・ あまりよい成績ではなかった
- ・ 理解出来ないことがあったから
- ・ 普段の学習が足りなかった。
- ・ 成績が悪いから
- ・ 1年生からもっと勉強すべきだった。
- ・ 成績が悪かったため
- ・ 2年生のときはあまり勉強していなかった気がするから。
- ・ 成績が良くないから
- ・ ほとんど認定単位だから
- ・ 自分自身が勉強していなかったため。もう少しやっておけばよかったと思う。
- ・ 本当の理解度とテストの点あまり結びついていないため
- ・ 良い物であっても理解が足りてなかったため。
- ・ 可がけっこうあるので。
- ・ 可が多い。
- ・ 成績が悪いから

- ・ 思ったように点数がのびなかった
- ・ バイトに熱中しすぎた
- ・ ほとんど勉強しなかったから。
- ・ ボーダーラインギリギリで通過すればいいと思っていた(当時)
- ・ もう少し頑張ればいい成績をとれていたと思うから
- ・ 勉強不足、意思・目標の低さ。
- ・ 自分を律して行動できなかったから
- ・ 可が多い。
- ・ 自分に甘かった、暗記科目が多かった気がする
- ・ できないことは苦行であり意欲を保つことが難しい。
- ・ 悪いから
- ・ 留年したから
- ・ 単位は取得したが、理解したとは言えないため。
- ・ 理解できていない科目もあるから
- ・ 悪かった。
- ・ もっと良い成績をとりたかった
- ・ 自分の努力が足りず、良い成績が取れなかったから。

[18] オフィスアワー（質問・相談時間）についてお尋ねします。

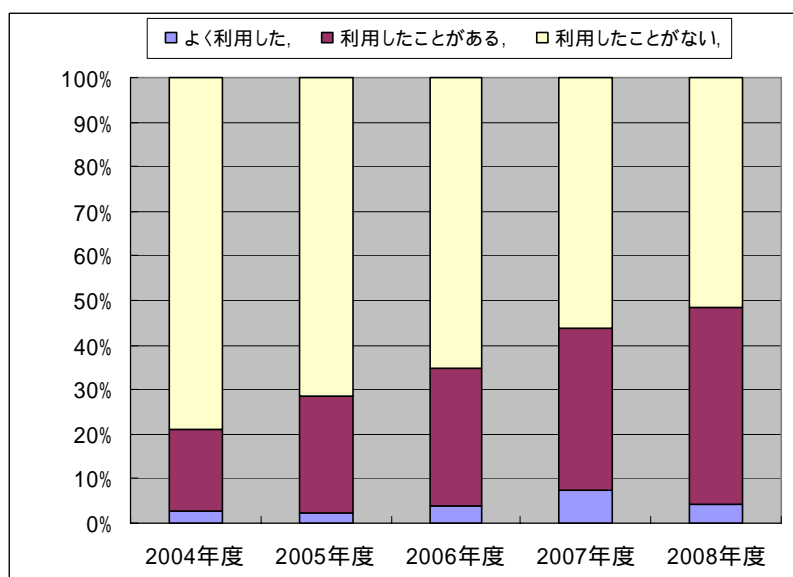
[18-1] オフィスアワーという制度を知っていますか。

2004年度から2008年度の傾向を見る。2004年度から2008年度にかけて「知っている」は約35%から80%に増加し、「知らない」は約45%から約5%に減少している。大きく改善されている。



[18-2] オフィスアワーを利用して、教員に質問した経験がありますか。

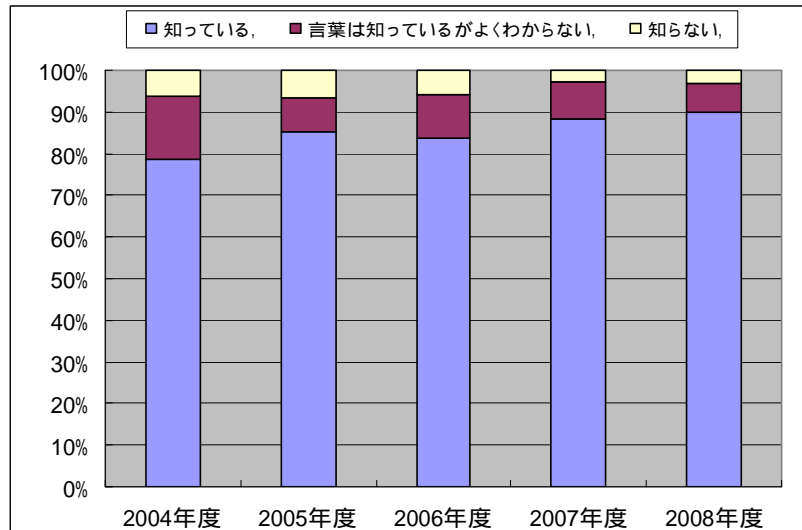
2004年度から2008年度の傾向を見る。「よく利用した」と「利用したことがある」は、20%強から50%弱へと大きく増加している。



[19]ティーチングアシスタント（TA）についてお尋ねします。

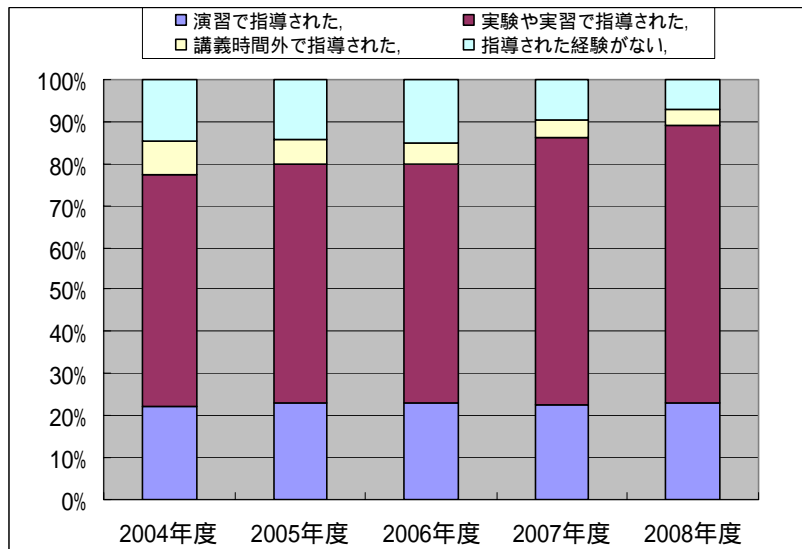
[19-1]ティーチングアシスタント（TA）という制度を知っていますか。

TA制度を「知っている」の割合は、2004年度から徐々に増え、2008年度には90%になっている。制度が定着している。



[19-2]ティーチングアシスタント（TA）に指導してもらった経験がありますか。（複数回答可）

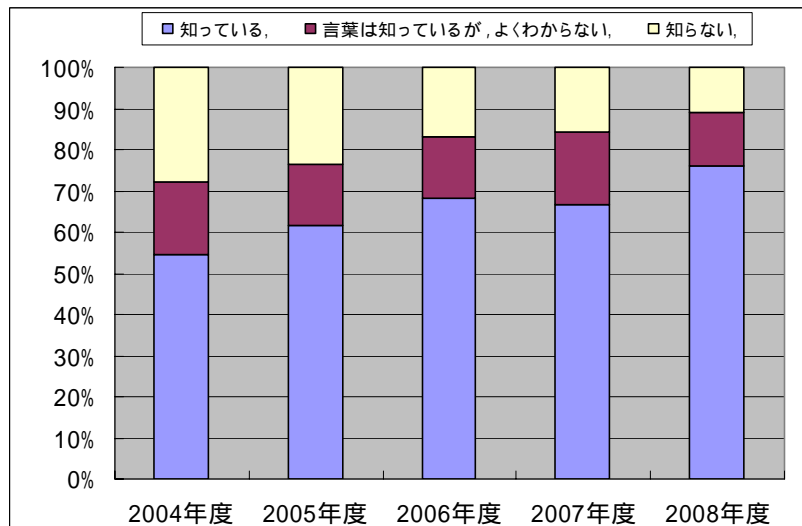
2008年度には、90%強が「演習」「実験・実習」「講義時間外」のいずれかの指導を受けた経験があり、制度が定着している。



[20]指導教員制度についてお尋ねします。

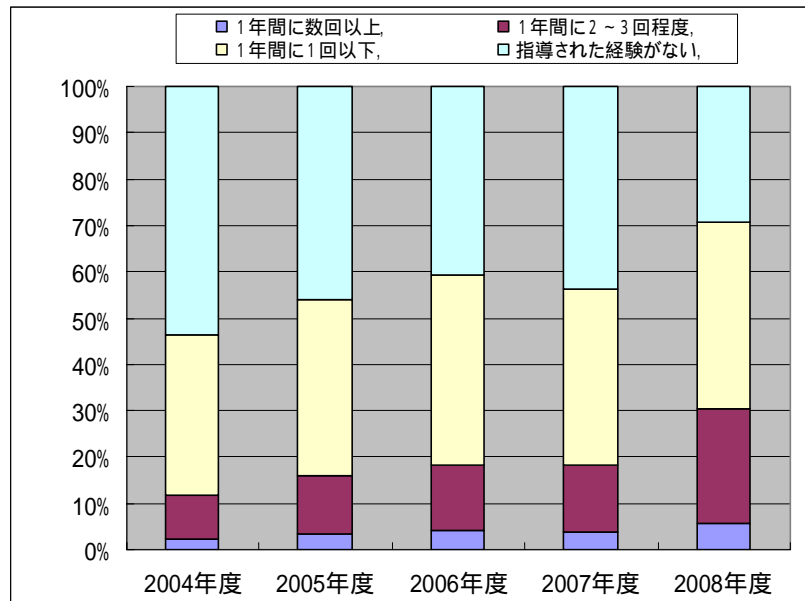
[20-1]指導教員制度を知っていますか。

指導教員制度の周知は、2004年度から2008年度にかけて改善しており、2008年度には、約75%の学生が「知っている」と答えている。しかし、「知らない」または「言葉は知っているがよくわからない」の割合がまだ25%あることは、制度の周知方法も含めて今後の検討課題である。



[20-2] 1年生から3年生の間に、指導教員から指導やガイダンスを受けた経験がありますか。(受けた経験のある方は、1年間の平均的な回数を答えて下さい。)

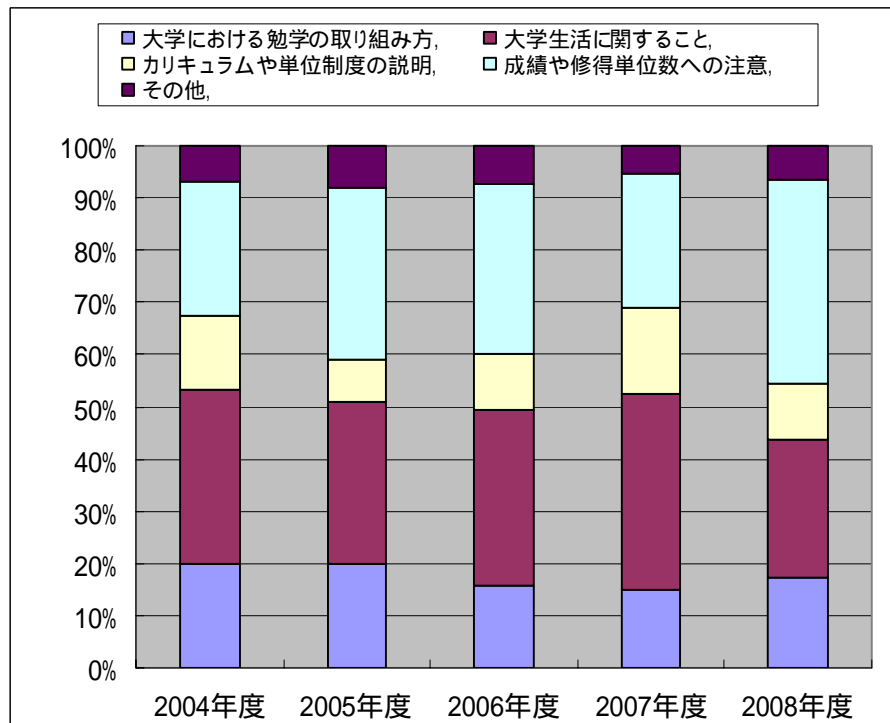
指導された経験が無い割合は着実に減少しているが、まだ30%程度ある点については、その理由を明らかにすることが望まれる。



[20-3][20-2]でA(1年間に数回以上)、B(1年間に2～3回程度)、C(1年間に1回以下)のいずれかを答えられた方:1年生から3年生の間に、指導教員から指導を受けた内容を答えて下さい。(複数回答可)

複数回答であり、勉学の取り組み、生活全般、カリキュラム、単位、成績のいずれも話題になっている。

大学生活、進路変更、就職、進学などについての相談が実施されている点は指導教員制度の趣旨に合致している。



E(その他)[具体的に:]

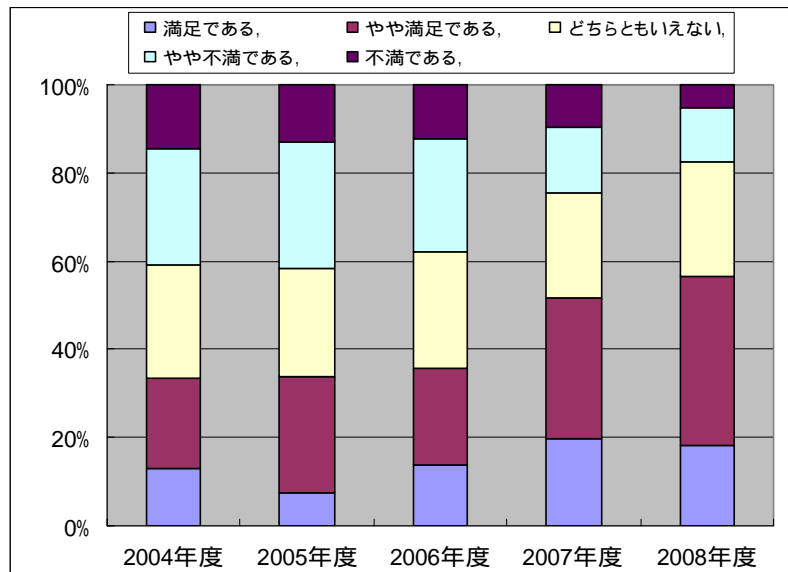
- ・ インターンシップのESの添削
- ・ 就職について
- ・ 進学について
- ・ 休学する際の相談

- ・ 事務への提出物に関して
- ・ 進学する大学について
- ・ 就職について
- ・ 進路について
- ・ 就職について。
- ・ 連絡先の確認
- ・ 就職情報について。
- ・ 就活
- ・ 仕事について
- ・ 進路・就職について
- ・ 将来に関する話。
- ・ 兄弟の成績に関する話。
- ・ 進路
- ・ 将来何がしたいか等。
- ・ 出席について、
- ・ 就職活動について
- ・ 修得単位の状況について
- ・ 語学留学に関する話
- ・ 卒業後の進路
- ・ 施設に対する不備に関する質問
- ・ 顔合わせで会いました。
- ・ 進路について
- ・ 修正不可の時にかけられても何の意味があるのか、へこませただけかと思いました。
- ・ 進学について

[21]施設や設備等についてお尋ねします。

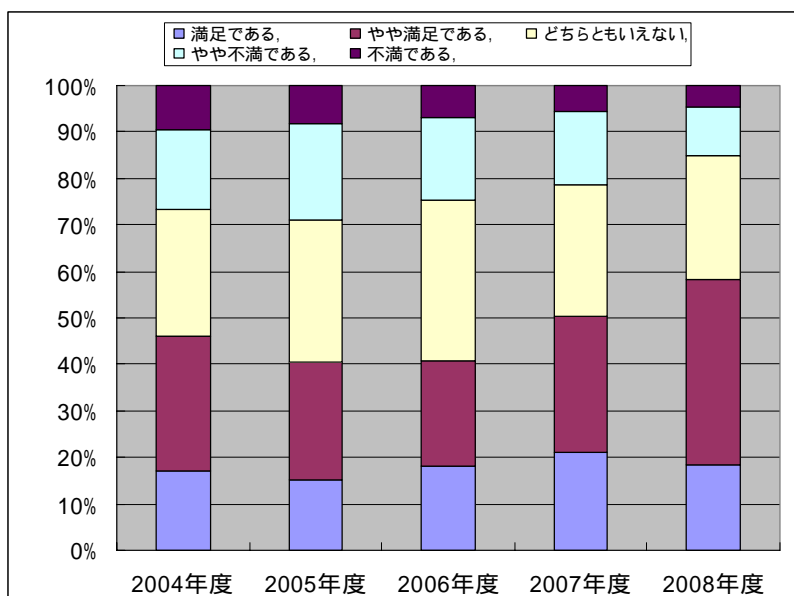
[21-1]教室の広さ，席数，明るさ等について，満足していますか。

2006 年度以前は「不満である」と「やや不満である」とする意見が 40% 程度あったが，2008 年度には 20%弱に減少している。その一方で，「満足である」と「やや満足である」が約 35%から 55%強に急増している。学生の満足度が大きく改善されている。



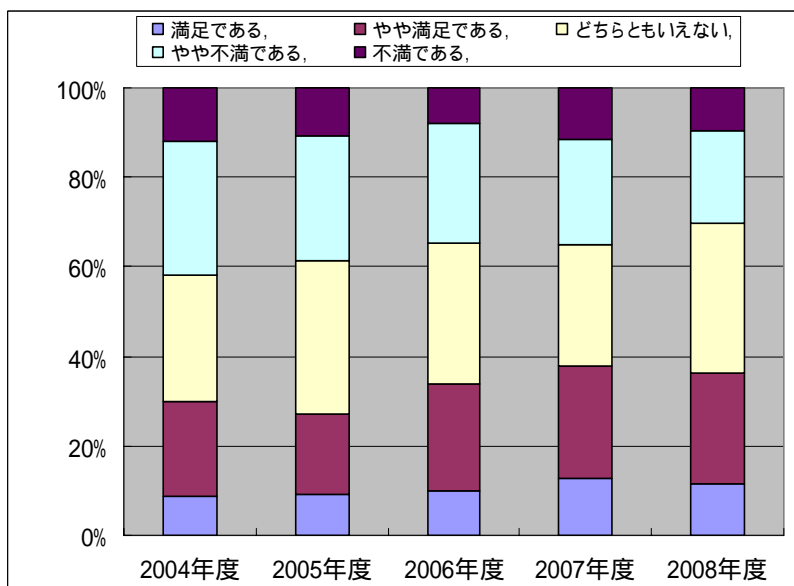
[21-2]必要な設備（マイク，OHP，プロジェクタ等）に満足していますか。

2006年度以前は「満足である」「やや満足である」とする意見が40%強程度であったが，2008年度には60%弱に増加している。学生の満足度が改善している。



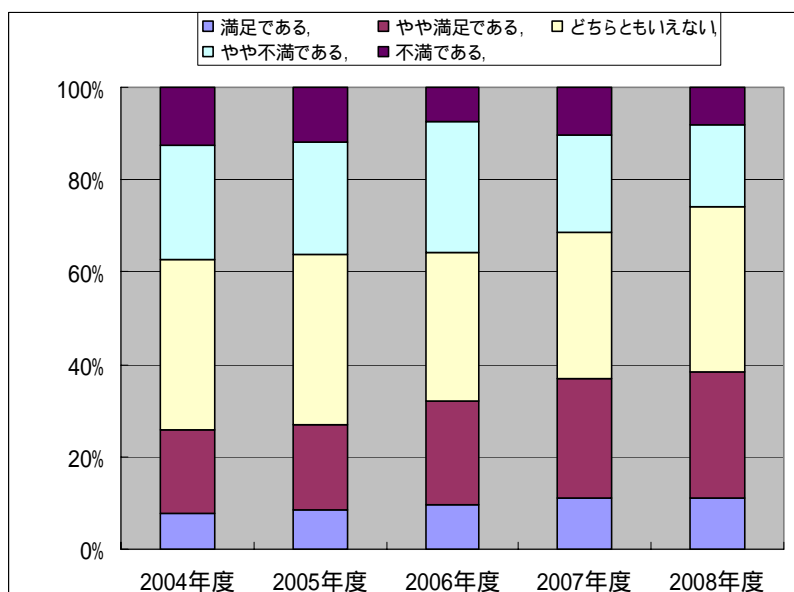
[21-3] 1年生から3年生の間に利用した実験室・実習室の広さ，明るさ等について，満足していますか。

2006年度以降は，学生の満足度に明らかな改善傾向がみられる。建物のリフォームに伴って徐々に改善された結果であろう。しかし，未だ否定的評価が30%強あり，いまからもリフォームの際にはこの観点からの設計も考慮に入れる必要がある。



[21-4] 1年生から3年生の間に利用した実験・実習に必要な設備・装置について，満足していますか。

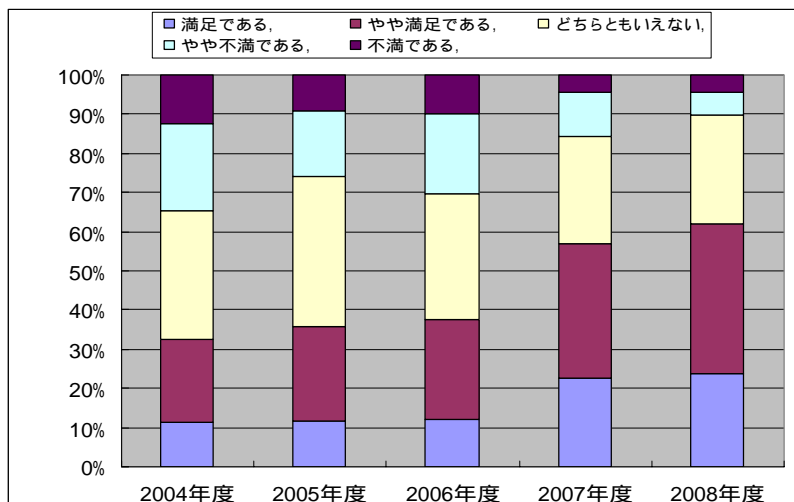
学生の満足度に明らかな改善がみられる。しかし，未だ否定的評価が30%弱あり，今後一層の努力が必要である。



[22]情報機器についてお尋ねします。

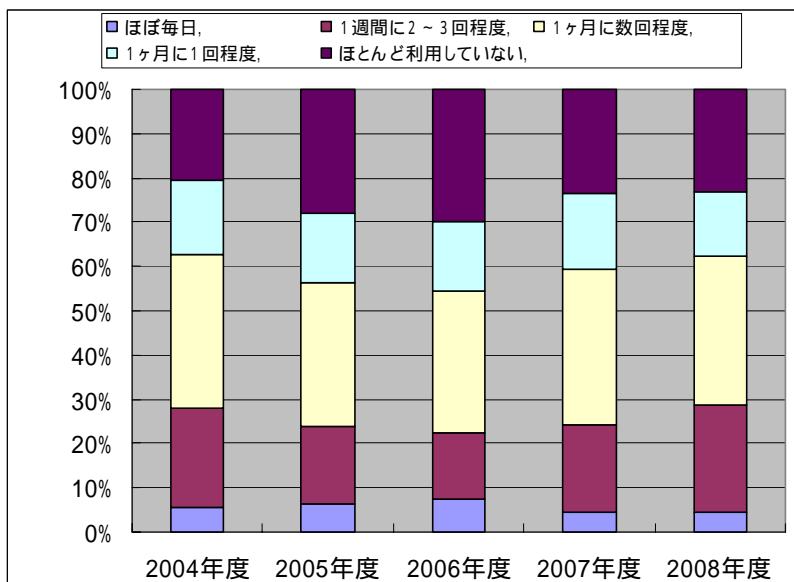
[22-1]情報機器（コンピュータ端末等）の整備状況について満足していますか。

昨年度に引き続き明確に改善傾向がみられる。しかし不満とする意見もまだ1割あり、今後も継続して改善の努力が必要である。



[22-2] 1年生から3年生の間に、講義以外でネットワークや情報サービス（ソフトウェア、教材を含む）を、どの程度利用しましたか。

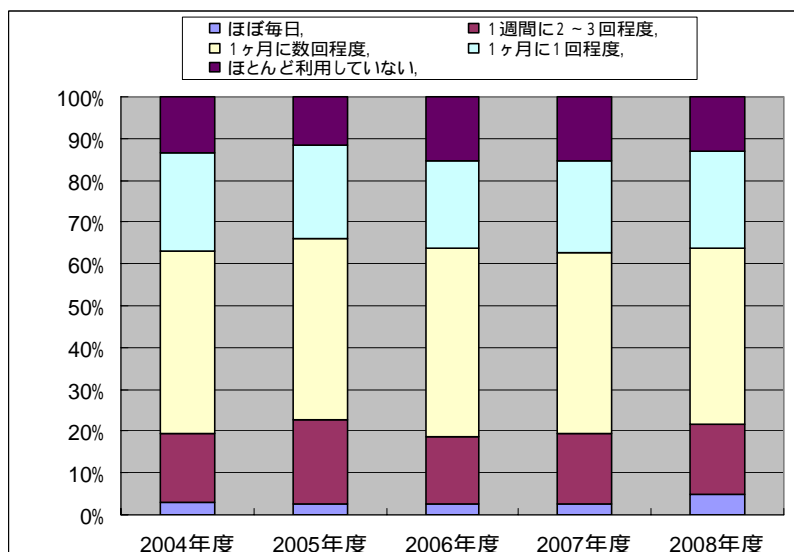
利用頻度はほぼ横ばい状態である。情報ネットへの精通を促す努力をすることが重要である。ITに関しては現行レベルを考えると機器の充実よりも情報ネットワークの重要性を理解させるためのカリキュラムを充実させることが重要である。



[23]図書館についてお尋ねします。

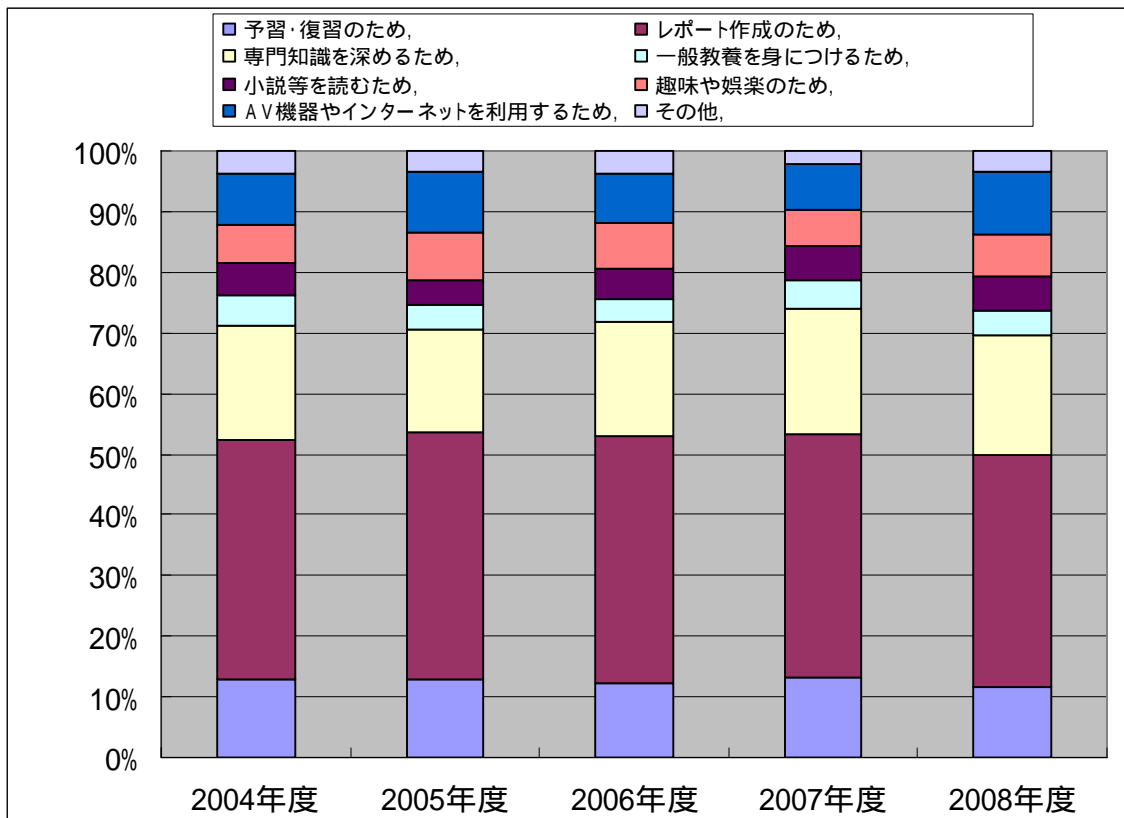
[23-1]図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

ほぼ昨年度と同じである。開かれた図書館づくりを一層進めることはもちろんであるが、図書館の利用を講義などで促す努力が必要であろう。インターネットのウィキペディアなどでは得られない情報が図書館には詰まっていることを教えるべきである。



[23-2]図書館を利用する主な理由を教えてください。(複数回答可)

昨年度と似た傾向である。インターネットを利用するための図書館利用が1.5倍近くになっている。おそらく利用できるコンピュータ数やアプリケーションソフトを充実するとさらに図書館利用者数は増加すると思われる。図書館本来の目的と合致するかどうかは議論の対象となるところもあるかもしれないが、現在ではIT情報を駆使できる能力は学生のような若者にとって非常に価値があると思われ、この点は大学側も真剣に努力すべきと思われる。



H (その他) [具体的に :

- ・ テスト勉強をするため
- ・ そつろん
- ・ 新聞に目を通す
- ・ 試験べんきょう
- ・ トイレ
- ・ しけん勉強
- ・ ひまつぶし
- ・ 試験勉強・研究のための論文収集
- ・ テスト勉強
- ・ 試験勉強
- ・ テスト勉強
- ・ 卒論の手助けに
- ・ ねる
- ・ テスト勉強
- ・ 時間つぶしや試験勉強
- ・ テスト勉強
- ・ 成績を見るため
- ・ 試験勉強
- ・ テスト勉強
- ・ 文献を探す。
- ・ 寝るため。

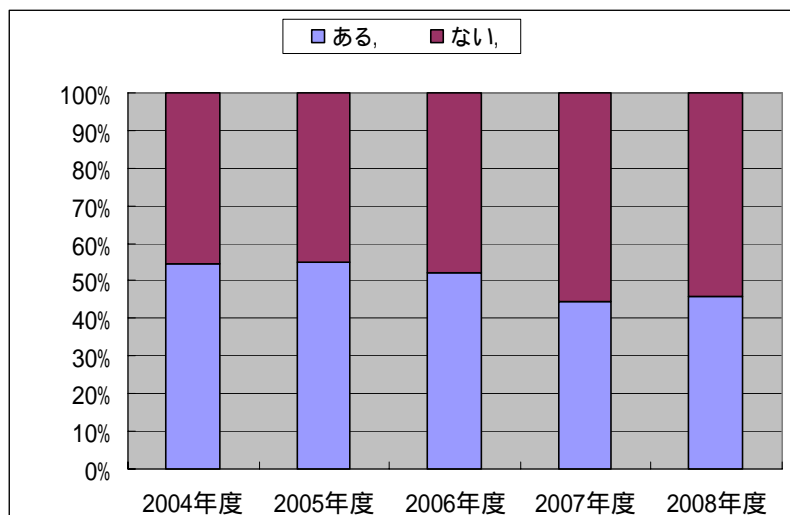
]

- ・ テスト勉強をするため。
- ・ TOEIC対策のため
- ・ 試験勉強に集中する為
- ・ 試験勉強
- ・ 試験勉強
- ・ 試験勉強、就活のための勉強
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強
- ・ 研究

[24]工場見学やインターンシップ(工場実習)についてお尋ねします。

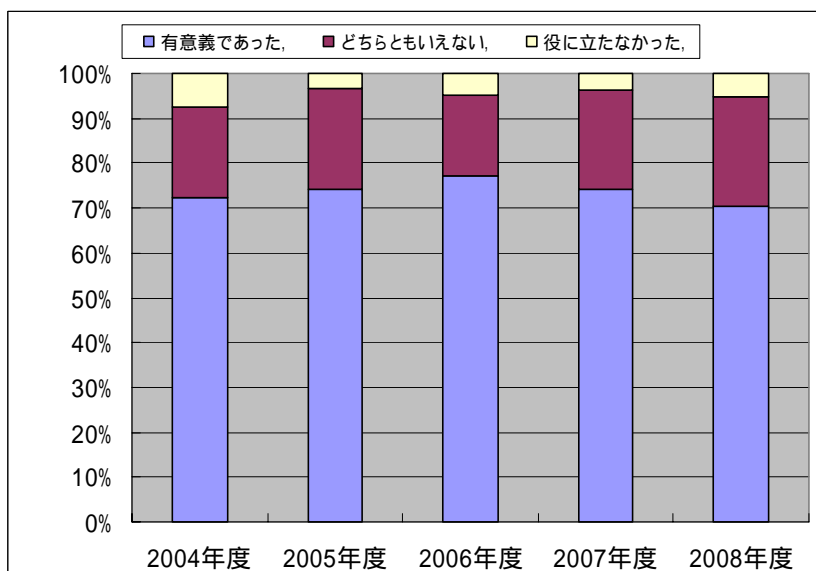
[24-1]工場見学やインターンシップに参加した経験がありますか。

昨年度と全く同じである。就職前に現場の内容や雰囲気を知ることには重要であり、いまだ半数以上の卒業生が経験していないという事実は無視できないものと思われる。大学側もさらなる改善へ向けた努力が必要であろう。



[24-2][24-1]でA(ある)と答えた方。工場見学やインターンシップに参加した経験が、自分自身の成長のために有意義であり、履修した価値がありましたか。

一昨年度とほぼ同じであるが若干「有意義」が減少している。しかしこれも誤差の範囲であり70%のインターンシップ経験者が有意義と答えている。インターンシップ参加者が増大するよう今後も努力が必要である。



2.2 2008年度修了生アンケート（工学研究科）

アンケート実施年月日 平成21年 1月26日

アンケート回収率

課程	配付枚数	回収枚数（回答率）
博士前期課程	334枚	265枚（79.3%）
博士後期課程	24枚	5枚（20.8%）

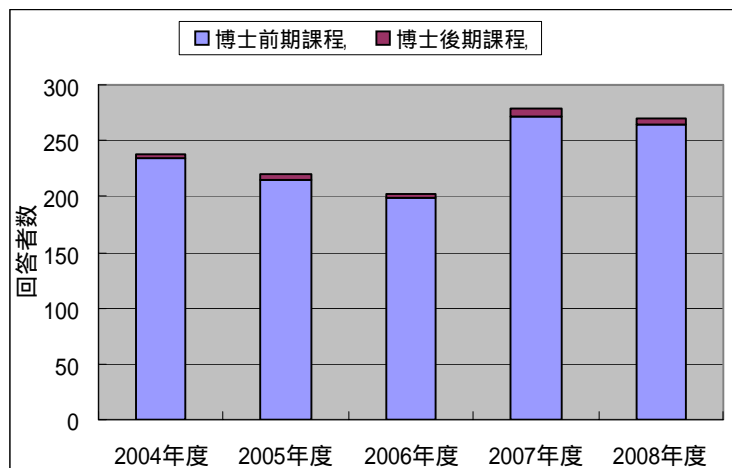
[1]あなたの課程，専攻についてお答え下さい。

[1-1]あなたが修了される課程は何ですか。

A（博士前期課程）265名

B（博士後期課程）5名

昨年度に比べ，博士前期課程はほぼ前年度と同じでかなり高いレベルにある。博士後期課程はさがっているが母数が小さいからこの変動で一喜一憂することはない。アンケートの趣旨を理解してもらう努力は続ける必要がある。



[1-2]あなたが修了される専攻は何ですか。

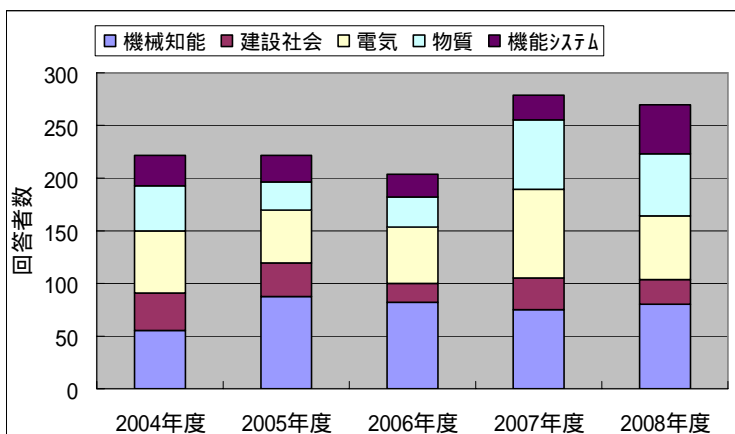
機械知能工学：80名

建設社会工学：24名

電気工学：61名

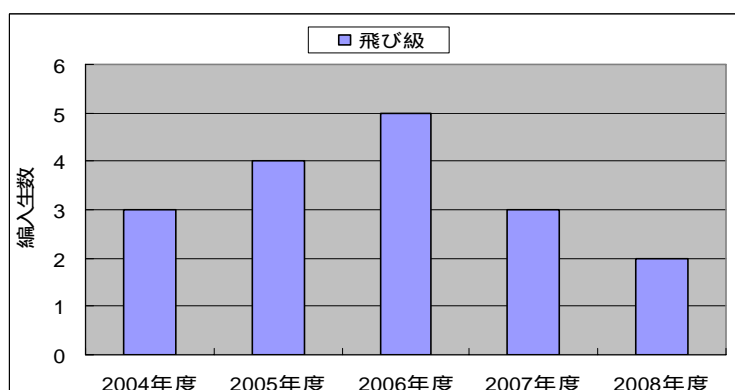
物質工学：58名

機能システム創成工学：47名



[1-3]飛び級入学の方は [] に 入れてください。 [2名]

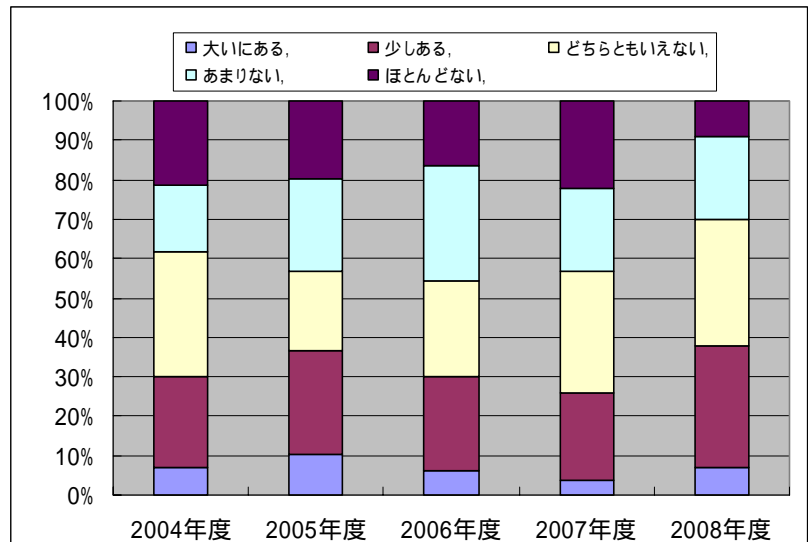
飛び級の入学者の数は2名で2007年度から1名減少している。ただし飛び級は多ければよいというものではないため、飛び級後の追跡調査など飛び級にまつわる問題を慎重に検討しなければならない。



[2]工学研究科における大学院教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

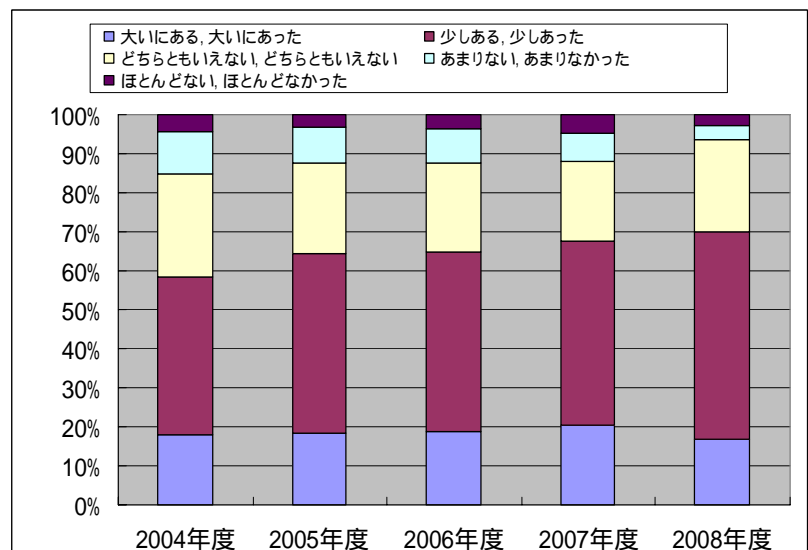
[2-1]外国語科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。（受講生のみ）

「大いにある」は2倍になっており、「少しはある」が10%程度増えている。「どちらともいえない」はほぼ同じで、ここまでで70%を達成している。この傾向は好ましいものであり、今後さらに改善に向けた努力を持続することが重要である。



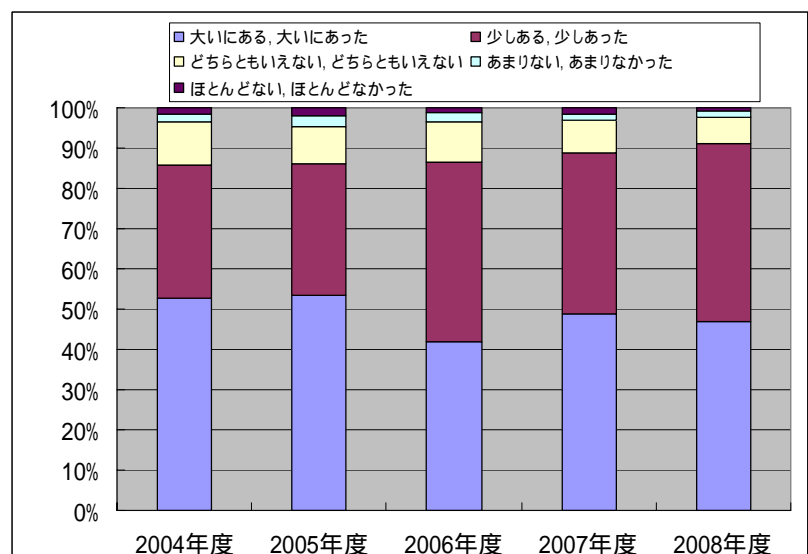
[2-2]共通科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

昨年度と同様の傾向を示し、共通科目の教育効果については、「少しはある」以上が7割の水準にあり、一定の効果を果たしていると思われる。また、「あまりない」「ほとんど無い」はあわせても5%で良好な傾向にある。今後も改善に向けた努力を行い有効100%をめざしたい。



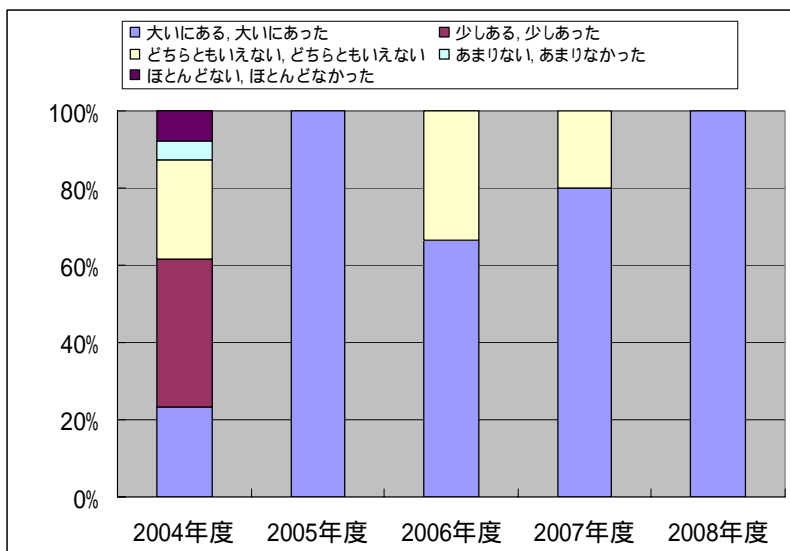
[2-3]専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

安定した推移を示し、ここ5年間は大きな変化はない。「少しはある」以上が90%以上ということから専門科目の自己形成に対する高い影響力がうかがえる。しかし工学系である以上やはり100%有効を目指さねばならない。



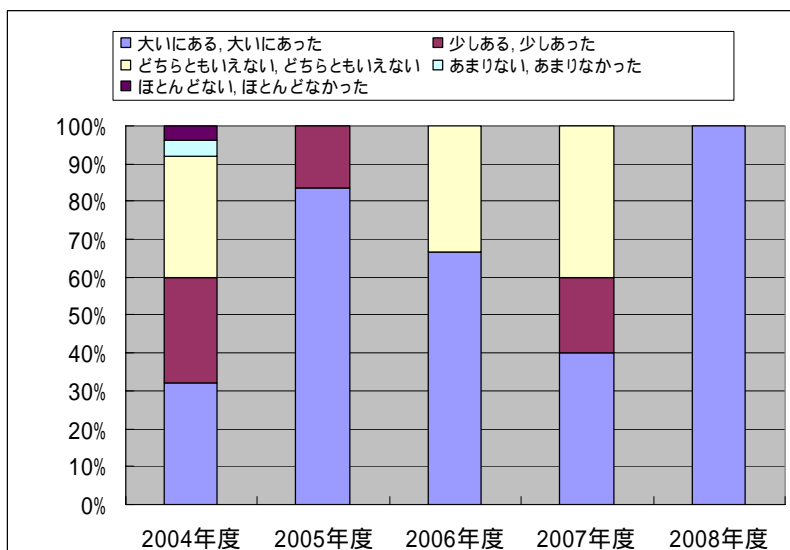
[2-4] 学外研修・特別演習はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者は5名で4名が「大いにある」と回答している。1名が「どちらともいえない」にしているが、これは本人の自己努力によるところもあり一概にアンケート結果から議論すべきではない。本来ならばやはり100%「大いにある」になるべきであろう。事前の心構えなどをトレーニングする必要があるかもしれない。



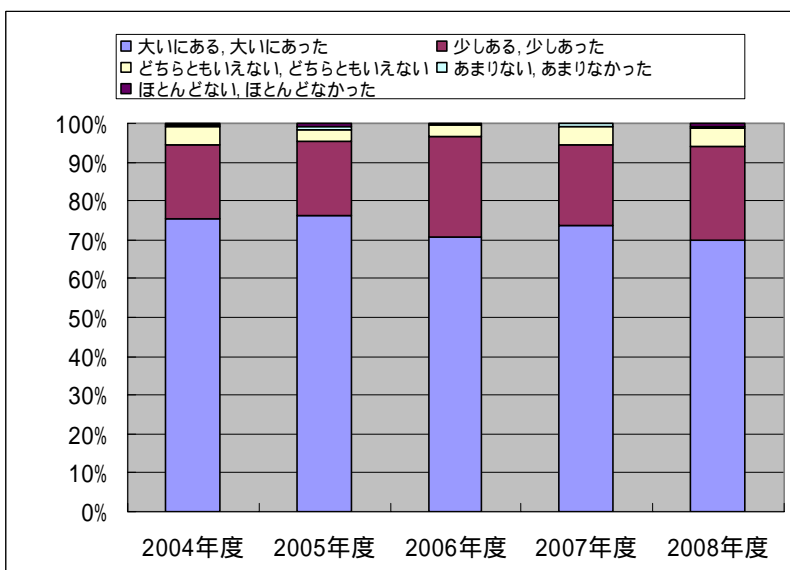
[2-5] プロジェクト研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者は5名と少ないので統計データとしての有効性には慎重を要するが、博士後期課程の学生の回答はすべてが「おおいにある」であり、2008年度修了生はこれらの科目の効果を評価していると判断できる。



[2-6] 学位(修士・博士)論文のための取組みはあなたの自己形成に効果がありましたか。

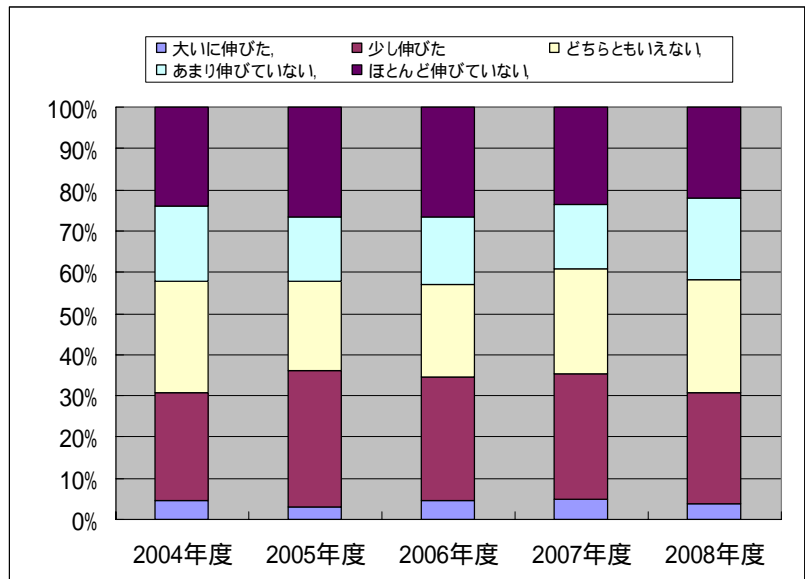
昨年度とほぼ同様であり、学位(修士・博士)論文取り組みの自己形成効果については、「大いにある」と「かなりある」の合計が9割以上の水準を保持しており、一定の教育効果が肯定的に受け止められていると判断できる。



[3]英語力についてお尋ねします。

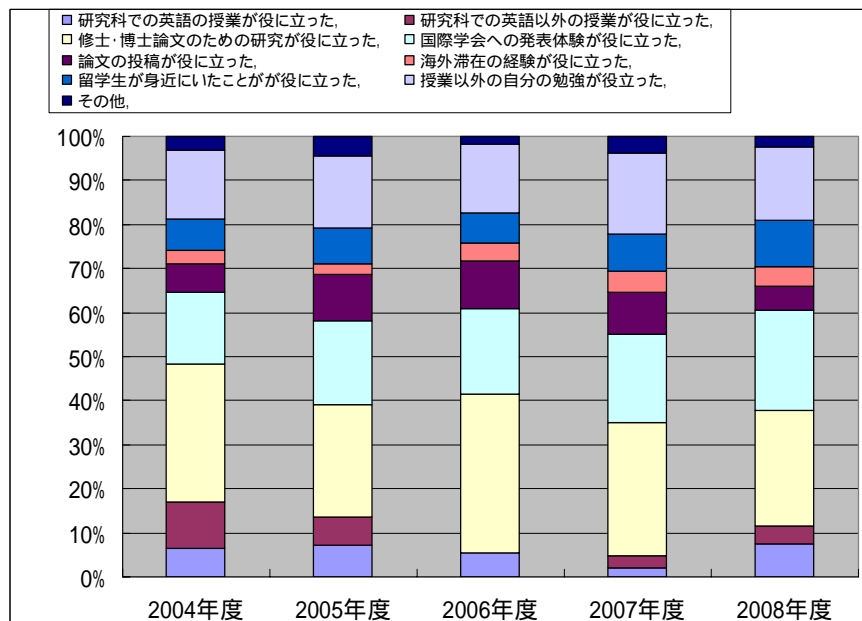
[3-1] 研究科の在学期間でああなたの英語力は伸びましたか。

依然として英語力が「ほとんど伸びていない」とする者と「あまり伸びていない」とする者の合計が4割強を占めていることは、教育方法に改善すべき課題があると判断すべきであり、今後の重点課題として対策に取り組む必要がある。専門科目での英語導入が必要と思われる。



[3-2][3-1]でA（おおいに伸びた）またはB（少し伸びた）と回答された方：その理由は何ですか。（複数回答可）

昨年度とほぼ同様の傾向であるが、「研究科での英語の授業が役に立った」とする答えが3倍ほど増えている。今後も専門英語を増強してもよいかもしれない。また「修士・博士論文のための研究」以外では、「国際学会への発表」「論文投稿」「留学生との交流」などが英語力の向上に役立ったと回答する者の割合が比較的多くを占め、国際的交流活動への参加が英語力向上に一定の効果を持つことが統計データに現れているものと判断できる。また「自分の勉強」とする回答もかなりあり、平日頃から各教官の「英語のすすめ」も効果があると思われる。



I（その他）[具体的に：]

- ・ 内定先のTOEICの勉強をしたから
- ・ 習った。
- ・ 英語の論文を読んだことが役に立った
- ・ 英語の論文を読んできたことが役に立った

[3-3][3-1]でD(あまり伸びていない)またはE(ほとんど伸びていない)と答えた方:その理由は何ですか。

社会に出てからの英語の必要性の認識不足,さらに英語に接する機会が少ないことなどから,英語学習に対する努力の不足を自分自身で感じている。何れにしても「英語力」を必要とする機会増大の方策が望まれる。

- ・あまり英語を勉強していなかったため。
- ・自分の勉強不足
- ・真剣に取り組まなかったから。
- ・英語にふれる機会がほとんどない。正しい英語をしゃべる人がいない。
- ・英語の勉強の機会がなかった
- ・授業のように定期的に英語にふれる機会がなかったから?
- ・日常会話で英語を使うことがない一方、専門用語ばかりが頭に入るので基本的な部分が抜ける。
- ・英語を勉強する機会が授業においてはほとんどないから
- ・英語にふれる機会がなかった
- ・英語を使う機会が少なかった
- ・伸びる程英語に接していない
- ・英語に触れる機会がほとんどなかった。
- ・単位を1・2年で取れるため、それ以降英語の勉強をしなくなるから
- ・論文以外で使う(読んだり書いたり)機会が少ない
- ・ほとんど勉強しなかったから
- ・英語にふれる機会がほとんどない
- ・英語を使用する機会がなかったから。
- ・自主的にTOEICをもっと受けていけばよかった。
- ・やってない
- ・不必要だったから
- ・使わないから。
- ・使う機会がほとんどない。
- ・TOEICの点が低い。
- ・履修していなかったため。
- ・あまり勉強していない
- ・英語を使用することが少ない
- ・何もしていないから。
- ・単位取得の為の努力はしたが、英語を身につける努力はしなかったため。
- ・英語にほとんどふれていない
- ・使う機会がなかった。
- ・使う機会がない
- ・英語に接する機会がなかったため。
- ・現状維持という意味で。
- ・英語の授業を受けず、また自分でも勉強をしていないため。
- ・英語に触れなかった
- ・勉強していないから
- ・英語にあまり触れなかったため。
- ・向上心の無さ、学部からブランクがあり取りかかりにくかった
- ・論文などの専門英語だけではTOEICの点数は伸びない
- ・英語の講義数が少ないから。
- ・英語を日常で読まないため。
- ・発表のコツと手順がわかるようになりました。
- ・基礎ができていないから
- ・勉強不足
- ・自習が足りなかった。
- ・英語を学ぶ機会がほとんどなかったから
- ・英語を使わなかったから
- ・英語を使う機会が減ったから
- ・日頃からの練習が足りなかった。

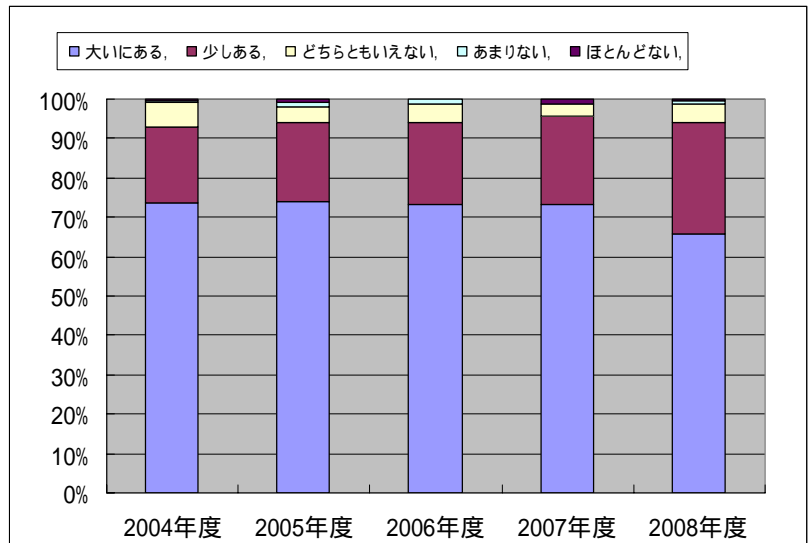
- ・ 講義を受けていない。
- ・ 英語を使う機会が少なかった。
- ・ 授業の時間数が短い
- ・ 英語の勉強をしていないから。
- ・ 一時期憶えた単語は普段使わないため、すぐ忘れてしまう。
- ・ 英会話の授業がほとんどない。必修にすべき。
- ・ 積極的に英語を学習しなかったから。
- ・ 論文を読む以外の取り組みをしなかったから。
- ・ あまり英語を使っていない
- ・ 英語学習を取り込む場がなかった。
- ・ 勉強をあまりしていない。
- ・ 自らの学習意欲が足りなかった
- ・ 英語力を伸ばそうとはしなかったから。
- ・ 授業の時間が少なかったため
- ・ 自主的にしていなかった。
- ・ 文法などは忘れていだけだったから
- ・ 文献を読むこと以外に英語をつかわなかったため
- ・ 授業が中学校レベルだから
- ・ 読解力は、ついたがリスニング力はつかなかったから
- ・ 英語を特に勉強していないから。
- ・ 英語にほとんどふれていないから。
- ・ 話さないから
- ・ ほとんど本気で取り組まなかった
- ・ 英語に接する機会が少ない。
- ・ 勉強(英語)してないため
- ・ 英語の授業がなかった。
- ・ 時続的に行わなかったから
- ・ 使うことがないから。
- ・ 英語と接するのが自分の研究で論文を読むときだけであったから
- ・ 自分自身の勉強不足。
- ・ 英語を勉強する機会があまりなかった
- ・ 殆んど英語を勉強することがなかった為
- ・ TOEICの点がかなり悪かった
- ・ あまり勉強しなかったため。
- ・ 期間が短かかったので忘れていった
- ・ 授業だけでは英語をする回数が少ないから。
- ・ 英語を使う機会がなかったから。
- ・ 積極的に英語を使わなかったから
- ・ 勉強が足りなかった
- ・ あまり英語にふれなかったため。
- ・ 伸ばす気のない指導
- ・ 自分で取り組もうとしなかったため。
- ・ 英語とあまり接する機会がなかったから
- ・ 大事なのは英会話でリスニング・リーディングを少しやる程度では伸びない。
- ・ 授業がなかったのでまったく勉強しなかったため
- ・ 自主的に勉強しなかった
- ・ 英語を利用する機会がほとんどなかった。
- ・ 英語の勉強を怠ったから
- ・ 学んでいない
- ・ 英語をする時間は高校生の方がある
- ・ 英語を使う機会がほとんどなかったから
- ・ 週一回の授業しか英語を使わなかった為
- ・ 勉強不足。英語を使う機会がない。
- ・ 論文投稿で数度、英文を作製したが、それ以外では特に英語が必要な機会がなかった。

- ・ もっと個人で積極的に勉強する必要があると感じた。

[4]学位（修士・博士）論文のための取組みについてお尋ねします。

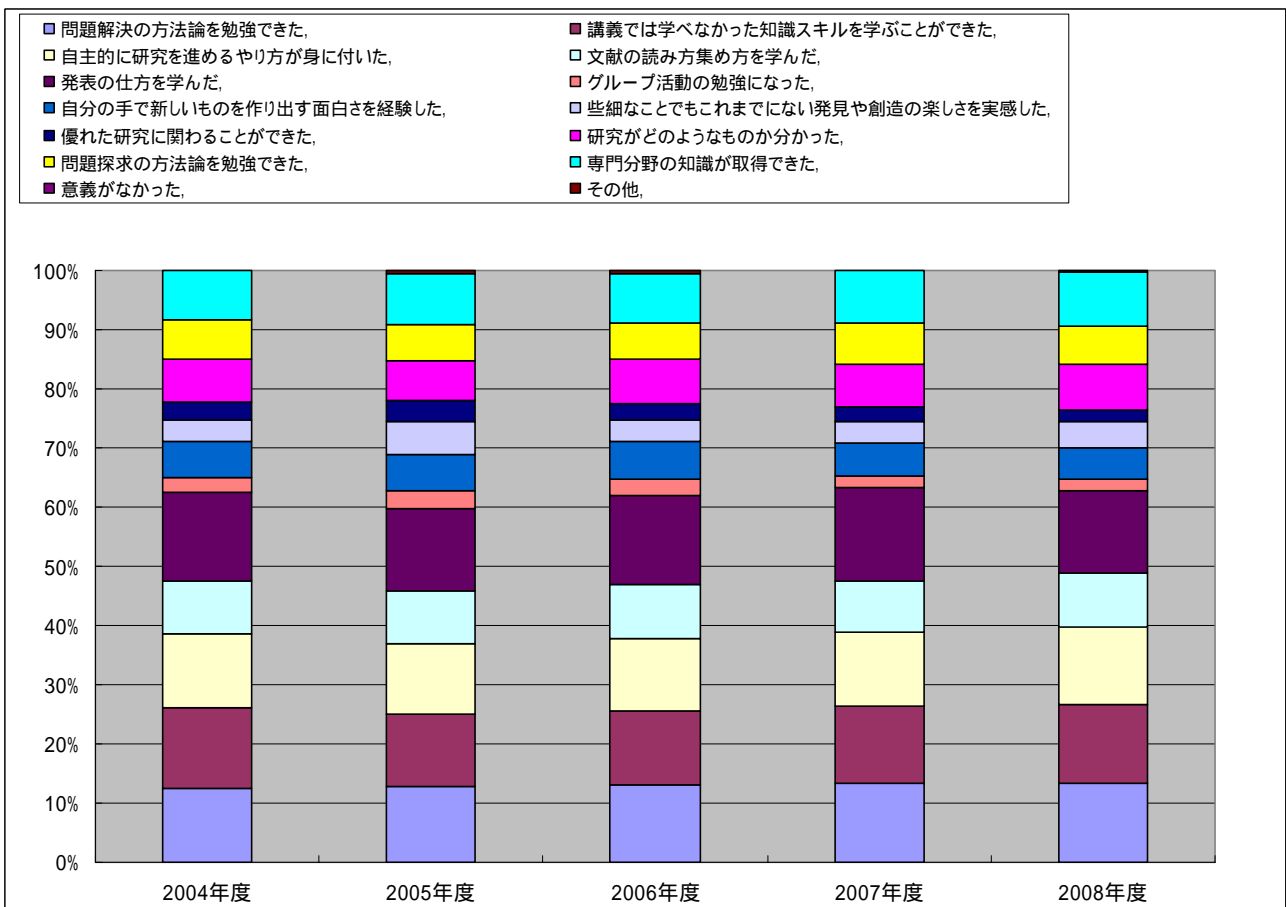
[4-1]学位論文の意義はあると思いませんか。

昨年度と似ているが、「少しはある」が増加している。今後さらに学位論文のための取組は大学院教育において重要と判断される。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

昨年度とまったく変わっておらず，課題解決の方法論，講義では学べない知識・スキルの取得，文献の読み方・集め方，発表の仕方が上位を占めており傾向は変化していない。



N（その他） [具体的に：]

- ・ 講義で学んでも、定着していなかったことがわかった。
- ・ 文章の書き方が学べる

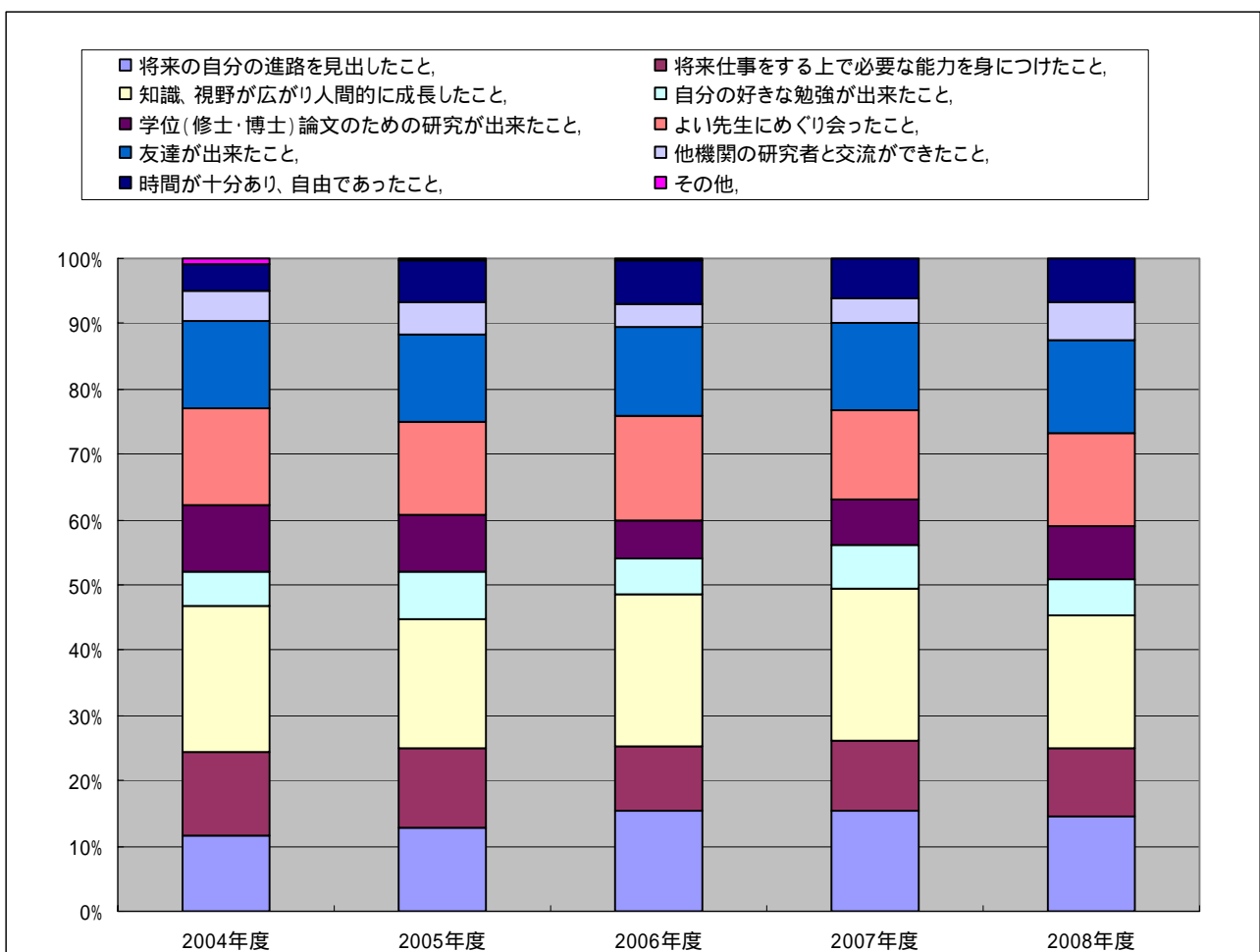
[4-3][4-1]でD（あまりない）またはE（ほとんどない）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

学生の意識と客観的な評価が必ずしも一致するとは限らない。論文やレポートをまとめることもエンジニアの重要な仕事である。下記のような意見を書いたものが社会に出て素晴らしい仕事ができるとはとても思えない。この点の教育が必要かもしれない。

- ・ 内容がないから
- ・ 発表練習でしかない
- ・ 研究への取組み方などは成果がともなうが誰も見ない論文を書いても意味がない。

[5]研究科生活を振り返って、どのようなことが良かったと思いますか。（複数回答可）

昨年度とほぼ同じで「将来の自分の進路を見いだした」と「知識・視野が広がり人間的に成長した」、
「友達ができた」「良い先生に巡り合えた」などが割合的に多く、研究生活が人生の一つの大きなかなめになっていることが分かる。



J（その他）[具体的に：]

- ・ 国際会議(学会)を体験できた

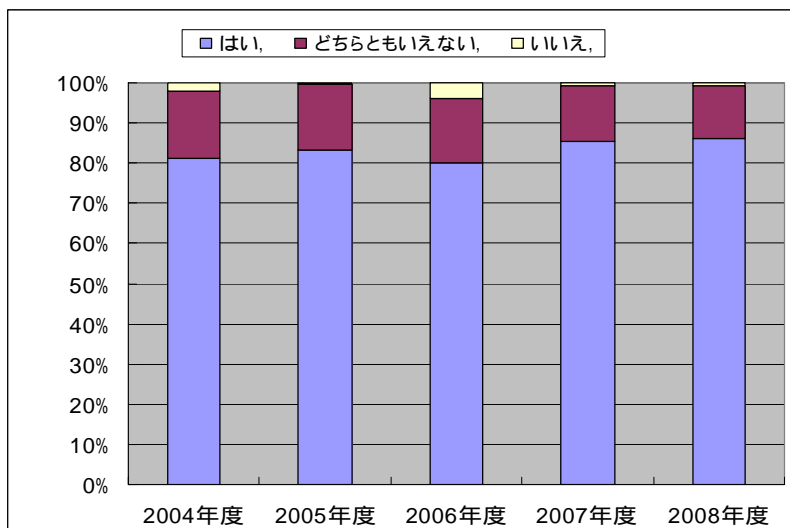
[6]入学した専攻についてお尋ねします。

[6-1]現在の専攻に入学してよかった
と思いますか。

[6-2][6-1]でC(いいえ)と答えた
方：その理由は何ですか。

- ・ 先行き不安

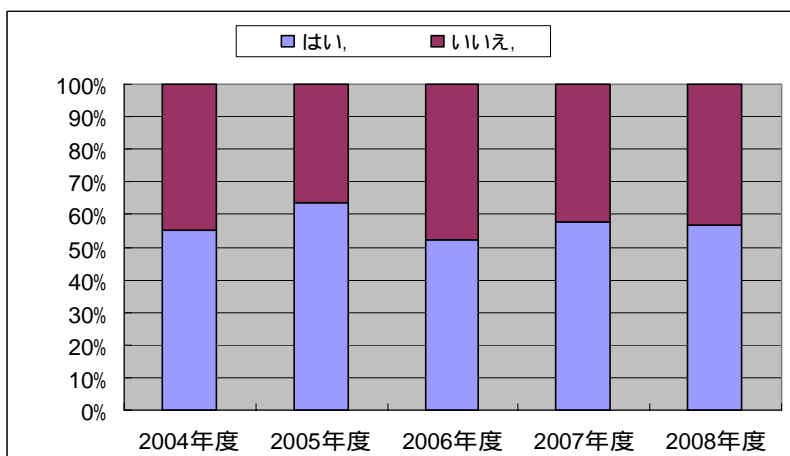
昨年度と全く同じで、「はい」がこ
れまでに高く値をキープしてお
り、院生の意識の高さが伺える。



[7]進学時の目標についてお尋ねします。

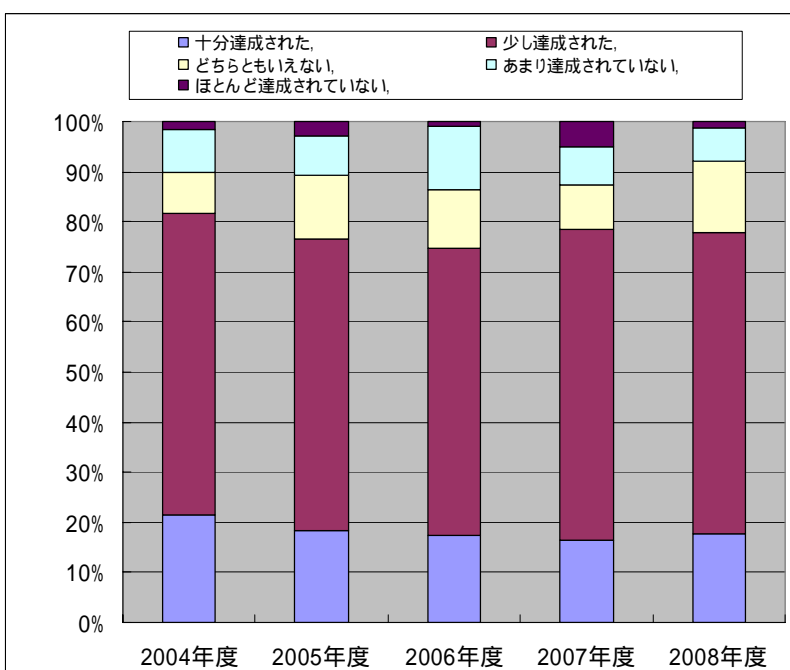
[7-1]あなたは進学の際に研究科で達
成したい目標がありましたか。

昨年度と全く同じで目標を持って
進学した院生の割合は60%近くある。
今後の推移を慎重に見守る必要があ
る。



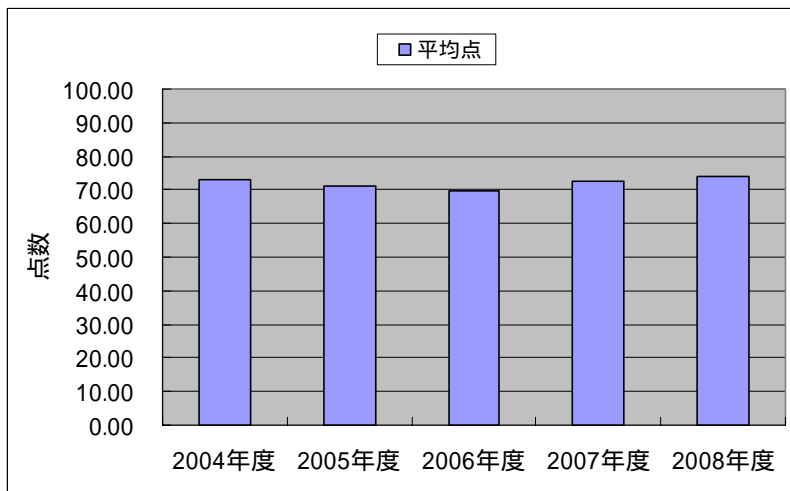
[7-2][7-1]でA(はい)と回答した
方：現在のどの程度達成されています
か。

達成感を有している院生の割合は8
0%近くおり、「ほとんど達成されてい
ない」とする院生は2%に近くなった。
今後注意を払って推移を見守ってい
く必要がある。



[8]研究科在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

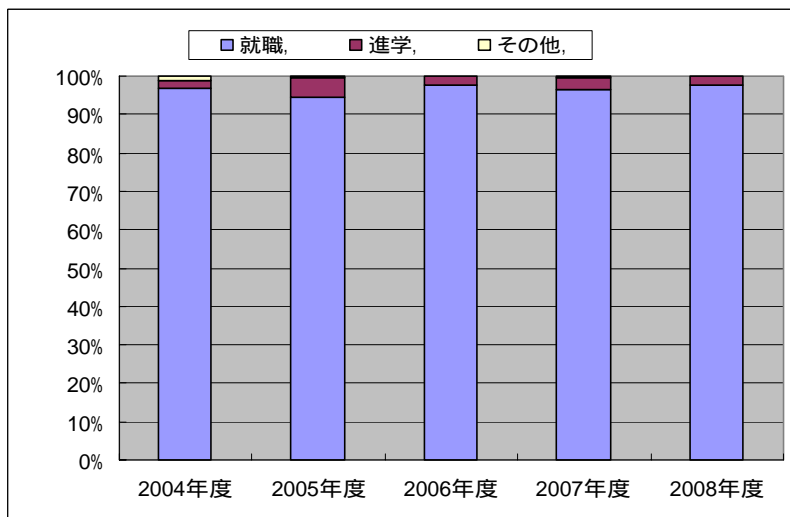
達成感を有している院生の増減と同調しているように見える。さらに向上に向けた努力が必要であろう。



[9]修了後の進路についてお尋ねします。

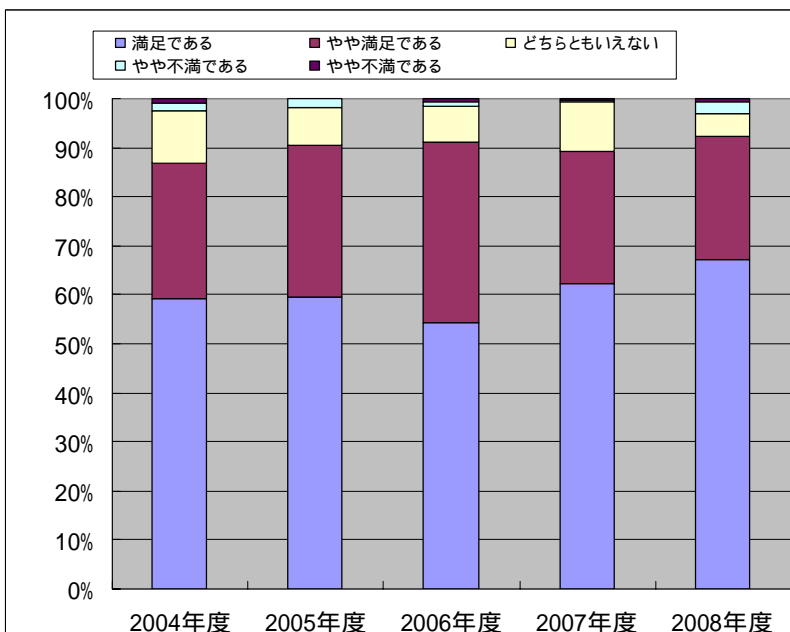
[9-1]あなたは修了後就職しますか、進学しますか。

就職する院生が95%以上で残りの学生が進学する様子は変わらないが、今後後期課程の充足率向上に向けた努力が必要であろう。



[9-2]あなたは修了後の進路に満足していますか。

修了後の進路に不満足を感じている院生の割合は少なくなっており、直近の3年間でその傾向が強くみられる。



[9-3][9-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

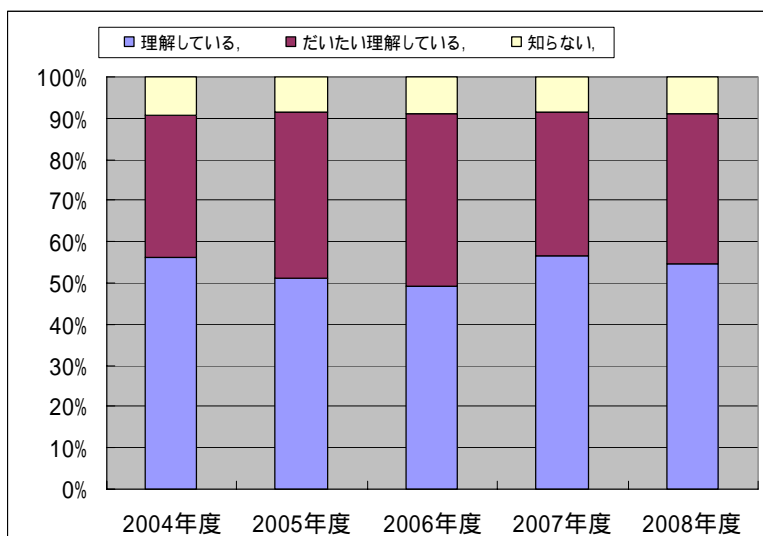
不満足感と言うよりは不安感と言った方が適切と思われる。

- ・ 希望していた就職先がダメだったため。
- ・ 目標としていた就職先に内定がもらえなかった。
- ・ 行きたいところに行けなかった。
- ・ 不景気
- ・ 希望に添う道へ進めなかったため
- ・ 希望していた就職先につけなかった。
- ・ 思っていたよりも転職が多いから。
- ・ 就職場に仕事ができるかどうか不安です。

[10]研究活動についてお尋ねします。

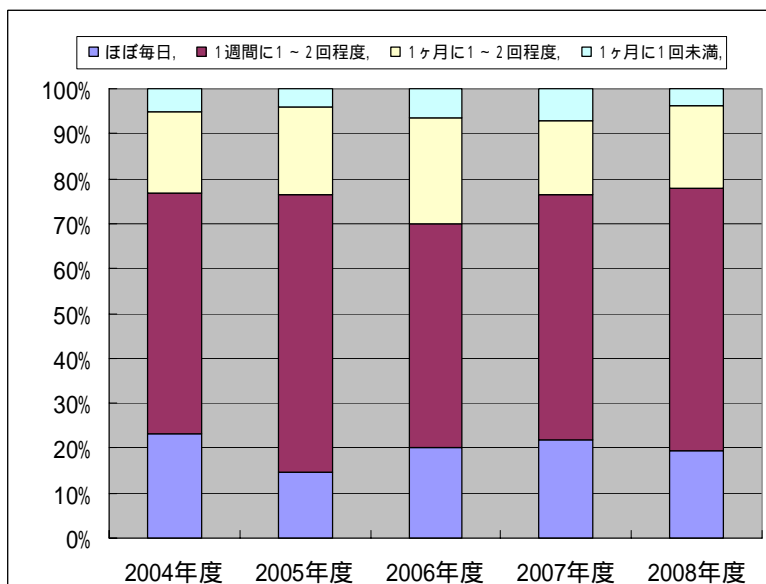
[10-1]進学時の研究室の配属決定方法を理解していますか。

研究室配属決定方法を知らない院生は10%以下であるが、さらなる周知徹底が必要であろう。



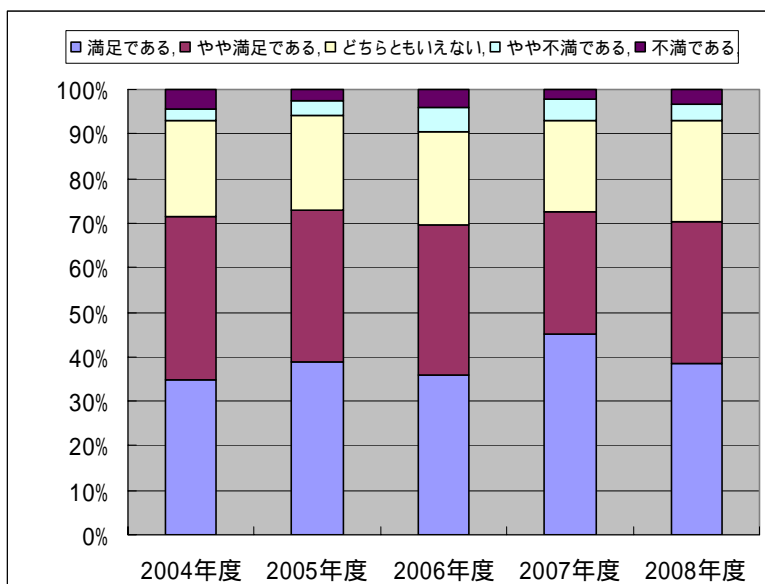
[10-2]研究指導はどの程度の頻度で受けましたか。

昨年度から反転して、「ほぼ毎日」と「1週間に1～2回程度」の研究指導を受けた院生が増加し、「1ヶ月に1～2回程度」の院生も減少した。しかし、「1ヶ月に1回未満」と回答した院生が増える兆しも見えるので、その原因を調査し、教員が院生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策、特に事務的仕事の軽減策を講じる必要がある。



[10-3] あなたの研究に対する指導方法について、どのように思っていますか。

「不満である」と「やや不満である」と回答した割合は、直近の3年間で減少傾向にあるが、更に院生の研究指導方法改善の努力・工夫を続ける必要がある。



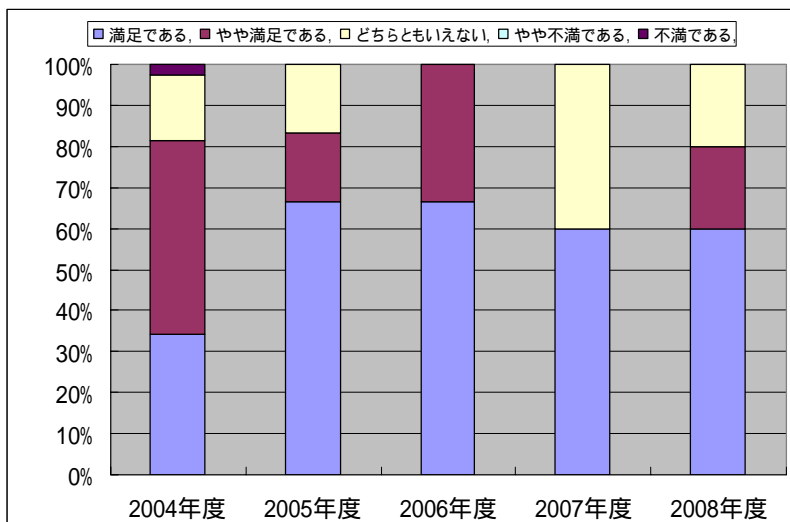
[10-4][10-3]でD（やや不満である）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。

一部解釈不能な理由もあるが、特に指導時間が少なかった場合に不満を感じている様子が伺える。その原因を調査し、教員が院生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策を早急に講じる必要がある。

- ・ 研究指導の先生が研究の先のことばかり語って、現状や中身に興味を示さない。私の研究に期待を持っていない。会いに行っても忙しい場合や居ない場合が多く、話ができない。
- ・ 先生が忙しすぎるため週一でしか直接話できないから
- ・ 指導がない
- ・ 自分の満足度ではなく、先生の満足度が重要になるから
- ・ 綿密な打ちあわせと的確な指導がなかった。
- ・ もう少し計画性をもって指導してもらいたかった
- ・ 教授方法
- ・ それでどうすればいいのかわからなかった。
- ・ 指導教官が明確な研究目標を挙げてくれない
- ・ 理ろんの人だった
- ・ 毎度のように話が違っている。
- ・ 実験方法に対する意見が衝突することが多かった。
- ・ 具体的な実験内容をそうだんできなかつた
- ・ 先生に会えなかつた。
- ・ わからないと言われる事があつたから
- ・ 一緒に研究をしようとしてくれないため。指導というより指示でした。
- ・ 実用的な指導はほとんどなかつた。

[10-5]あなたの研究に対する指導体制（指導教官グループ）について、どのように思っていますか。（博士後期課程の方のみ）

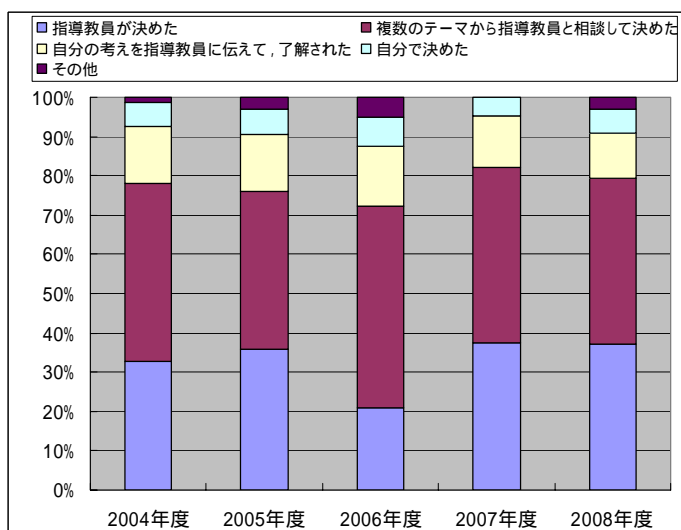
後期課程修了生の有効回答は少なく統計的な意味づけが困難であるが、特に否定的な解答は無い。



[10-6][10-5]でD（やや不満）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。（この項目に回答した学生はいなかった。）

[10-7]研究テーマはどのように決定されましたか。

院生が自分で決めた比率が下がり、指導教官がリーダーシップを取って研究テーマを決める割合が増えた。

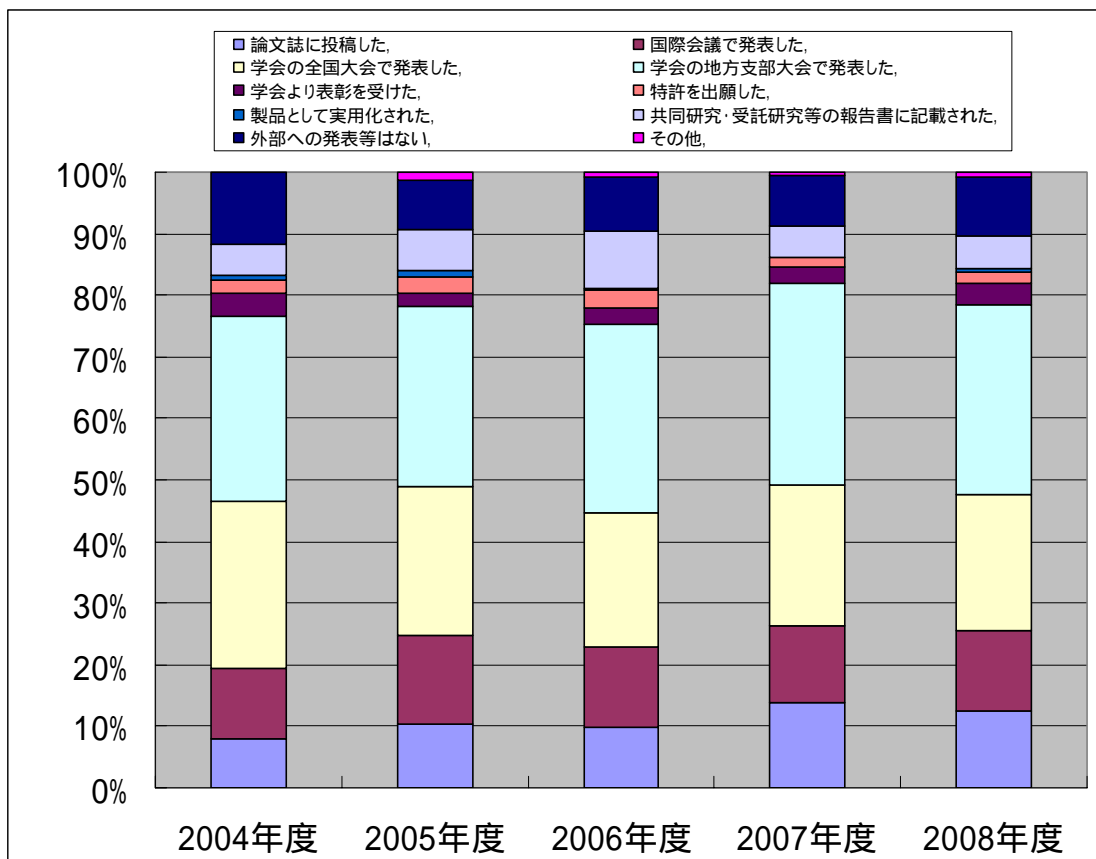


E（その他）[具体的に：]

- ・ 複数あるテーマから学生だけで話し合っ
て決めた
- ・ 初めの研究テーマは自分で決め、途中
で学会の関係で指導教官の決めたテー
マに変更になった。
- ・ 複数のテーマから好きなものを選んで
指導教官が決めたテーマの中から、学
生で話し合い決めた
- ・ テーマは教員が。新規性の部分は自分
で決めた。

[10-8]あなたが在学中に研究したテーマの成果は下記のうちどれに該当しますか。（複数回答可）

論文誌への投稿が増加し、国際会議や学会の全国大会での発表も高い水準を維持しているが、まったく発表しないケースも見られるので、さらに改善が必要と思われる。

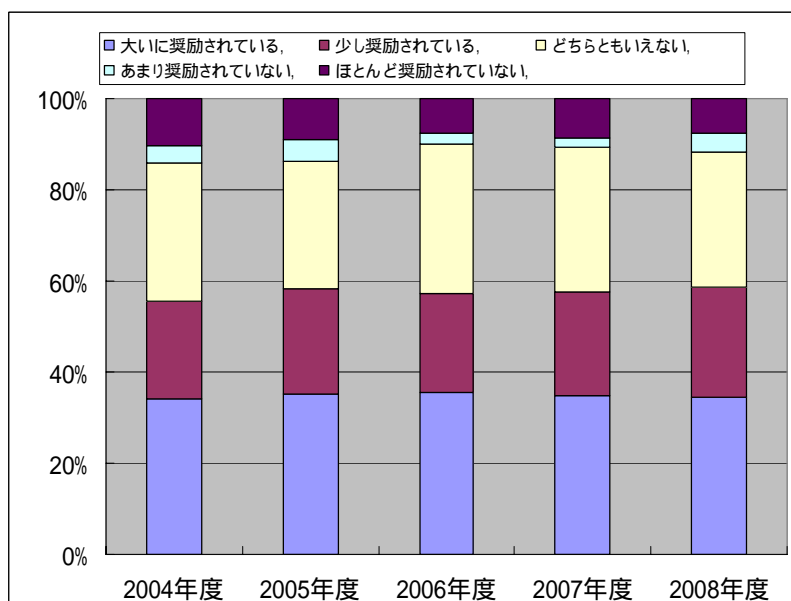


J (その他) [具体的に :

- ・ 修了後に学会で発表
- ・ 学生会での発表
- ・ ポスターセッション
- ・ 研究会での発表

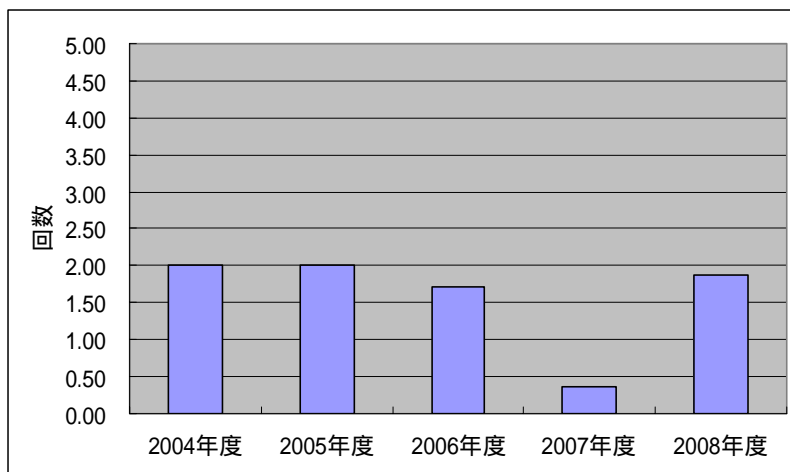
[10-9]学外での研究活動(学会発表や他機関での研究活動等)を奨励されていましたか。

2003年度以降は多かれ少なかれ推奨されていると感じている学生の割合が増加しているが、依然として60%弱であり、教員側の意識の改革も必要である。



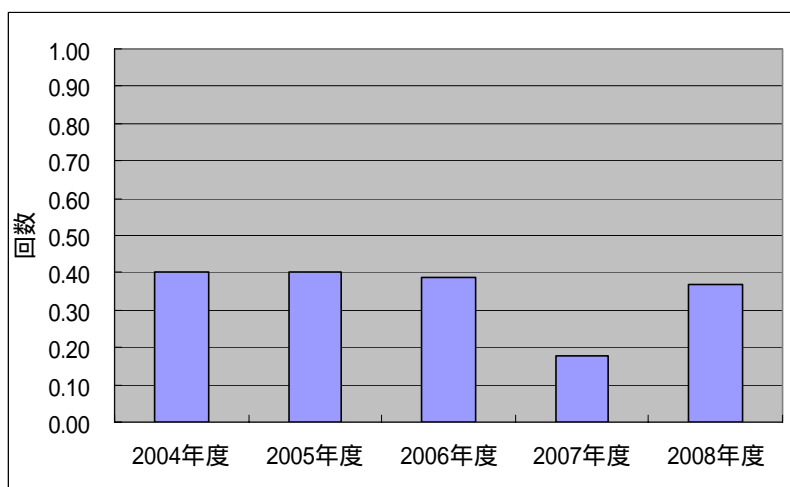
[10-10] あなたは在学中に国内学会（大会等）で何回発表しましたか。

2007年度激減した院生の発表回数が2008年度は復旧している。在学年数からみて、年2回程度は妥当であろう。



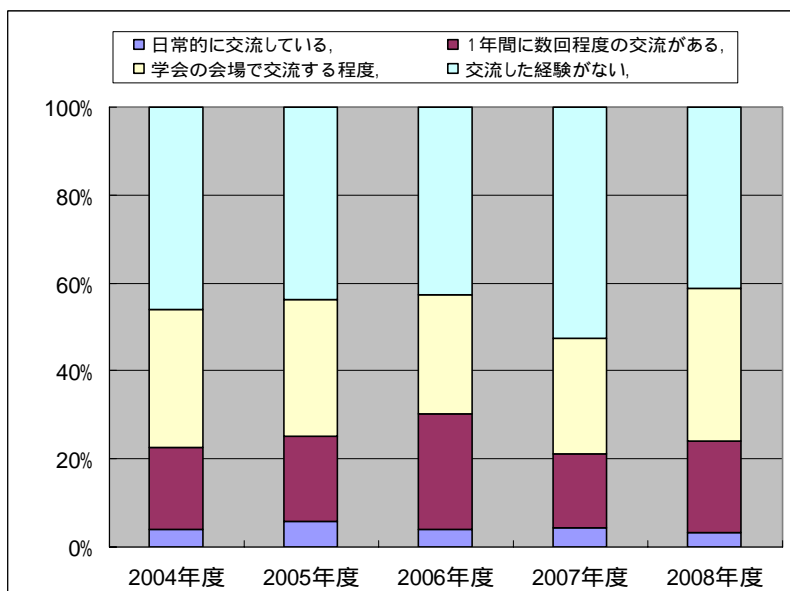
[10-11] あなたは在学中に国際会議で何回発表しましたか。

2007年度激減した院生の発表回数が2008年度は復旧している。



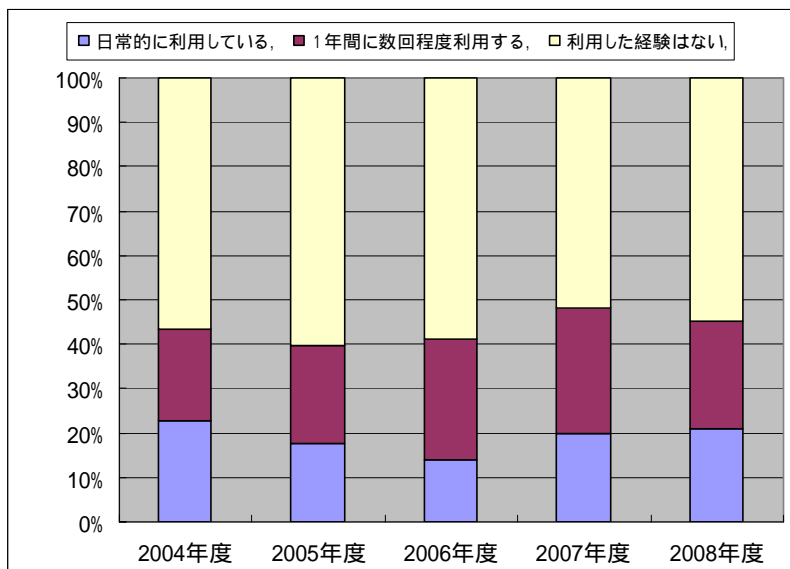
[10-12] 学外の研究者（国内および国外）と研究交流した経験がありますか。

2007年度激減した院生の発表回数が2008年度は復旧したために、交流経験も同様の傾向を示している。



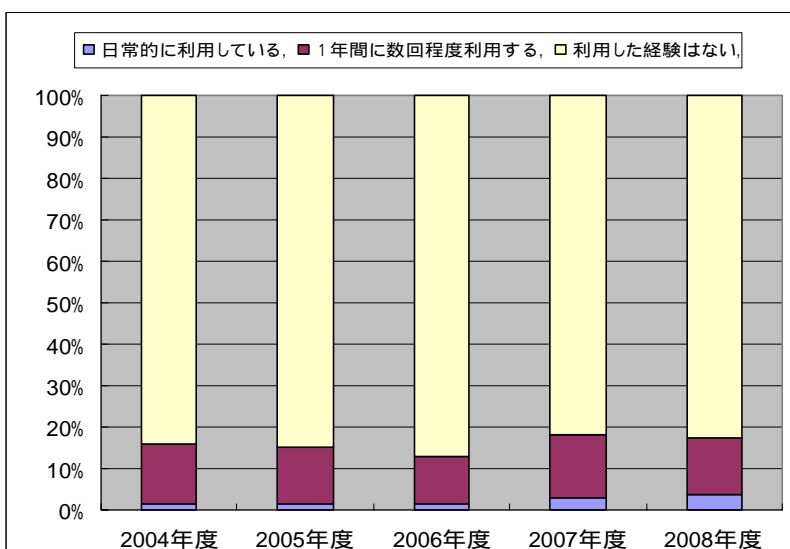
[10-13]学内の共同利用施設（情報科学センター，機器分析センター等）を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合が増加し，50%近くなっている。



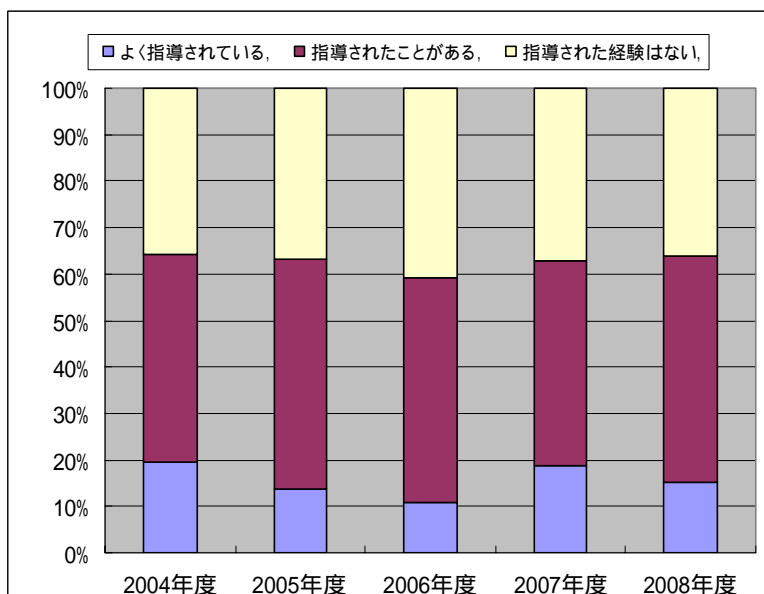
[10-14]学外の共同利用施設等を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合が増加し，20%近くになった。



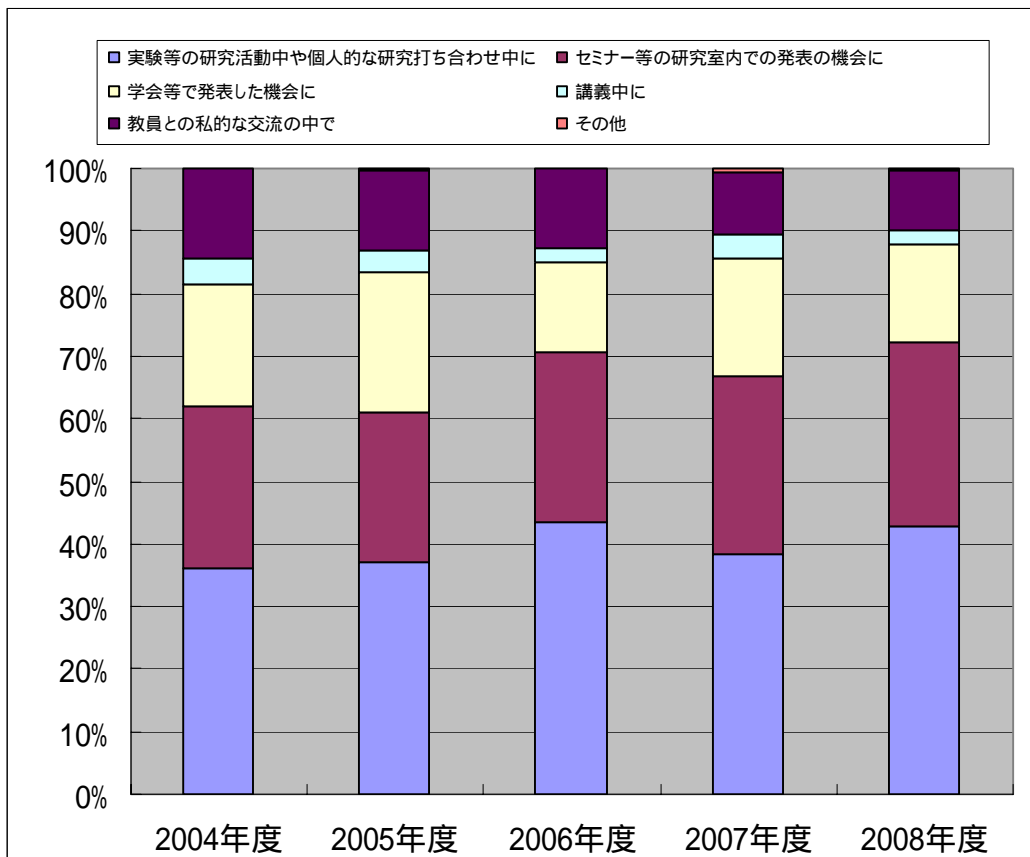
[10-15]学位論文の研究を通して，研究遂行に対して競争意欲が向上するような指導を受けたことがありますか。

よく指導されている院生が増え，指導された経験の無い院生は40%以下に減少した。しかし，依然として指導改善の取り組みは必要である。



[10-16][10-15]でA（よく指導されている）またはB（指導されたことがある）と答えた方：それはどのような機会に指導されましたか。（複数回答可）

教員との個人的な研究打ち合わせやセミナー，学会発表等で指導を受けている学生の割合は 90%弱に達した。



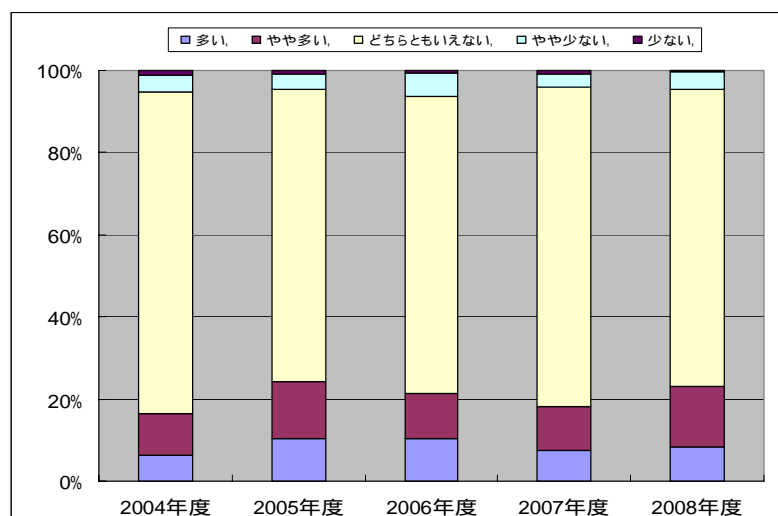
F（その他） [具体的に：]

- ・ 研究室ゼミ

[11]工学研究科における講義・演習等についてお尋ねします。

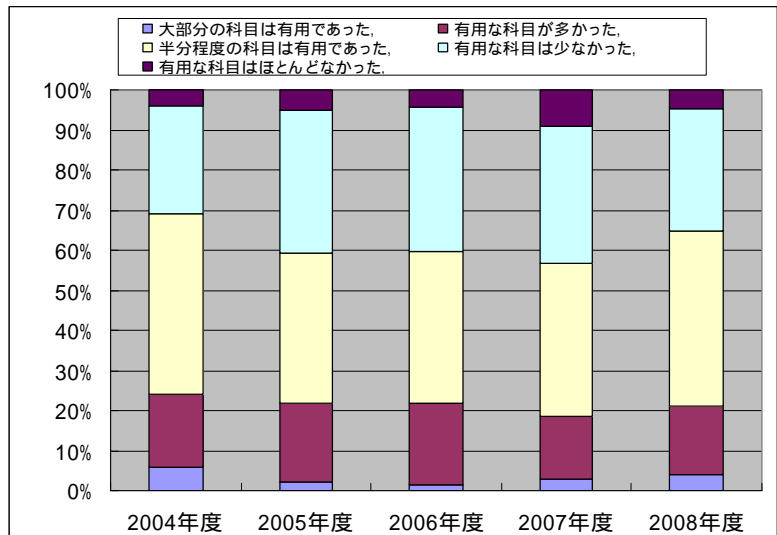
[11-1]工学研究科における講義・演習等の必要要件単位数は多いでしょうか、少ないでしょうか。

「やや多い」，「多い」と回答した院生はやや増加している。「やや少ない」，「少ない」と回答した院生は横ばいの傾向である。



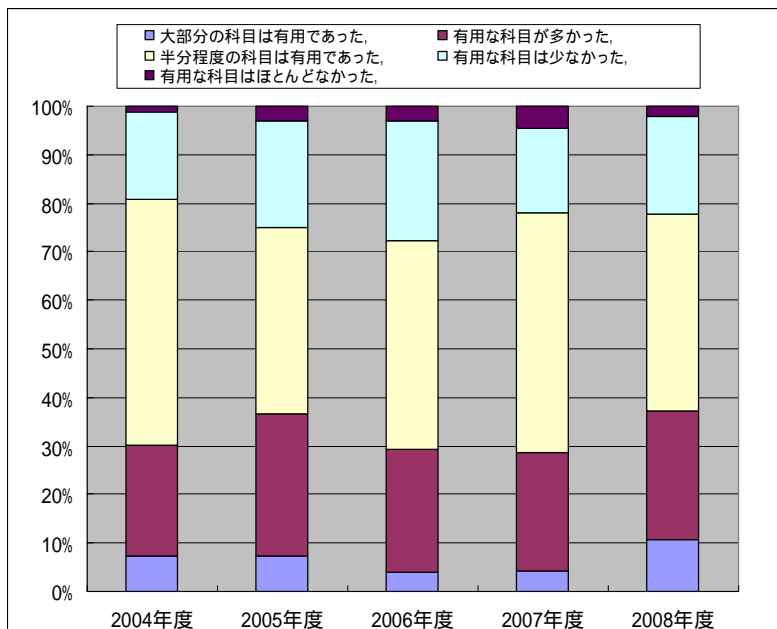
[11-2] 工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で，自分自身の研究に役立った科目の割合はどの程度ですか。

「半分以上の科目は有用であった」と回答した院生はやや増加の傾向がみられる。有用な科目が増加するように，さらなる講義（演習）内容の改善が必要である。



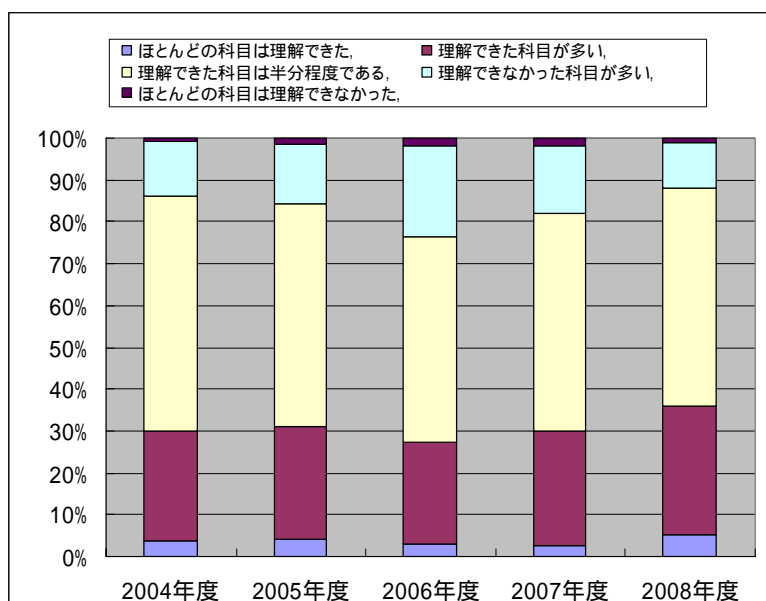
[11-3] 工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で，自分自身の成長のために有用であり，履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

「大部分の科目は有用であった，有用な科目が多かった」は2005年度の36%程度まで復旧した。一方，「半分以上の科目は有用であった」と回答した修了生が，ピーク時の81%には及ばないものの，近年やや増加して77%程度となっている。受講者の意識・学力を把握，考慮した講義（演習）内容の検討が必要と思われる。



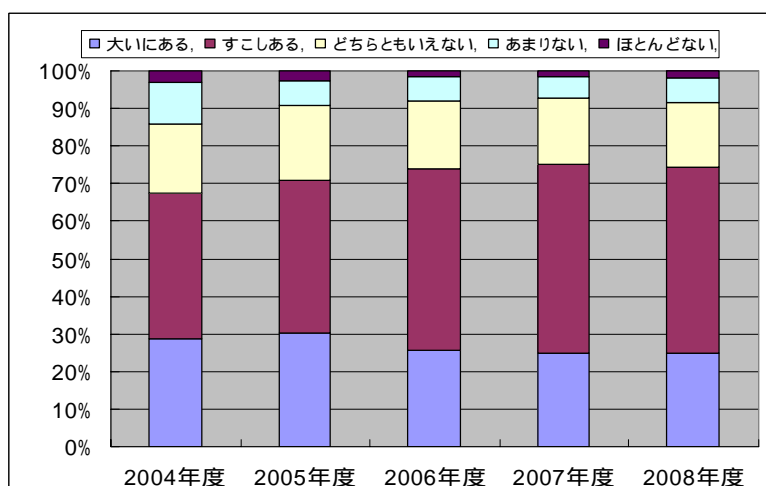
[11-4] 工学研究科で受講した講義科目の理解度はどの程度ですか。

「理解できた科目が半分以上」の修了生の割合が2004年度の86%から減少傾向にあり、2006年度に80%を割ったが、2008年度は90%弱まで増加した。また「理解できなかった科目が多い」の割合も前年と比べて減少している。引き続き講義内容や教授方法の検討・改善が必要と思われる。



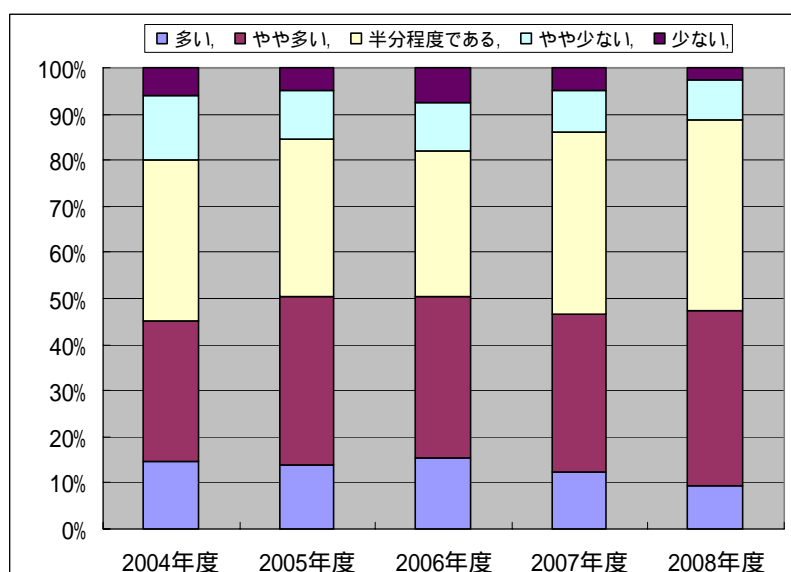
[11-5] 学部で履修した科目と研究科で履修した科目の間に、つながりがあったと思いますか。

「学部で履修した科目との関連がある」と回答した修了生の割合が67%から順次75%まで増加しており、学部で履修した科目との関連性は向上していると判断できる。



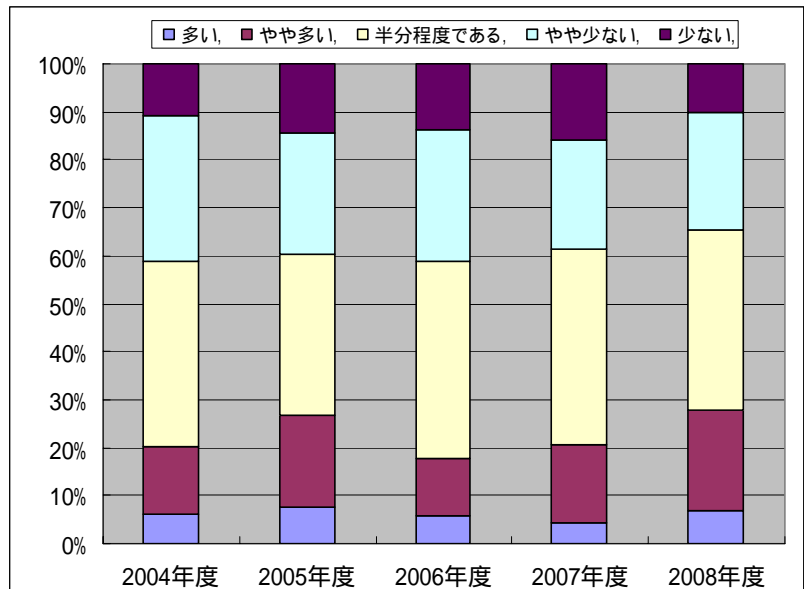
[11-6] 工学研究科で履修した科目全般について、教育への熱意があった担当教官の割合はどの程度ですか。

「半分以上の教員に熱意があった」と回答した修了生の割合は、2006年度に若干の減少を見せたが、2004年度の80%から2008年度の88%までほぼ順次増加するとともに、過去5年間は80%台で推移している。



[11-7]工学研究科で履修した科目で、就職後、仕事をする上で役に立つと思う科目はどれくらいありましたか。

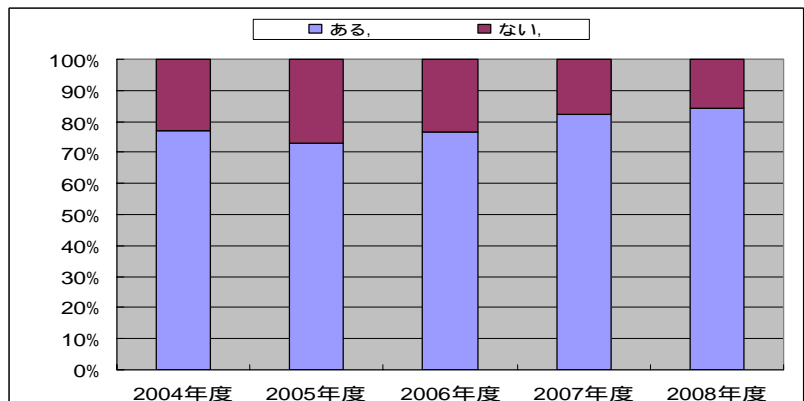
「半分以上の科目は仕事に役に立つ」と回答した修了生は、2004年度58%から2008年度65%まで増加しており、「実学」の観点からの教育効果は向上していると思われる。なお、40%前後は（仕事をする上で）「役に立った科目は少ない、やや少ない」と回答している。この点は本学学是「技術に堪能なる氏君子の養成」にも係わり、必ずしも「実学」に直結しない科目の重要性を踏まえた総合的観点から検討する必要があるが、2008年度の比率は一つの妥当な割合と考えられる。



[12] TA, RA等の制度についてお尋ねします。

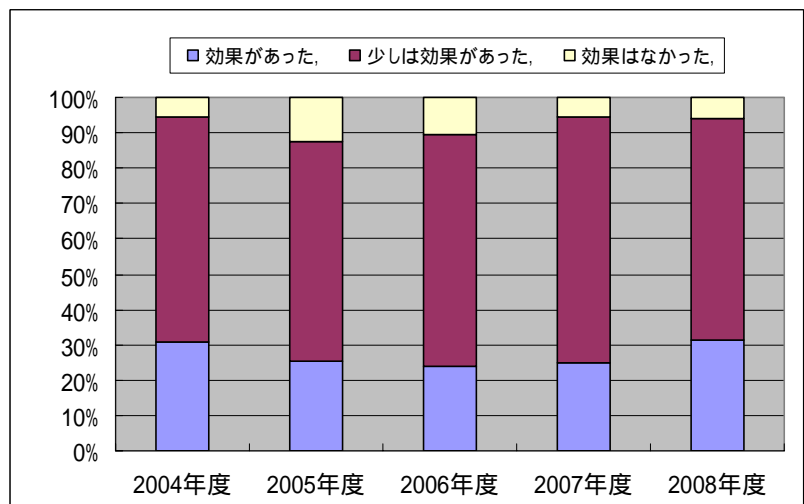
[12-1] TAを担当したことがありますか。

TA経験者は2003年度の81%をピークに減少傾向にあったが、2006年度に増加に転じ、2008年度は過去最高の83%に達した。



[12-2][12-1]でA（効果があった）と答えた方：TA活動を通して、学部学生に対して教育的効果があったと思えますか。

「効果があった」とする回答は30%弱、「少しは効果があった」とする回答はおおよそ60% - 70%で二つの回答を併せると90%前後が、TAが学部教育に貢献していると自己評価している。



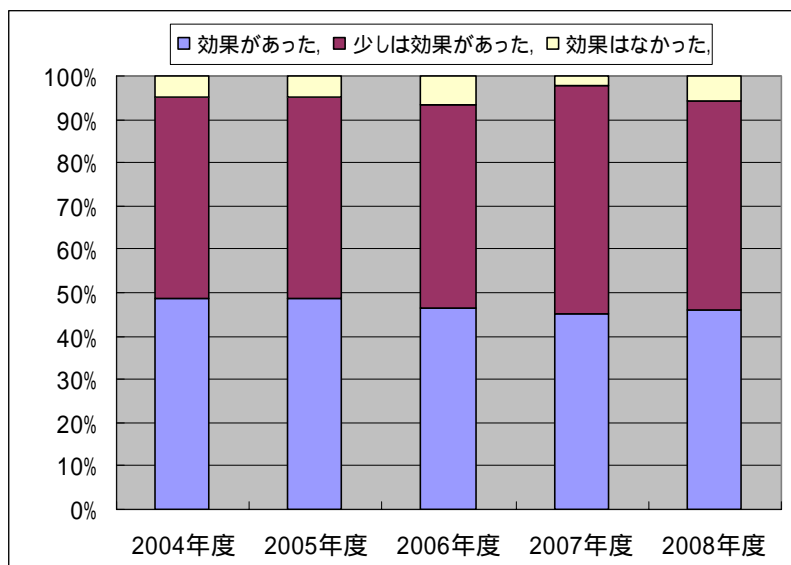
[12-3][12-2]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

「効果がなかった」とする回答は5%から12%の間を前後しているが、過去4年間は減少傾向にあり2008年度は6%だった。具体的な回答は以下の通りである。TA活動そのものが補助的であり、学部学生への教育効果を直ちに理解しにくい面もあると思われるが、ほぼ90%以上が「効果があった。少しは効果があった」としている。TA自身が学んでいる面が見られるが、TA制度の有効な活用についてさらに検討を進める必要がある。

- ・ 自分が未熟なため、学生の助けになれなかった。
- ・ 作業量が少ない。
- ・ いてもいなくてもいい仕事だったから
- ・ 特に指導していないから
- ・ TAとのふれあいがなかったため
- ・ 学生と接しなかった
- ・ やる気がない。受ける側に問題がある。
- ・ なかったので理由もない。
- ・ 私の研究分野とは違ったのであまり教えることができなかったから
- ・ 雑用がメインだったので。
- ・ 何も特別な変化などみられない。

[12-4][12-1]でA（ある）と答えた方：TA活動は、自分自身にとって教育的効果があったと思いますか。

90%以上が、教育効果があったと答えており、TA活動が充分機能していると思われる。



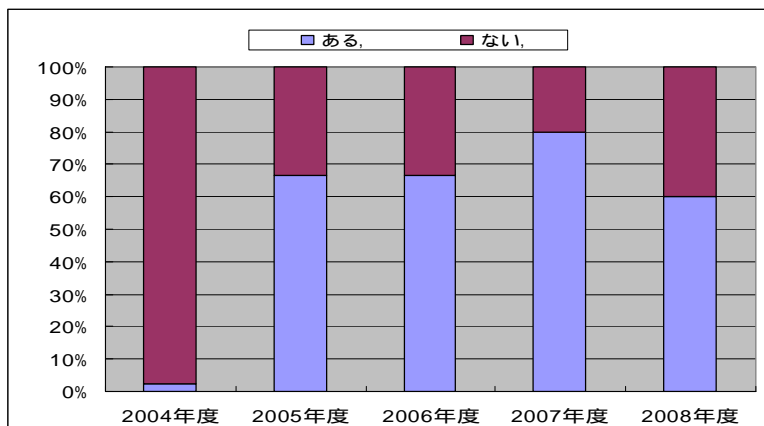
[12-5][12-4]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

TA活動は自分自身にとって教育的効果がなかったとする回答は2008年度には6%であり、この制度が十分教育的な効果を上げていると判断できる。

- ・ やらされた感じがした
- ・ 作業量が少ない。
- ・ いてもいなくてもいい仕事だったから
- ・ 基本的にかんたくしていただけなので
- ・ 得るものがなかった
- ・ 特に指導していないから
- ・ 教える内容が非常に単純なものだったので
- ・ TAは必要な科目のみでいいと思う。
- ・ 計画性のないTA活動ほど無為なものはない。
- ・ 時間を削られるだけだった。
- ・ 特に自覚することがない

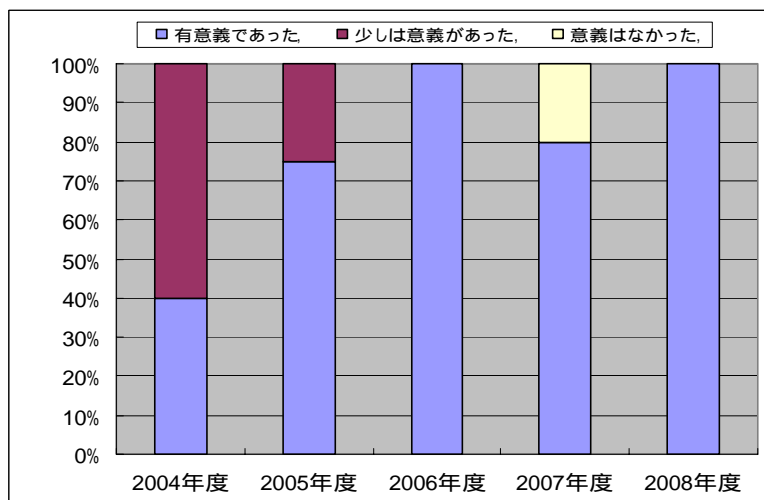
[12-6] R Aを担当したことがありますか。(博士後期課程の修了生のみ)

2005 年度以降 R Aを経験した博士後期課程の学生はそれまでの数%からが 60%以上と大幅に増加し RA 制度が定着しつつあるが、2008 年度は大幅に減少しており注視する必要がある。



[12-7][12-6]でA(ある)と答えた方。R A活動は、自分自身にとって意義があったと思いますか。

2004 年度以来 2008 年度まで R A活動の体験者全員が RA を肯定的に考えており、2006 年度および 2008 年度には 100%の博士後期課程学生が R Aに「意義があった」と評価している。2007 年度にはそれが 80%と減少している。

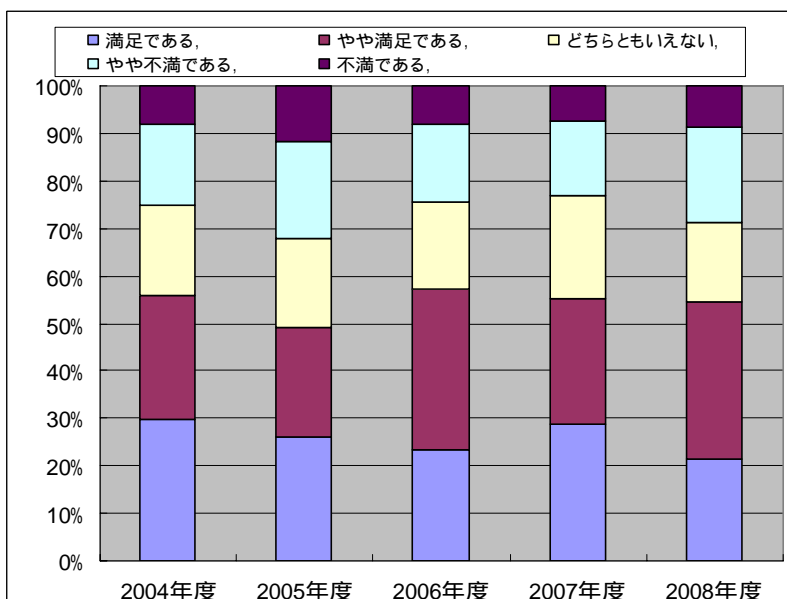


[12-8][12-7]でC(意義はなかった)と答えた方：その理由は何ですか。(博士後期課程の修了生)
(この項目に回答した学生はいなかった。)

[13]施設・設備等についてお尋ねします。

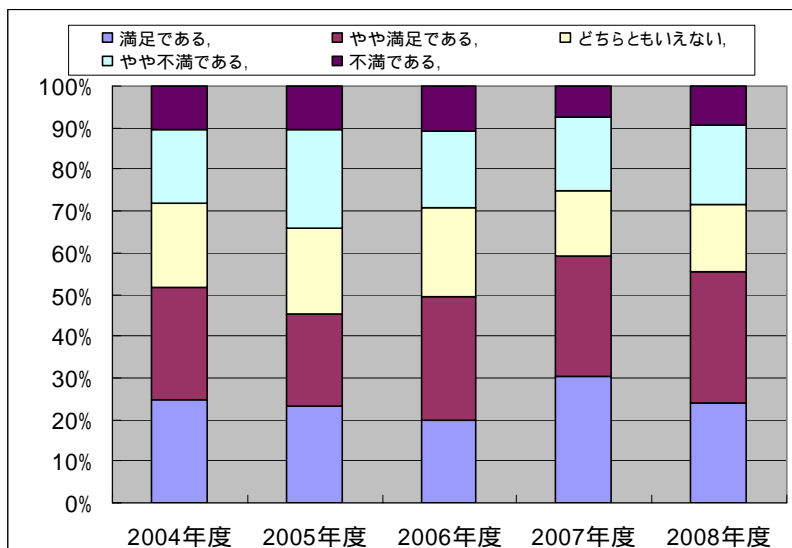
[13-1]研究に使った実験室・実習室のスペースや環境等について満足していますか。

「満足、やや満足」と解答した学生はほぼ半数以上である。2006 年度に 57%に増加したが、2007 年度 55%、2008 年度 54%とやや減少した。実験室・実習室等の施設・設備の整備をさらに進めていく必要がある。



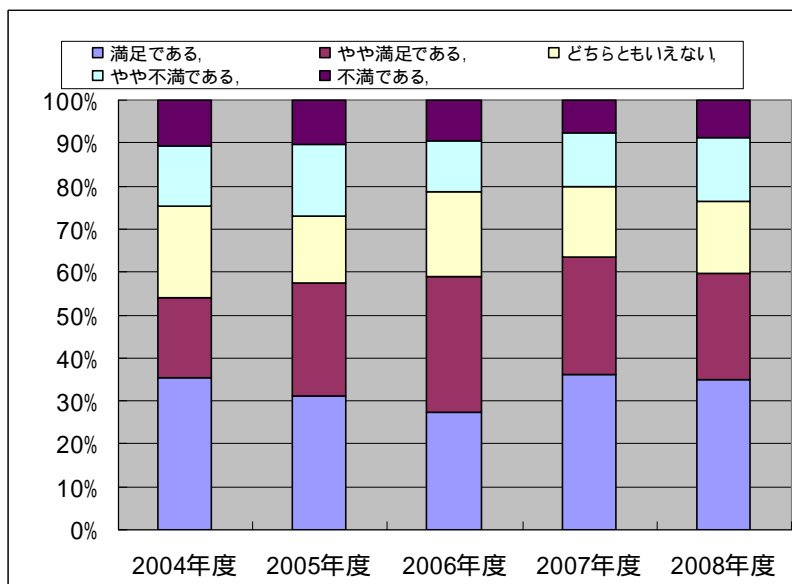
[13-2]研究に必要な設備・装置について満足していますか。

「満足，やや満足」とした回答は2006年度までほぼ50%前後であったが，2007年度，2008年度ともに55%以上になった。これより研究に必要な設備・装置の整備が進んでいることが窺えるが，教育の根幹の問題であり，更に効果的に整備を進めるべく検討する必要がある。



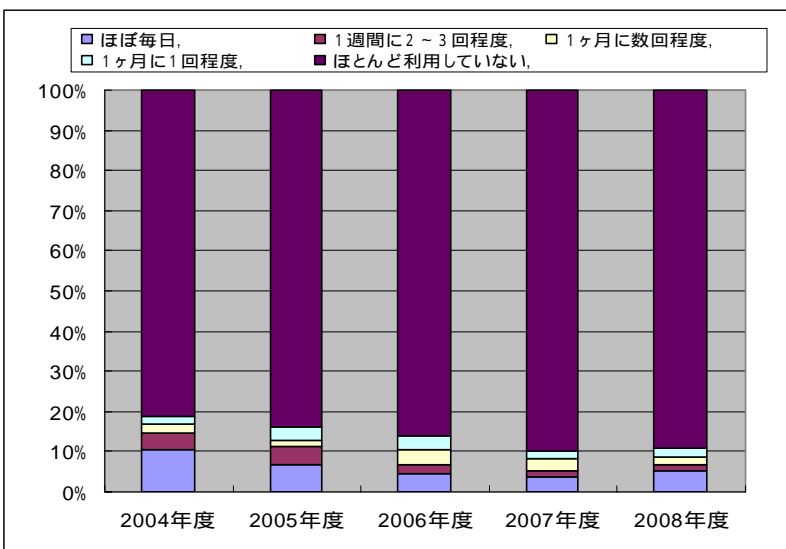
[13-3]研究に必要な情報機器(コンピュータ端末等を含む)の整備状況について満足していますか。

「満足，やや満足」と回答した学生の割合は60%程度と着実に増加している。「不満」とした回答は2007年度までは年次毎に減少し2008年度は9%になっている。引き続き整備していく必要がある。



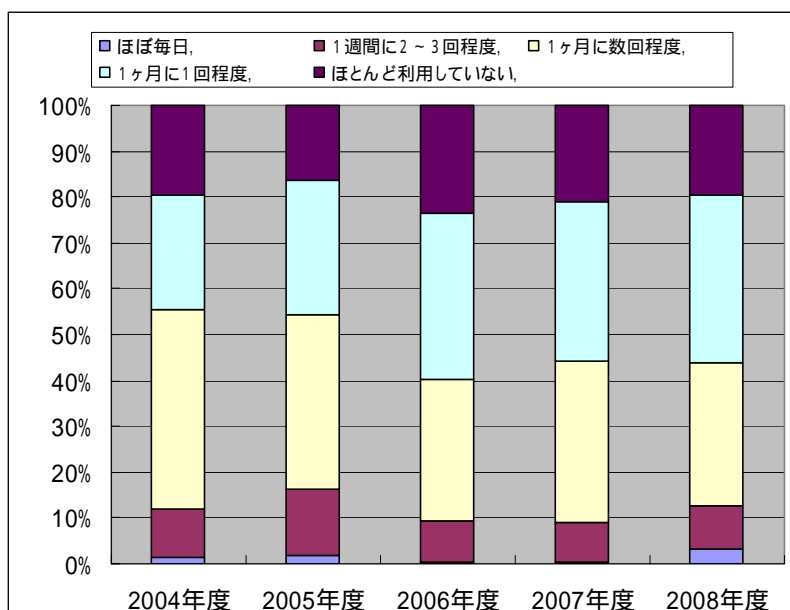
[13-4]情報科学センターが提供しているサービスをどの程度利用していますか。(インターネットや電子メールを除く。)

約85%以上の学生が情報科学センターのサービスを利用していない。これは増加傾向にあり2007年度は90%を超えている。情報科学センターのサービス利用の促進を検討する必要がある。



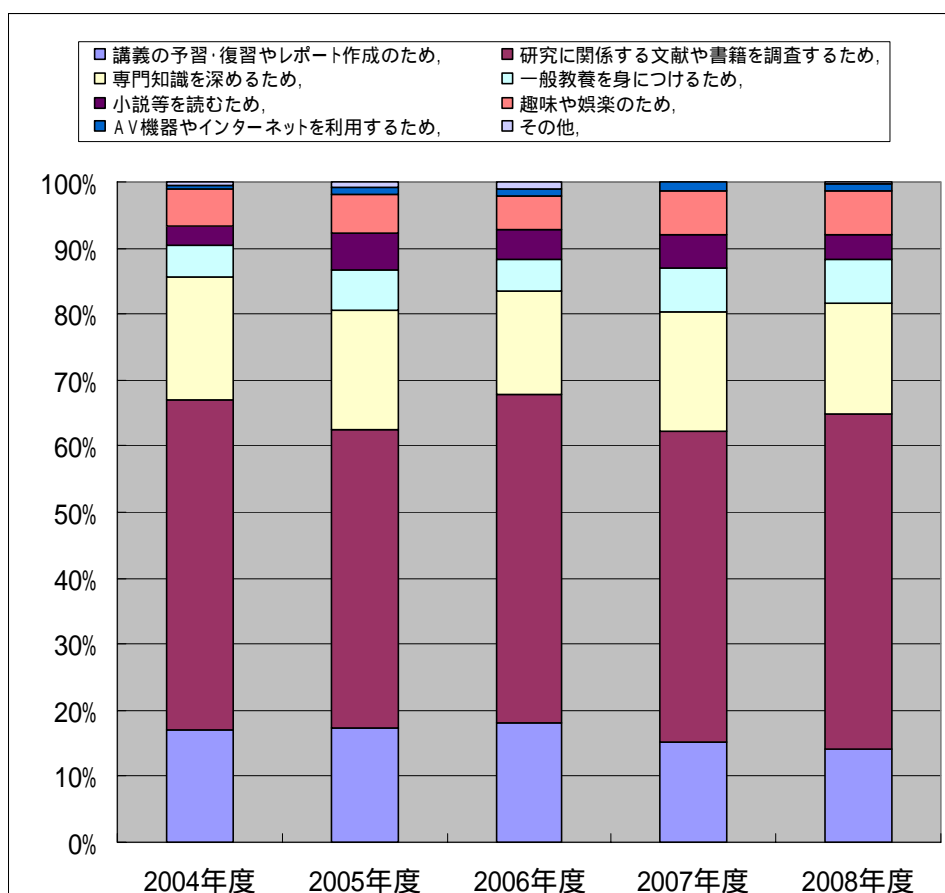
[13-5] 図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

1週間に2～3回程度まで日常的に利用している学生の割合は2007年度には10%を割っていたが、2008年度にはまた10%を超える割合に戻っている。月に1回程度以上利用する学生の割合は80%前後であり、ほとんど利用しない学生の割合は20%前後である。



[13-6] 図書館を利用する主な理由をお答えください。(複数回答可)

学生が講義、研究、専門知識および一般教養に関して図書館を利用している割合は、それぞれおおよそ15%、45～50%、15～20%、5～7%程度で合計は90%程度である。



H (その他) [具体的に:]

- ・ 新聞を読むため。

2.3 教育達成度評価アンケート：雇用主 (2006年3月以前卒業生)

2008年度は、2001年度以降これまでに実施したアンケートに基づき、卒業生のレベル変化や卒業生に対する企業の要求レベルを調査することを目的として実施した。学部教育に対する企業の評価の経年変化を調べるため、2008年度も2004年度のアンケート項目に添って調査を行った。

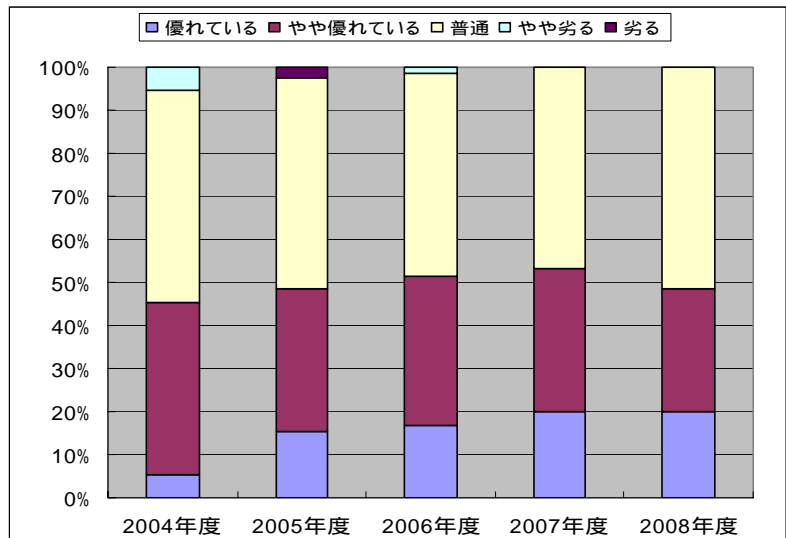
2006年3月期の卒業生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係よりアンケートを依頼した。アンケート用紙を送付した企業は110社で、回答のあった企業は35社であった。回答率は31.82%であり、2007年度の35.29%より減少した。アンケートの内容や実施方法に継続性が必要と考えられるが、今後回答率を上げる取り組みも必要と考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

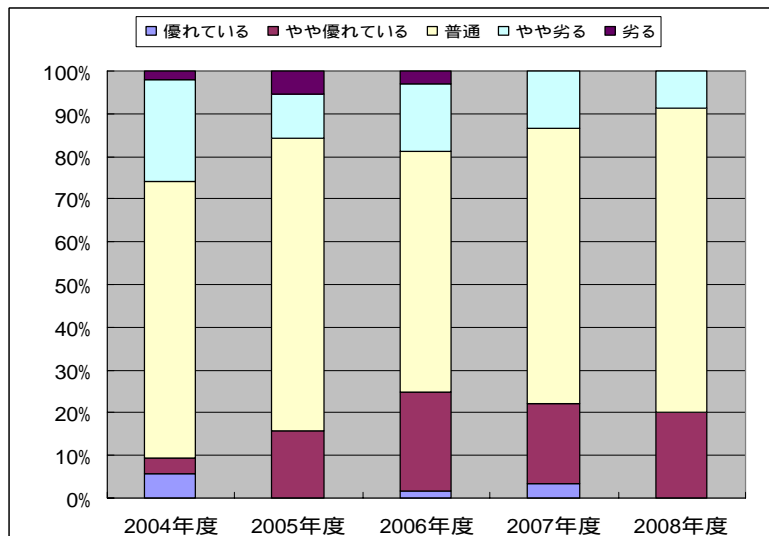
(1) 卒業生が受けた教養(人文・社会等の一般教養)教育のレベル

「優れている、やや優れている」が2004年度の45%から増加を続け2007年度には53%に達している。2008年度には48%に減少しており、注視しておく必要がある。



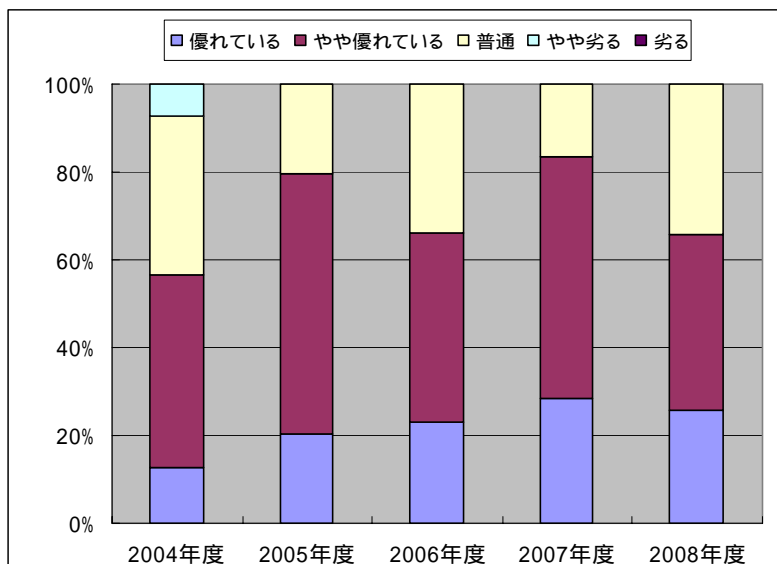
(2) 卒業生が受けた語学(特に英語)教育のレベル

2004年度には企業の74%、それ以外の年度ではほぼ80%以上が「普通以上」と回答しているが、2008年度には92%に上昇しており、この比率を更に増やす努力が必要である。



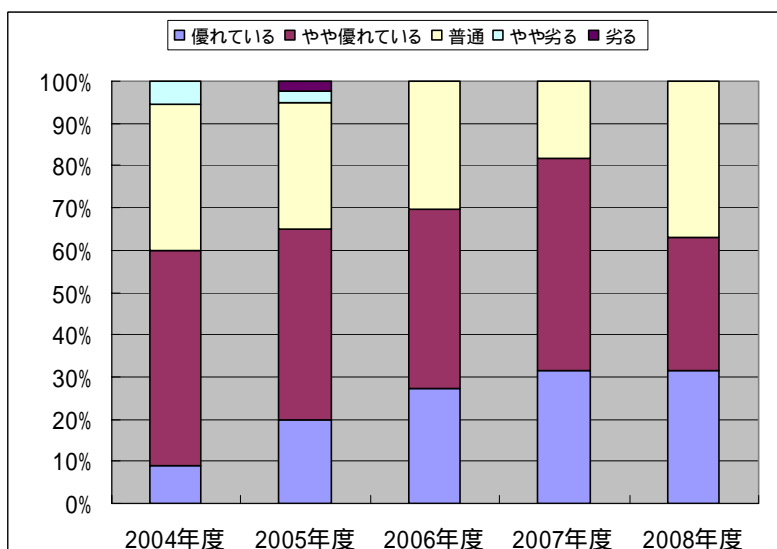
(3) 卒業生が受けた理数系(数学・物理・化学)教育のレベル

2004年度以外、全企業が「普通以上」と回答しているが、「優れている」、「やや優れている」と回答した企業が2005年度にほぼ80%、2007年度は83%に達した。年度ごとに一定でない入学者の母集団の特性に左右される面もあり、一喜一憂はできないが、今後この比率を更に上げる努力が必要である。



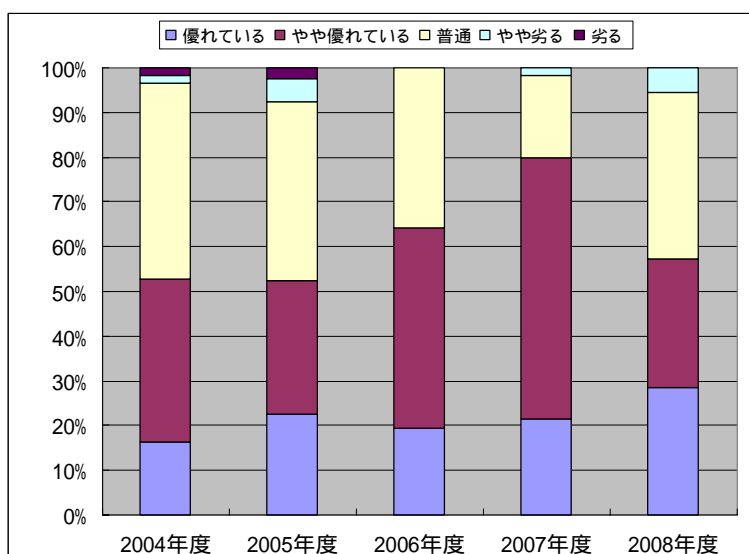
(4) 卒業生が受けた専門教育のレベル

卒業生の専門教育レベルについては、「優れている、やや優れている」が2004年度の60%から着実に増加を続け2007年度には82%に達している。しかし、2008年度は53%と大幅な減少を示しており、注視しておく必要がある。



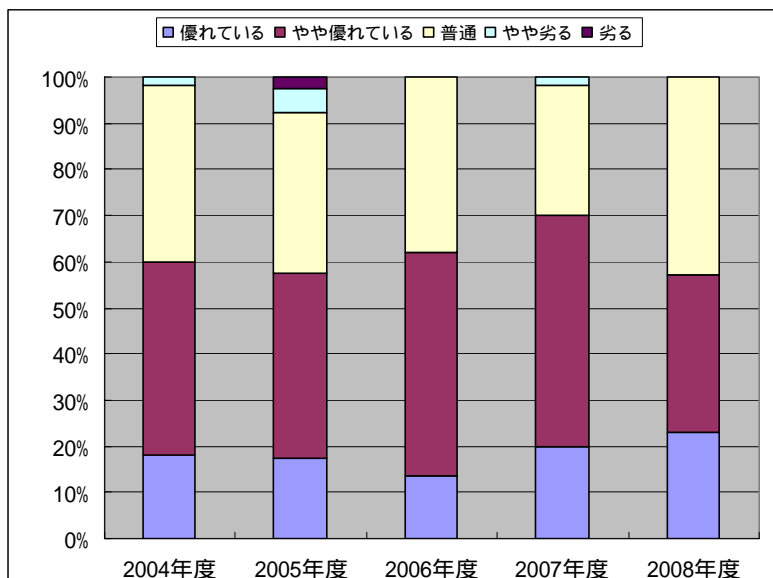
(5) 卒業生が受けた課題探求能力教育のレベル

卒業生の課題探求能力レベルについては、「優れている、やや優れている」が2004年度～2005年度の50%台から2006年度64%に増加し、2007年度には80%に達した。これらのことから課題探求能力の涵養を目指した教育の効果が現れつつあると考えられた。しかし、2008年度は57%と大幅な減少を示しており、注視しておく必要がある。



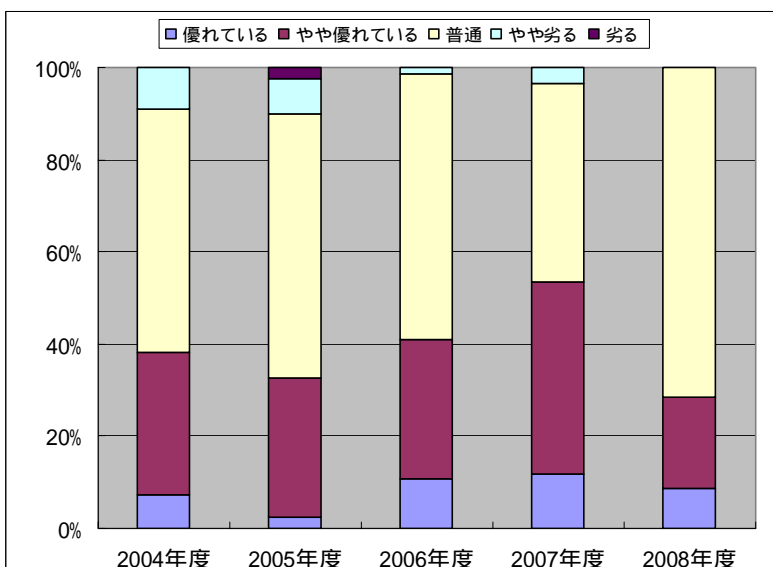
(6) 卒業生が受けた課題解決能力教育のレベル

卒業生の課題解決能力については、「優れている，やや優れている」は2007年度は70%にまで上昇しているが，2008年度は57%と大幅に減少しており，注視しておく必要がある。



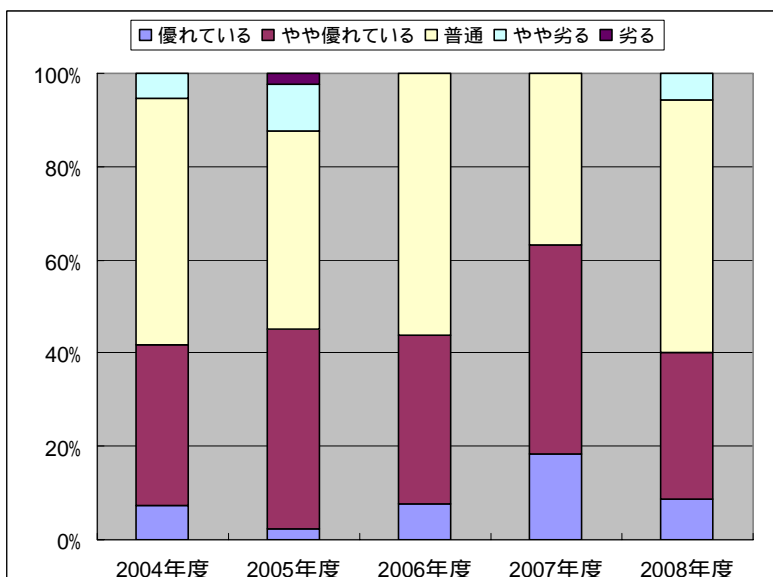
(7) 卒業生が受けた独創性教育のレベル

卒業生の独創性については「優れている，やや優れている」が2005年度以降年々増加し，2007年度には53%となっている。しかし，2008年度は大幅に減少しており，今後も推移を見守る必要がある。



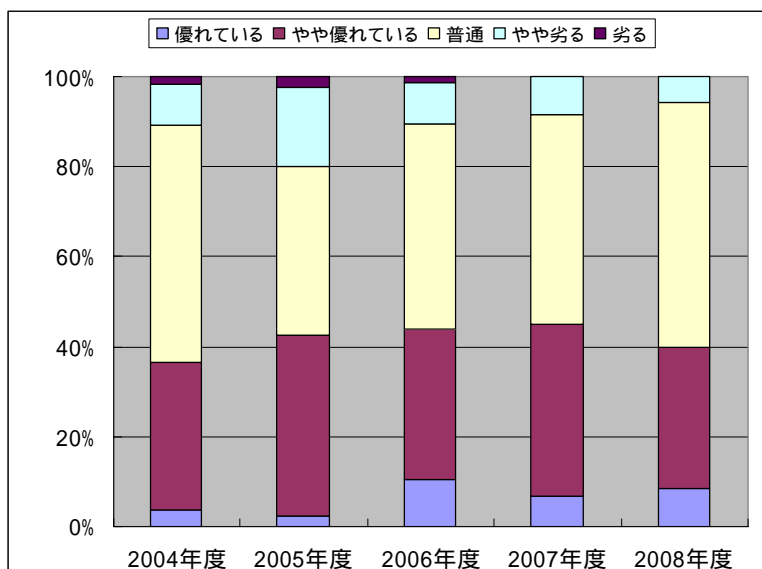
(8) 卒業生が受けた構想力教育のレベル

卒業生の構想力については、「優れている，やや優れている」は2004～2006年度は45%前後を推移してきた。2007年度には一気に60%を超えたが，2008年度は40%にまで大幅に減少した。今後も推移を見守る必要がある。



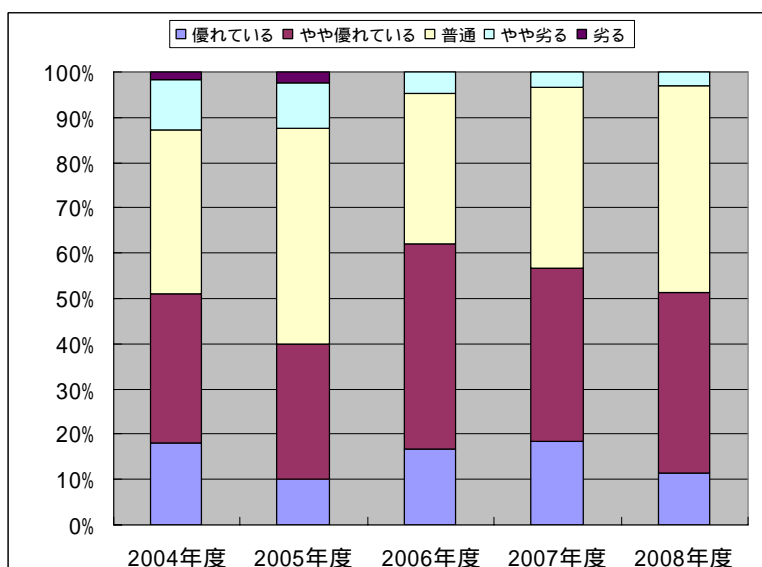
(9) 卒業生が受けた表現力教育のレベル

2005年度以降「普通」以上の評価が漸増し、2008年度は約95%に達している。「やや優れている」以上の評価は微減したが、40%程度で推移している。この2年間「劣る」の評価はなくなり、「やや劣る」が5%程度に減少して過去最小となっている点で、改善の傾向が見られる。今後「優れている」「やや優れている」の比率増が望まれる。



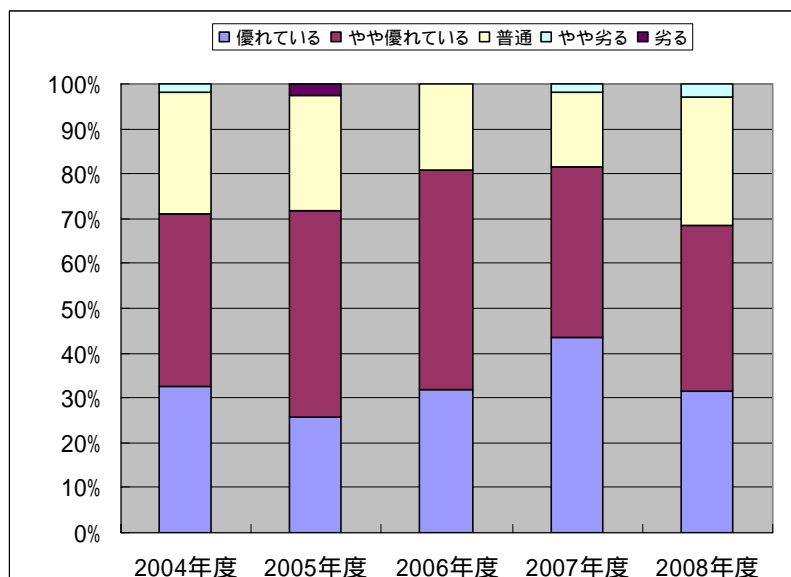
(10) 卒業生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

コミュニケーション能力に関しては「普通」以上の評価が増加傾向を続けている。2006年度以降95%以上で推移し、2008年度は97%に達している。またこの3年間「劣る」の評価はなくなり、改善の傾向が見られる一方で、「やや優れている」以上の比率は50%以上ではあるが、5%程度ずつ減少している。この点、今後注意して推移を観察する必要がある。



(11) 卒業生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

「普通」以上の評価が95%以上で、「やや優れている」以上の評価が凡そ70%以上で推移している。全体として評価は高いといえる。



2. 貴社・貴機関が九州工業大学 工学部 卒業生に望む事項（卒業生の資質等）がございましたらご記入ください。

「勉学」、「エンジニアとしての素養」といった面で一定の好評価があるが、「コミュニケーション能力」、「表現力」、「語学力」、「積極性」、また「基礎学力」、「技術的な基礎力」の育成への期待がある。

- ・ コミュニケーション能力の更なる向上を希望します。
- ・ 明るく元気に！
- ・ 熱意、粘り強さ、また、コミュニケーションを大切にする人材を望んでいます。仕事は人と人との信頼関係が重要ですので、学生時代から、他者への思いやりも培って欲しいです。
- ・ 入社前より自らのキャリアプランを持ち卒業後も企業人として業務を通し自らを伸ばしていただきたいです。
- ・ 専門分野の深耕はもとより、コミュニケーション能力の向上を望みます。
- ・ 自ら考え、行動する力。
- ・ 特になし
- ・ 私は、専門教育は会社に入ってからでも決して遅くはないと思っています。問題なのは、それを受け入れる資質だと思います。数学、物理学等を基礎ツールとし、科学的に思考/探究できる事が、最重要だと思います。
- ・ 英語力の拡充に期待します。
- ・ エクセル（マクロ含む）/ワード/パワーポイント等の習得
- ・ 基礎学力と英語力。自己表現力と積極性。
- ・ 主体的に課題に取り組むことが出来、コミュニケーション能力の高い学生さんを期待しております。
- ・ 適応力・成長意欲
- ・ 専門性が乏しい点があるものの、エンジニアとしての素養は感じられます。スキルアップ、戦力度アップは探究心や向上心、好奇心があれば可能かと思えます。
- ・ より一層の語学力（特に英語）のアップとコミュニケーション力（表現力）の養成を望みます。
- ・ 勉学の面では、申し分ございませんので、元気にコミュニケーションをとっていただきたいと思えます。
- ・ 基礎能力（人間力、コミュニケーション能力など）を徹底頂きたい。研究成果を出すことも重要であるが、技術的な基礎をしっかりと教育して頂きたい
- ・ 特にございませぬ。
- ・ 自律性豊かな頼れる人材。
- ・ 受身ではなく、自ら考え、自ら動こうとする姿勢
- ・ 先輩から後輩への情報コミュニケーション
- ・ 従来通り、学業に力を入れて頂きたく存じます。
- ・ 語学力の向上
- ・ 問題事項を解決する事に対する、リーダーシップを発揮すること。又、自から企画、提案していただくこと、能力を身に付けること。

3. 九州工業大学 工学部の教育に対して、ご意見・ご要望（企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等）がございましたらご記入ください。

要望・意見は、以下のとおり業務に応じて多岐に亘る。理数系教育において原理に重点を置いた基礎的学力の修得、「学ぶ力」の涵養への期待が大きい。また、専門的素養と同時に「分析力」、「判断力」、「行動力」等、総合的な「人間力」への期待がある。

- ・ なし
- ・ 1. 土木全般（コンクリート、鋼、土質など）の基本的な考え方を身に付けること。2. 基本的な数学的思考力を有し、利用して考えられること。
- ・ 特に理数系の教育につきましては、原理、原則を重点的に教育して頂きたい。基礎知識が確実に身に着いていれば、技術的な課題解決能力や開発能力は仕事を通じて、劇的に向上すると確信しています。
- ・ 単なる学問としての知識の修得に重点を置かずに、活かせる知識の修得という点から、「学ぶ力」

としての学力を指導し、企業における即戦力的人財の輩出を期待しております。

- ・ これまで以上に工学系の学生の方々には専門性とバランス性の両面が求められると考えています。バランス性においては課題の分析力、解決に向けた展開力や行動力が求められると考えています。
- ・ 特になし。
- ・ 特になし
- ・ 問2では、大学での専門教育は不要、と書きましたが、出来れば、電子回路はやって欲しいです。特に、SPICE等のシミュレーションツールに精通しておいてもらえると、会社に入ってから、大分、楽だと思います。
- ・ 材料力学/流体力学/熱力学の習得
- ・ 弊社としては、機械工学及び電気・電子工学の知識を有する学生を必要としております。アンケートの回答は、人事担当者ではなく、卒業生の上司の方が適しているのでは、と思います。
- ・ 鋳鉄を中心とした材料系及び、設計、設備管理等を踏まえた機械系の高い専門性を有した学生さんを期待しております。
- ・ 半導体に関する基礎知識の講座を充実させて頂きたいと思います。
- ・ いつも、とてもよい学生が弊社を受験していただいております。今後も今までどおりの教育を続けていかれるようお願い致します。
- ・ なし。
- ・ 特にございません
- ・ 基礎的な実践教育である、測量実習の充実を時間数並びに受講時期を検討して頂きたい。
- ・ 現在世界不況の中で、自動車産業は次世代に向けて技術革新を進めています。貴学でも自動車に特化した専門分野があれば企業としても大変心強い
- ・ 土木技術を確実に身に付けるためには、法的な知識の修得が必須となります。関連法規の基本的学習も取り入れて頂きたい。

4. 全体としての傾向

2008年度においては「普通」以上の評価が全ての項目において90%（2007年度85%）を越えた。語学以外の10項目は95%を超え、なかでも、人文・社会等の一般教養、理数系、専門、課題解決能力、独創性の5項目（2007年度4項目）は100%であり、「劣る」とする評価は2007年度に引き続き全項目から消えている。

「やや優れている」以上の評価は、すべての項目について2007年度から減少し、おおよそ2006年度あるいは2005年度に近い結果となった。2007年度の評価が相対的に高いものであったことが覗えるが、2008年度の「やや優れている」以上の評価は、理数系68%、専門62%、課題探求能力、課題解決能力はそれぞれ58%と60%前後、また仕事への熱意は約70%であり、卒業生は、引き続き企業から概ね高い評価を得ていると判断される。なお、独創性、構想力、表現力が40%あるいはそれ以下と低く、この年度の一つの傾向が覗える。

社会・企業等から要望の高い語学、コミュニケーション能力については、それぞれこの3年間で「普通」以上の評価は漸増し2008年度にそれぞれ92%、97%となった点で改善が見られるが、「やや優れている」以上の評価は、いずれも漸減し2008年度はそれぞれ20%、51%であった。これらの項目で一層の改善をいかに進めていくか、課題が残されている。

2.4 教育達成度評価アンケート：雇用主 (2006年3月以前修了生)

2008年度は、2001年度以降これまでに実施したアンケートに基づき、修了生のレベル変化や修了生に対する企業の要求レベルを調査することを目的として実施した。大学院教育に対する企業の評価の経年変化を調べるため、2008年度も2004年度のアンケート項目に添って調査を行った。

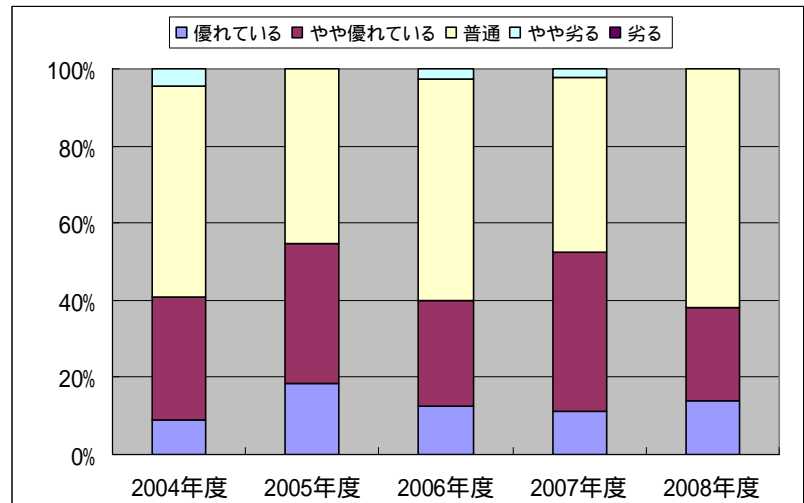
2006年3月期の修了生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係よりアンケートを依頼した。アンケート用紙を送付した企業は117社で、回答のあった企業は29社であった。回答率は24.79%で、2007年度の20.40%より増加した。アンケートの内容や実施方法に継続性が必要と考えられるが、今後回答率を上げる取り組みも必要と考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

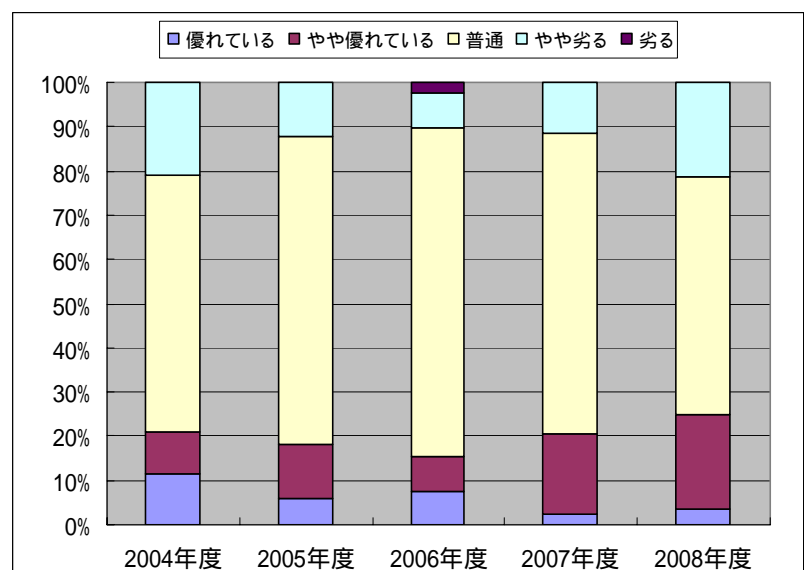
(1) 修了生が受けた教養(人文・社会等の一般教養)教育のレベル

「やや優れている」「優れている」の回答が40%~54%で推移している。全体として企業側の評価はこのレベルに定着しているとみられる。



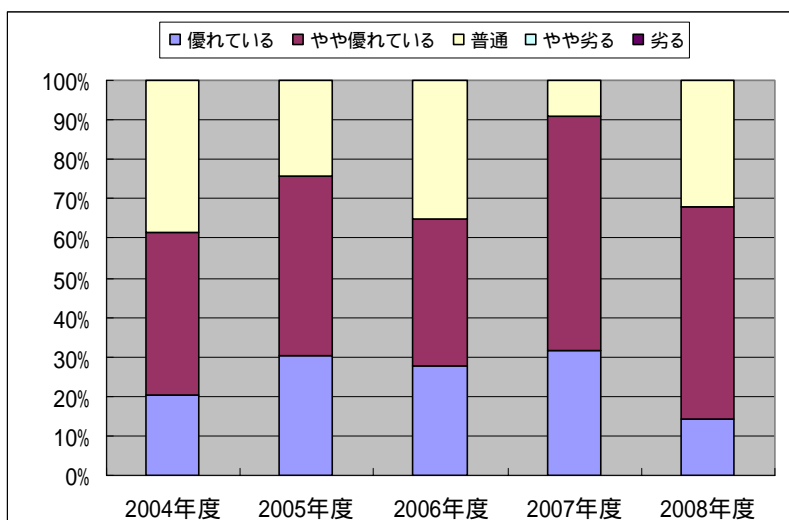
(2) 修了生が受けた語学(特に英語)教育のレベル

「普通」以上の回答が過去2年間に比べて約10%減少して80%弱となった。「やや優れている」以上の回答はこの3年間増加傾向にあり、2008年度は25%となったが、この数値は教養教育、理数系等と比較するとかなり低い数値である。着実な改善への対策が必要であると考えられる。



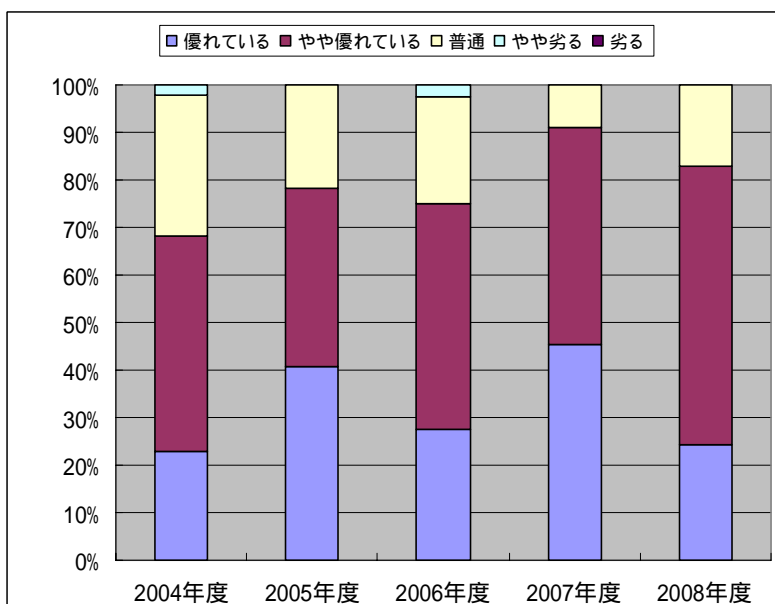
(3) 修了生が受けた理数系(数学・物理・化学)教育のレベル

「優れている」「やや優れている」の回答は、2007年度に合計90%となり突出しているが、2005年度以降65%以上で推移しており、全体的に企業側の評価は高いものと判断される。



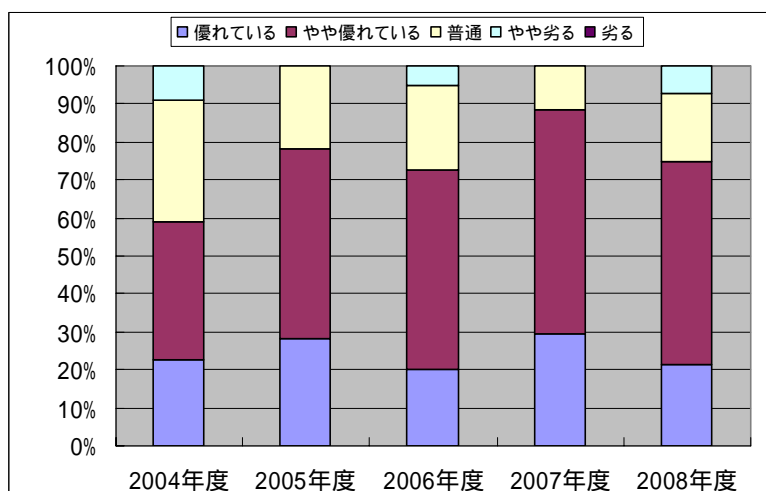
(4) 修了生が受けた専門教育のレベル

昨年度に引き続き「普通」以上が100%である。「優れている」「やや優れている」合計の回答は、2007年度の91%から83%に減少したが、相変わらず80%台にあり、「優れている」の回答に隔年ごとにジグザグな変動が見られるものの企業側の評価は極めて高いことがわかる。



(5) 修了生が受けた課題探求能力教育のレベル

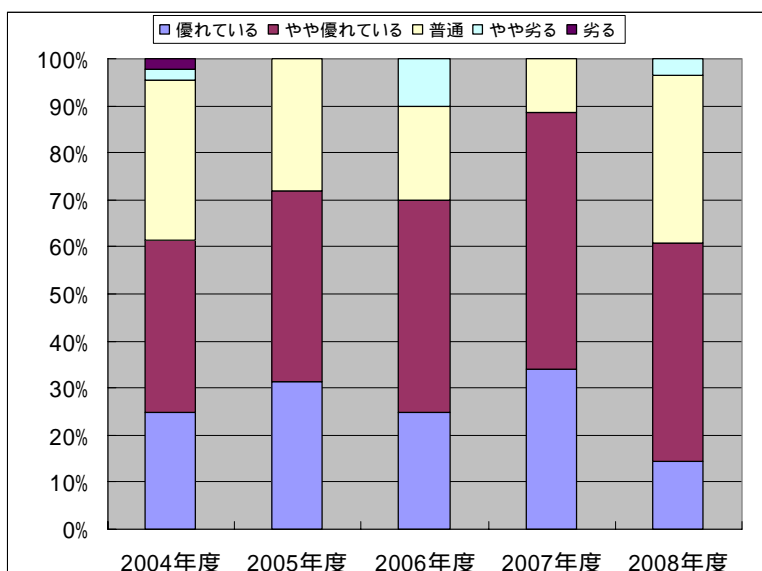
2007年度ゼロであった「やや劣る」の回答が2008年度には7%あったが、「やや優れている」以上の回答は2005年度以降70%台以上で推移し、2008年度は75%であった。2007年度には89%と突出した年もあり、企業側の評価は概ね高いと判断される。



(6) 修了生が受けた課題解決能力教育のレベル

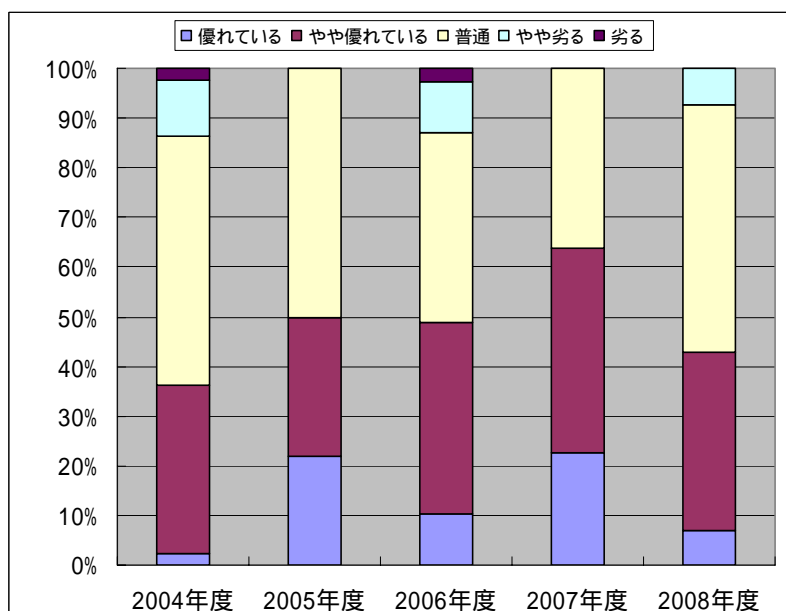
「やや優れている」以上の回答は2005年度～2007年度に70%以上で推移しているが、2008年度は、2007年度から28%ほど減少して2004年度レベルの約60%程度となった。

「普通」以上は97%で2006年度を上回っている。2007年度が突出している傾向が見られるが、母団の特性の年度変化といった要因を考慮する必要があると思われる。



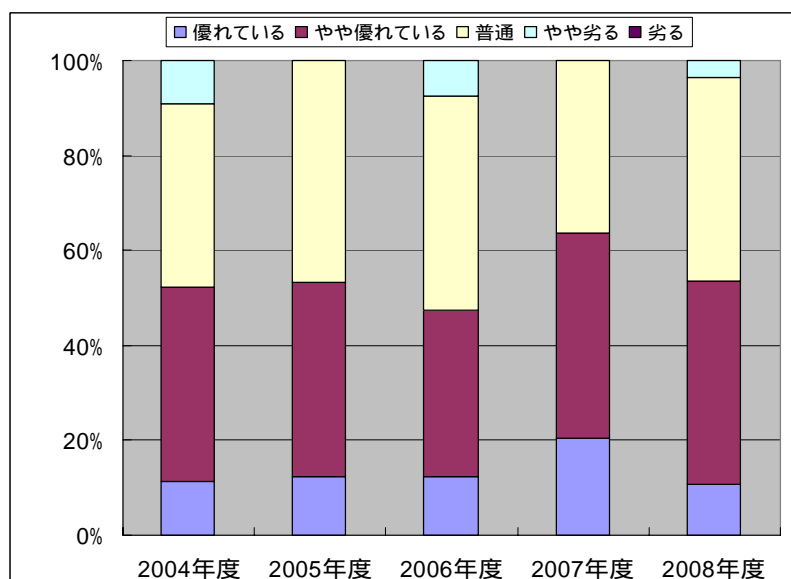
(7) 修了生が受けた独創性教育のレベル

2008年度は「普通」以上の回答が93%であり、「劣る」は昨年に続きゼロであった。2005年度～2007年度「やや優れている」以上の回答はおおよそ50%以上で推移しているが、2008年度は前年度から20%ほど減少して43%となった。「優れている」の回答も減少し約7%となった。この項目での教育効果は一朝一夕に得られるものでないが、引き続き、継続的な工夫が必要であろう。



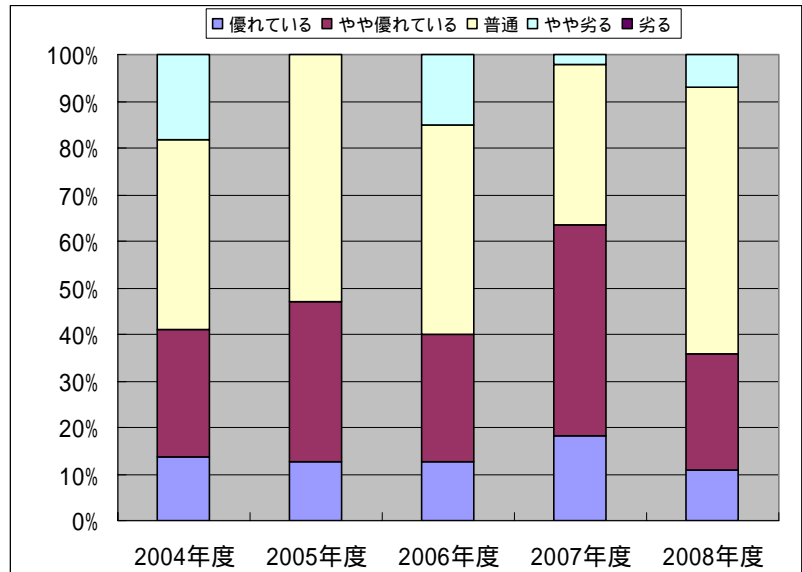
(8) 修了生が受けた構想力教育のレベル

2007年度が比較的好結果となっているが、2008年度を含めてその他の年度はおおよそ同様の傾向を示している。2008年度は「普通」以上の回答が96%で、「やや優れている」以上の回答は54%程度であった。昨年度ゼロであった「やや劣る」の回答が4%程度あった。まずまずの評価と言ってよいであろう。



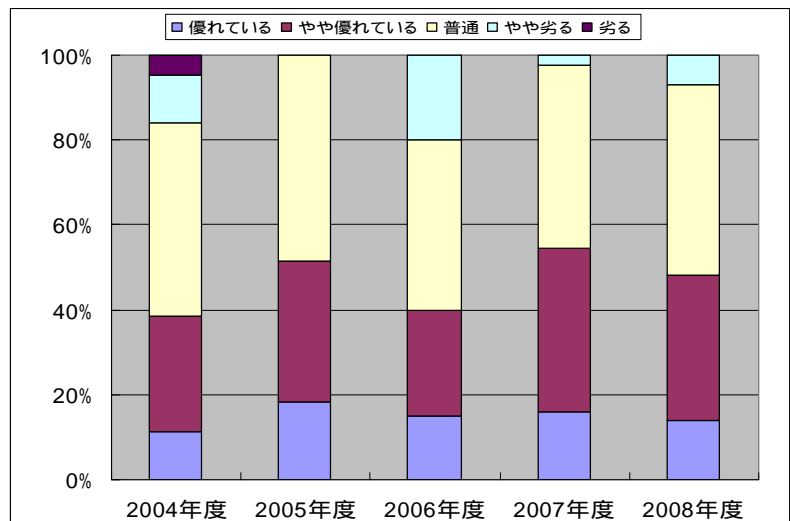
(9) 修了生が受けた表現力教育のレベル

多くの項目でジグザグの傾向が見られる。表現力について2004, 2006, 2008年度を見ると「やや劣る」は18%, 15%, 7%, また「普通」以上は82%, 85%, 93%で改善の傾向が見られる。一方「やや優れている」以上は2007年度に64%と高い値を示したが, その他の年度は概ね40%前後で推移している。継続的な対応が必要であろう。



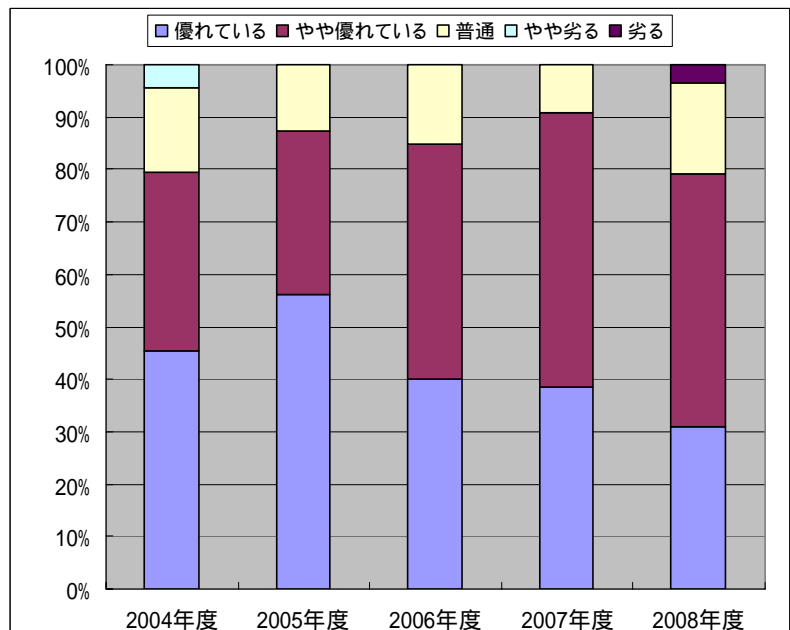
(10) 修了生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

コミュニケーション能力は本学修了生の苦手な項目と指摘されている。2008年度は「やや優れている」以上が前年度から5%ほど減少したが, 約50%程度であり, 「普通」以上は93%である。今後「普通」以上が100%に, また「やや優れている」以上が着実に増加するよう工夫が必要であろう。



(11) 修了生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

2004年度以降「やや優れている」「優れている」を合わせた回答はほぼ80%以上の数値を確保している。「普通」以上は, 2005年度~2007年度100%であり, 2008年度に97%となったが, 全体的に本学の修了生は企業から高い評価を受けていると考えられる。また2008年度に「劣る」の回答が新たに3%ほどあった。



2. 貴社・貴機関が、九州工業大学 大学院工学研究科 修了生に望む事項（修了生の資質等）がございましたらご記入ください。

キーワードとして列挙する。「主体性」、「積極性」、「人間力」、「コミュニケーション力」、「幅広い視点」、「意欲」、「課題解決能力」、「好奇心」、「チャレンジ精神」等。また同時に「理数系及び専門分野の基礎教育レベルの充実」、「体系的で幅広い基礎知識」習得への期待がある。

- ・ 特になし
- ・ 与えられた課題については積極的に取り組んでいるが、基本的に受け身（指示待ち）の傾向が見られます。いろんなことに感心を持ち、情報収集等行動して欲しい。まだ、入社一年ですので、本来の力を見れていないかもしれません。
- ・ 主体的な課題解決力。コミュニケーション能力。
- ・ 従来通り、学業に力を入れて頂きたく存じます。
- ・ チームの一員として、どのような姿勢で仕事に取組べきかの教育。大学院生であっても、入社すれば、新人で1から仕事を学んで行くのでチームワークの取り方、チームの一員としての自覚等についての意識レベルを上げて行く必要があると思います。これは専門教育とは異なることですが。
- ・ 理数系及び専門分野の基礎教育レベルの充実。体系的な基礎知識の習得。
- ・ 特に無い。
- ・ 皆様明るくモチベーションを高く持ち責任感あふれている方が多い。グローバルな視点で活躍していただきたい。
- ・ 特にございません。
- ・ 毎年、多くの卒業生を輩出して頂いております。専攻テーマをいかに深く掘り下げ、自分のものになっているか、また、その内容を第三者に分かりやすく、論理的に説明できるか、が重要と考えます。
- ・ 工学の基礎を勉強していただいている事が製造業にとって大変重要だと考えます。
- ・ 幅広く興味を持つ、好奇心。疑問を持つ、探究心。やり遂げる為の粘り強さ。
- ・ 基礎能力は高いものを持っていると感じますが、若干他者との折衝や調整等で苦労している者も見受けられますので、教育の中で、この面もフォローして頂けると良いと思います。
- ・ 課題解決能力。自主性。チャレンジ精神。
- ・ 情報が限られているケースでも、自分なりに考えをめぐらせ、自説を書いてまとめる能力を有する人物。物事を前向きにとらえ、建設的な発言を心がける人物。
- ・ 近年、一般的に新卒者の人間としての資質・常識の低下が取り沙汰されております。研究を通じた高い専門知識と並び、社会人として活躍するためのベースである「人間力」を身につけることを期待しております。
- ・ 理数系に関して幅広い知識を修得していることを望みます。
- ・ ナブテスコ株式会社においては、特に1の(5)～(11)についての資質等を必要としております。
- ・ 特にありません。

3.九州工業大学 大学院工学研究科の教育に対して、ご意見・ご要望（企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等）がございましたらご記入下さい。

キーワードとして列挙する。「コミュニケーション能力」、「粘り強さ」、「課題解決能力」、「基礎学力」、「専門知識」、「幅広い知識」等。また、「(修了生の)研究レベルの維持・向上」への期待がある。

- ・ 特になし
- ・ レオロジー、トライボロジー
- ・ 採用選考時に基礎学力（SPI実施）の面でもの足りない場合がしばしばあります。専門性はもちろんですが、基礎力も大切と考えます。
- ・ 研究を通じての研究、仕事に取り組む姿勢、や取り組み方をしっかりと身につけて欲しい。専門分野に特化しすぎない幅広い知識の習得を望みたい。
- ・ 特に無い。
- ・ コミュニケーション能力を大事にしながら基礎学力を身につけ粘り強く課題に取り組むこと。
- ・ 特にございません。
- ・ 半導体に関してはクリーンルームや製造装置などのインフラを充実させ、半導体分野に興味を持つ学生さんを増やして頂きたいと思います。
- ・ 工学の基礎をしっかりと教育していただいている事が大変にありがたく存じています。
- ・ 専門分野に関しては修了することにより、ある程度評価される。その教育の中で前項のような資質がレベルアップされることが期待。
- ・ 当社に必要な専門分野。有機化学の基礎。高分子化学の基礎。
- ・ 化学、化学工学。電気、(工場)計装。
- ・ 貴大学の卒業生の方は、在学中の熱心な研究によって高度な専門性を有していると評価していません。今後も研究レベルの維持・向上を進めていただければ幸いです。
- ・ 一般企業から技術協力がやりやすいようなシステムがあったほうがよい。
- ・ ナプテスコ株式会社においては、工学部の建設社会工学科及び大学院工学府の建設社会工学専攻以外の専門分野、専門知識等を必要としております。
- ・ 特にありません。

4.全体としての傾向

2008年度アンケート調査の修了生の評価では、前年度に比べて「語学」を除いた全ての項目で「やや優れている」以上の回答が減少した。とくに「理数系教育」、「課題解決能力」、「独創性」、「表現力」で15%以上の減少となったが、2007年度は「やや優れている」以上の回答がほぼ全体的に突出した傾向が見られ、2008年度は概ね2006年度以前の評価レベルであったと言えよう。「理数系教育」、「専門教育」は2007年度の「やや優れている」以上の回答が90%以上と極めて高い評価であった。2008年度はそれぞれ70%弱、83%となったがいずれも「普通」以上で100%であり、好評を得ているものと考えられる。一方、語学では「やや優れている」以上の回答が2006年度から毎年5%程度増加して2008年度に25%となり、改善の傾向が見られるが、同時に「やや劣る」が増加し、21%となった。もとより母集団に英語が得意な傾向があるが、「教養」、「理数系」、「専門」に比べてかなり低いレベルにあり、着実な改善への工夫が必要であろう。また、今回のアンケートで「やや優れている」以上の評価が50%を切っている「語学」、「教養」、「独創性」、「表現力」、「コミュニケーション能力」の強化が課題であろう。

2.5 教育達成度評価アンケート：卒業生 (2006年3月以前卒業生)

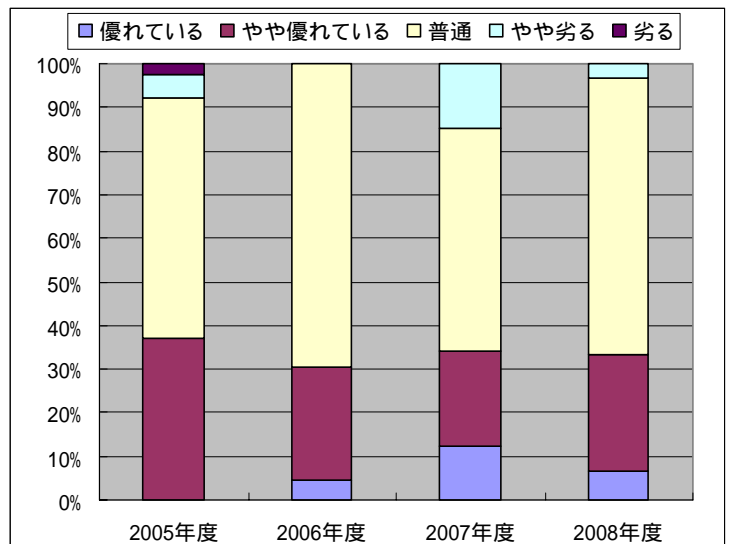
中期目標・中期計画に基づいて、2006年3月期の卒業生で企業へ就職した者へのアンケートを実施した。アンケート用紙は卒業生のリストに基づき、工学部総務係より発送した。アンケート用紙を配布した企業に就職した卒業生は121名、回答のあった卒業生は30名であった。回答率は24.79%であり、2007年度の21.47%より増加した。アンケートの内容や実施方法に継続性が必要と考えられるが、今後回答率を上げる取り組みも必要と考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

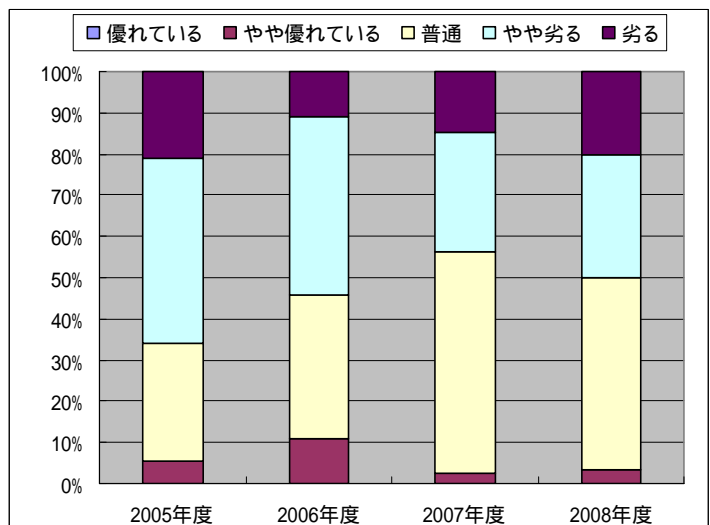
(1) あなたが受けた教養教育のレベル

2008年度は、「普通」以上の評価が前年度から12%程度増加して約97%になった。「やや劣る」は3%程度に減少し、教養教育レベルは概ね肯定的評価を受けていると判断される。ただし、2006年度以降「やや優れている」以上の評価は35%以下であり、今後さらに向上させるための改善が必要であろう。



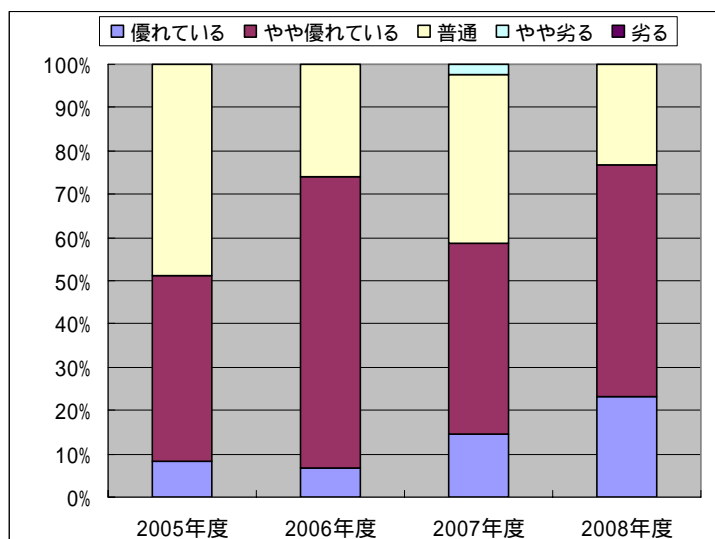
(2) あなたが受けた語学(とくに英語)教育のレベル

「やや優れている」、「普通」を合わせた回答が前年度から5%減少して、「やや劣る」以下の回答と半々になった。「劣る」の比率が2006年度から漸増し、2008年度は20%と高い。今後の対策が必要であろう。



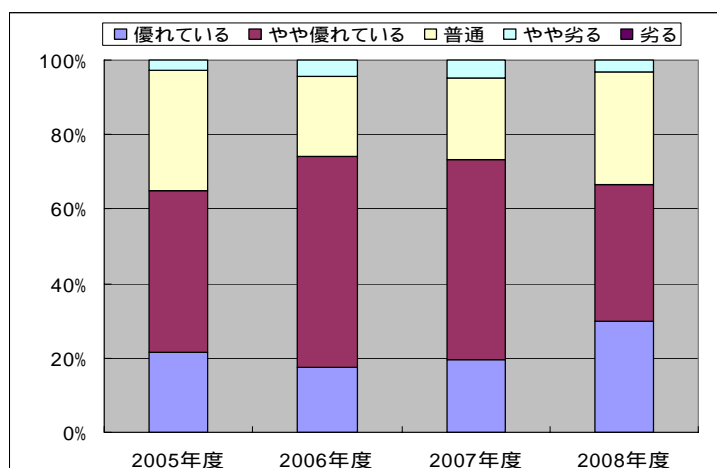
(3) あなたが受けた理数系教育のレベル

2007年度は「優れている」「やや優れている」の評価を与えた卒業生が6割程度であったが、2008年度は75%程度にまで伸びている。また「優れている」については倍増しており、理数教育のレベルが高く評価されていることがわかる。



(4) あなたが受けた専門教育のレベル

「優れている」「やや優れている」の合計の評価の評価は2007年度よりやや減少しているが、「優れている」のみについては5割程度増加している。学生によっては高く評価しているものが増えていることがわかる。

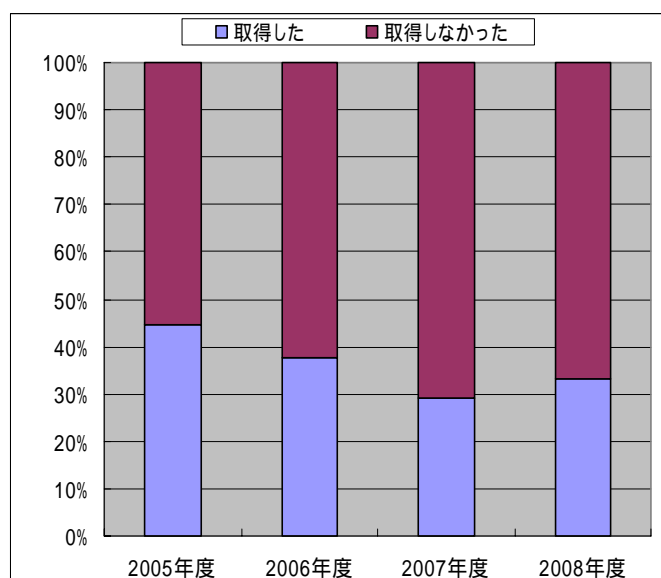


(5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

入社後取得した資格（具体的に）

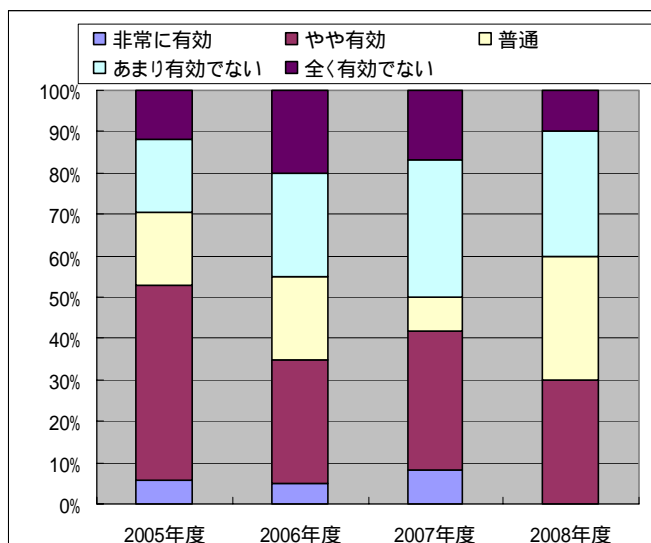
- ・ 1級土木施工管理技士
- ・ QC検定、
- ・ 公害防止管理者
- ・ エックス線作業
- ・ 建築設備関係
- ・ 危険物乙4、消防設備士乙6
- ・ 危険物取扱作業主任者(甲種)、有機溶剤作業主任者、酸素欠乏・硫化水素危険作業主任者、特定化学物質作業主任者
- ・ VEリーダー

2007年度より微増していることがわかる。今後、資格に関する意識を高める教育も必要と考えられる。



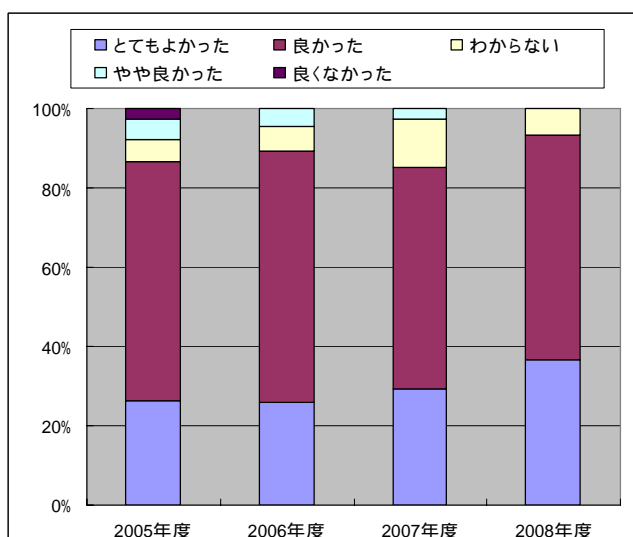
(6) 資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

「あまり効果がない」、「全く効果がない」が50%から40%に減少しているものの、「普通」以上の評価が10%程度増えている。卒業生が本学の教育が資格取得に有効であったと必ずしも評価していない。有効でなかったとの評価に関しては資格の種類（例えばフォークリフト等）と大学教育のマッチングの問題等も関連しているものと考えられる。



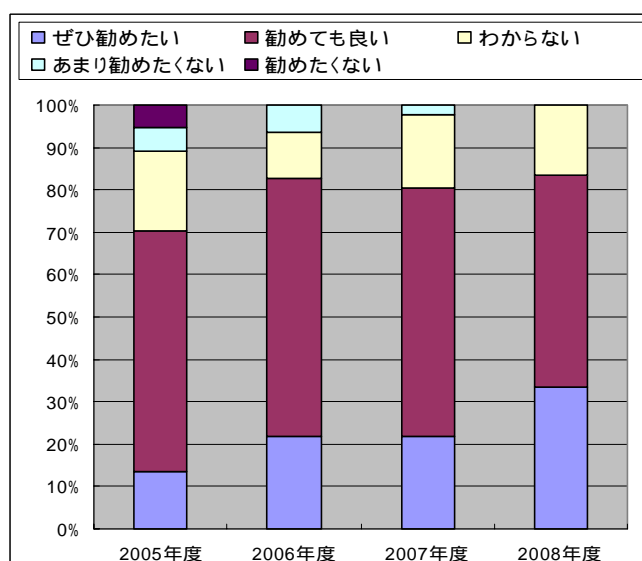
(7) あなたは、九州工業大学工学部を卒業してよかったと思いますか？

「とても良かった」、「良かった」の評価は90%以上にまでに達する。ほとんどの卒業生が今の仕事を続けていく上で、本学で受けた教育の成果を肯定的に考えている。



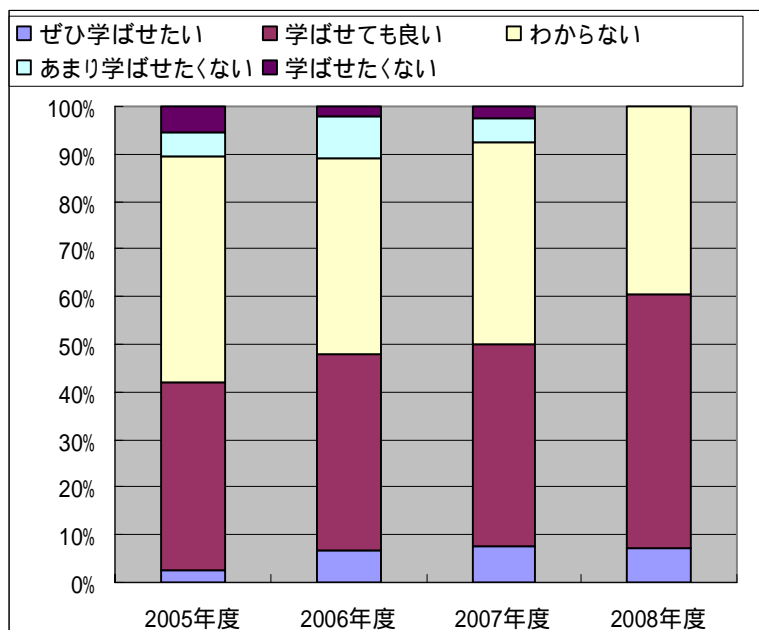
(8) あなたは、九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思いますか？

「ぜひ勧めたい」、「勧めても良い」の割合は80%以上に伸びた。また「あまり勧めたくない」、「勧めたくない」の割合が0%となった。就職者は九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思う傾向が上昇している。



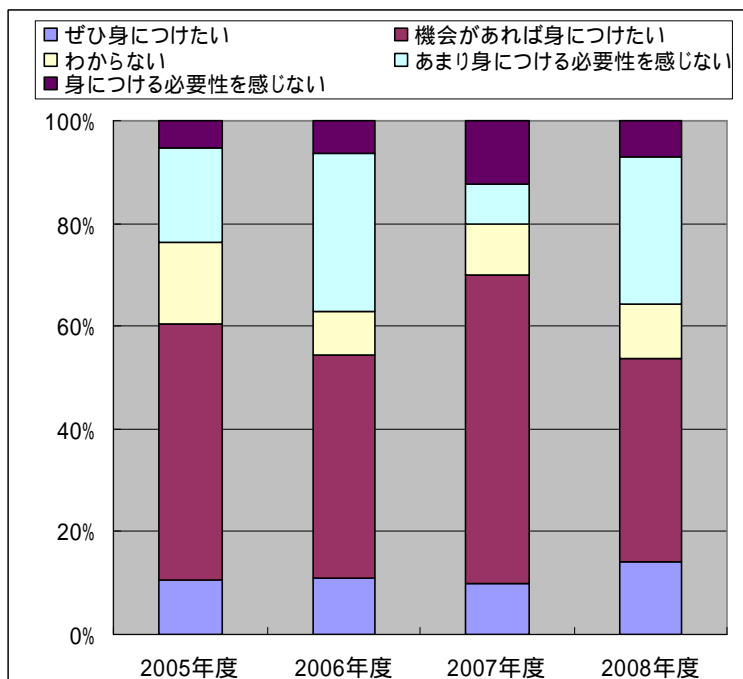
(9) あなたは、将来、子供ができたら、九州工業大学に学ばせたいと思いますか？

「ぜひ学ばせたい」、「学ばせても良い」の割合は60%に増加しているが、九州工業大学工学部を後輩に勧めたいと思っている83%と比べてかなり低い。これは、子供に対してより慎重になる結果と思われる。「わからない」の割合は、40%に減少しているが、依然高いと判断される。より魅力ある大学にする努力が必要である。



(10) あなたは、更に高度な学力(修士, 博士)を身につけたいと思いますか？

「あまり身につける必要性を感じない」「身につける必要性を感じない」の割合が20%から35%以上に増加し、高度な専門性を身に付けたいという意識が2006年程度に戻った感がある。しかし、「ぜひ身につけたい」は微増しており2極化の傾向がみられる。



2. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して良かった点がありましたらご記入下さい。

九州工業大学で学んだことが十分職場で役立っている。特に研究室に入ってから研究と教育によって習得したことが有効であったと考えられる。カリキュラムや研究環境の満足度は高く、研究指導では学術面の指導のみならず有意義な人的交流も特筆されている。就職者が工学部に在学して良かったと述べている事柄は今後も継続していく事が必要である。

- ・ 専門知識を身につけることができたこと。幅広い分野においてベースを作ることができたこと。
- ・ 専門教育の内容に満足している。
- ・ 多くの学問を学べる場がある
- ・ 特になし
- ・ 工業に対して必要な知識が身についた。就職の推薦をもらうことができた。

- ・ 4年生時、研究室に所属し、目標を達成する為の物事の進め方、経過～達成までのまとめ方など会社に入ってから活用できる事をたくさん学べた事。
- ・ 基本的な学力を身に付けることができた。
- ・ 専門教育のレベルが高かった。今になってもっと勉強すべきだと気付いている。
- ・ 基礎部分は学べたと思う
- ・ よい友人ができたこと。思考の幅が広がったこと。
- ・ 就職先が大学で専攻していた分野と違うので、知識としては、あまり関わりはなかったですが、4年生時の研究での進め方、考察の仕方などは、研究・開発業務なので役に立っていると思います。
- ・ 物理学・電気工学実験等で得られたレポートの書き方実験結果に対する考察等は現在の仕事でも十分役に立っており、学べて良かったと思う。
- ・ すばらしい先生方に出会えたこと。
- ・ サークルに入ったことで先輩方との交流を持てたこと。研究室で研究以外にも色々なことができたことがよかったと思う。専門教育に関して基礎を学べたので会社でとても役にたった。
- ・ 就職に有利。専門知識がかなり得られる。
- ・ 小人数制の研究室で深く学ぶことが出来た。教養の講義で他学科の多くの人と知り合いになる事が出来た。
- ・ 九州の企業にいたので九工大卒という事で人脈につながる事がある。
- ・ 在学中に取組んだ分野とは違った職に就きましたが、卒業研究に取組む姿勢・問題解決へのプロセスの考案など、業ムにおける、下地を学ぶことができたと思います。
- ・ 私は在学時に勉学を疎かにしており、留年する程でしたが、卒業して就職し、他大学卒業生と比べて自分の学力が高いとわかりました。九工大の講義でレベルの高いものを教わっていたことがわかりました。
- ・ 責善会での活動で、社交性を学べた。
- ・ 専門科目については深く理解する事が出来たと思う。
- ・ 課目選択の自由度が高く、専門分野以外にも幅広く学べる点。周辺の環境が良く、集中すべき時に集中できる点。様々な場面において、個人の意見が言える場があり、またそれが尊重される点。
- ・ 学寮や部活動を通して、多くの人と交流を取れたこと。実験では、自分で薬品や器具をさわられたので、技術を肌で感じられた。卒業論文では、自分で課題、実験工程を設程した。
- ・ ラプラス変換や伝達関数など業務に役立っている。

3. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して不満を感じた点、こう改善すべきだと感じた（例えばこういう技術（科目）を教えてほしかった）点がありましたらご記入ください。

会社の業務遂行に対する卒業生の高い向上心と現実の充実感・手応えの多様性を反映した結果となっている。学部の教育・訓練の目的や課程と日常の会社業務遂行に必要とされる能力や資格の差異については本人の意識も截然としていないため、アンケートには「不満」として表れてしまったように見受けられる。特に卒業後の業務内容との関係で一般教育、専門科目、実験に対する要望が示されている傾向にあり、そのため実践的教育を望む声が比較的多い。大学教育における論理的思考能力の育成という基本的課題との調和を図りながら、英語教育、実験・実習など実践的科目のより一層の充実が求められている。インターン制度は既に開始されているが、就職セミナーや卒業生を招いての講演会などをさらに充実していく必要がある。

- ・ 英語の講義をもっと増やして欲しい。（英語を使わない会社はほとんどありませんし、昇級等にTOEICの点数も関係してきております。）
- ・ 英語・第二外国語のレベルが低い。（形式的だった気がします。）TOEICなどの客観的に修学度の分かるツールを使えば、より学習意欲が上がるのではないかと考えます。
- ・ 実際に業務に役立つ実験内容にしてほしい。例えば、電気職はこのような仕事をするので、これがこう役立つといった所が見えにくい
- ・ 資格取得にリンクする科目
- ・ 外国語の選択時に、韓国語を学びたかった。
- ・ 英語力に力を入れてほしい。
- ・ 土木、建築の実務に直接活かせる専門科目があっても良い。
- ・ 語学をもう少し学びたかった。研究室によって設備に差がある点。
- ・ 回路設計。論理設計。ls、cd、pwd、cp、など基本的な使い方。

- ・ 指導教官はいたが、こちらからも何かしようとした訳ではないが交流等が全くなかったこと。
- ・ ドイツ語が必修科目でしたがほとんど役に立ってないと思います。それから教育内容とは関係ないですが、空調整備がもう少し整っていたら、と感じました。
- ・ 電気・電子回路を専攻した生徒には、実際の回路部品を用いてシミュレーション設計をやってみると良い。また一般に売られている製品を分解し、基板に搭載されている部品(役割)を調査すると、より興味を持てる。
- ・ 座学だけではなく、実際に技術が使われている現場への見学などがあればよかったです。
- ・ 英語がもう少しできるようになりたかった。
- ・ カリキュラムに対しては特にありません。卒業後の進路に対して卒業された方達の、もっと詳しい情報が欲しかったです。
- ・ 在学当時に使っていた、リナックスは全く使わないので、有効ではなかった。土木・建築関係なので、CADの勉強がしたかった。(Auto CAD、jww他)。一般教養(特に外国語)は、内容を充実させた方が良かった。
- ・ 語学レベルがかなり低いと思う。修士、博士への抵抗にもなっていると思う。
- ・ 実験・製図以外の実作業の講義が有ると良いと思います。インターンの様な社会体験等。
- ・ 語学の科目を増やして欲しかった。(特に英会話)特に会話能力の無さを会社に入って痛感した。ビジネスに特化した英会話の授業(出来れば少人数で)があれば良いと思う。
- ・ もっと現実的なイメージが湧く授業にしてほしい。例えば、材力にしても、単なる丸棒の問題ではなく車の構造から問題を作るなど、実践を意識できるように、してあげるべき。
- ・ 語学についてのバックアップ(TOEIC)が不十分だと感じる。現在の不況の中で生き抜く為には、必要な資格だと思う。大学3年次ぐらいにでも、就職後に必要となる授業構成等に変更とか出来ると、社会人として早く対応できる。
- ・ 化学工学について、より幅広く学べるとよいと思った。(濾過、伝熱等各種単位操作の基礎を、応用化学コースでも(選択でもよいので)学びたい)

4. 全体としての傾向

回答のあった卒業生は30名(回答率24.79%)であった。同じような事柄について問2の「在学して良かった点」と問3の「不満を感じた点」で相反する形の回答も散見され、各人の在学中や就職後の充実感・手応えと言ったものが多様であること、また卒業生の向上心が高いことを反映している。

学部教育と大学院前期、そして大学院後期の教育の目的と実社会の業務遂行における能力・資格の差異が本人にも截然と意識されていないためアンケートには「不満」として表現されてしまったような部分が見受けられる。

大学教育における論理的思考能力の育成という基本的課題との調和を図りながら、英語教育、実験・実習、プレゼンテーション、経営学など実践的科目のより一層の充実が求められている。しかし、英語力の必要性については各人に早期に認識させ、その能力を高める抜本的な対策の検討が必要である。

2.6 教育達成度評価アンケート：修了生 (2006年3月以前修了生)

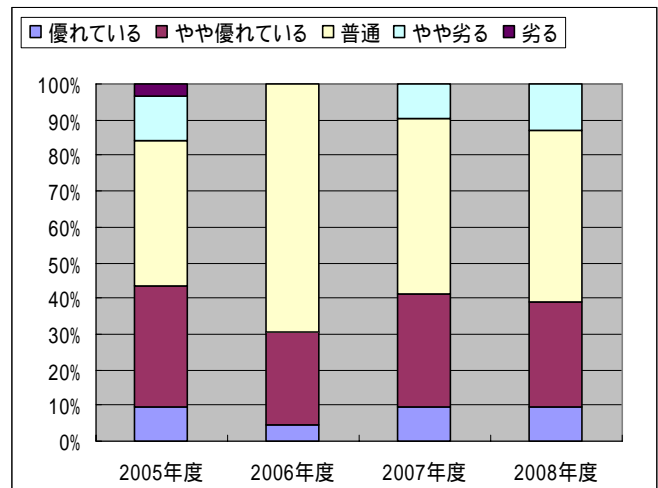
中期目標・中期計画に基づいて、2006年3月期の修了生で企業へ就職した者へのアンケートを実施した。アンケート用紙は修了生のリストに基づき、工学部総務係より発送した。アンケート用紙を配布した企業に就職した修了生は153名、回答のあった修了生は31名であった。回答率は20.26%であり、2007年度の20.40%より減少した。アンケートの内容や実施方法に継続性が必要と考えられるが、今後回答率を上げる取り組みも必要と考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

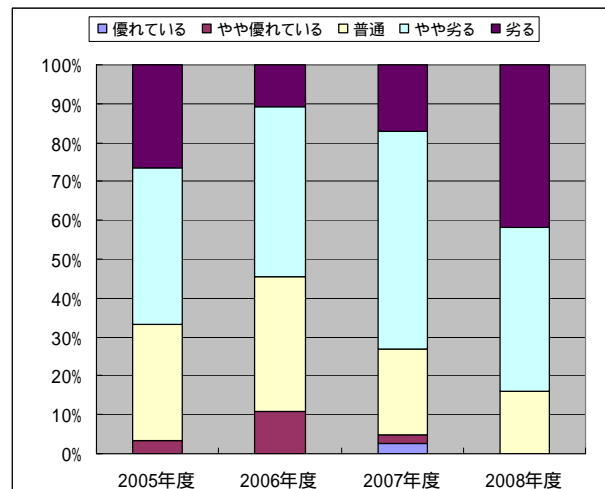
(1) あなたが受けた教養教育のレベル

2007年度とほぼ同様「優れている」と「やや優れている」の割合が「劣る」の割合よりも大幅に勝っており教養教育のレベルについては一般論としては肯定的に評価されている。しかし、否定的評価が約10%程度であり、改善が望まれる。



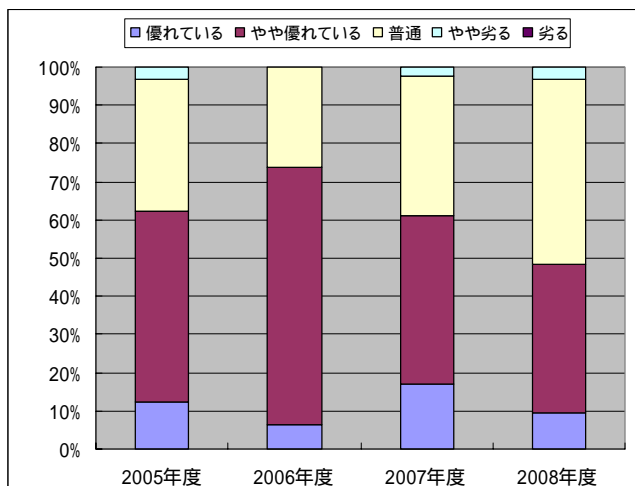
(2) あなたが受けた語学(特に英語)教育のレベル

英語等の語学教育については、現状の批判的評価が顕著で前年度より増大しており、今後の英語教育を見直す必要が認められる。



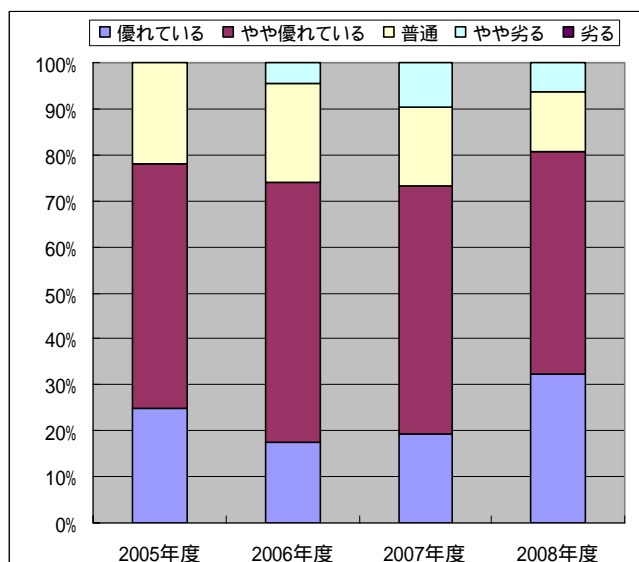
(3) あなたが受けた理数系教育のレベル

理数系の教育レベルについては、肯定的評価が5割程度であり現状で特に問題がないが、2007年と比較すると否定的評価も増えており対策が必要である。



(4) あなたが受けた専門教育のレベル

専門教育のレベルについては、肯定的評価が8割を越えており現在の教育内容が肯定的に評価されていると判断できる。

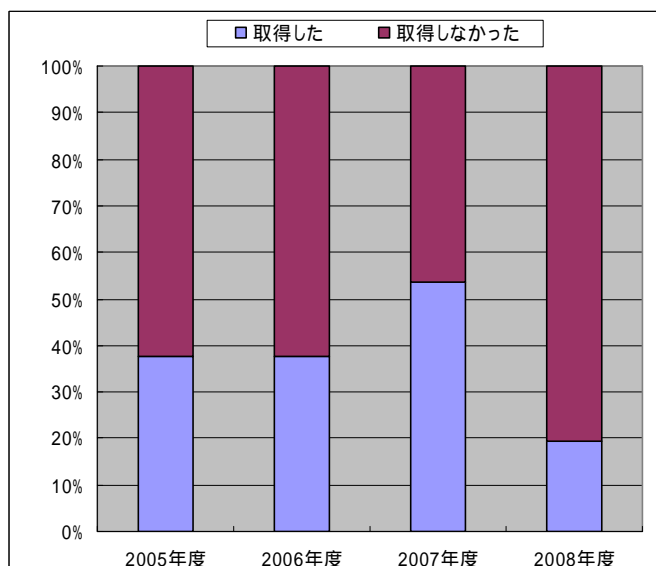


(5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

入社後取得した資格（具体的に）

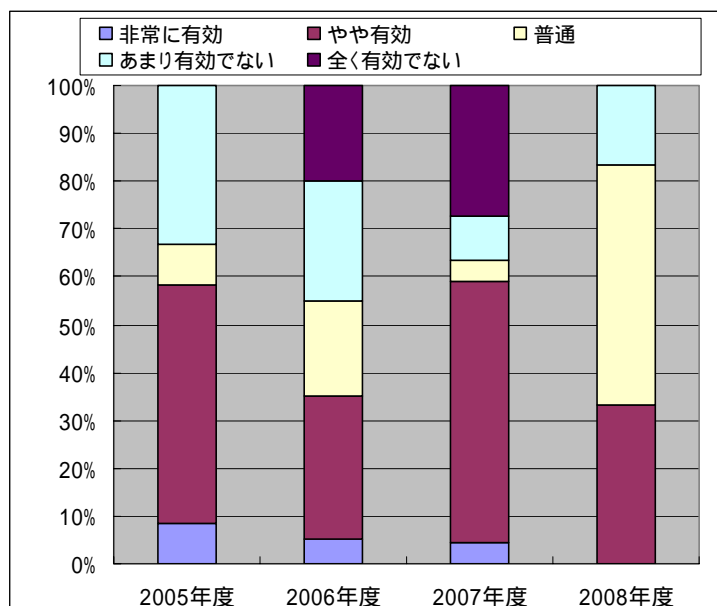
- ・ 危険物(甲種)
- ・ 有機溶剤取扱い主任者
- ・ 玉掛作業責任者、酸欠作業責任者、足場組立作業責任者
- ・ 危険物取扱資格(乙4)
- ・ 高圧ガス製造保安責任者 甲種
- ・ 技術士補

入社後に何らかの資格を取得した者の比率が2007年度より激減している。原因の究明が求められる。



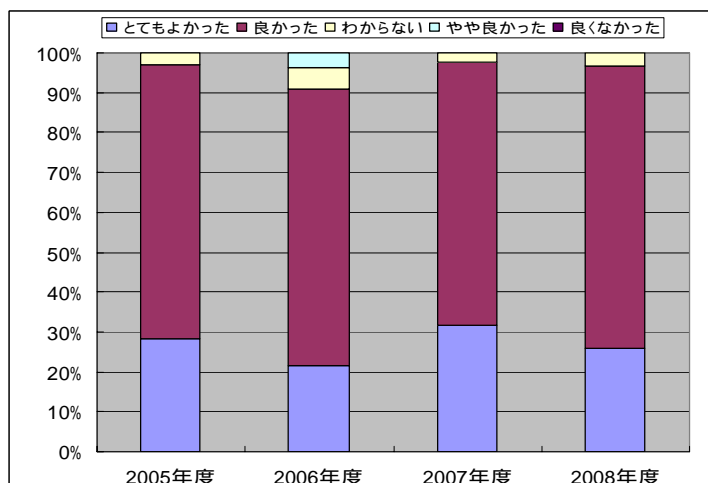
(6) 資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

資格取得に対する本学の教育を肯定的に評価する者の率が2007年度より激減している。今後の調査が必要である。



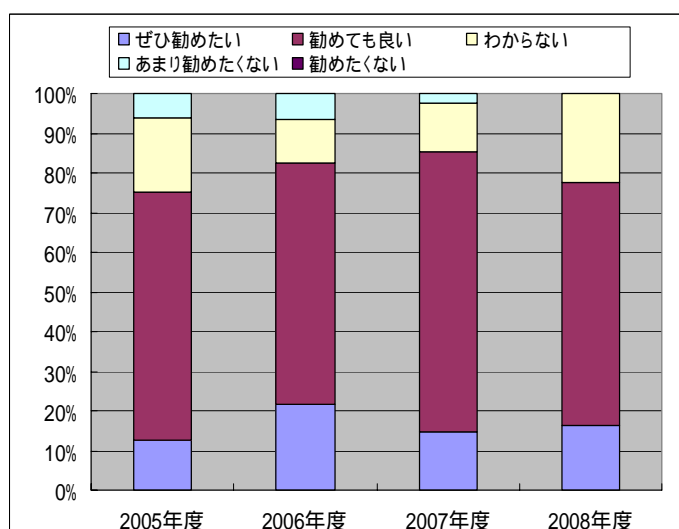
(7) あなたは、九州工業大学大学院工学研究科(博士前期又は後期課程)を修了してよかったと思いますか？

工学研究科の教育のあり方としては、「わからない」が若干あるものの、大多数から肯定的評価をいただいていると判断できる。



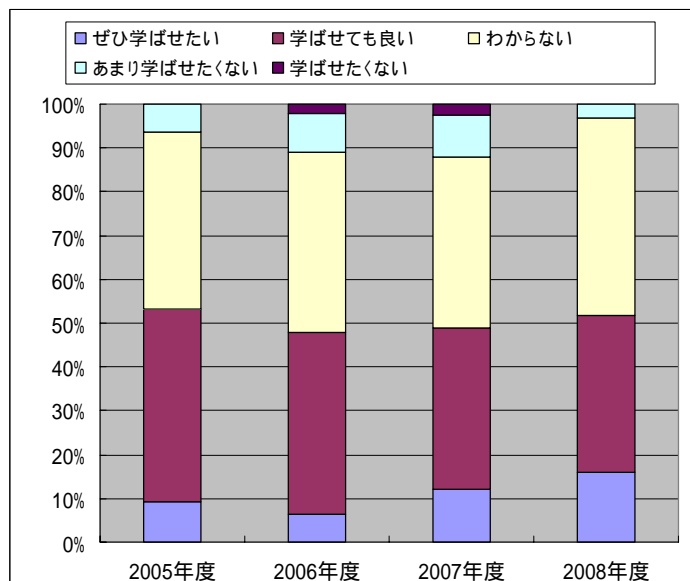
(8) あなたは、九州工業大学大学院工学研究科を魅力ある研究科として後輩に勧めたいと思いますか？

2007年度から2008年度の傾向を見ると「ぜひ勧めたい」が微増し「あまり勧めたくない」以下が0%となった。今後は「ぜひ勧めたい」の割合を高める必要がある。



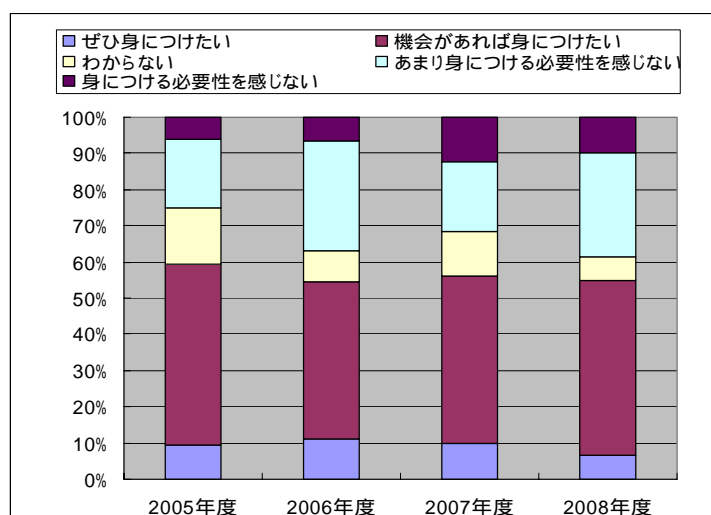
(9) あなたは将来、子供ができれば、九州工業大学に学ばせたいと思いますか？

2007年度から2008年度の傾向を見る。「ぜひ学ばせたい」がさらに増加し「学ばせても良い」との合計で過半数を超えた。しかし依然「わからない」以下の回答も多い。より魅力ある大学にする努力が必要である。



(10) あなたは、更に高度な学力(博士)を身につけたいと思いますか？

「ぜひ身につけたい」と「機会があれば身につけたい」の合計は昨年度とほぼ同じである。一方で、「あまり身につける必要性を感じない」と「身につける必要性を感じない」は依然大きな比率を占めているので、高度な学力を身につける意識等を周知する必要がある。



2. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して良かった点がありましたらご記入ください。

大学院に在籍してよかった点として、研究指導を通しての教員とのコミュニケーション、在籍中に学んだ専門知識、研究室での先輩、同輩、後輩との交流や深いつながり、自由に研究ができたこと、さらに論文作成、論文発表の経験が社会で役立っていることなどを挙げている。このような評価は昨年と同様であり、今後もその維持と一層の高度化を図りたい。

- ・ 修士課程に研究した内容を業務に活用できる機会が多くある点。各年代に多くの先輩の方々が入社されており、人間関係を構築しやすい点。
- ・ 学会等で発表する機会が持てた。
- ・ 共同研究が盛んであり(研究室によって差はあるが)、企業と連携をとることで目的、納期の明確なスピーディーな研究を行うことが出来る。
- ・ 専門科目が多かった事。比較的实验の授業が多い事。例外はあるが、全体的に真面目な気質(だった)。
- ・ 高度な研究を行うことができた。(EMC)
- ・ 業務に直結する事が多く入社後の導入教育等でもスムーズに理解することができ、在学中に学んだことが非常に役に立った。
- ・ 明専会の活動が活発であり、社内外共に、OB・OGと交流できる機会が多く、業務に有効活用できる点が非常に良いと思います。

- ・ 自分の研究成果を発表する機会が多いところ。様々な学会に積極的に参加させていただき、海外の学会に参加したり、論文を発表したりと外部に対しての発表の場を多く得られて良かった。
- ・ 様々な分野の先輩・仲間・後輩と知り合う事ができた。
- ・ 実習を通じた応用力と創造力の習得。(制御工学時代のロボカーの後輩指導など)。対外的な発表によるコミュニケーション及び人脈の発達。(学会発表または勉強会を通して企業や他大学との交流)。就職活動の際の学校推薦。研究者間の交流で幅広い知識(専門性)が身についた。
- ・ 九工大在学時よりもより深度化した講義を受講出来た。大学院時に解析に携ることが出来、その時学んだことがわずかではあるが今の仕事に役立てられている。
- ・ 研究計画の企画を行ったこと。修論発表の場でプレゼンの機会があったこと。
- ・ 産学官の共同研究に携わることができ、学外からの刺激を受けることができた。
- ・ 国内の大学でも数少ない制御工学を専攻した点は就職後も強みになっていると思う。
- ・ 教育方針(技術に堪能なる土君子)。勉強一辺倒ではないところ。研究室での生活(現在と共通するものがある)。
- ・ 鳥人間コンテストのサークルを立上げ出場できたこと。現在も続いており、今後も継続してほしい。
- ・ 様々な実験が出来たこと。
- ・ 先生方が非常に面倒見がよかった。チューターや、学部実験を手伝わせてもらったことで、社会勉強になった。
- ・ 学生実験の質が高く、入社してからもとても役立つ。
- ・ 自由に研究が行えた。
- ・ 在学中にメカとの共同研究を体験できて、会社でも役立っている。
- ・ 専門分野以外の知識が学べた事。自分の研究テーマについて2年間集中して出来た事。
- ・ 機能システムでは電気以外の勉強もでき、モノをつくっていくうえで、電気以外の知識も必要であり、ためになった。
- ・ 他の大学にはない、高度なクリーンルームがあり、非常に貴重な経験が出来、現在も、その経験を活かしていること。

3. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して不満を感じた点、こう改善すべきだと感じた(例えばこういった技術(科目)を教えてほしかった)点がありましたらご記入ください。

英語教育の充実についての要望が圧倒的に多い。また、より実践的な専門科目や社会的に必要とされる教養やスキルを求める声も多い。今後は高度な専門教育と同時に企業等で求められるビジネスマインドを涵養するような教育への対応を考える必要がある。

- ・ 修士課程に研究した内容に特化しすぎている為、他分野に関する技術・能力が劣っている。よって他分野を習得する機会を増やす必要がある。
- ・ 仕事上で実際使うようなケーススタディの授業があればよかったと思う。
- ・ 英語に関する授業が充実していない。(科目数より内容)。研究室に配属されてから、基礎的な研究に対する取り組み、考え方などを学ぶ機会が少ないor研究室によって差が大きい。大学の授業としてやる必要は無いが、指導教官の意識が低いと思われる。
- ・ 現在、家電製品の電源設計を行っているが、学生で学んだ基礎知識だけでは、設計をする上で非常に厳しい。そのため、実践形式(回路基板設計)を多く取り入れてほしい。
- ・ 英語の学習は継続して行なう必要があると思います。2年生までの勉強のみではかなり不足していると感じられた。
- ・ 学部も含めて、語学、特に英語を学ぶ機会が乏しかったと思います。
- ・ 特にありません。
- ・ 教師の教えやすさを重視した講義が多く、理学的な内容に偏る傾向がある。その為、実社会が要求する項目とギャップが生じ、在学中に得た知識が活用できる場が少ない。
- ・ 積極的な資格指導(技術士など)。英語及びその他外国語のスキル向上(当社の九工大卒は、おしなべてTOEICスコアが悪い)。計装分野の講義(計測工学、計測技術基礎?)で、テキストだけでなく、実物と触れる機会がもっとあれば良かった。(3、4年次の実験レポートのような。)。その他 貴信同封の用語説明にて、課題探求能力において、“結果を出す時間は考慮しない”とあるが、社会人にはこれは通用しないので、“定められた時間の中で、何故に結果を出すか”という考えを学生時代から身につける必要があると思う。アカデミックな所で自由な発想を育てるという意味ではいいと思います。

- ・ 研究活動に対しては、放置されていた感がある。私が携ったテーマはもう完了しているが、教授と学生が更に密になって活動出来ることによりもっと成果が上がると思う。
- ・ 教養科目の拡重。政治・経済の基礎的な知識。英語が必要とされる場。
- ・ 学内の研究発表が年1回だったので、全体で中間報告会を開催することで、学生の研究に対する取り組みもより積極的になると思う。企業や他大学との交流の機会が増えると良いと思う。
- ・ TOEICなどの英語の資格だけでなく、専攻した分野に関する国家資格についても情報を提供し、学生が積極的に資格を取るような仕掛けが必要だと思う。
- ・ 教授が喋って、板書するだけの講義。英語(学部時代には興味が持てなかった。大学院時に受けた村田教授の「言語学特論」はよかった。もっとはやくこの講義を受けたかった。)
- ・ 宇宙工学コースを選択したが、他コースとの差は無く、物足りなく感じた。もっと専門的な科目を教えてほしかった。
- ・ 英語の授業のレベルをもっと高める。(特に実際に使うような英会話などを重点的に)
- ・ 教授の先生方の中には講義の進め方が悪い人が多かった。プロとして、通常の講義において、もう少し先生としての面を勉強してほしい。
- ・ 語学力を伸ばす科目も学びたかった。実際の建造物を題材にした講義
- ・ 海外進出、活躍の場が増えていきますので、外国語の教育を徹底してほしい。
- ・ 語学力を高めることができるカリキュラムを増やして欲しいと思いました。
- ・ 語学をもっと充実させるべき。
- ・ 英語教育を増やす等の英語に接触する機会を増やした方がよい
- ・ 機能システム創成の一期生だったからかもしれませんが、全体的に講義内容が満足する物が少なかった。就職活動の際の募集企業が他の学科に比べても少なかった。
- ・ 会社ではTOEICが昇格に必要なだが、そのための勉強ができていない。
- ・ 色々な科目を学ぶ中で、仕事でどのように生きてくるのかを明確に教えていただけたら助かりました。
- ・ 学会へ参加しやすい仕組み作りが必要だと思います。現在は研究室に依存しすぎていて、研究室によっては、参加するチャンスが非常に少ないです。

4. 全体としての傾向

回答者 31 名, 回答率 20.26%である。修了生の工学研究科に対する評価はかなり高く, 研究室での生活が充実したものであったことをうかがわせる。また, 専門性, プレゼンテーション能力, 問題解決能力の向上にも十分な満足度が得られているものと判断される。しかし, 英語教育については不足感を感じており, この点は, 大多数の修了生に共通した意見である。学部・大学院の英語教育のあり方を議論し, 対策を施す必要がある。

3 大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営

3.1 大学院工学研究院・工学府・工学部の組織図

平成20年度の管理運営組織並びに意志決定体制を、図3.1.1及び図3.1.2に示す。

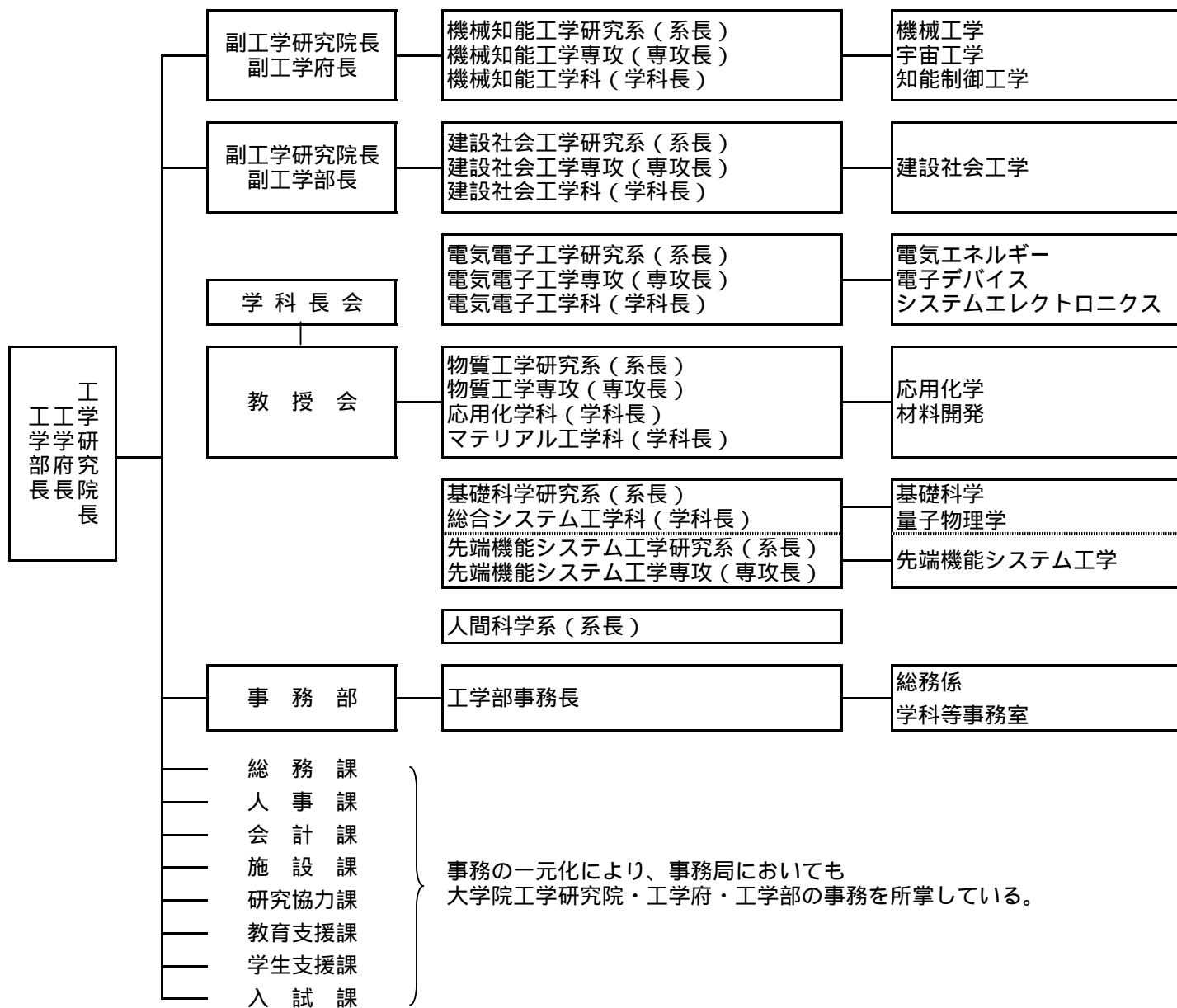


図3.1.1 組織図

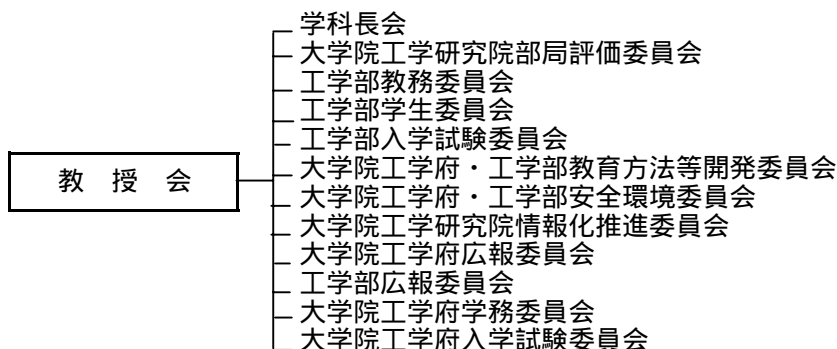


図3.1.2 各種委員会

3.2 各種委員会活動の点検・評価

3.2.1 大学院工学研究院部局評価委員会

1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 平成19年度卒業生，修了生アンケートの解析・まとめ
- (2) 平成19年度企業アンケートの実施と解析・まとめ
- (3) 平成17年度以前の卒業生，修了生アンケートの解析・まとめ
- (4) 平成19年度版「現状と課題」の発行
- (5) 平成20年度の各種アンケートに関する検討
- (6) 平成21年度に実施する教育職員評価のシステムと方法に関する検討

2. 今年度採択した事項

- (1) 各種アンケートの結果をまとめ，「現状と課題」に掲載した。
- (2) 「現状と課題」をホームページに掲載し，公表することとした。
- (3) 平成20年度卒業生・修了生アンケート内容を検討した。
- (4) 平成20年度企業アンケート内容および実施方法を検討した。

3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 各種アンケート結果のフィードバックと対策
長年にわたり対象を卒業生，修了生，企業とする3つのアンケートを実施しており，蓄積したデータを信頼性の高い教育システム構築に効率的に役立てる必要がある。この課題を関連する委員会にフィードバックし，教育システムの改善に反映させる取り組みの強化が望まれる。
- (2) 教育と研究の活性化システム
第一期の中期目標・中期計画に対する法人評価を受け，教育と研究をさらに活性化するシステムの構築がこれまで以上に認識されるようになった。工学研究院，工学府，そして工学部の体制を活用した仕組み造りが望まれる。
- (3) 平成21年度実施の認証評価
平成20年度実施の法人評価の結果等を基にして，平成21年度実施の認証評価のための部局データの収集と検討が必要である。

4. 委員会の議論に使用された資料

- ・平成19年度卒業生・修了生アンケート，平成19年度企業アンケート，平成17年度以前の卒業生・修了生アンケート
- ・大学評価委員会議事録

5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

上記3.(1)(2)(3)と同様

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 教育職員評価システム
大学全体で教育職員評価のシステムと方法に関する議論が行われ，平成21年度に実施の運びとなった。
- (2) 企業アンケートの工夫
幾つかの質問項目について意が伝わるよう表現を工夫した。実施時期は昨年度と同様とした。
- (3) 学生アンケートの結果を受けて
高学年に対する英語教育については，より積極的な取り組みが行われるようになった。

3.2.2 工学部教務委員会

1. 今年度取り組んだ課題

1) 授業関係

- (イ) 中級英語科目の受講について
- (ロ) 全学科共通科目「プレゼンテーション統合ワークショップ」と「総合連携実習」の廃止について
- (ハ) 昌原大学校との短期プログラムに係る授業科目について
- (ニ) 平成21年度人間科学リレー講義科目について
- (ホ) 「コンピュータ概論」の廃止について
- (ヘ) 「教職実践演習」の追加について
- (ト) 「情報リテラシー」における図書館情報の説明について
- (チ) 「離散の数理」と「代数学」、「計測制御」と「制御工学基礎」について

2) 教育関係

- (イ) 学生による成績評価の異議申し立て制度について
- (ロ) 授業日数調整の為の振替日の通知について
- (ハ) 夜間主コース学生への対応について
- (ニ) GPA導入による「選択」科目の受講者数について
- (ホ) 単位の実質化について
- (ヘ) eラーニング高等教育連携に係る遠隔教育について
- (ト) 工学部基礎共通実験実習経費について
- (チ) 編入学生への認定希望科目調査について
- (リ) TAの勤務時間を現在の授業時間中から授業時間外に広げることにについて
- (ヌ) 学習・教育目標のホームページ掲載について
- (ル) 図書館の教育支援教材について
- (ヲ) 学習・教育目標の認知度調査について
- (ワ) 物理のリメディアル教育について
- (カ) 基礎科目のリメディアル教育について
- (ヨ) 平成21年度推薦入試合格者の入学前教育について
- (タ) 入試追跡調査用データの活用について
- (レ) 各講義室の設備について
- (ソ) 附属図書館からの依頼事項について
- (ツ) 平成20年度コース分けスケジュールについて
- (ネ) 平成21年度シラバスについて
- (ナ) PBLを基軸とする工学教育プログラムについて
- (ラ) 図書館のグループ創造学習コーナーの利用について
- (ム) 工学系数学統一試験について
- (ウ) 図書館教育資源のシラバス掲載について
- (エ) 電子版学修自己評価システムについて
- (ノ) 教職課程教育実施運営委員会について
- (オ) 平成21年度新入生オリエンテーションについて
- (ク) 平成19年度授業アンケート結果のまとめについて
- (ヤ) Web版教務情報システムについて
- (マ) 遠隔講義システムの設置について
- (フ) 学部・学科の移籍における各学科(コース)の条件について

3) 学生関係

- (イ) 平成20年度編入学学生の単位認定について
- (ロ) 全学生の保証人への成績郵送について
- (ハ) 履修登録をしていない学生について
- (ニ) 学習成果自己評価シートについて
- (ホ) オールドドミニオン大学語学研修派遣学生について
- (ヘ) 除籍対象学生への通知について
- (ト) 履修登録の上限設定を超えて履修登録を行った学生について

- (チ) 受験料補助運用について
- (リ) 平成 21 年度工学部研究生等事務手続要領について
- (ヌ) 障害のある学生の受入・修学支援について
- (ル) 期末試験の試験補助員派遣について
- (ヲ) 東北大における実験中の事故について
- (ワ) 外国語能力試験の成績に基づく単位認定について

4) その他

北筑高校からの依頼事項について

福岡県立ひびき高等学校との高大連携について

2. 今年度採択した事項

1) 授業関係

- (イ) 「プレゼンテーション統合ワークショップ」と「総合連携実習」については、平成 21 年度入学生から廃止とする。ただし、平成 20 年度以前に入学した学生に対しては、学年進行に従い開講する。これらの科目の担当学科は、建設社会工学科と決めた。
- (ロ) 昌原大学校との短期プログラムに係る授業科目を「日本語入門」と「材料科学のための機器分析の基礎と応用」にした。
- (ハ) 平成 21 年度人間科学リレー講義科目を「環境適応論」とした。
- (ニ) 留学生科目「コンピュータ概論」の受講者の状況、類似する科目の新設、担当学科の教員の減少などを考慮し、悪い影響が生じないことも確認し、「コンピュータ概論」を平成 21 年度の履修課程表から削除することにした。
- (ホ) 教育職員免許法施行規則の変更により、教職必修科目「教職実践演習」を平成 22 年度の履修課程表に追加することにし、代わりに平成 22 年度の履修課程表から「総合演習」をはずすことにした。学年進行によって「総合演習」はなくなる。
- (ヘ) 平成 21 年度から「情報リテラシー」の 1 コマで図書館環境の説明を行うことと決め、シラバスにも記載した。

2) 教育関係

- (イ) 学生による成績評価の異議申し立て制度の運用を開始した。
- (ロ) 授業日数調整の為の振替日の通知については、教務係りから 2 週間ほど前にメールで全教員に案内を流すこととした。
- (ハ) 単位の実質化については、授業時間外の課題をシラバスに追加し自主学習への指導を進めた。この他にも実質化の手立てを検討した。
- (ニ) 編入学生への認定希望科目調査については、新たに様式を作成し認定作業時に編入生の意図を取り込むように改善した。これによって、編入生自身が履修課程表と科目の把握を行う機会を設定できた。
- (ホ) TA の勤務時間を現在の授業時間中から授業時間外に変更することと学部 4 年生を TA として雇用することについては、現行の制度では実施できないことが判明した。工学部として制度の変更が必要であれば、まず実施案を作成し執行部へ提案を行っていく必要があるとの回答を受けた。
- (ヘ) 学習・教育目標のホームページ掲載については、教務に関するほぼ全ての情報（学生便覧、シラバス、学習目標など）をホームページ上に掲載した。
- (ト) 学習・教育目標の認知度調査については、全学生に対してアンケート調査を行いその直後に再度、学習・教育目標のまとめを配布することで認知の徹底を進めた。
- (チ) 平成 21 年度推薦入試合格者の入学前教育については、例年通りの通信添削で行うこととした。しかし、他の手法による教育のありかたについても検討の必要性がある。
- (リ) 工学系数学統一試験については、昨年同様に教務委員を通じてポスターの掲示を行い受験生の募集を行った。
- (ヌ) 附属図書館からの依頼事項については、
 - ・ 視聴覚電子資料等の利用は、学習時間確保など、単位制度の実質化にもつながるので活用を進めることを決めた。
 - ・ 図書館教育資源をシラバスの最初に掲載することを決め、シラバスの改善を行った。
- (ル) 電子版学修自己評価システムについては、現代 GP の取り組みとして平成 21 年度に工学部にも

システムの導入を図ることを決めた。電子版自己評価システムの工学部での運用について下記の事項について工学部長から了承をうけた。

- ・ 工学部情報基盤室の参加。
 - ・ WG を教務委員会、工学部情報基盤室、各 2 名で構成することを検討中。
 - ・ 教務委員会としては、データの内容について受け持ち、ハードウェア・メンテナンス等については工学部情報基盤室が受け持つ。
- (マ) 教職課程教育実施運営委員会については、教職の環境の変化により運営委員会の必要性が生じたため、教職課程教育実施運営委員会要項を策定し、教職専任教員を中心にして教職課程の運営を行うことを決めた。
- (ワ) 平成 21 年 1 月以降主要行事予定表については、学生への配慮のため、「研究生・聴講生・科目等履修生の出願期間」を、2 月 26 日から 3 月 11 日までと変更した。
- (カ) 入試追跡調査用データの活用については、今後、調査・分析等に活用することも考えられるため、教務委員会としては入試委員長に「必要に応じてデータの提供を希望する」方針にした。
- (コ) Web 版教務情報システムについては、平成 21 年度 3 月末からシステムを稼働し平成 21 年度前期の試験分から運用することを決めた。
- (ク) 遠隔講義システムの設置については、情報工学部 ICT の予算により総合教育棟 C-2D 教室に遠隔講義が実施可能なシステムを設置することに決めた。
- (ケ) 学部・学科の移籍における各学科(コース)の条件については、改組により条件の整備が必要となったため確認の意味も込めて、再度コースごとの条件をまとめた。

3) 学生関係

- (イ) 全学生の保証人への成績郵送については、5 月に各学生の前年度分の成績を保証人宛てに発送した。
- (ロ) 4 月に履修登録をしていない学生については、指導教員を通して指導を行った。
- (ハ) 学習成果自己評価シートについては、例年通り半期の初旬に指導教員との面談を行った。
- (ニ) 障害のある学生の受入・修学支援については、平成 21 年度入試に対象学生が受験していることから入学後の支援体制を確認した。
- (ホ) 期末試験の試験補助員派遣については、試験時の不正行為を無くすために受験生が多いクラスでは派遣申請を行うように教務委員を通して広報することに決めた。

3. 残された課題または将来解決すべき事項

(1) 授業関係

- (イ) 各種行事に影響される授業日数確保への対応
- (ロ) PBL 科目に関する対応
- (ハ) 図書館の資源・教材の有効活用
- (ニ) 履修科目数上限の設定による問題への対応

(2) 教育関係

- (イ) 単位の実質化(1 単位 4 5 時間相当の学習の確保)
- (ロ) TA の配置の見直し
- (ハ) JABEE 受審に対する方針
- (ニ) 卒業生や企業へのアンケート集計結果のフィードバックシステムの充実
- (ホ) 推薦入学者に対する入学前教育
- (ヘ) 遠隔講義システムの有効利用

(3) 学生関係

- (イ) 学習成果自己評価シート、教務情報システム、学生証(IC カード)を利用した出欠確認システムの導入などによる教務情報の整備・有効利用
- (ロ) 欠席または不登校学生の早期発見と指導教員による指導(グループ担任制)の有効化を図る
- (ハ) 試験時の不正行為への対応
- (ニ) 身体障害者の修学支援関係
- (ホ) 入試追跡調査用データの利用による学生指導への対応

4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 九州工業大学中期計画・中期目標
- (2) 学習成果自己評価シート
- (3) 教育委員会資料
- (4) 学士課程教育の構築に向けて(中教審報告)
- (5) その他,教務委員会資料

5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 単位の実質化も考慮し、リメディアル、入学前教育、学力不足学生のための塾形式指導センターなどの整備が望まれる。
- (2) JABEE への対応を視野に入れ、編入生に対する単位認定を弾力化する必要がある。
- (3) 図書館との協力より、電子教材、e-learning などの活用を発展させることが望まれる。
- (4) 教務システム、自己評価シートシステムなど種々の独立したシステムの統合が望まれる。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 授業関係
 - (イ) 入試委員会へ推薦入学試験の土曜、日曜日での実施を要望したが実現できなかった。授業日数日の確保のために、今後も検討をする必要があると思われる。
 - (ロ) 複数クラス授業の内容および統一化と成績評価の標準化については、電気電子教室で共通科目に同一の試験を行うなどの対応が見られる。JABEE と関連して、今後一層の進展が必要と考えられる。
 - (ニ) 履修科目数上限の設定により、履修者数のかなり減った選択科目が発生したことがわかった。現時点では特に対策を取る予定はないが、この状況については今後の動向を注視する必要があると考えられる。
- (2) 教育関係
 - (イ) 単位の实質化(1単位45時間相当の学習の確保)については、本年度はシラバスに授業時間外の学習指導を記載することで学生の自発的な学習を助長した。別の手法による単位の实質化も引き続き検討する必要がある。
 - (ロ) TA の配置の見直しは、予算面、制度面においてかなり難しいことが判明した。
 - (ハ) JABEE 受審に対して改組時に総単位数をどの教室も6単位ほど増加させて対応している。
 - (ニ) 推薦入学者に対する入学前教育は昨年度と同様の方針で行ったが、今後も検討する必要性がある。
- (3) 学生関係
 - (イ) 前年度の各学生の成績を5月に保証人へ送付した。保護者との連携が密になったと考えられる。ただ本措置の教育上の効果については今後も検討する必要がある。
 - (ロ) 学習成果自己評価シートのオンライン化を平成21年度に予定している。
 - (ハ) 学生証(ICカード)を利用した出欠確認システムの導入については、現状では進んでいない。
 - (ニ) 欠席または不登校学生の早期発見については、必修科目3回連続で欠席した学生の情報により指導教員の指導が行われるようになった。今後は、指導の有効化を図る検討が望まれる。

3.2.3 工学部学生委員会

1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 優秀学生奨励賞（授業料特別免除）候補者の選考方法について
- (2) 中期目標・中期計画の実行
- (3) ものづくり工房について
- (4) 期末試験における不正行為防止の検討
- (5) 日本学生支援機構奨学生の選考
- (6) 放置自動車・自転車の措置について
- (7) 工大祭への対応
- (8) 新入生研修の日程等について
- (9) 合同企業説明会の開催
- (10) 不正行為の防止策について
- (11) 学生のインターネット上情報流用防止策について

2. 今年度採択した事項

(1) 優秀学生奨励賞（授業料特別免除）候補者の選考方法について、平成21・22年度について下記の定数配分案を採択した。

21・22年度優秀学生奨励賞(授業料特別免除)候補者数 定数配分案

2008年1月29日 学生委員長

- (1) **基数**=コース定員合計(545)/優秀賞定員(11)=49.55 (全体で49.5人に一人が受賞できる)
- (2) **コース配分数**=コース定員/基数
- (3) 各コースに1名ずつ配分
- (4) 配分数から引いた**残数**上位3コースに1名ずつ追加配分→21年度配分数および残数確定
- (5) 21年度残数にコース配分数を足し、(1)～(4)の繰り返し→22年度配分数および残数確定

	H21年度							H22年度						
	定員	基数	コース配分数	各コース1名	残数	残数上位3コースに追加配分	合計配分	21年度残数	コース配分数+21年度残数	各コース1名	残数	残数上位3コースに追加配分	合計配分	22年度残数
	a	b	c=a/b	d	c-d	e	f=d+e	g=c-f	h=c+g	d	h-d	i	d+i	h-(d+i)
機械	58	49.55	1.2	1	0.17	0	1	0.17	1.34	1	0.34	0	1	0.34
宇宙	35	49.55	0.7	1	-0.29	0	1	-0.29	0.41	1	-0.59	0	1	-0.59
制御	42	49.55	0.8	1	-0.15	0	1	-0.15	0.70	1	-0.30	0	1	-0.30
建設	73	49.55	1.5	1	0.47	0	1	0.47	1.95	1	0.95	1	2	-0.05
電気電子	91	49.55	1.8	1	0.84	1	2	-0.16	1.67	1	0.67	0	1	0.67
電子通信	92	49.55	1.9	1	0.86	1	2	-0.14	1.71	1	0.71	1	2	-0.29
応用化学	82	49.55	1.7	1	0.66	1	2	-0.34	1.31	1	0.31	0	1	0.31
マテリアル	72	49.55	1.5	1	0.45	0	1	0.45	1.91	1	0.91	1	2	-0.09

(2) 全学学生委員会委員長からの求めに応じる形で、工学部全体でのキャリア教育等の必要性について検討を行った。結果、現時点では各学科・専攻毎に就職支援の内容が大きく異なるため、情報工学部キャリアセンターと同様な、各学科・専攻を横断して捉えた統一的な就職支援体制を敷くことは必ずしも効果的ではないとの意見に終息した。しかし、この件は以下の3. **残された課題,又は将来解決すべき事項**に記すように**検討を進めることが強く望まれる。**

(3) 工大祭実行委員会から工大祭休業期間を1日延長して欲しいとの要望については、工大祭実行委員会が行う100周年を記念した企画のプレゼンテーションの内容を確認した上で検討することとした。この結果、**例年通りの日程で行うこととなった。**

(4) 学生が、レポートなどオリジナリティを要求される文書においてインターネットサイトからの情報流用(コピーアンドペースト)を安直に行う現状について検討した。コピーアンドペーストの摘発にはあいまいさが伴うので**学則への明文化は難しいが、手を打たないも問題なのでポスターを作って掲示する**という案に落ち着いた。

(5) 不正行為の防止策について、**50名以上のクラスについては科目担当教員に加えてTA1名以上を配置する旨学部長に申し入れを行った。**従来は自分の研究室院生TAなどに直接依頼することが多かった。しかしこれでは依頼できるTAのあてがない場合に不都合が生じる。そこで、**定期試験時には工学部の全TAを、柔軟に割り振る体制を整えるよう要請した。**

3. 残された課題,又は将来解決すべき事項

以下の2点が特に重要な事項である:

(1) 工学部キャリアセンターの設置に向けて

これまで、工学部では各学科・専攻毎に就職支援の内容が大きく異なっているため、情報工学部キャリアセンターと同様な、各学科・専攻を横断して捉えた統一的な就職支援体制を敷くことは必ずしも効果的ではないという意見が大勢であった。また、現在各学科・専攻で行っている個々の学生に対する細やかな就職指導で十分であるとの認識も強かった。

しかしながら、近年学生の意識、企業側の雇用情勢がともに急速に変動しており、結果的に企業の意図と学生の意識に齟齬が拡がりつつある。**各学科が対応する業界の現状を包括的にとらえ、学部全体としてマクロな視点で学生のキャリア教育を実施する必要がある時期に来ている。**「就職に強い九工大」のイメージを社会に浸透させるためにも、**キャリアセンターの設置検討が強く望まれる。**

(2) 定期試験時の不正行為防止策について

学生からの聞き取りなどを踏まえると、不正行為の防止策としては「**50名以上のクラスについては科目担当教員に加えてTA1名以上を配置する**」ことが効果的であるといえる。該当全科目について、**定期試験時には工学部の全TAを、柔軟に割り振る体制を整える必要がある。**

4. 委員会の議論に使われた資料

- ・九州工業大学中期目標・中期計画
- ・平成19年度～平成20年度における年度計画等について(評価と翌年度計画案)
- ・H20年度日本学生支援機構奨学生 工学部推薦者選考資料
- ・工大祭実行委員会からの依頼書

5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見,又は改善に関する提言

建物改修に伴う学務部の移転により、学生の利便性については大いに改善された。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

意見箱の本格的な運用を開始し、運用体制に特に問題は生じなかった。しかし、学生の利用数は多くなかった。学生への周知と共に、意見箱の設置場所についての検討が望まれる。

3.2.4 工学部入学試験委員会

1. 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- (1) 平成21年度編入学試験について
- (2) 平成21年度入学者選抜要項について
- (3) 中期目標・中期計画について
- (4) 応用化学科(等)への入試科目に生物を導入することについて
- (5) 平成21年度推薦入学試験について
- (6) 平成21年度一般選抜試験について
- (7) 平成21年度帰国子女特別選抜・私費外国人留学生試験について
- (8) 平成22年度入学試験日程について
- (9) 平成22年度編入学試験の募集要項について
- (10) 平成21年度個別学力検査追加合格者決定要領について
- (11) 平成21年度欠員補充第2次募集の選考方法等について

2. 今年度、本委員会が採択し、実施した事項

通常の選考・審査、募集要項の作成については例年どおり実施した。ここでは、新たに実施した事項についてのみ記す。

- (1) 平成21年度編入学試験について
 - ・合格者が定員を満たさなかった場合の説明に使用するため、各学科で不合格理由について記録を残し、入試委員が把握しておくこととした。
 - ・これまで各学科・コースの面接員5名の中に共通講座教員1名が加わる場合もあったが、平成22年度から総合システム工学科の編入試験も開始されることから、共通講座の教員数減少に配慮して、専門学科の教員のみで構成することとした。
 - ・昨年度より、編入生の定員はコースごとではなく、学部全体で規定している。そのため、定員超過への対応を目的として、コースごとに定員を決めるがどうかを議論したが、当面はコースごとに定員は定めず、様子を見ることとした。
 - ・編入学試験の応募者が大幅に減少したため、志願者を増やす方法について検討を行い、当面は高専への広報活動を強化することとして、工学部長に提言を行った。
 - ・平成21年度編入学試験選抜方法について教授会で報告を行った。
- (2) 平成21年度入学者選抜要項について
 - ・選抜区分ごとの入学者確保及び定員超過の抑制(特に推薦選抜)に対応するため、選抜区分毎の募集人員は学科の実情により設定することとし、工学部として選抜区分毎の比率のガイドラインは設けないこととした。
 - ・平成21年度入学者選抜要項について決定し教授会上に上程した。また、推薦・一般・帰国子女・私費外国人の募集要項については、選抜要項に基づき作成するので、教授会では審議しないこととした。
- (3) 中期目標・中期計画について

中期目標・中期計画の中で未実施項目であった、入試成績、入学後の学生成績情報、卒業後の進路データを網羅するデータベースを構築した。また、データの閲覧範囲について、広報委員会、教務委員会、各学科に照会を行い、範囲を決定し、工学部長の許可を得た。
- (4) 応用化学科(等)の入試科目に生物を導入することについて

応用化学科より、後期日程試験においてセンター試験の利用教科・科目として生物を選択科目として導入したいとの申し出があり、検討を行った結果、平成22年度の入試より、応用化学科単独で実施する方向で準備を行うこととなった。
- (5) 平成21年度推薦入学試験について
 - ・面接に当たって、不適切な質問の再発防止策として、過去問題となった不適切な質問事項とその理由を事例集として作成し、「面接にあたっての留意事項について」の中に加えることとした。
 - ・推薦入試の合格点については600点に固定せず、600点以上を合格の目安とすることとした。
 - ・推薦入学学生募集要項については、これまで2学部で別々に作成してきたが、全学入試委

員会より合冊提案があり，その可能性について検討を行い，工学部では可能と回答した。ただ，最終的には，調整がつかず，21年度については分冊で作成をした。

- (6) 平成22年度入学試験日程について
 - ・平成22年度の推薦選抜の試験日を土曜日，日曜日に実施可能かを検討し，実施可能である旨，大学院工学府・工学部教育改善会議に回答した。
- (7) 平成22年度編入学試験の募集要項について
 - ・平成22年度より，改組後の体制で入学試験を実施することになるので，改組後の組織に合わせて内容を変更した。
 - ・編入学試験募集要項の合冊について検討を行ったが，22年度については見送ることとした。
 - ・募集定員を工学部全体で規定していることを考慮し，従来，順位で開示をしていた入学試験成績を，総得点で開示することとした。また，事務局より，点数と順位の両方を開示することについて意見照会があったが，検討の結果，方針の一本化には至らなかったため，編入試験については，総得点を開示する旨回答した。
 - ・平成22年度編入学学生募集要項を教授会に上程した。

3. 残された課題，又は将来解決すべき事項

- (1) 中期目標・中期計画の残された課題である「長期間にわたる受験生の入学試験成績情報，入学後の学生の成績情報（成績の推移情報），卒業後の進路に関する情報を網羅するデータベースを構築して，入試データの追跡調査を行い，追跡調査結果のデータに基づいた入学者選抜方法の改善に取り組む」については，20年度にはデータベースを構築したのみであるので，中期目標・中期計画の最終年である，21年度には，このデータベースを用いて追跡調査を行い，改善方法について提言を行う必要がある。
- (2) 応用化学科において，後期日程試験のセンター試験利用教科・科目として生物を選択科目として導入することが合意されたが，入学者選抜要項への盛り込み等，実施に向けた準備を行って行く必要がある。
- (3) 入試結果の情報開示については，これからも開示範囲を拡大できるよう検討を行って行く必要がある。特に，推薦入学試験は面接試験を行うため，一般入試に比べると，定量的な判定が難しい部分があるが，開示範囲を拡大できるよう，試験方法の整備を行って行く必要がある。

4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 平成20年度，平成21年度入学者選抜要項
- (2) 平成21年度，平成22年度編入学学生募集要項
- (3) 平成20年度，平成21年度帰国子女特別選抜学生募集要項
- (4) 平成20年度，平成21年度推薦入学学生募集要項
- (5) 平成20年度，平成21年度私費外国人留学生募集要項
- (6) 平成20年度，平成21年度一般選抜学生募集要項
- (7) 平成21年度欠員補充第2次学生募集要項
- (8) 中期目標・中期計画（案）

5. 工学部の現状に関する意見，又は改善に関する提言

- (1) 広報委員会の努力により，今年度については，工学部の受験倍率は前期日程が2.34倍，後期日程が2.39倍と2倍以上の倍率を昨年に続き維持することができた。入試成績を見ても，高い倍率を維持することは，レベルのそろった学生を獲得する上で重要であるので，今後も一層の努力を期待したい。
- (2) 編入学試験の応募者については，平成20年度の36名から大幅に減少し23名であった。平成19年度が52名であったことを考慮すると，長期的に減少傾向にあることは間違いない。今年度，対策について議論を行ったが，単位認定等他の委員会が関係する課題が多く，工学部長に広報活動の強化を提言して推移を見守ることとしたが，平成22年度入試においても，同様な傾向が続くのであれば，さらなる対策を，工学部として考えて行く必

要がある。

- (3) 中期目標・中期計画に必要な，入学試験成績情報，入学後の学生の成績情報，卒業後の進路に関する情報を網羅するデータベースは工学部では準備されていないので，今回は入試課の入学試験成績情報データをベースに教育支援課，学生支援課よりデータを提供して頂いて，自前でプログラムを作成して統合した。しかし，自前での統合は，毎年委員が替わる入試委員会では限界があるので，全学的にこれらのデータを統合するシステムを開発する必要がある。

6．昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 推薦入試・前期日程・後期日程試験の定員配分，ひいては募集形態・入学定員をも含めた抜本的な検討に関して，まず定員配分については，学科毎に状況が異なることを考慮して，今年度より，工学部でのガイドラインを撤廃し，学科ごとに自由に設定できるようにした。今後は，各学科で入学後の学生の成績を追跡調査し，定員配分を見直して行く必要がある。また，平成22年度より応用化学科が後期日程試験においてセンター試験の利用教科・科目として生物を選択科目として導入する予定である。ただ，その他の募集形態・入学定員等の変更については，工学部の改組から時間が経過していないことや，入試倍率が2倍以上を維持しているため，当面は，推移を見守る必要がある。
- (2) 入試動向を把握することは，戦略上重要ではあるが，人的資源の問題があり，昨年度と同様の活動しか行っていない。現在は，2倍以上の受験倍率を維持しているため，大きな問題にはなっていないが，今後，受験倍率が低下することがあれば，再度検討を行う必要がある。専門性が高い分野であるので，それに合った体制を作ることが必要である。
- (3) 入学試験成績情報，入学後の学生の成績情報，卒業後の進路に関する情報を網羅するデータベースについては，関係する課の協力により自前で作成をした。今後の課題は「工学部の現状に関する意見，又は改善に関する提言」の(3)で述べているとおりである。

3.2.5 大学院工学府・工学部教育方法等開発委員会

1. 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- (1) 授業評価アンケートの実施と実施方法の改善
- (2) 公開授業の実施
- (3) 学生懇談会の実施
- (4) 講演会の実施
- (5) FD活動の公表(FDニュースレター発行)
- (6) 中期計画における年度計画の実施

2. 今年度、本委員会が採択した事項

2-1 授業評価アンケートの実施と実施方法の改善

授業評価アンケートについては、当委員会内にWGを設置しアンケートの実施方式・内容について検討を重ねた。また、平成19年度のアンケート結果の解析を行い、よい点や問題点等を教育改善会議に献策した。

今年度は、大学院ならびに学部の全科目を対象とした授業アンケートを行った。今年度のアンケート結果に対する解析は来年度行われる予定である。

2-2 公開授業の実施

教員研修の一環として定例化した公開授業を今年度も実施した。なお、今年度から、各学科において大学院の公開授業も行った。その実施状況は以下の通りである。なお、授業担当者の推薦など実施方法についてはそれぞれの教室に一任した。

公開授業においては、全ての授業について実施担当教室以外の教室に所属する教員が参加する方式を昨年度に続き本年度も実行した。

平成20年度実施した公開授業は以下の通りである。

・日時：平成20年6月23日(月)6時限 場所：総合教育棟 C-2G 科目：オブジェクト指向プログラミング 担当：浅海賢一准教授	・日時：平成20年12月4日(木)2時限 場所：総合教育棟 C-3B 科目：上級英語A 担当：ラックストーン I.C. 准教授
・日時：平成20年7月8日(火)3時限 場所：教育研究1号棟 1-3C 科目：電子回路 担当：大塚信也准教授	・日時：平成20年12月5日(金)3時限 場所：教育研究1号棟 1-3A 科目：地盤工学特論 担当：廣岡明彦准教授
・日時：平成20年7月9日(水)3時限 場所：総合教育棟 C-3A 科目：基礎数理総合演習(線形数学) 担当：池田敏春教授	・日時：平成21年1月19日(月)3時限 場所：教育研究6号棟 6-2A 科目：材料力学 担当：寺崎俊夫教授
・日時：平成20年7月22日(火)3時限 場所：記念講堂 科目：知能制御実験 担当：知能制御工学コース教員全員	・日時：平成21年1月21日(水)3時限 場所：教育研究6号棟 6-1B 科目：成型用マテリアル特論 担当：恵良秀則教授
・日時：平成20年12月2日(火)3時限 場所：教育研究4号棟 制御演習室 科目：制御系構成論 担当：小林敏弘教授	・日時：平成21年1月30日(金)3時限 場所：総合教育棟 C-1A 科目：無機化学 担当：植田和茂准教授
・日時：平成20年12月3日(水)3時限 場所：教育研究1号棟 1-2A 科目：地域計画と景観デザイン	

2 - 3 学生懇談会の実施

昨年度に引き続き「学生と教員との懇談会」を11月21日(金)10:00~12:00に総図書館4階グループ研究室において実施した。出席教員は工学部・工学研究科FD委員会委員6名,および学生17名であった。

*学生懇談会の概要についてはFDニュースレターNo.2を参照。

2 - 4 講演会の実施

第3,第4回FD講演会を実施した。

第3回FD講演会

日時:平成20年7月4日(金)
14時40分~16時00分

場所:附属図書館4階グループ研究室

講演者:東京大学先端科学技術研究センター 教授 菅 裕明氏

講演題目:「アメリカの大学院教育 - 君たち学生は切磋琢磨しているか?」

第4回FD講演会

日時:平成21年3月23日(月)
15時20分~16時50分

場所:附属図書館4階AVホール

講演者:元三菱電機技術研修所長 島田 彌 氏

講演題目:「変化の時代を生き抜くための創造的討論法 - 和而不同討論 - 」

*2回の講演会概要についてはFDニュースレターNo.2を参照。

2 - 5 FD活動の公表

本年度のFD活動に基づいたFDニュースレター No.2を発行した。(H21.3.31付)

2 - 6 中期計画における年度計画の実施

中期計画に基づき全学の教育委員会に報告すべき工学部FD活動の内容の公表方策について評価・検討を行った。

3. 残された課題, 将来解決すべき事項

3 - 1 授業アンケートのweb入力への移行

本年度より,大学院での科目も含めマークシート方式を用いた全科目アンケートが実施されている。そして,アンケート記入等に関し,学生ならびに教員の負荷が増大している。この問題を解決するため,アンケートのweb入力への移行を早急に検討する必要がある。なるべく学生の負担にならない入力方法の検討も行う必要がある。

3 - 2 公開授業の参加者数拡大と実施時期の工夫

メールを用いて全教員へ公開授業の通知を行い,さらに,FD委員が他教室の授業に参加する体制をとった。しかし,昨年度に比べて参加者数の増加傾向は見られなかった。前期実施科目の増加や,事前通知方法の改善,学生へのアナウンスなど,引き続き参加者拡大に向けた工夫を図る必要がある。

3 - 3 大学院(工学研究科)のアンケート結果の解析法

今年度より,大学院の全科目に対して授業アンケートを行った。この結果が来年度解析されるが,その解析法がまだ検討不足である。学部の授業アンケートと同じ解析も必要であるが,大学院での授業には授業形態が学部の形態と異なる科目が多いので,このことを考慮に入れた解析法を考える必要がある。

4. 委員会の議論に使われた資料

主な資料として

(1) 授業アンケート

(2) 平成19年度 授業アンケート解析結果

(3) 平成 2 0 年度 FD ニュースレターNo. 2

5 . 工学部の現状に関する意見,又は改善に関する提言

教育方法の開発・改善という従来の活動に加え,昨年度に引き続き,教職員の教育能力向上にとってどのような手段が有効なのかを検討する必要がある .

6 . 昨年度の改善に関する提言に対する,改善状況と未改善及び新たな問題点

昨年度,『教職員の教育能力向上にとってどのような手段が有効なのか,将来像を確立し,それに向かった方策を検討すべきである』という提言があった . このことに関しては,まだ良い方策が出されていない状況である . 今後,この問題に関し引き続き検討する必要がある .

メールを用いて全教員へ公開授業の通知を行い,さらに,FD 委員が他教室の授業に参加する体制をとった . しかし,昨年度に比べて参加者数の増加傾向は見られなかった . 参加者拡大に向けた工夫を図る必要がある .

3.2.6 大学院工学府・工学部安全環境委員会

1. 今年度取り組んだ課題

(1) 安全衛生ミーティングの実施および実施結果の評価

昨年度定められた「安全衛生ミーティング」の実施要綱をもとに、各教室で7月および12月に安全衛生ミーティング実施のアナウンスと「安全衛生ミーティング記録」の提出依頼を行った。また、委員会にて第一回の実施結果の評価を行い、各研究室でヒヤリハット事例など事故につながる恐れのある危険因子を学生と教職員で共有できたとの報告が多数見られ、本ミーティングが当初の実施目的を達成していることが確認された。また、本ミーティングを今後継続して行っていくことが事故防止に効果があるとの認識で一致した。

(2) 講義室の安全巡視の実施とその評価

安全衛生委員会による巡視に含まれない講義室等の巡視を本委員会で行うこととし、対象となる講義室と巡視担当を決定した。チェックリストに基づき巡視を行った結果、非常口の表示がほとんどなかったこと、消火器の本来あるべき場所が分からない等の意見があった。これらの点に関して検討した結果、非常口については事務でステッカーを作成していただくことになり、消火器については設置場所を記載した資料を各教室の委員に配布し、それに基づいてチェックすることとした。また、本検討結果をもとにチェック項目の改訂を行った。

(3) 防災マニュアルおよびパンフレットについて

過去に本委員会で作成された防災マニュアル案および防災に関する本学の規則を参照し、改善点を検討した。その結果を安全衛生委員会に報告したところ、会計課で詳細な防災マニュアルを作成しているとのことで、それをもとに両委員会で再検討することとなった。

(4) 「実験・実習における安全の手引き」の改訂

本年度版の内容について、分野ごとに担当を定め改訂作業を行った。特に本年度は改組が行われたため、総合システム工学科など新設学科では新たに項目を付け加えることとなった。

(5) 中期目標・中期計画の達成評価と次年度の計画

ほぼ計画に従い活動を進め「3」の達成度と評価できた。また、次年度以降の計画に関しては、遅れの見られる防災パンフレットに関する項目のみ上記1.(3)に関連して修正を加え、残りは従前通りとすることとした。

2. 今年度採択した事項

(1) 講義室の安全衛生巡視チェックリスト(改訂版)

第1回の巡視結果をもとにチェック項目の改訂を行った。

(2) 災害時の避難場所(改訂版)

建物の名称変更に伴う表示の改訂を行った。

(3) 安全衛生推進員の兼任

安全衛生委員会より、これまで教室毎におかれていた安全衛生担当者を安全環境委員が兼務してほしい旨の提案があり、安全環境委員会で審議の結果これを了承した。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

(1) 防災マニュアルの見直し、防災パンフレットの作成と配布

(2) (1)に基づいた防災訓練の実施

4. 委員会の議論に使われた資料

(1) 工学部の平成19年度版「実験・実習における安全の手引」

(2) 中期目標・中期計画 ファイル

5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

学生の安全と教職員の安全は密接に関連しており重複する内容も多い。本委員会と安全衛生委員会との連携を強化することで両委員会の活動の合理化をはかることが必要である。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

上記1.(3)および2.(3)のように安全環境委員会と安全衛生委員会で連携をはかることができた。特に1.(3)に関しては、両委員会で協議して早期実現をはかることが望まれる。

3.2.7 大学院工学研究院情報化推進委員会

1. 今年度、委員会が取り組んだ課題

- (1) 本委員会組織に関わる検討
 - A. 副委員長の選出,及び全学情報化推進委員会への副委員長のオブザーバー参加
 - B. 情報セキュリティポリシー策定専門部会への参加
 - C. 情報セキュリティポリシーに関する基本規程等制定に伴う学内講習会実施検討WG委員の推薦
 - D. 全学統合ID管理システム導入WGメンバの推薦
 - E. 戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討WGの設置
- (2) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の検討と実施
 - A. ウイルス対策ソフト
 - B. マイクロソフトキャンパスアグリーメント
 - C. Mathematica
- (3) 違法行為防止,及びセキュリティ向上についての検討と対処
 - A. 情報モラル教育
 - B. 情報セキュリティポリシー策定のための検討と講習会の実施
 - C. 工学部情報倫理教育のための小冊子の配布
 - D. 工学部におけるインシデントに対する対応の確認
- (4) 付属図書館運営に関する検討
 - A. 研究報告投稿要領の改訂
 - B. 学生用図書の見直し
 - C. 機関リポジトリへの掲載に関する事項

なお、議事録から確認された議題は以下のとおりである。

- 副委員長の選出,及び全学情報化推進委員会への副委員長のオブザーバー参加 (第1回)
- 委員長および副委員長の決定方法について(第1回)
- 委員会における業務の確認について(第1回)
- マイクロソフトキャンパスアグリーメントの運用について(第1回)
- ウィルスバスターの運用に関する工学部の基本方針(平成20年度版)について(第1回)
- サイトライセンスソフトウェアのメディア購入について(第2回)
- 情報セキュリティポリシーについて
(セキュリティポリシーに関する基本規定について工学部意見の集約)(第3回)
- 平成20年度後期情報モラル向上週間への取り組みについて(第3回)
- 平成20年度工学部学生用図書購入予算額配分について(第3回)
- 本学研究報告掲載論文の他大学機関リポジトリへの掲載許諾について(第3回)
(本件は第4回まで継続審議)
- 工学研究院関係各棟のネットワークに関して(第4回)
- 全学統合ID管理システム導入に関する指針について(第5回)
(本件は第6回でも審議)
- 情報セキュリティポリシーに関する基本規程等制定に伴う学内講習会について(第5回)
- 戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討WGの設置について(第5回)
(中村委員、河部委員、服部委員、池永委員、工学研究院情報基盤室から技術職員1名)
- 平成20年度後期情報モラル週間におけるポスター掲示について(第6回)
- 九州工業大学研究報告投稿要領の改正について(第6回)
- 九州工業大学研究報告(平成21年3月発行予定)の原稿募集について(第6回)
(第8回まで継続審議)
- 教育機関向け生涯メールの無償提供について(第7回)
- ソフトウェア管理簿の運用について(第8回)
- MSCA ソフトウェア Windows Vista Ultimate のライセンスキー管理方法について(第8回)
- 情報セキュリティポリシーに関する手順・ガイドライン等について(第8回)
- 情報モラル・セキュリティパンフレットの改訂について(第8回)
(第10回まで継続審議)

- MSCA 学生使用許諾書（2009 年版）について（第 10 回）
- 情報セキュリティポリシーに関する説明会について（第 10 回）
- 九州工業大学研究報告への学外者の投稿論文掲載の可否について（第 10 回）
- 全学統合 ID 管理システム導入WG委員の推薦
（池永委員を推薦）
- 情報セキュリティポリシーに関する基本規程等制定に伴う学内講習会実施検討WG委員の推薦
（基礎科学研究系の浅海准教授を推薦）

2. 今年度、委員会が採択した事項

- (1) 上記 1 (1) で示される各種委員の選出
- (2) セキュリティポリシーに関する基本規定について工学部意見の集約
- (3) 平成 20 年度後期情報モラル向上週間への取り組み内容
- (4) 平成 20 年度工学部学生用図書購入予算額配分
- (5) 九州工業大学研究報告投稿要領の改正
- (6) MSCA ソフトウェアのライセンスキー管理方法
- (7) 情報セキュリティポリシーに関する説明会実施方法
- (8) 戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討WGの設置

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 情報セキュリティポリシーの不断の周知徹底
- (2) 情報モラル向上およびソフトウェアライセンス管理
- (3) 戸畑キャンパス内におけるネットワークの安定的な運用管理体制の構築
- (4) 学生証・職員証に付与されている電子マネーについて、他の流通系・交通系カードや電子マネーとの提携等によるコスト削減や利便性向上の検討

4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 平成 20 年度工学部・工学研究科情報化推進委員会委員名簿
- (2) 九州工業大学工学部・工学研究科情報化推進委員会内規
- (3) 前年度活動内容および本年度課題
- (4) ウィルスバスターの運用に関する工学部の基本方針 2008 年度版
- (5) セキュリティパンフレット 2009 年度版
- (6) 情報セキュリティポリシー関連規程
- (7) ソフトウェア管理台帳（様式）
- (8) 全学情報化推進委員会資料
- (9) 全学図書委員会資料
- (10) その他

5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

- (1) ネットワークの安全性および情報セキュリティポリシーの不断の周知徹底
- (2) 法令順守の観点から、ソフトウェアのライセンス管理の重要性の周知と管理強化
- (3) 工学部情報基盤室の位置づけと業務分担・責任範囲、業務依頼の方法の明確化

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

安全なネットワークシステムの構築については、戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討WGの設置により検討の体制は準備できたが、具体的な検討および整備は今後の課題である。

セキュリティポリシーの周知徹底に関しては、学生を含む全構成員を対象とした講習会の実施により、改善したと言えるが、この活動を継続して実施する必要がある。

工学部情報基盤室の人員体制が整ったこととともなって、業務依頼が増加することが予想されるため、業務分担・責任範囲、業務依頼の方法を明確にしておく必要があると考えられる。

3.2.8 大学院工学府広報委員会

1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 昨年度立ち上げられた工学部公式ホームページ上の工学府，工学部の内容の全面的な校正を行った。
- (2) 大学院募集（特に外国人用）の広報活動用に特化した（日本語，英語）パンフレット作製のワーキング委員会の立ち上げ
- (3) 大学院募集用のパンフレットの素案を作製した。
- (4) 工学部の英語版のホームページを昨年度の改組に従い全面的に更新した。

2. 今年度採択した事項

- (1) 工学部公式ホームページ上の工学府，工学部の内容の全面的に校正をした。
- (2) 大学院広報用パンフレット（外国人用）の作製を行った。
- (3) 工学部の英語版のホームページを昨年度の改組に従い全面的に更新した。

3. 残された課題または将来解決すべき事項

今後は，外国人の応募を増加させるような，英語版のパンフレットあるいは英語版の工学部ホームページの効果的の使用と効率的な管理のあり方（新しい情報を迅速に更新するなど）が重要となると考えられる。情報としては，北九州の生活コスト，奨学金の最新情報等等を提供するほか，大学院の応募書類の英語版を作製する必要もあると考えられる。

4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 平成20年度委員会名簿
- (2) 九州工業大学広報委員会規則
- (3) 九州工業大学工学部・工学研究科広報委員会内規

5. 工学部・工学府の現状に関する意見または改善に関する提言

工学部，工学府における入学試験志願倍率を上げるためにも日本だけではなく，近隣アジア諸国への広報活動の強化が極めて必要である。工学部全体での連携を深めると共に広報活動の充実のために，日本語，英語を含めた工学部ホームページの効果的かつ効率的な運用のあり方を検討する必要がある。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する，改善状況と未改善及び新たな問題点

昨年度の残された課題として，英語版の工学部のホームページの更新と外国人用の大学院募集用パンフレットの作製，学部，大学院募集要項の英語版の作製が挙げられた。ホームページについては，改組に伴う正しい内容に更新された。この英語版ホームページが，日本語版と同様に，今後最新の情報を提供し続けることができるかが，今後の課題である。また，外国人対象の大学院募集用パンフレットができあがった。このように，二つの課題についても改善がなされた。学部，大学院募集要項の英語版に関しては，関係各部署と今後の議論が必要と考えている。今後は，国内外問わず効果的に広報活動を行うためのホームページ（英語版，日本語版を含め），パンフレットのあり方を検討する必要があると考えられる。

3.2.9 工学部広報委員会

1. 今年度、貴委員会が取り組んだ課題

当委員会に係わる定例的な活動は、オープンキャンパス、大学説明会（高校訪問）、業者等が主催する大学進学説明会への参加、高校等から依頼される工学部見学、大学案内の編集補助等である。なお、組織的な大学院生募集活動の必要性和、当委員会が幅広い意味での学部学生募集活動の実施母体であることを明確にするため、従来の広報委員会と学生募集活動委員会は、本年度より工学府広報委員会および工学部広報委員会となっている。

昨年度より、工学部・情報工学部の更なる協調を図り始め、高校訪問に対する大学説明用パワーポイント統一、訪問教員1名、福岡県外訪問等の取り組み、また、新聞・列車広告の実施等、学部単位ではなく全学的な学生募集がスタートしており、今年度はその充実を図った。また、学部学生募集活動を進める工学部広報委員会は、委員選出が従来の教室単位から学科単位となったため、工学研究院広報室との連携を強めることにより委員数減少分を補った。さらに、入試委員会に代わり、大学主催入試説明会への参加を始めた。各活動の取り組み課題を、以下にまとめる。

- (a) オープンキャンパス：昨年度より実施しているスタンプラリー・学科何でも相談コーナーの参加者増のための工夫。
- (b) 大学説明会（高校訪問）：県内高校に対する工学部・情報工学部分担。岡山以西の全高校への案内送付。
- (c) 進学説明会：業者主催の説明会への積極的参加。
- (d) 大学主催入試説明会：工学部は入試委員から学部広報委員に変更。
- (e) 高校からの工学部訪問への対処：大学概要の説明への協力。
- (f) 大学案内の編集補助：研究室及び学生推薦等の取材協力、共通部分の企画。発行時期の検討。
- (g) 大学広告の作成：高校生向けの宣伝のための電車吊り広告、新聞広告の作成。
- (h) 工学研究院広報室との連携：工学部の学生募集活動の充実化。

2. 今年度、貴委員会が採択した事項

前項目の活動及び各課題を解決するため下記事項を採択した。

- (a) オープンキャンパス
 - (1) 今年度のオープンキャンパスは8月7日(木)と8日(金)に開催した。参加人数は1285人(前年比+220人工学部のみ)(1日目760人, 2日目525人)であった。
 - (2) 実施内容は次のとおりである。午前は、移動距離を少なくするよう考慮した2つのブロック、機械知能・応化・総合システムと建社・電気電子・マテリアルを見学。午後の自由見学では、スタンプラリーにより、午前に見学していない学科に人の流れを作る。アンケート調査の回収は、昨年度と同様に、スタンプラリーの景品交換場所をメインとし、各学科に回収箱を設置した。さらに、今年度は正門に広報室事務補佐員を配置した。
 - (3) 学科の見学会においては、昨年度と同様に説明者の服装、態度に関して改善をお願いすると共に、より平易な説明を心がけていただけよう依頼した。また、各学科で教職員による「何でも相談会」を実施した。本年度のアンケート結果(5点満点)は、学部・学科紹介の「わかりやすさ」4.02(昨年度4.07), 「満足度」4.07(昨年度4.11), 研究室見学の「わかりやすさ」3.99(昨年度4.01), 「満足度」4.09(昨年度4.08)で、昨年度のレベルを維持できた。
 - (4) 期間中にボランティアで協力していただく生協学生委員に対して、昨年同様、服装、態度に関して改善をお願いすると共に、説明内容をキャンパス生活などに限定するように依頼した。
- (b) 大学説明会（高校訪問）
 - (1) 今年度は、岡山以西の全高校に大学説明会の案内を送り、県内86校、県外111校の計192校(昨年度、県内92校、県外70校の計162校)を訪問して、生徒向け・進路指導教諭向けの説明会を実施した。工学部からは教員10名で54校(昨年度、13名で46校)を訪問した。なお、県内については、今年から学部毎に訪問地域を振り分けた。さらに、「工学部ってどんなところ?」と題した出前講義を始め、5校で実施した。
 - (2) 工学部または情報工学部教員1名で各校訪問を実現するための、説明内容を統一した両学部共通パワーポイントの修正を実施した。
- (c) 進学説明会

業者主催進学説明会については積極的に参加する方針で27(昨年度22)の説明会に参加した。広いエリアで入学希望者を募るといった考えのもと、県外で実施される進学相談会にも参加した。

(d) 大学主催入試説明会

昨年度まで工学部からは入試委員が出席していたが、高校教諭からの質問に柔軟に対応するため、今年度から学部広報委員が出席することとし、開催11会場(昨年度6会場)に対応した。また、工学部説明用パワーポイントの作成も行った。

(e) 高校からの工学部訪問

理数教育支援センターが受付けている大学訪問(見学, 大学模擬授業, インターンシップ)に対して19校(昨年度15校)に大学説明を実施した。このうち, PTAが参加したのは, 田川, 久留米, 福岡工業の3校であった。昨年度は, 理数教育支援センターから委員長に直接依頼があったが, 今年度から広報室へ依頼するよう変更した。

(f) 大学案内の編集補助

昨年度と同様に, 平成21年度の大学案内も大幅に変更せず, 学生のコメントとデザインの変更程度にとどめることを確認した。

(g) 大学広告の作成

昨年から実施している新聞広告と電車吊り広告に対して, デザインを引き続き担当した。

(h) 工学研究院広報室との連携

学生募集活動の経験がある教員を工学研究院広報室員として迎え入れ, 委員数が減少した分を補った。また, 高校訪問等の事務連絡などの実施により, 広報委員の活動補助を強化した。

3. 残された課題, 又は将来解決すべき事項

本年度も, 充実したオープンキャンパス, 高校訪問を目指して検討してきたが以下のような課題が残されている。

(a) オープンキャンパス

まず, 今年度も午前中の見学に対して, 半分の学科しか見ることができないことへの不満が若干みられた。見学コースの希望をとること考えられるが, 過去の実施状況から偏りが十分懸念される。全学科見学ツアーも, 現状では参加者数が多すぎて不可能であると考えられる。次年度の募集案内に, 「午前は3学科見学, 午後自由見学」といった説明の追加が必要であろう。つぎに, 保護者の参加が増えてきているので, 午前中見学時に保護者向け説明会を実施することも学生募集の有効な方策であると考えられる。

(b) 大学説明会(高校訪問)

工学部としては, 進路指導教諭だけではなく可能な限り生徒に直接説明したい, また, マイナスの広報活動を避けるべく, 訪問を希望する教員であれば誰でも良いというやり方はとるべきではない, という方針をとっているため, 情報工学部と比較して, 訪問校数および訪問教員数が少ない。確実な広報活動が可能な, 訪問担当教員数(広報室員)の増加を図る方策を検討する必要がある。

(c) 進学説明会

広い地域での広報活動を実施するため, 参加が少なくても必要な県, 高校訪問が手薄な県を見つけ, 参加の判断をするためのデータ収集が今後とも必要である。なお, 地域だけでなく, 本学受験レベルの高校が参加する説明会の選別も必要不可欠である。

(d) 大学主催入試説明会

短期間に広範囲の地域で実施されるため, 今後担当委員振り分けが問題となることが考えられる。高校訪問と同様に広報室員の増加を図る方策を検討する必要がある。

(e) 高校からの工学部訪問

昨年度は委員長のみ, 今年度は広報室員で対応したが, 理数教育支援センターからの大学説明実施依頼が直近の場合もあるため, 委員も説明担当として対応する必要がある。

(f) 大学案内の編集補助

社会情勢・受験生の動向などを考慮しつつ, 各学科・コースの説明内容を適切に見直しに行く努力が必要である。ただし, 1年間使用するものであるため, あまり極端な見直しをした場合, 逆効果もあることを十分考慮しなければならない。

(g) 大学広告の作成: 高校生向けの宣伝のための電車吊り広告, 新聞広告の作成。

今年度、大学全体の新聞広告の横に情報工学部単独の新聞広告の掲載があった。工学部および事務部は反対であったが、残念ながら今回は上層部の判断で実施された。次年度からは同様の事態が生じないように注意が必要である。

4. 委員会の議論に使われた資料

高校訪問アンケートおよび調査結果、オープンキャンパスアンケートおよび調査結果、大学案内、進学説明会趣意書等。

5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

(a) 編入生募集

工学部の編入生募集が、学科・コース毎から学部一括 20 名となったため、出願件数がかなり減少した。工学部広報委員会として、高専への募集活動方法を検討していく必要がある。ただし、高専生は専門学科を専攻している点と本委員会の構成員が准教授までである点を考慮すると、従来の高校に対する募集活動とはかなり異なることとなるため、本委員会は立案のみに限定して実施は別組織、という方針で臨むべきである。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

(a) 大学説明会（高校訪問）

今年度、学生募集活動専門部会で「高校訪問（大学説明会）実施に関する事務処理申し合わせ」が策定された。この申し合わせに沿った学生募集活動が実施され、その結果、県外実施・各校 1 名での訪問に対する情報工学部との情報共有、に対する改善が図られた。また、広報スペシャリストの要請による質の高い広報活動に対しては、工学研究院広報室員の増加を図ったが、更なる増員を進めて行く必要がある。

3.2.10 大学院工学府学務委員会

1. 委員会が取り組んだ課題

1) 九州歯科大学との歯工学連携に伴う対応について

九州歯科大学の提供する3科目を連携歯工学科目として扱い、学修細則の改正をおこなった。なお、歯工学科目は専攻の履修課程表には含まれてないが、研究とかなり密接する科目となるため、連携する専攻にあっては各科目を主専攻として取り扱うこととした。

2) 博士前期課程における副指導教員について

博士前期課程の学生に対しても複数の教員より指導を受けることとし、新たに副指導教員を置くこととした。それに伴い、学修細則の見直しを行うとともに、研究指導体制に関する申し合わせを制定した。また工学府研究指導等計画書の改定も行った。

3) 中期計画・年度計画について

中期計画・年度計画において学務委員会が担当する事項は、教育課程、インターンシップ、学外との連携、成績評価、指導教員等に関する21項目である。それぞれの項目について、20年度中間報告、20年度評価を行い、また21年度委員会予定を明示した。

2. 委員会が採択した事項

- (1) 学生の除籍について
- (2) 学生異動について
- (3) 長期履修申請について
- (4) 遠隔教育による大学院単位互換協定に基づく特別聴講学生の成績について
- (5) 博士後期課程指導教員グループについて
- (6) 日本育英会奨学金大学院奨学生の選考について
- (7) 大学院工学研究科学修細則(案)の改正について
- (8) 博士後期課程指導教員グループの決定・変更について
- (9) 博士後期課程の指導教員グループ、論文審査委員会の構成について
- (10) 外国人研究生の受け入れについて
- (11) 国費外国人留学生の受入れについて
- (12) 外国人特別研究学生の受入れについて
- (13) 「教育・研究活動報告書」の提出依頼について
- (14) 学年暦(案)について
- (15) 9月末修了者の認定について
- (16) 社会人修学支援講座(技術者大学院講座)科目等履修生・聴講生の受け入れについて
- (17) オリエンテーションスケジュールについて
- (18) 博士前期課程学生の他研究機関における研究指導について
- (19) 工学府研究指導等計画書について
- (20) 工学府時間割表について
- (21) 短縮修了の取扱い等について
- (22) 派遣学生報告書について
- (23) 博士学位論文申請様式について
- (24) 日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者の推薦について
- (25) 修了査定について
- (26) 長期履修申請について
- (27) 派遣研究学生について

3. 残された課題，又は将来解決すべき事項

- (1) 博士前期課程における副指導教員体制の実質化
- (2) 特別応用研究、学外実習、学外演習、特別実験等の内容の精査
- (3) 中期目標・中期計画の実行
- (4)

4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 工学研究科学生便覧教授要目
- (2) 九州工業大学大学院工学研究科委員会規則

- (3) 九州工業大学大学院工学研究科運営委員会内規
- (4) 九州工業大学大学院工学研究科学務委員会内規
- (5) 九州工業大学中期目標・中期計画
- (6) 九州工業大学における日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者選考に関する規程

5 . 工学部・工学研究科の現状に関する意見,又は改善に関する提言

- (1) 昨年度も議論になった課程Bであるが、そのあり方が専攻によって必ずしも一致しておらず、そのこともあって、ほとんど希望者がいないのが現状である。 早急に対処しないと、存続自体が困難になるであろう。
- (2) 中期計画・年度計画に基づき、新しい試みやこれまでにないシステムが提案され、実行されつつあるが、全体的に十分に消化しているとは思えない。 もう少し、的を絞った改革が必要であると思われる。

6 . 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 博士後期課程の充足率は、残念ながら十分とは言えない。 ただ、社会人に対する長期履修制度は評判も良く、学生募集には効果的である。 さらに制度の改善により、今以上の入学者数も期待できる。
- (2) 昨年度来、取組んできた新規・改善事項は、個々には成果を挙げてはいるが、全体としての評価については、不明な点が多い。

3.2.11 大学院工学府入学試験委員会

1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 平成21年度博士前期課程入学試験(一般選抜)募集人員の変更について審議した。
- (2) 出願資格認定委員会委員の選出について審議した。
- (3) 入試問題の作成・管理に関する基本ルールの審議を行った。
- (4) 各専攻の入試実施体制の調査を行った。
- (5) 平成21年度博士前期課程入学試験(推薦選抜)合格候補者の選考について審議した。
- (6) 中期計画の年度計画策定について審議した。
- (7) 博士前期課程一般選抜入学試験の第2志望がある者の面接等の方法について審議した。
- (8) 平成21年度博士前期課程(推薦選抜)入学試験合格者の選考について審議した。
- (9) 平成21年度(推薦選抜合格者決定後)博士前期課程一般選抜募集人員変更について審議した。
- (10) 平成21年度博士前・後期課程(第1回募集)入学試験合格者の選考について審議した。
- (11) 平成20年10月入学博士前・後期課程入学試験合格者の選考について審議した。
- (12) 平成21年度博士前・後期課程入学試験(第2回募集)の出願資格認定について審議した。
- (13) 外国人留学生特別選抜募集要項の改正について審議した。
- (14) 平成22年度工学府入学者選抜要項(案)について審議した。
- (15) 平成21年度九州工業大学工学府博士後期課程第3回募集(追加募集)について審議した。
- (16) 過去に個別の入学資格審査により認められた者の出願資格の有効性について審議した。
- (17) 平成21年度大学院工学府博士前期課程及び後期課程(第2回募集)入学試験合格者の選考について審議した。
- (18) 平成21年度大学院工学府博士後期課程(第3回募集および特別実施)入学試験合格者の選考について審議した。

2. 今年度採択した事項

- (1) 大学院入試問題に関する情報漏えい、および問題作成ミスを防ぐ目的から、入試問題の作成・管理に関する基本ルールの審議・作成を行った。
- (2) 博士前期課程一般選抜入学試験における、第2志望がある者の面接について、各専攻で個別に実施するか、合同で実施するかについては第1志望専攻・試験分野と第2志望専攻・試験分野で協議の上決定して実施することとした。
- (3) 博士後期の定員充足の問題に関連して、外国人留学生特別選抜の志願者の増加を図るため、募集要項の選抜方法の記載内容の見直しを行うとともに、博士後期課程については、全専攻の選抜を面接試験のみに統一した。また、博士後期課程については、書類審査により面接試験を免除することも可能とした。さらに募集要項の英文翻訳の作業を進めることにした。
- (4) 大学院工学府出願資格の判定に関する申し合わせとして、過去に個別の入学資格審査により出願資格を認められた者の出願資格は当該年度以降も有効であり、以後の入学資格審査は要しないこととした。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 博士後期課程の定員充足にむけた方策の検討
- (2) 生命体工学研究科の学生確保促進を考慮した、工学府の適切な第2回募集実施の検討

4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 各専攻の入試実施体制の調査資料
- (2) 「中期目標・中期計画」
- (3) 平成22年度九州工業大学大学院工学府入学者選抜要項(案)
- (4) 外国人留学生特別選抜試験の各専攻実施状況
- (5) 平成22年度九州工業大学大学院工学府博士前期課程学生募集要項(案)
- (6) 平成22年度九州工業大学大学院工学府博士後期課程学生募集要項(案)

5. 工学府の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 外国人留学生特別選抜試験要項の改善によって、博士後期課程受験者の母集団の拡大を図る。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 各専攻の試験実施状況の把握を行うためアンケートを実施し、入試実施体制の改善に向けた検討資料の作成を行った。

3.3 教員組織

3.3.1 教員の配置

大学院工学研究院

表3.3.1 大学院工学研究院教員現員一覧

(平成20年4月1日現在)

系	講座名	教授		准教授		講師		助教		合計	技術職員等
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
機械知能工学研究系	機械工学部門	5	梅景 俊彦 金元 敏明 鶴田 隆治 野田 尚昭 水垣 善夫	6	河部 徹 吉川 浩一 黒島 義人 清水 浩貴 長山 暁子 宮崎 康次	1	高藤 和樹	3	谷川 洋文 田丸 雄摩 吉田 幸一	15	14
	宇宙工学部門	4	赤星 保浩 橘 武史 松田 健次 米本 浩一	1	平木 講儒	0		3	井上 昌信 各務 聡 西川 宏志	8	
	知能制御工学部門	4	石川 聖二 小林 敏弘 坂本 哲三 田川 善彦	4	大屋 勝敬 金 亨變 黒木 秀一 相良 慎一	0		2	西田 健 タナジューキ	10	5
	小計	13		11		1		8		33	52
建設社会工学研究系		8	秋山 壽一郎 久保 喜延 幸左 賢二 永瀬 英生 仲間 浩一 山口 栄輝 山崎 竹博 渡辺 義則	7	伊東 啓太郎 鬼束 幸樹 木村 吉郎 重枝 未玲 寺町 賢一 日比野 誠 廣岡 明彦	0		2	加藤 九州男 合田 寛基	17	3
	小計	8		7		0		2		17	20
電気電子工学研究系	電気エネルギー部門	4	近藤 浩 趙 孟佑 匹田 政幸 三谷 康範	3	大塚 信也 白土 竜一 渡邊 政幸	0		0		7	10
	電子デバイス部門	5	大村 一郎 高木 精志 並木 章 西垣 敏 藤原 賢三	3	和泉 亮 川島 健児 内藤 正路	0		6	佐竹 昭泰 鶴巻 浩 羽野 一則 松平 和之 山内 貴志 渡邊 晃彦	14	
	システムエレクトロニクス部門	7	岩根 雅彦 桑原 伸夫 重松 保弘 芹川 聖一 二矢田 勝行 前田 博 水波 徹	4	池永 全志 生駒 哲一 市坪 信一 中司 賢一	0		6	河野 英昭 張 力峰 水町 光徳 山脇 彰 楊 世淵 横尾 徳保	17	
	小計	16		10		0		12		38	48

物質工学研究系	応用化学部門	8	横野 照尚 鹿毛 浩之 古曳 重美 清水 陽一 竹中 繁織 柘植 顕彦 松永 守央 吉永 耕二	8	新井 徹 荒木 孝司 植田 和茂 岡内 辰夫 北村 充 坪田 敏樹 津留 豊 山村 方人	0		6	下岡 弘和 馬渡 佳秀 毛利 恵美子 高瀬 聡子 村上 直也 森口 哲次	22	5
	材料開発部門	5	恵良 秀則 大谷 博司 寺崎 俊夫 長谷部 光弘 松本 要	5	秋山 哲也 篠崎 信也 高須 登実男 廣田 健治 横山 賢一	0		6	伊藤 秀行 大坪 文隆 北村 貴典 山口 富子 山根 政博 和才 京子	16	5
	小計	13		13		0		12		38	48
人間科学系		7	井上 寛 田吹 昌俊 鳥井 正史 橋本 年一 藤澤 正明 本田 逸夫 村田 忠男	8	アプト川恭子 李 友炯 今井 敦 岡野 裕司 中村 雅之 虹林 慶 水井 万里子 ラックストン・イツ.c	3	大野瀬津子 八丁 由比 東野 充成	0		18	0
	小計	7		8		3		0		18	18
基礎科学研究系	数理科学部門	4	池田 敏春 加藤 幹雄 酒井 浩隆 仙葉 隆	7	浅海 賢一 川本 一彦 木村 広 鈴木 智成 服部 裕司 平山 至大 藤田 敏治	0		0		11	2
	量子物理学部門	4	岡本 良治 鎌田 裕之 出口 博之 西谷 龍介	3	岸根 順一郎 中尾 基 美藤 正樹	0		0		7	
	小計	8		10		0		0		18	20
先端機能システム工学研究系		4	近浦 吉則 小森 望充 増山 不二光 山崎 二郎	7	大門 秀朗 鈴木 芳文 孫 勇 高原 良博 竹澤 昌晃 本田 崇 脇迫 仁	0		1	徳永 辰也	12	0
	小計	4		7		0		1		12	12
合計		69		66		4		35		174	218

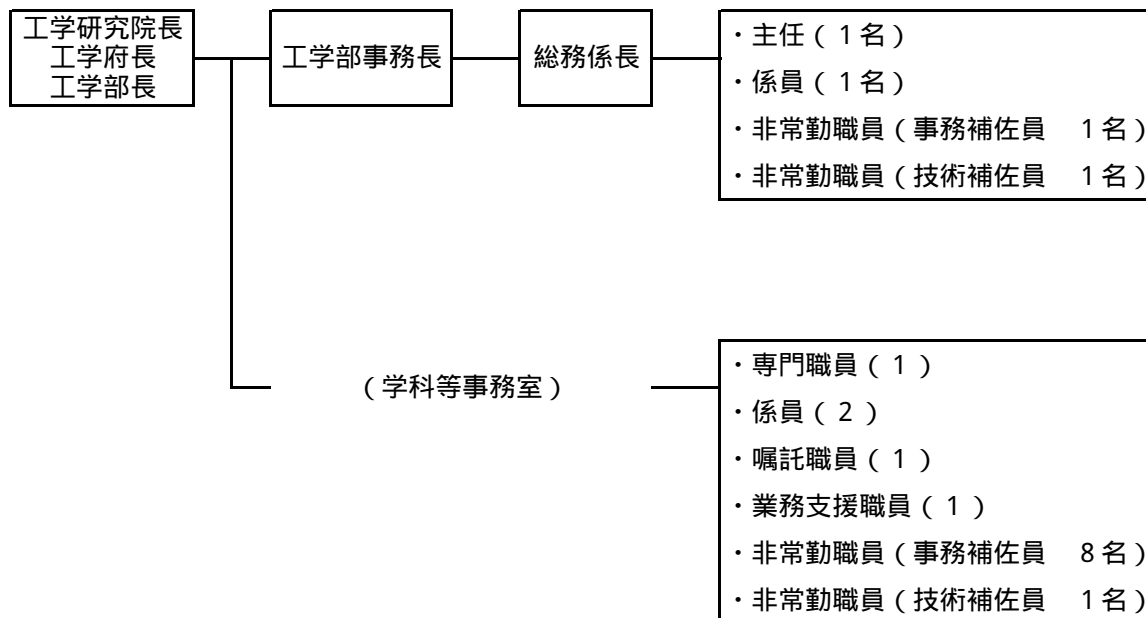
大学院工学府

表3.3.2 大学院工学府連携講座(定員外)

(平成20年4月1日現在)

専攻名	教授		准教授		講師		助教		合計	
	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
先端機能システム工学専攻	2	開道 力 納富 啓	1	西 敏郎	0		0		3	0
合計	2		1		0		0		3	0

3.4 事務組織



学科等事務室の非常勤職員は、勤務場所が学科等事務室になっている者の数。

図 3.4.1 事務組織図 (平成 20 年 4 月 1 日現在)

4 大学院工学研究院・工学府・工学部の財政

4.1 運営費交付金配分状況

表 4.1.1 運営費交付金配分額，学部運営費，教室配分額年次変化

(単位：千円)

区分 \ 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
運営費交付金配分額 (校費配分額)	(755,711)	423,601	391,496	409,336	381,132
学部運営費 (うち光熱水費保留分)	325,406	129,965 (11,357)	104,257 (11,383)	101,843 (11,460)	100,975 (11,313)
教室配分額	430,305	293,636	287,239	307,493	280,157

表 4.1.2 平成 20 年度費目別配分額

(単位：千円)

費 目	配分額	比率 (%)
研究経費	72,294	19
教育経費	141,489	37
業績等配分経費	27,769	7
事項指定経費	38,605	10
学部運営費	89,662	24
光熱水費保留額	11,313	3
その他	0	0
合 計	381,132	100

表4.1.3 過去5年間の学科等別積算校費配分額の推移

(単位：千円)

年度・科目	学科等	機械知能	建設社会	電気電子	物質工学	共通講座	先端機能	システム創成	その他	
	工学	工学科	工学科	工学科	科					工学専攻
平成16年度	教育研究基盤校費									
	教官数積算分	19,487	9,964	25,176	21,135	22,387		9,771	0	
	学生数積算分	34,152	16,588	38,610	27,423	6,438		9,340	7,655	
	大学分等	6,368	4,329	10,651	9,745	3,956		2,079	0	
その他		16,128	6,941	51,390	13,703	3,281		126,101	287,041	
平成17年度	教育・研究費									
	研究経費	15,293	7,819	19,641	16,382	17,155		7,667	0	
	教育経費	33,289	15,317	35,181	25,547	5,727		10,299	7,655	
	業績等配分経費	7,880	3,518	10,858	7,915	3,680		3,077	0	
その他		1,727	0	35,141	1,846	0		1,022	129,965	
平成18年度	教育・研究費									
	研究経費	10,370	5,281	12,415	11,065	12,193		5,018	243	
	教育経費	38,681	17,456	40,536	31,887	5,972		12,848	7,175	
	業績等配分経費	5,286	2,641	8,547	6,145	3,360		2,107	0	
その他		1,872	0	33,928	1,652	0		2,218	112,600	
平成19年度	教育・研究費									
	研究経費	13,089	6,967	17,504	14,861	15,400		6,371	300	
	教育経費	37,310	16,395	40,249	32,817	6,540		13,270	7,175	
	業績等配分経費	4,232	1,621	5,712	4,530	2,445		1,726	7,579	
その他		1,422	0	33,928	1,652	0		2,218	114,023	
年度・科目	系	機械知能	建設社会	電気電子	物質工学	基礎科学系	人間科学系	先端機能	システム創成	その他
	工学研究系	工学研究系	工学研究系	工学研究系	工学研究系					
平成20年度	教育・研究費									
	研究経費	13,282	7,533	16,232	14,836	7,527	7,418	5,516	0	
	教育経費	33,475	15,284	37,650	34,375	0	2,257	18,378	0	
	業績等配分経費	3,629	1,646	5,667	5,423	1,476	1,177	1,419	0	
その他		1,564	0	32,443	1,526	0	0	3,072	108,307	

4.2 科学研究費補助金の採択状況

金額は、直接経費のみ。

(転出を含み、転入を除く)

表4.2.1 科学研究費補助金採択状況(平成16~20年度)

(単位:千円)

種目	年度	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
特別推進研究		1	59,000	2	125,000	2	35,470	2	26,700	1	11,700
特定領域研究(A)(2)											
特定領域研究		3	15,000	3	14,600	5	21,500	4	18,400	1	2,600
特別研究促進費										1	8,000
基盤研究(A)(1)		0	0							1	11,600
基盤研究(A)(2)		1	3,700			2	23,500	3	33,200	3	28,200
基盤研究(B)(1)		3	10,700								
基盤研究(B)(2)		14	61,300	15	68,600	15	59,300	12	40,600	7	42,800
基盤研究(C)(1)											
基盤研究(C)(2)		21	28,600	23	30,400	23	27,900	21	30,900	26	28,300
萌芽的研究		9	14,300	9	10,600	7	12,400	8	11,100	4	4,900
奨励研究										1	580
奨励研究(A)											
若手研究(A)		1	1,600			1	15,900	1	2,100	2	4,000
若手研究(B)		12	15,100	17	25,300	16	20,100	17	23,600	16	17,600
特別研究員奨励費		1	1,200	1	600			1	900		
計		66	210,500	70	275,100	71	216,070	69	187,500	63	16,0280

表4.2.2 平成20年度科学研究費補助金学科等別申請,採択状況

(上段数字は継続課題で内数)

系 事項	機械知能工学研究系	建設社会工学研究系	電気電子工学研究系	物質工学研究系	基礎科学研究系	人間科学研究系	先端機能システム工学研究系	合計
	申請件数	32	14	32	39	14	10	9
採択件数	8	6	11	5	6	5	1	42
	13	7	16	10	9	6	2	63

申請件数・採択件数ともに、非常勤研究員を含む。また、申請件数には、特別推進研究の継続申請を含まない。

4.3 外部資金導入状況

4.3.1 寄附金（奨学寄附金）

表4.3.1 寄附金受け入れ状況

(単位：千円)

学科等	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系	26	16,180	17	13,500	13	9,770	18	13,070	14	13,902
建設社会工学研究系	18	32,676	18	22,354	24	32,840	15	22,800	20	57,130
電気電子工学研究系	10	13,550	14	11,390	15	11,280	11	8,550	22	12,670
物質工学研究系	40	24,440	39	27,780	42	26,357	35	23,225	36	28,170
共通講座	1	500	3	4,500	5	2,400	4	5,980		
基礎科学研究系									3	954
人間科学系										
先端機能工学研究系	14	9,250	10	5,200	8	5,385	6	3,900	5	49,723
合計	109	96,596	101	84,724	106	88,032	89	77,525	100	117,799

4.3.2 民間等との共同研究

表4.3.2 民間等との共同研究受け入れ状況

(単位：千円)

学科等	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系	4	3,100 (3,100)	9	6,168 (6,168)	8	5,670 (5,670)	8	7,489 (7,489)	19	19,260 (19,260)
建設社会工学研究系	6	16,950 (16,950)	5	7,100 (7,100)	5	10,806 (10,806)	4	8,500 (8,500)	4	3,000 (3,000)
電気電子工学研究系	20	43,725 (43,725)	26	46,930 (46,930)	24	36,085 (36,085)	27	39,649 (39,649)	34	49,657 (49,657)
物質工学研究系	10	13,640 (13,640)	26	30,500 (30,500)	20	25,399 (25,399)	26	32,791 (32,791)	34	43,154 (43,154)
共通講座	1	1,050 (1,050)	2	3,050 (3,050)	2	2,500 (2,500)	3	3,750 (3,750)		
基礎科学研究系									3	2,400 (2,400)
人間科学系									0	0 (0)

機能システム創成工学専攻 (先端機能システム工学研究系)	3	1,400 (1,400)	3	900 (900)	4	2,000 (2,000)	7	14,699 (14,699)	2	12,598 (12,598)
合計	44	79,865 (79,865)	71	94,648 (94,648)	63	82,460 (82,460)	75	106,878 (106,878)	96	130,069 (130,069)

下段の()数字は民間負担分の歳入金額で内数。

複数年契約を含む。

4.3.3 受託研究

表4.3.3 受託研究受け入れ状況

(単位：千円)

学科等	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系	6	6,665	10	29,007	15	24,283	12	18,514	13	30,148
建設社会工学研究系	1	4,975	4	12,300	2	6,465	3	19,015	5	18,483
電気電子工学研究系	7	39,704	10	54,484	12	72,469	17	79,013	21	58,781
物質工学研究系	13	19,460	10	28,441	11	24,903	10	149,586	18	109,638
共通講座	0	0	1	4,250	1	5,696	2	4,640		
基礎科学研究系									1	2,000
人間科学系									0	0
機能システム創成工学専攻 (先端機能システム工学研究系)	1	1,000	3	2,556	5	10,633	7	21,737	3	21,072
合計	28	71,804	38	131,038	46	144,449	51	292,505	61	240,122

複数年契約を含む。

注意事項

- ・ 束ね契約もありますが、申請を1件としています。
- ・ 知的クラスターは1テーマを1件とし、代表者の所属で分けています。
- ・ 受託事業は含まれていません。

4.3.4 寄附講座

表4.3.4 寄附講座受け入れ状況

(単位：千円)

名称	所属学科	寄附者	年度別受け入れ金額					教員組織
			平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	
電力系統 制御工学	電気工学科	九州電力(株)	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	平成20年度 客員教授 1 客員助教 1

4.3.5 寄附金の利息

大学院工学研究院・工学府・工学部では、寄附金の利息を共通経費として運用している。表 4.3.5 に平成 20 年度の使用内訳を示す。

表 4.3.5 平成 20 年度寄附金共通経費使用報告

(単位:円)

受入額		使用額	
事項	金額	事項	金額
前年度より繰越	12,223,094	実験器具	9,502,500
寄附金オーバーヘッド分	5,497,427	秋季入学を考えるシンポジウム意見交換会会費	6,000
移算	942,582	資源ソリューション研究に関するシンポジウム会議費	63,000
		PBL シンポジウム・FD 講演会会議費	45,000
		国立大学 53 工学系学部長会議費	10,000
		事務打ち合わせ会場費	44,450
		(小計)	9,670,950
		繰越額	8,992,153
合計	18,663,103	合計	18,663,103

5 大学院工学研究院・工学府・工学部と社会のつながり

5.1 地域貢献活動

5.1.1 大学公開

大学公開事業の一環として実施している高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況を表5.1.1に示す。

表5.1.1 高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況

年度	参加校数（校）	参加者数（名）		
		大学全体	学部別	
平成16年度	224	1,481	（工）	892
			（情）	589
平成17年度	224	1,481	（工）	892
			（情）	589
平成18年度	255	1,543	（工）	968
			（情）	575
平成19年度		1,701	（工）	1065
			（情）	636
平成20年度		2,198	（工）	1285
			（情）	913

19年度より、個人の参加申込みとなったため、参加校数のデータは取っておりません。

5.1.2 公開講座等

表 5.1.2 公開講座等実施状況

(単位：名)

年度	講座名	対象	参加者数
平成16年度	技術士の専門知識	「技術士1次試験」を受験する者	19
	北九州大学体験工房	中学生	22
	体験学習「電気電子技術体験だい！」	下関西高校	40
	本物ものづくり教室		
平成17年度	エネルギー・エレクトロニクスの未来技術	一般市民・高校生	14
平成18年度	第3回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を切って作るふしぎな図形」	小学生以上	59
	八幡大谷市民センター 折り紙講座	市民対象	27
	第4回 ジュニア・サイエンス・スクール 「光の不思議を体験しよう」	小学校4年生以上	55
	明治学園小学校 天体観測会	5年生	41
	戸畑子ども会 折り紙講座	小学生	50
	第5回 ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学校4年生以上	73
	第6回 ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	中学生	17
	第7回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで作るふしぎな模様」	小学生以上	64
	第8回 ジュニア・サイエンス・スクール 「圧力ガンガン」	小学校4年生以上	68
	第9回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正六角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	99
	第10回 ジュニア・サイエンス・スクール 「超伝導ってなんだろう？」	小学校4年生以上	63
	第11回 ジュニア・サイエンス・スクール 「発泡スチロールのリサイクル」	小学校4年生以上	44
	第12回 ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議 - 花火のひみつ - 」	小学校4年生以上	88
平成19年度	第13回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正六角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	97
	第13回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を組んで作るふしぎな立体」	小学生以上	97
	第14回 ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	
	第15回 ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	中学生	41
	第16回 ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学4年生～中学生	41
	第17回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正方形や長方形や三角形の折り紙をたたんでみよう！」	小学生以上	86
	第18回 ジュニア・サイエンス・スクール 「光と色のマジック！～発光体～」	小学生以上	67
	第19回 ジュニア・サイエンス・スクール 「天気のおぞに挑戦しよう！」	小学4年生以上	69
	第20回 ジュニア・サイエンス・スクール 「身近な化学...しょっぱいだけじゃない塩水の不思議」	小・中学生	131
	第21回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで切って開いてできる、ふしぎな模様」	小学生以上	79
第21回 ジュニア・サイエンス・スクール(2回目) 「折り紙をたたんで切って開いてできる、ふしぎな模様」	小学生以上	70	

	第 22 回ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議 花火のひみつ(2)」	小学 4 年生以上	85
	もりつね祭ブース出展	一般	
	毎日新聞社主催「ふしぎ発見ワークショップ」への協力	一般	
	インフォネットフェスティバル 2007 への協力	一般	
	青少年の為の科学の祭典 実験ブース出展	一般	
	北九州市児童文化科学館「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般	
	こどもエコクラブ全国フェスティバル in 北九州	一般	
平成 20 年度	第 23 回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	ブース 出展
	第 24 回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体」	小学生以上	105
	第 25 回ジュニア・サイエンス・スクール 「天体観望会：大型望遠鏡で月や惑星をみよう」	中学生	228
	第 26 回ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	小学 4 年生～中学生	29
	第 27 回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 水環境館」	小学生以上	ブース 出展
	第 28 回ジュニア・サイエンス・スクール 「正 6 画形で作るふしぎな立体」	小学生以上	78
	第 29 回ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機の最新技術」	小学 4 年生以上	30
	第 30 回ジュニア・サイエンス・スクール 「音と楽器の科学」 「ミニチュア電子ピアノの作製」	小・中学生 中学生	28 16
	第 31 回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(初級)」 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(中級)」	小学生以上	36 44
	第 32 回ジュニア・サイエンス・スクール 「磁石を使って魚口ポットを動かしてみよう」	小学生以上	28
	もりつね祭ブース出展	一般	
	青少年の為の科学の祭典 実験ブース出展	一般	ブース 出展
	北九州市児童文化科学館 「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般	ブース 出展
	福岡市少年科学文化会館 「音と楽器の科学」への協力	一般	ブース 出展
	福岡市少年科学文化会館 「わくわく科学カーニバル」への協力	一般	ブース 出展
	北九州市立中原市民センター	小学 1～6 年生	約 30
	北九州市立三六市民センター	小学生(主に 1～3 年生)	約 40
	福岡県高校化学部会研修会	高校教員	20
	天文講演会 「生命の歩み-君はどこからきたのか-」	小学校高学年以上一般まで	162
	中学理科教員サークル研修 「天気のおぞに挑戦しよう！」 「光の不思議を体験しよう」	中学教員	約 20
	飛幡中学校 「燃える不思議-花火のひみつ-」	中学 1・2 年	14
	インターンシップ 福岡県立八幡工業高等学校	高校生	2

5.1.3 北九州市民カレッジへの協力

本学は、福岡・北九州地域リカレント教育推進協議会主催のリカレント教育の実施大学の一つになっていたが、その後継事業として、平成16年度から北九州市民カレッジが始まった。これらの事業にこの5年間に協力したセミナーの実施状況を表5.1.3に示す。

表5.1.3 北九州市民カレッジ（リカレント教育）協力セミナー実施状況（単位：名）

年 度	セミナー名	参加者数	備 考
平成16年度	Windows プログラミング入門	22	市民カレッジ
平成17年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成18年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成19年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成20年度	現代社会を支える化学 - 最先端機能物質から環境・リサイクルまで	18	市民カレッジ

5.1.4 出前講義

近年、社会的問題となっている、いわゆる青少年の「科学離れ」「理工系離れ」対策の一環として、小・中・高等学校の生徒を対象に本学の教官が小・中・高等学校に出向き、理工系分野の学問の最前線の話や魅力等について分かり易く講義をする。

表5.1.4 出前講義

年度	講義名	実施件数	対象者
平成16年度	地球環境と風力エネルギー	6	小・中学生
	これから世界で活躍する技術者・研究者になるために、今、何をしておくべきか	5	高校生
	「ものづくり」とは何だろう？ - 乗用車の開発から製造まで -	3	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	8	高校生
	魚のすみやすい川づくり	7	小・中・高校生
	私たちの身近なみどりとまちづくり	10	高校生
	顔認証・世界最小のバーコード変換技術	19	小・中・高校生
	ITとコンピュータによるこれからの私たちの生活	10	中・高校生
	君も色のマジシャンになってみませんか - 新幹線から制がん剤まで -	3	中・高校生
	電池の科学 - クリーンでソフトなエネルギーの缶詰 -	4	小学生
	生活に見る材料力学	1	高校生
	身のまわりのプラスチックとそのリサイクル - ペットボトルをもっと知ろう！ -	2	高校生
	身近な科学の話	12	小・中校生
	シャボン玉から知る複合材料の科学	1	中学生
	宇宙・星のしくみと私たち	2	中・高校生
	地球を守る水と風	8	小学生
	平成17年度	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	7
やさしい情報通信の世界 - インターネットの基礎と応用 -		2	高校生
ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -		6	中・高校生
電子が創るナノワールド - 高校理科から最先端技術へ -		6	高校生
光触媒を使った太陽光による環境浄化		1	高校生
身のまわりのペットボトルのリサイクル - ペットボトルをもっと知ろう！ -		1	高校生
身近な金属材料のリサイクル		3	高校生
地球を救う水と風のエネルギー		1	小学生
君も色のマジシャンになってみませんか - 新幹線から制がん剤まで -		2	中学生
3次方程式の解法 - 楽しい数学 -		1	高校生
宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？		4	高校生
進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者		1	高校生
テレビはなぜ見える！ - テレビ・ラジオの原理と電波のふしぎ -		5	小・中学生
迷路とマイクロマウス - 人工知能ってなに -		2	小・中学生
物理と工学 - 物理は何の役に立つ？ -		2	高校生
風を生活に役立てる最先端研究 - 何がわかってて、何がわかってない？ -		1	高校生
ひとにやさしいまちづくりって？ - バリアフリーのまちづくり -		1	小・中・高校生
平成18年度	天気予報の物理と数学 - 流れの力学から気象予報士になる方法まで -	2	高校生

	エコポ・ワークショップ！植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化 - 自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てよう -	1	小・中・高校生
	魚のすみやすい川づくり	1	中・高校生
	身近な科学の話 - 理科(科学)の学習の意味を考える -	3	中・高校生
	3次方程式の解法 - 楽しい数学 -	1	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	2	高校生
	万有引力の法則の初等的な導出法 - ニュートンが目指したもの -	1	中・高校生
	相対性理論と4次元時空間 - アインシュタインが目指したもの -	3	中・高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	1	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	1	高校生
	エネルギーと環境	1	中・高校生
平成19年度	「アポロ13」はただの冒険映画じゃない - 技術者ってカッコいい！ -	4	中・高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	5	高校生
	やさしい情報通信の世界 - インターネットの基礎と応用 -	2	高校生
	テレビはなぜ見える！ - テレビ・ラジオの原理と電波のふしぎ -	4	小・中・高校生
	シミュレーションで学ぶデジタル通信の仕組み	1	高校生
	聞こえないことと、その支援方法	1	中・高校生
	視覚障害者のための福祉機器について - 視覚障害を体験して考えてみる -	1	中・高校生
	電気のいろいろな作り方 - 身近なもので電気をつくろう -	3	小学生
	超伝導体による浮上実験 - 超伝導体と磁石はどう違うか？ -	8	小・中・高校生
	シャボン玉から知る複合材料の科学	2	中・高校生
	携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路(LSI)がぎっしり - LSIってなに？半導体ってなに？ -	3	小・中・高校生
	水の不思議 - 20℃で、あたたかい氷をつくってみよう！ -	1	小・中・高校生
	遺伝子とゲノムと生命 - やさしい遺伝子のはなし -	1	中・高校生
	医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術 - 生物に学ぶドラッグデリバリーシステム -	2	高校生
	マイクロ波が促進する化学反応 - 電子レンジで化学の実験 -	1	小・中・高校生
	身のまわりのプラスチックとリサイクル - ペットボトルやビニールについてもっと知ろう -	2	小・中・高校生
	あっ、プラスチックが水に溶ける！ - プラスチックのリサイクルを考える -	2	高校生
	生ゴミからプラスチックと肥料をつくる - リサイクルを考えよう -	2	小・中学生
	魚のすみやすい川づくり	1	中・高校生
	風を生活に役立てる最先端研究 - 何がわかってて、何がわかってない？ -	1	高校生
	エネルギーと環境 - おまけ 僕や私の生きる道(技術者編) -	6	中・高校生
	天気予報のしくみと地球の気候変動 - 気象現象の物理と数学 -	3	高校生
	身近な物理現象と、大学での研究例との関係 - 多様な知識と好奇心が共通にある -	1	小・中・高校生
	3次方程式の解法 - 楽しい数学 -	2	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	1	高校生
	相対性理論と4次元時空間 - アインシュタインが目指したもの -	1	高校生

	やってみなくちゃ分からない折り紙飛行機 - ものづくりの秘密 -	2	小・中学生
	「紅の豚」はただのアニメじゃない - 技術者っていいもんだ！ -	4	中・高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	2	高校生
平成20年度	もてる男の顔・対称性とその顔認証への応用 - バイセキュリティの世界 -	4	小・高校生
	やさしい情報通信の世界 - インターネットの基礎と応用 -	3	高校生
	テレビはなぜ見える！ - テレビ・ラジオの原理と電波のふしぎ -	3	小・高校生
	音声のブラインド信号分離 - 聖徳太子プロジェクト -	2	高校生
	世界最速のデジタルオーディオ IC	1	高校生
	脳と機械の「見る」 - 人間の視覚のしくみとロボットへの応用 -	3	小・高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	2	高校生
	環境にやさしいプラスチックで作る自在に曲がる電子デバイス - ポリマーで拓く未来の情報機器とロボット -	1	高校生
	携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路 (LSI) がざっしり - LSI ってなに？ 半導体ってなに？ -	4	高校生
	超伝導体による浮上実験 - 超伝導体と磁石はどう違うか？ -	10	小・中・高校生
	生物の生み出すナノ工作の世界 - 生物の働きを生み出すタンパク質達を眺めてみよう -	1	高校生
	DNA と遺伝子 - やさしい遺伝子のはなし -	5	高校生
	医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術 - 生物に学ぶドラッグデリバリーシステム -	3	高校生
	エコポ・ワークショップ！ 植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化 - 自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てよう -	3	小学生
	魚のすみやすい川づくり	1	高校生
	風を生活に役立てる最先端研究 - 何がわかって、何がわかってない？ -	2	高校生
	地球温暖化問題と自然エネルギー - 風力発電を含めて -	2	小・高校生
	エネルギーと環境 - 新聞から学ぶ 原発と温暖化対策 -	1	高校生
	お日様パワーは地球を救う - 太陽電池のはなし -	2	高校生
	光触媒を使った環境浄化について	1	高校生
	生ゴミからプラスチックと肥料をつくる - リサイクルを考えよう -	3	小・中学生
	あっ、プラスチックが水に溶ける！ - プラスチックのリサイクルを考える -	1	高校生
	ためになるけど、ホントはコワイ確率の話。 - 確率にだまされるな。確率は人の生命も左右する鋭い牙にもなる。確率は科学の大事な根っこ。 -	1	高校生
	正多面体のはなし - 折り紙でいろいろな立体をつくろう -	1	小学生
	宇宙とは何か？ 時間とは何か？ 人間とは何か？	1	高校生
	天気予報のしくみと地球の気候変動 - 気象現象の物理と数学 -	2	高校生
	「アポロ13」はただの冒険映画じゃない - 技術者ってカッコいい！ -	2	高校生
	「紅の豚」はただのアニメじゃない - 技術者っていいもんだ！ -	4	高校生
	自動車の出来るまで - ものづくりの現場を見てみよう -	5	高校生
	工学部ってどんなところ？	5	高校生
	僕や私の生きる道 (工学編) - 人生なんとかなるもんだ -	2	高校生

5.1.5 情報公開

大学院工学研究院・工学府・工学部の情報公開の実施状況を表5.1.5に示す。

表5.1.5 各種情報公開の現状

現在公開（公表）している情報等	編集方針	年間発行回数、発行時期	公開・情報提供先	編集組織の名称
大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書	大学院工学研究院・工学府・工学部とその関連部局における自己点検・評価を行い、その結果を公表する。	1回・2月	大学公式ホームページ上で、学内外へ公開	大学院工学研究院部局評価委員会

5.2 学生の国際交流

表5.2.1.1 外国人留学生(国籍別・課程別・費用別)在学状況一覧表

所属・課程・費用別等		外国人留学生在学状況 H20.5月1日現在 (単位:人)																	合計				
		中国	マレーシア	タイ	メキシコ	パングラチシュ	ベトナム	インドネシア	エジプト	スリランカ	コスタリカ	ラオス	モロッコ	インド	フィリピン	フランス	ロシア	オーストラリア		アメリカ	フィンランド	ドイツ	合計
工学部・工学府研究科	博士後期課程	4		1	3	3	1																14
	博士前期課程	13			2	2																	20
	学部生	1	9			2																	13
	研究生/聴講生	7																2					20
	JASSO																						
	費用別	3		1		3	1	4															16
	本国政府派遣		9																				9
	私費	22				2	1	1	1									2					42
	国籍小計	25	9	10	1	5	2	5	1			2	2	2	1	1	1	2	1	1	1	1	67
	博士後期課程	3	1		1	3	2						1										15
博士前期課程	2					2			1													7	
学部生	9	4		1																		16	
研究生/聴講生	2																					3	
JASSO																							
費用別	1			2	1					1												8	
本国政府派遣		4																				4	
私費	15	1	1		2				1													29	
国籍小計	16	5	1	2	3	2	3	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	41	
博士後期課程	9	5	1		2																	19	
博士前期課程	9	1	5						1												1	17	
研究生/聴講生	2																					2	
JASSO																							
費用別		1	4						1													6	
本国政府派遣																							
私費	20	5	2		2																	32	
国籍小計	20	6	6	2	2				1													38	
博士後期課程	16	6	1	1	8					1												48	
博士前期課程	24	1	6		2				2													44	
学部生	10	13		1		2																29	
研究生/聴講生	11																					25	
JASSO																							
費用別	4	1	4	1	2	4	1	4		1	1	1										30	
本国政府派遣		13																				13	
私費	57	6	13		6	1	6	1	1		2											103	
国籍小計	61	20	17	1	2	10	2	10	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	146	

JASSOは、独立行政法人日本学生支援機構による大交流計画奨学金または短期外国人留学生支援制度奨学金によって在籍する者(費用別区分では私費を含む) 研究生/聴講生は、JASSO制度に係らない協定校からの特別聴講(研究)学生を含む

表 5.2.2 外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧

（平成20年5月1日現在）（単位：人）

所 属 区 分	機械知能工学科 機械知能工学専攻			建設社会工学科 建設社会工学専攻		電気電子工学科 電気電子工学専攻		物質工学科 物質工学専攻		機能システム創成専攻	合 計
	機 械 工 学 コ ー ス	宇 宙 工 学 コ ー ス	制 御 工 学 コ ー ス	電 気 電 子 工 学 コ ー ス	電 子 通 信 シ ス テ ム コ ー ス	応 用 化 学 コ ー ス	マ テ リ ア ル 創 成 加 工 工 学 コ ー ス				
博士後期課程	4		2		5		1				12
博士前期課程	1		2	1	3	2	1	1	2		11
学部生 2年生以上	5		1	1	4						11
学部生 1年生	/			/		/		/		/	
研究生・聴講生	/			/		/		/		/	
短期留学生	/			/		/		/		/	
合 計	15			2		14		3		36	

（平成20年5月1日現在）（単位：人）

所 属 区 分	機械知能工学科 機械知能工学専攻			建設社会工学科 建設社会工学専攻			電気電子工学科 電気電子工学専攻			物質工学科 物質工学専攻		総合システム工学科 機能システム創成工学専攻 先端機能システム工学専攻		合 計
	機 械 工 学 コ ー ス	宇 宙 工 学 コ ー ス	知 能 制 御 工 学 コ ー ス	建 築 学 コ ー ス	地 域 環 境 デ ザ イ ン コ ー ス	都 市 再 生 デ ザ イ ン コ ー ス	シ ス テ ム エ レ ク ト ロ ニ ク ス コ ー ス	電 気 エ ネ ル ギ ー 学 コ ー ス	電 子 デ バ イ ス コ ー ス	応 用 化 学 科	マ テ リ ア ル 工 学 科	機 能 シ ス テ ム 創 成 専 攻	先 端 機 能 シ ス テ ム 工 学 専 攻	
博士後期課程			1						1					2
博士前期課程			1				2	3		1				7
学部生 2年生以上	/			/			/		/		/		/	
学部生 1年生	1			1									2	
研究生・聴講生	3						3						6	
短期留学生	4			2			6		1		1		14	
合 計	10			3			15		2		1		31	

表5.2.3 学生の海外派遣

年度	国名	交流協定校	学 生 派 遣 数
16	イギリス	サリー大学	交流協定による派遣1名(情報工学研究科)
			短期留学1名(情報工学研究科)
	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣2名(工学部1名, 生命体工学研究科1名)
	ニュージーランド	オークランド工科大学	短期留学1名(生命体工学研究科)
	韓国	忠州大学	相互交流14名(工学部14名)
昌原大学		相互交流15名(工学部15名)	
韓国海洋大学校		相互交流8名(情報工学部8名)	
マレーシア	プトラ大学	交流協定による派遣1名(生命体工学研究科)	
17	イギリス	サリー大学	交流協定による派遣3名(工学研究科2名, 情報工学研究科1名)
			短期留学1名(工学部1名)
	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣1名(工学部)
	韓国	忠州大学	相互交流12名(工学部12名)
		昌原大学	短期留学1名
韓国海洋大学校		相互交流8名(工学部8名)	
マレーシア	プトラ大学	相互交流10名(情報工学部10名)	
マレーシア	プトラ大学	交流協定による派遣2名(生命体工学研究科)	
18	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	イギリス	サリー大学	交流協定による派遣1名(情報工学研究科1名)
			短期留学1名(工学部1名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣1名(工学研究科)
韓国	忠州大学校	相互交流14名(工学部14名)	
19	イギリス	サリー大学	短期留学1名
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
	韓国	忠州大学校	相互交流12名(工学部12名)
		浦項工科大学	合同ワークショップ24名(生命体工学研究科24名)
20	イギリス	サリー大学	短期留学2名
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
	フランス	ロレーヌ工科大学	短期留学1名
	韓国	忠州大学校	相互交流12名(工学部12名)

6 . おわりに

今年度、委員長を仰せつかりました。「現状と課題」は、工学研究院・工学府・工学部の活動の到達点・現状の認識を可能にし、新たな改善へ向けた活動の道しるべになるものと思います。特に、卒業生・修了生アンケートや企業アンケートは、その結果の分析を通じて工学部・工学府の教育改善を進めていくことが可能になる点で大きな意義を有するものと思います。一方、卒業生・修了生の母集団は年毎に固有の特性を有することも念頭に置いて、データを大きく緩やかな視点から読み取ることが必要と思いました。また、「教育」というすぐには成果が見えない事柄について「成果」を問おうとする場合、工学教育を通じて「人を育てる」といった学是「技術に堪能なる士君子の養成」の視点に立ち返ることが肝要と思いました。今年度は、大学認証評価が実施された他、平成18年度に続いて第2回目の教員評価が実施されました。その趣旨は、自己評価による活動の点検と改善を通じて、部局、ひいては大学の教育研究活動全般の向上に寄与することにあります。この評価システムが一人歩きすることの無いよう願っています。委員の皆様、関係事務職員の皆様のご多大なご協力に感謝致します。(加藤幹雄)

今回発行される「現状と課題」では、大学が独立法人化された平成16年度(2004年度)から5年間にわたって、統一的な方法で、本学の在学生・卒業生・修了生・企業の意識を調査・分析した結果が示されている。もはや、調査年数が短すぎるとはいえず、本年度の調査・分析結果から有意な傾向を捉えられるのではないかと思う。その様な思いで「現状と課題」を見ると、調査項目の中には、明らかに評価が上昇し、教職員の努力が結実しているものがある。その一方で、評価が上昇していたものが、一転、平成20年度(2008年度)には下降している調査項目もある。それが短期的な傾向なのか、何らかの兆候なのか、今後の動向を観察する必要がある。いずれにしても、何年にもわたって積み重ねられた「現状と課題」の調査・分析結果は、貴重な情報を含んでいるのではないかと思う。(渡辺義則)

本評価を終えて、今年度話題になった事業仕分けを思い出しました。教育・研究であれ、公共事業であれ、その目的・理念がまず定まらずして比較評価することは無意味・無謀でしょう。しかし、いつからか“エビデンス”という脅迫と防御によって翻弄される中で評価が本論に成代わって主役の座におさまっているというのは言い過ぎでしょうか?いまひとつ話題になったゆとり教育は理念が伝わらなかったばかりに評価に屈した例のように思われます。評価故に学生への情熱的な対応が損なわれてはならない、そんな評価に向かうことを願いつつ。(橘 武史)

評価委員を終わるにあたって正直ホッとしております。人の評価などはおおよそ私には向いておりませんし荷が重たいだけでした。きっと評価というものは悪いところをけなす

よりいいところを見つけてよりそこを大きく伸ばすことにあるような気がします。欠点のない人間はいないのでからいいところを大きく伸ばして個性豊かな人間を育てることが真の評価ではないかなと思っています。九工大が個性豊かな教員によって未来の、日本のそして世界の獅子たちをはぐくむ大いなる大学たらんことを心から祈念いたしております。最後に評価委員に籍を置かせていただいたことをこころより感謝申し上げます。ありがとうございました。(近藤 浩)

本年より部局評価委員会委員を担当しましたが、この委員会に出席するようになって、あらためて大学法人化以降の教育・研究環境の急激な変化を意識することが多くなりました。たとえば、この報告書にもある学生や卒業生の大学や教員に対するスタンスの取り方は、それなりに堅牢な大学システムの中で教育を受けた私自身などは持ち得なかった新しい資質であり、その変化に驚くとともに、考え方として納得させられる部分もありました。自己評価システムは、教員と学生の間これまでの一方向的な知識伝達を双方向的に変え、さらに教員同士の相互理解を行う手段として、今後も不可欠なものになっていくことは間違いないでしょう。大学という知の現場をより良い方向へ導くために、さらにシステム自体の評価と反省を繰り返すことが重要であり、この委員会がその主導的な役割を果たしていくことを心から望んでいます。(大谷博司)

部局評価委員会から冊子の報告書が出されていることは知っておりましたが、その報告書の内容があまりにも膨大であったため、大変な業務であろうと想像していました。実際に委員を経験してみますと、確かにある程度は大変な委員であると思いましたが、大きな混乱もなく務めさせていただきました。今年度のアンケート内容は例年とほぼ同じと思いますが、私が担当しました箇所に関しては、景気の影響か例年より厳しい結果が出ているように感じました。景気が悪い時のアンケート結果は、企業にとっての真実に近い回答とも考えられますので、それらを真摯に受け止める必要があると思いました。また、アンケート結果を基に、具体的な提言まで踏み込めれば、このアンケート活動は本学の教育と研究の向上に大きく寄与するものと思いました。(小森望充)

昨年度より部局評価委員会の委員を担当させていただいておりますが、依然「部局評価」という文言に圧力を感じざるを得ません。評価が点数化され記録された場合、それが一人歩きを始め、教育や研究といった本体とは懸け離れた行動を取ってしまう危険性を孕んでいます。我々は数字だけに目を奪われることなく、学生や企業から挙がってきた大学への評価を真摯に受け止め、今後の改善に活かすのが使命だと思われれます。しかし教員評価や教育評価が、教員のやる気や情熱を削ぐ様なものになってしまっは本末転倒です。周辺からの評価ばかりに惑わされることなく、自分自身の理念を持って改善を行おうとする姿勢こそが重要なことだと痛感します。(田吹昌俊)

2010年(平成22年)2月

平成21年度 大学院工学研究院部局評価委員会委員

加藤 幹雄	工学研究院 教授【委員長】
渡辺 義則	工学研究院 教授【副委員長】
橘 武史	工学研究院 教授
近藤 浩	工学研究院 教授
大谷 博司	工学研究院 教授
小森 望充	工学研究院 教授
田吹 昌俊	工学研究院 教授
葉石 研次	工学部事務長
